

京都府遺跡調査概報

第 35 冊

1. 桑飼上遺跡
2. 国道 9 号バイパス関係遺跡
千代川遺跡第14次
3. 長岡京跡左京第 200 次
4. 木津地区所在遺跡
 - (1) 上人ヶ平遺跡
 - (2) 上人ヶ平 1 号埴輪窯
 - (3) 瓦谷遺跡
 - (4) 幣羅坂古墳
 - (5) 瀬後谷遺跡

1989

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年4月に開所した京都府埋蔵文化財調査研究センターも、早や9年目を迎えました。この間、公共事業は年々増大し、それに伴って、発掘調査は、たんに件数の増加にとどまらず、年ごとに大規模化の傾向にあります。当センターでは、このような状況に対応するため、徐々に組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実をはかってまいりました。こうした発掘調査の成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』その他の各種印刷物を逐次発行し、関係者の利用に供するとともに、「小さな展覧会」・「研修会」を開催して、一般の普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、昭和63年度に実施した発掘調査のうち、舞鶴市桑飼上遺跡・亀岡市千代川遺跡・長岡京市長岡京跡左京第200次及び住宅・都市整備公団の大規模開発に伴う「木津地区所在遺跡」に関する発掘調査概要を取めたものであります。なかでも、規格的に配置された奈良時代の大規模建物群が見つかった桑飼上遺跡や、埴輪窯が京都で初めて見つかった上人ヶ平遺跡の内容は注目されます。本書が、学術研究の資料として、また埋蔵文化財を理解する上で、役立つところがあれば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された建設省近畿地方建設局、日本道路公団大阪建設局、住宅・都市整備公団をはじめ、京都府教育委員会、舞鶴市教育委員会、亀岡市教育委員会、長岡京市教育委員会、木津町教育委員会などの関係諸機関の御協力に対し、また調査に直接参加・協力いただいた多くの方がたに厚くお礼申し上げます。

平成元年11月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

凡 例

1. 本冊に取めた概要は、下記のとおりである。

1. 桑飼上遺跡 2. 千代川遺跡第14次 3. 長岡京跡左京第200次 4. 木津地区所在遺跡

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は、下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 桑飼上遺跡	舞鶴市桑飼上	昭和63. 4.11 平成元. 3.10	建設省近畿地方建設局	細川 康晴
2. 千代川遺跡第14次	亀岡市千代川町北ノ庄堂ノ後他	昭和63. 4.19 平成元. 3. 3	建設省近畿地方建設局	小池 寛 鶴島 三壽
3. 長岡京跡左京第200次	長岡京市馬場～長岡京市勝龍寺	昭和63. 7.18 平成元. 3.15	日本道路公団大阪建設局	戸原 和人 三好 博喜
4. 木津地区所在遺跡			住宅・都市整備公団	
(1) 上人ヶ平遺跡	相楽郡木津町大字市坂字上人ヶ平	昭和63. 5. 1 平成元. 3.31		石井 清司 伊賀 高弘 中井 英策 八瀬 正雄
(2) 上人ヶ平1号埴輪窯	相楽郡木津町大字市坂字上人ヶ平・瓦谷	昭和63.12. 2 平成元. 3.31		石井 清司 伊賀 高弘
(3) 瓦谷遺跡	相楽郡木津町大字市坂字瓦谷	昭和63. 4.20 平成元. 1.19		伊賀 高弘
(4) 幣羅坂古墳	相楽郡木津町大字市坂字幣羅坂	昭和63. 6.29 昭和63. 9.26		石井 清司
(5) 瀬後谷遺跡	相楽郡木津町大字市坂字瀬後谷	昭和63.11. 7		石井 清司

3. 遺構の写真は各調査担当者が、遺物の写真は田中 彰が担当した。

4. 本冊の編集は、平良泰久が担当した。

目 次

1. 桑飼上遺跡昭和63年度発掘調査概要	1
2. 国道9号バイパス関係遺跡昭和63年度発掘調査概要	21
千代川遺跡第14次	21
3. 長岡京跡左京第200次発掘調査概要	37
4. 木津地区所在遺跡昭和63年度発掘調査概要	51
(1) 上人ヶ平遺跡	53
(2) 上人ヶ平1号埴輪窯	85
(3) 瓦谷遺跡	92
(4) 幣羅坂古墳	102
(5) 瀬後谷遺跡	107

挿 図 目 次

1. 桑 飼 上 遺 跡

第 1 図	桑飼上遺跡と京都府北部の主要集落遺跡	1
第 2 図	トレンチ設定図	2
第 3 図	15・16トレンチ実測図	2
第 4 図	遺構配置図	3
第 5 図	C・D区掘立柱建物配置図	5
第 6 図	奈良時代建物群出土土器	7
第 7 図	奈良時代建物の変遷	8
第 8 図	B期建物の平面規格	9
第 9 図	竪穴住居 3 実測図	10
第 10 図	竪穴住居 5 実測図	11
第 11 図	有孔円板・玉類実測図	12
第 12 図	竪穴住居 3・5 出土土器実測図	13
第 13 図	竪穴住居 5 床面出土土器実測図	14
第 14 図	奈良時代土器の併行関係	16
第 15 図	古墳時代後半期の土師器	17
第 16 図	須恵器と土師器の関係	19

2. 国道 9 号バイパス関係遺跡 (千代川遺跡第 14 次)

第 17 図	調査地位置図	22
第 18 図	調査区配置図	23
第 19 図	10・11区平面図	24
第 20 図	21・22・30区平面図	26
第 21 図	33・34・35区平面図	29
第 22 図	土器実測図(古墳時代)	31
第 23 図	土器実測図(奈良・平安時代)	32
第 24 図	石帯実測図	33
第 25 図	土器実測図(鎌倉時代)	34

3. 長岡京跡左京第 200 次

第 26 図	長岡京条坊図	37
--------	--------	----

第 27 図	調査地位置図	38
第 28 図	調査地字切図	39
第 29 図	1～4 ブロックトレンチ配置図	40
第 30 図	2 ブロック第 3 トレンチ断ち割り部実測図	42
第 31 図	4 ブロック第 6—1 トレンチ平面図	43
第 32 図	溝 S D 200001・200002 実測図	44
第 33 図	5 ブロックトレンチ配置図	45
第 34 図	5 ブロック第 7—2 トレンチ実測図	45
第 35 図	トレンチ土層柱状図	46
第 36 図	出土遺物実測図・拓影	48
第 37 図	包含層出土遺物実測図	49

4. 木津地区所在遺跡

第 38 図	調査地位置図	52
--------	--------	----

(1) 上人ヶ平遺跡

第 39 図	上人ヶ平・瓦谷遺跡調査区配置図	53
第 40 図	第 1 トレンチ遺構平面図	54
第 41 図	5 号墳周辺遺構平面図	57
第 42 図	5 号墳断面図	58
第 43 図	5 号墳埴輪列・葺石実測図	59
第 44 図	7・8・16 号墳実測図	60
第 45 図	8 号墳主体部実測図	62
第 46 図	16 号墳主体部実測図	63
第 47 図	円筒埴輪実測図	65
第 48 図	形象埴輪実測図(1)	69
第 49 図	形象埴輪実測図(2)	71
第 50 図	形象埴輪実測図(3)	72
第 51 図	古墳時代土器実測図	73
第 52 図	古墳時代鉄器実測図	75
第 53 図	S K 8833・S E 8837 実測図	76
第 54 図	奈良時代土器実測図	78
第 55 図	軒丸瓦実測図	79
第 56 図	軒平瓦実測図	80

第 57 図	鬼面文鬼瓦実測図	81
第 58 図	第 2 トレンチ遺構平面図	82
(2) 上人ヶ平 1 号埴輪窯		
第 59 図	遺構平面図	86
第 60 図	窯体実測図	87
第 61 図	埴輪実測図(1)	89
第 62 図	埴輪実測図(2)	90
(3) 瓦谷遺跡		
第 63 図	74 b t B 地区木製品出土状況図	93
第 64 図	古式土師器実測図(1)	95
第 65 図	古式土師器実測図(2)	97
第 66 図	木製品実測図(1)	99
第 67 図	木製品実測図(2)	100
(4) 幣羅坂古墳		
第 68 図	調査区配置図	102
第 69 図	墳丘実測図	103
第 70 図	主体部実測図	104
第 71 図	出土遺物実測図	105
(5) 瀬後谷遺跡		
第 72 図	磁気探査地区割り図	107

表 目 次

1. 桑飼上遺跡		
第 1 表	掘立柱建物一覧表	4
4. 木津地区所在遺跡		
(1) 上人ヶ平遺跡		
第 2 表	古墳概要表	55
第 3 表	形象埴輪一覧表	68

図版目次

1. 桑飼上遺跡

- 図版第1 掘立柱建物跡群
図版第2 (1)掘立柱建物跡群 (2)建物跡13
図版第3 (1)A・B・C期建物跡群 (2)D・E期建物跡群
図版第4 (1)竪穴住居跡3 (2)竪穴住居跡5
図版第5 下層遺構出土遺物

2. 国道9号バイパス関係遺跡(千代川遺跡第14次)

- 図版第6 (1)調査地遠景 (2)10・11区全景
図版第7 (1)21区S D21001完掘状況 (2)30区全景
図版第8 (1)34区全景 (2)34区柱穴
図版第9 (1)35区全景 (2)35区S B35003検出状況
図版第10 (1)35区S E35040遺物出土状況 (2)33区流路完掘状況
図版第11 出土遺物

3. 長岡京跡左京第200次

- 図版第12 (1)1ブロック第15トレンチ全景 (2)2ブロック第3トレンチ全景
図版第13 (1)3ブロック第4トレンチ全景
(2)4ブロック第19-1トレンチ土層液状化断面
図版第14 (1)4ブロック第6-1トレンチ溝S D200001
(2)4ブロック第6-1トレンチ溝S D200001断面
図版第15 (1)5ブロック第7-1・2トレンチ全景
(2)5ブロック第7-2トレンチ全景

4. 木津地区所在遺跡

(1) 上人ヶ平遺跡

- 図版第16 (1)調査地全景 (2)5号墳造り出し全景
図版第17 (1)5号墳墳丘埴輪列検出状況 (2)5号墳外堤埴輪列検出状況
図版第18 (1)5号墳東調査区全景 (2)5号墳墳丘埴輪列・葺石検出状況
図版第19 (1)16号墳周溝内遺物堆積状況 (2)16号墳全景
図版第20 (1)8号墳主体部遺物出土状況 (2)16号墳主体部全景
図版第21 (1)17号墳馬形埴輪出土状況 (2)14号墳蓋形埴輪出土状況

- | | | |
|----------------------|---------------------------|---------------------------|
| 図版第22 | (1) S E 8837遺物出土状況 | (2) 鬼瓦出土状況 |
| 図版第23 | (1) 第2トレンチ全景 | (2) S X 3201全景 |
| 図版第24 | 埴輪 | |
| 図版第25 | 土器 古墳時代 | |
| 図版第26 | 土器・瓦 奈良時代 | |
| (2) 上人ヶ平1号埴輪窯 | | |
| 図版第27 | (1) 調査区全景 | (2) 窯体検出状況 |
| 図版第28 | (1) 3次床面遺物出土状況 | (2) 2・3号窯灰原検出状況 |
| 図版第29 | 埴輪 | |
| (3) 瓦谷遺跡 | | |
| 図版第30 | (1) I K W 58 b t 全景 | (2) I K W 58 b t -A 全景 |
| 図版第31 | (1) I K W 76 b t 全景 | (2) I K W 74 b t 木器出土状況 1 |
| 図版第32 | (1) I K W 74 b t 木器出土状況 2 | (2) I K W 74 b t 木器出土状況 3 |
| 図版第33 | 土師器 | |
| (4) 幣羅坂古墳 | | |
| 図版第34 | (1) 墳丘全景 | (2) 主体部全景 |
| (5) 瀬後谷遺跡 | | |
| 図版第35 | (1) 調査区全景 | (2) 磁気探査風景 |

1. 桑飼上遺跡昭和63年度発掘調査概要

1. はじめに

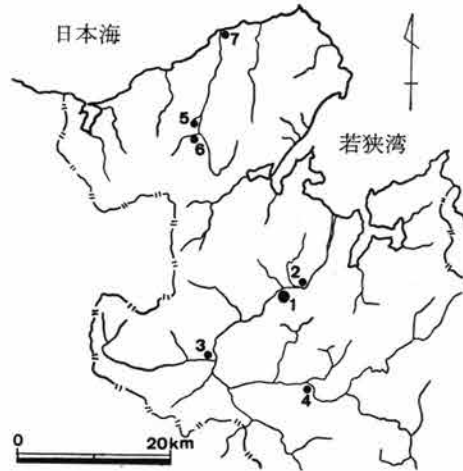
舞鶴市桑飼上遺跡の調査は、今年度(63年度)で2年目を迎えた。この遺跡は、近年、京都府北部で、弥生時代から古墳時代にかけて話題を提供し続けている由良川流域に位置する。由良川は、北近畿最大の河川であり、流域には、数多くの遺跡が分布する。とりわけ、中・下流域では、志高遺跡(方形貼石墓の発見)、広峯15号墳(景初四年銘鏡の発見)、私市円山古墳(短甲を副葬する大円墳の発見)など、これまで、不明瞭であった、当地域の古墳文化成立に関わる問題について、貴重な成果を次々と生み出している。

この調査は、建設省近畿地方建設局福知山工事事務所において計画・実施されている

由良川改修工事に先立ち、同局の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが、継続して行っているものである。今年度は、昨年度の試掘調査の成果を受けて、遺跡推定範囲地内残り3分の1において試掘調査を継続し、さらに、下流側3分の1の範囲については面的な調査(本調査)を行った。

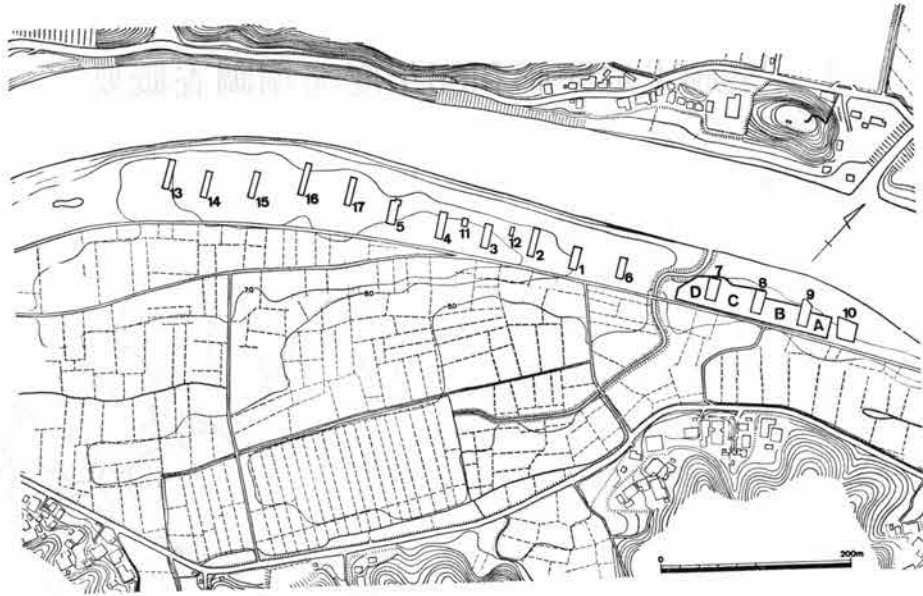
現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長辻本和美、同調査員肥後弘幸・細川康晴・森 正・中川和哉が担当した。調査期間は、昭和63年4月11日～平成元年3月10日である。調査面積は、本調査4,000 m^2 、試掘906 m^2 の計4,906 m^2 である。本概要は、調査担当者の討議を踏まえ、細川が執筆した。

調査に際しては、建設省近畿地方建設局福知山工事事務所・同舞鶴出張所・舞鶴市教育委員会社会教育課・京都府教育委員会はじめ、多くの関係諸機関より御協力を得た。また、地元桑飼上地区を始めとする有志の方々には、調査補助員・作業員・整理員として調査に従事して頂いた。^(注1) さらに、多くの方々から、御指導・御教示を頂いた。^(注2) 記して感謝の意を表したい。なお、調査にかかわる経費は、建設省近畿地方建設局が負担された。



第1図 桑飼上遺跡と京都府北部の主要集落遺跡

1. 桑飼上遺跡
2. 志高遺跡
3. 石本遺跡
4. 青野遺跡
5. 扇谷遺跡
6. 途中ヶ丘遺跡
7. 竹野遺跡



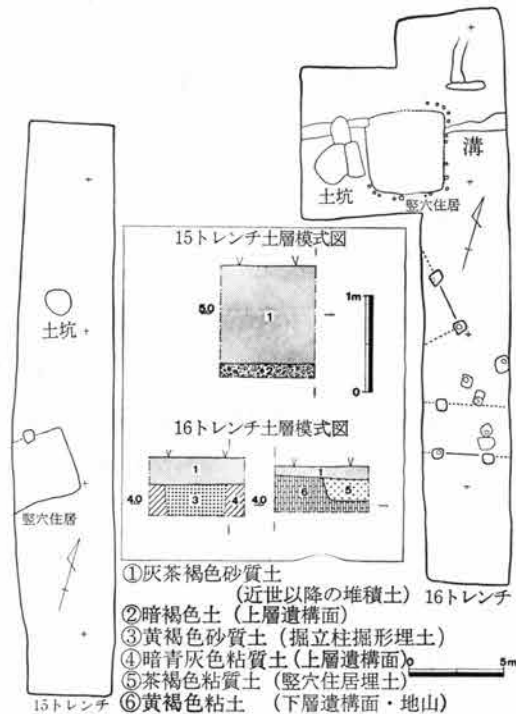
第2図 トレンチ設定図

2. これまでの調査と試掘の結果

初年度は、1～12トレンチについて、試掘調査を行った。^(注3)とりわけ、7・8トレンチにおいては、上・下2層にわたる、遺構面の存在を確認したので、今年度、改修工事の進行に伴い、7～9トレンチについて、面的調査を行った(A～Dトレンチ)。

これと併行して、試掘調査を継続し、遺跡の最上流側について、トレンチを設定した(13～17トレンチ)。13・14トレンチでは、表土直下から、厚い砂層の堆積が始まり、遺構・遺物は確認できなかった。

15・16トレンチでは、基本的に上・下2層の遺構面を確認している。上層は、暗青灰色粘質土、下層は、黄褐色粘土(地山)をベースにしている。遺構埋土は、上層が主に黄褐色砂質土、下層が茶褐色粘質土である。ただし、トレンチ北半部では、上層遺構面が削平流出している。



第3図 15・16トレンチ実測図



第4図 遺構配置図

主な遺構として、15トレンチでは、上層で、奈良時代の可能性のある堅穴住居、下層では、土坑などを検出した。16トレンチでは、上層で、方形柱掘形を持つ掘立柱建物群、下層では、弥生時代の堅穴住居・土坑・溝・柱穴群などを検出した。上・下層のレベル差は最大0.4mである。以上のことから、15・16トレンチにかけては、上層では、奈良時代の掘立柱建物群を中心とした、下層では、弥生時代の集落跡の広がり予測される。

17トレンチでは、顕著な遺構は、検出できなかったが、弥生～奈良時代にかけての包含層遺物の出土をみたので、同時期の遺構が、隣接地に展開している可能性がある。

3. 上層遺構の調査

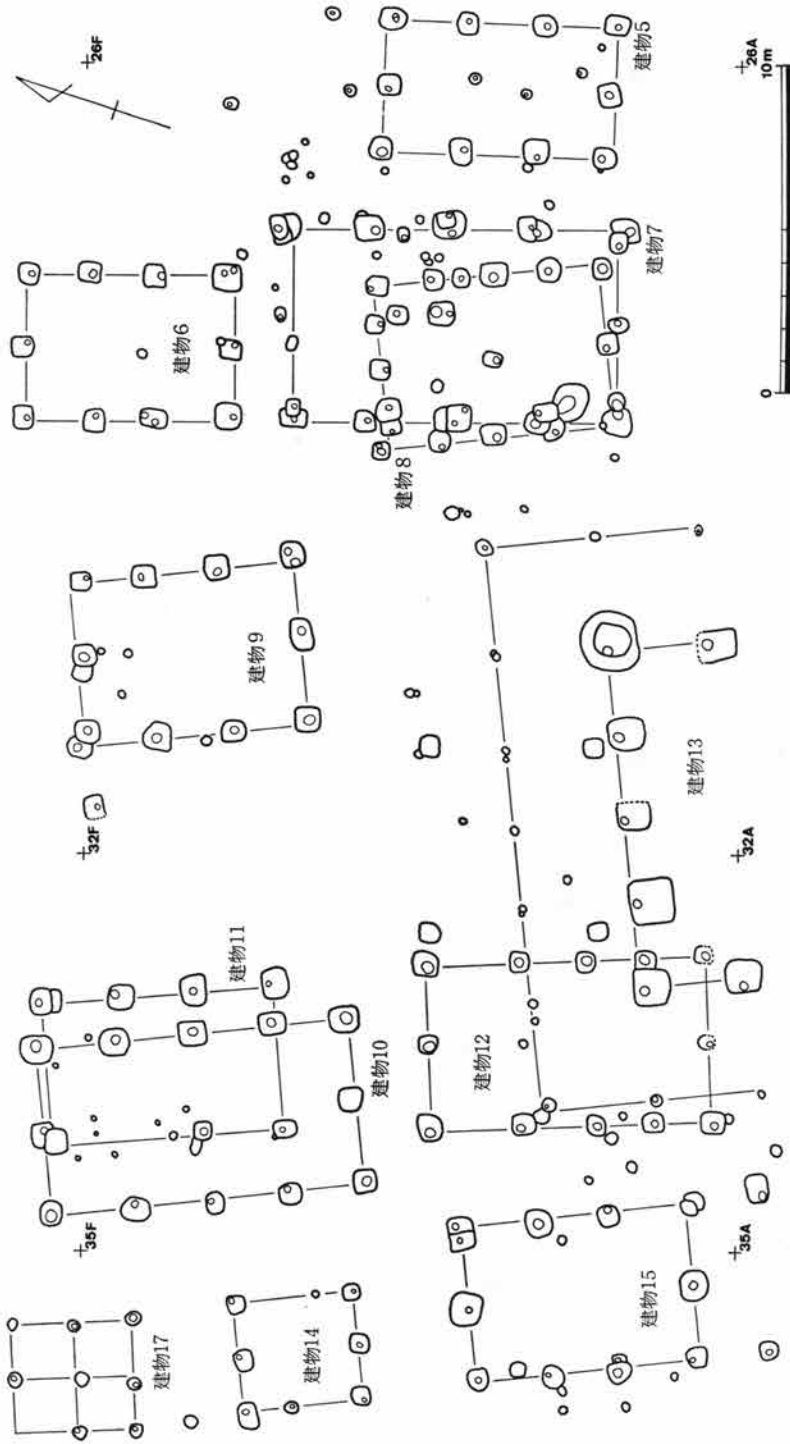
(1) 遺 構

上層遺構では、第4図に示したように、西半部では、方形柱掘形を持つ掘立柱建物群が中心となっている。

これらの建物群は、C・Dトレンチのうち東西44m、南北24mの範囲に集中的に分布する。この範囲における建物群は総数で13棟を数えるが、若干の切り合い関係を持つものもあり、全ての建物が同時には存在しない。柱間は2間×3間ないしは2間×4間の南北棟が主体を占める。柱間寸法については、各建物内においてさえもばらつきが見られ、等間とはなっていない。柱掘形は、主要な建物のほとんど全てが隅丸方形であり、一辺0.6～

第1表 掘立柱建物一覧表 (単位=m)

番号	柱間	南北長	柱間寸法(南北)	東西長	柱間寸法(東西)	主軸	期
5	2×3	6.8	2.2+2.2+2.4	4.1	2+2.1	N16°W	E
6	2×3	6.4	2.1+1.8+2.5	4.4	2.2+2.2	N18°W	D
7	2×4	10.3	2.3+2.5+2.6+2.9	5.9	3+2.9	N18°W	D
8	2×4	6.9	1.6+2.0+1.7+1.6	4.95	2.4+2.55	N24°W	B
9	2×3	7.25	2.4+2.45+2.4	4.9	2.7+2.2	N24°W	B
10	2×4	9.6	2.45+2.35+2.4+2.4	5.1	2.6+2.5	N24°W	B
11	1×3	7.15	2.35+2.4+2.4	4.4	4.4	N22°30'W	C
12	2×4	8.6	2.8+2.1+1.8+1.9	5.1	2.6+2.5	N20°30'W	A
13	4×?	?	—	10.3	2.6+2.5+2.6+2.6	N24°W	B
〃柵	6×?	?	—	17.3	3.5+2.65+2.5+2.55+2.6+3.5	N24°W	B
14	1×2	3.7	3.7	3.4	1.7+1.7	N24°W	B
15	2×3	6.9	2.3+2.1+2.5	4.8	2.3+2.5	N24°W	B
16	—	—	—	—	—	—	—
17	2×2	3.7	1.9+1.8	3.4	1.7+1.7	N20°30'W	A



第5図 C・D区掘立柱建物配置図

1.4mを測る。柱の太さは、柱痕跡によると、最大のもので直径40cmを測るものもある。なお、各建物の計測値は第1表に示した。

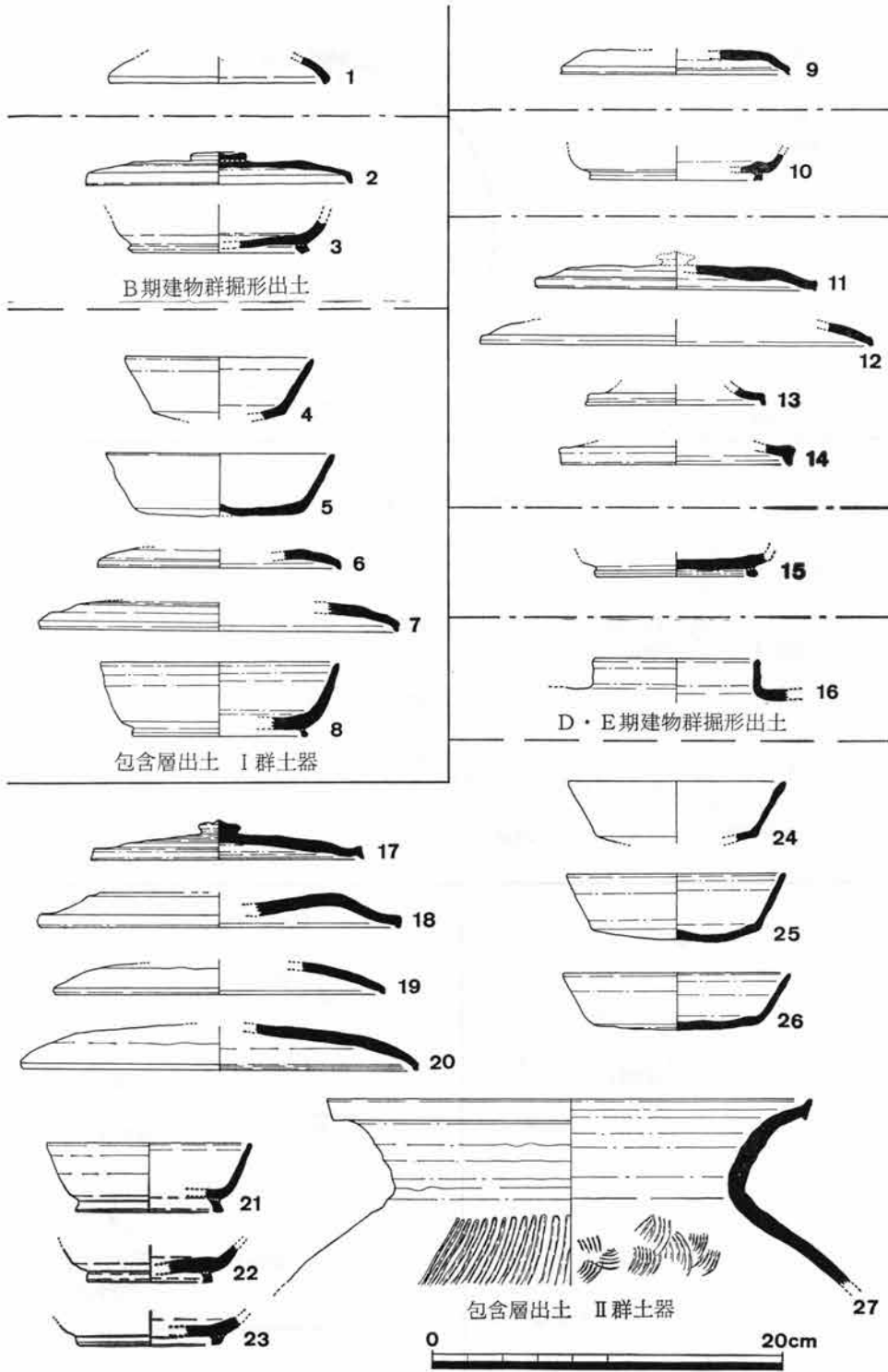
(2) 遺 物

掘立柱建物群は、その全てが、当時の生活面を削平されているため、直接遺構に伴うと判断できる遺物は極めて少ないのが常である。ここでも、何らかの事情でわずかばかり柱掘形の埋土に混入した土器片を検出したに過ぎない。しかし、それらの大半は、直接遺構に関係のない古墳時代の土器であった。これらのうちから、型式学的に、柱掘形の時期を示すと思われるものを抽出し、出土位置も考慮して、包含層資料で補ったものが、第6図に示したものである。便宜上、B期建物柱掘形出土遺物(1~3)とそれに対応すると思われる土器群(4~8)をⅠ群土器とする。また、D・E期建物群出土遺物(9~16)と、これに対応するものを、Ⅱ群土器とする(17~27)。Ⅰ群土器とⅡ群土器は型式学的に連続する。蓋は、A：天井が平らで、口縁端部と天井部の境界で屈曲するもの(2, 9, 11, 12)、B：笠形天井部を有するもの、の2つのタイプがある。つまみの形状は、Bでは擬宝珠つまみで扁平化している。Aタイプつまみの形状は、不明である。杯は、A：高台のないもの、B：高台のあるものに分けられる。杯Bには蓋が伴うものと思われるが、蓋の形状に伴い杯Bの形態が分離するものかどうかは分からない。

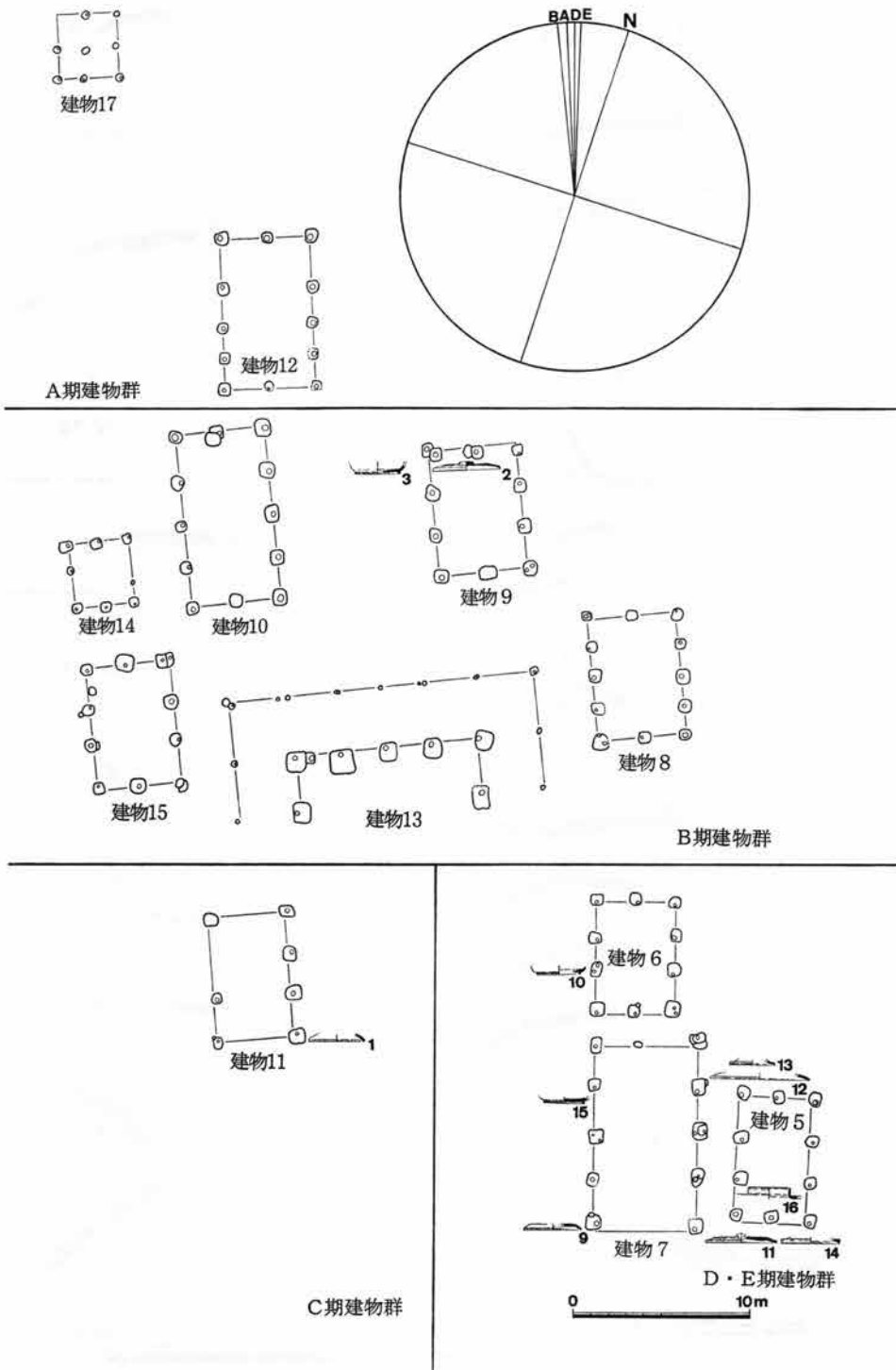
(3) 小 結

今回、検出した上層遺構の中心は、C・Dトレンチで検出した掘立柱建物群である。建物総数は、合計13棟で、若干の重複がある。時期別建物の配置・変遷・同時期併存した建物を抽出するために、建物主軸による分類を行い、第7図を作成した。主軸方位はA~Eの5類に分けることが可能だが、建物の配置などを勘案するとA・B・Dの3期に大別できる。これら建物群の造営について、最も特徴的なことは、建物配置の規格性である。第8図に示したように、B期建物群の平面規格を復原するために、柱間寸法から割り出した、方眼操作の結果を提示してみた。ここでは、復原案の1例として、方眼の単位を3.14mとし、建物13を、配置の中心と考えてみた。建物13は、中心部分が東西4間、南北1間以上である。南辺については、調査範囲外であるので、建物の全体像は明らかではないが、現状で、東・西・北の3面に、円形柱掘形を伴っている。これを廂と考えるか、柵と考えるかは断定はできないが、建物13が、B期建物群の中心建物とすることには異論はない。他の建物は、基本的に南北棟が主体を占め、東西棟の可能性のあるものは、建物13のみである。建物14は、正方形プランである。柱間は、他の建物より短い、総柱建物にはならない。

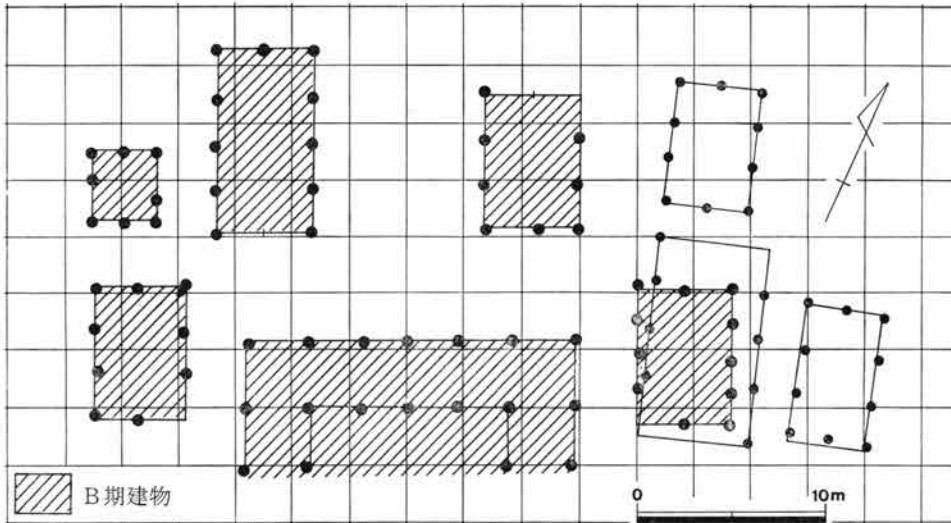
B期建物群に続いて、D・E期建物群が造営されるが、建物7は、B期建物群の建物8



第6圖 奈良時代建物群出土土器



第7図 奈良時代建物の変遷



第8図 B期建物の平面規格

を、プランを同じくして拡大したものである。また、建物10もほぼ同じ位置で、やや規模を縮小して建て直されている。

再び、建物群全体の変遷を考えてみると、導入期の建物群であるA期建物群では、2棟の建物しか検出していないので、これが、当該期の建物の全てかどうかは分からない。続く、B期建物群は、建物13を中心とした左右対称の配列である。さらに、主軸を違えてB期建物群の建物を一部拡張する形で、D・E期建物群が造営される。これは建物7を中心としたL字形の配列である。

以上、これら建物群は、B期建物群に明らかのように、極めて規格性の強い建物群であると言える。この建物群の性格については、今後検討して行かなければならないが、一辺1mをこえる方形柱掘形を持ち、整然と並ぶ規格的に配置された建物群は、由良川流域の中で重要な位置を占める建物群である可能性が強い。今、にわかに具体的な建物群の役割・性格付けを行うことはできないが、周辺地域の資料の増加を待って検討して行きたい。

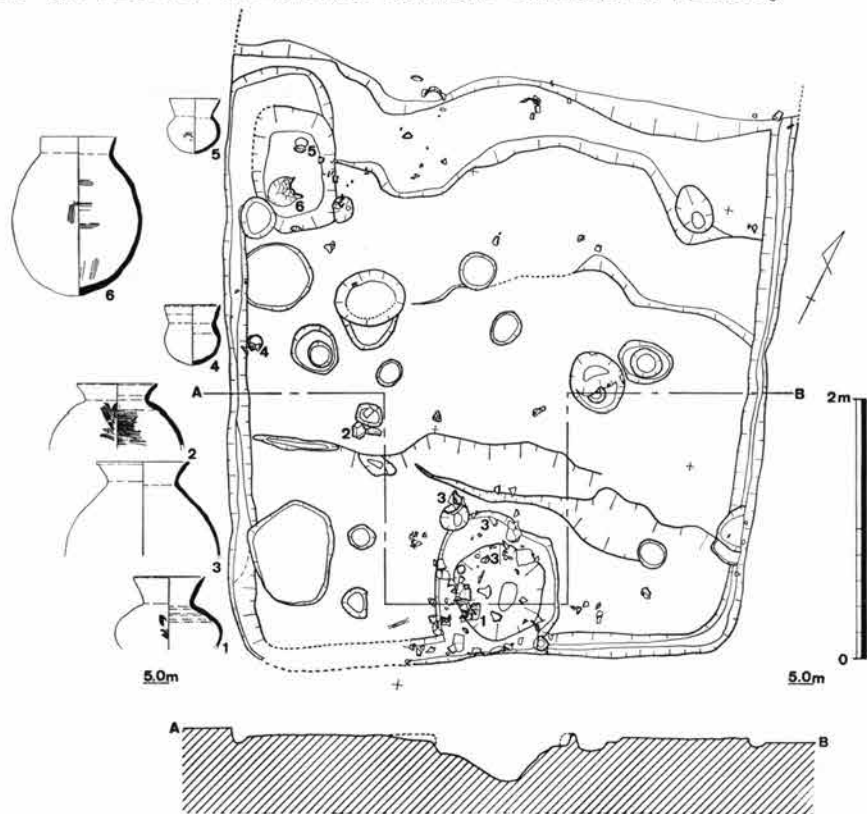
4. 下層遺構の調査

(1) 遺 構

下層遺構の中心は、C・Dトレンチを中心とした合計10基の竪穴住居群である。各住居の配置から考えると、Aトレンチの竪穴1(Aグループ)、C・Dトレンチの竪穴2・3・5・6・7・8・9(Bグループ)、Dトレンチの竪穴4・10(位置は重複)(Cグループ)の3つのグループに分けて考えることが可能である。各竪穴住居の平面形は、全て隅丸方形で、一辺4~6m前後である。主軸方位は、ほぼ南北に置くものが多く、河川に対して、平行している。柱穴は、基本的に4本柱、周壁溝、特殊ピット、炉跡を持つものも多いが、

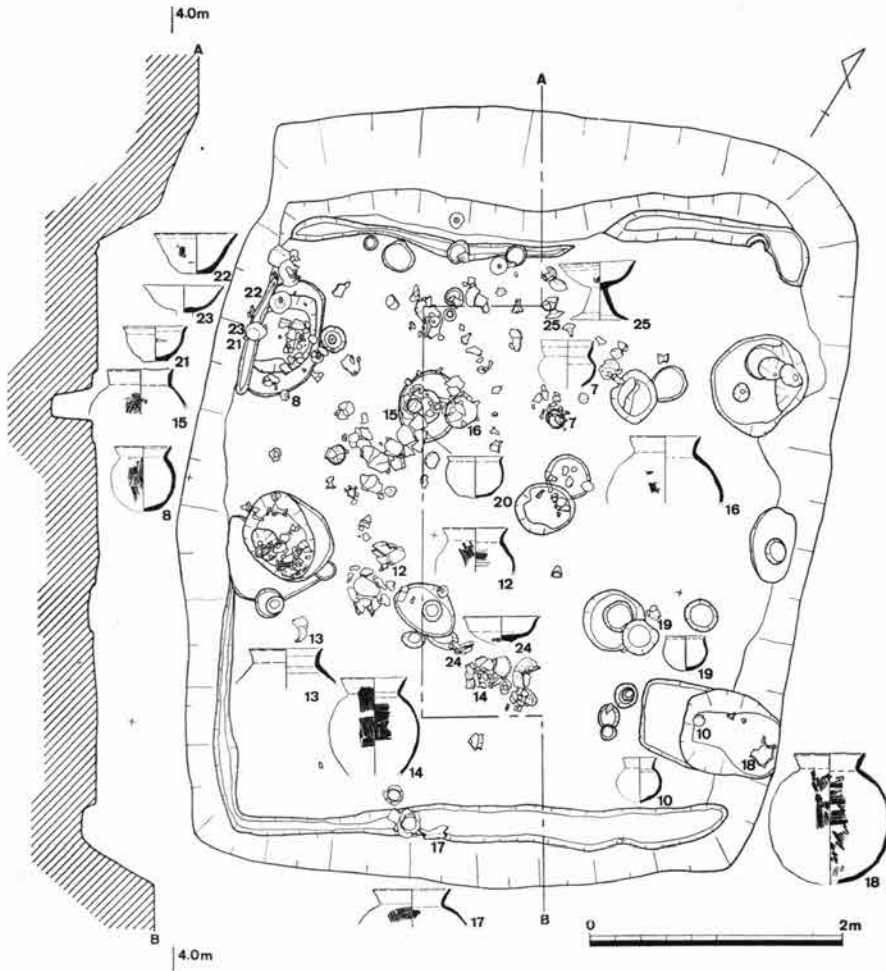
カマドを持つものはないようである。遺構検出面からの残存壁高は、0.1~0.8mで、概して遺存状況の悪いものが多い。ここでは、特に、遺物の遺存状況が良好であった2基の竪穴住居についてその概略を報告する。

竪穴住居 3 東西3.75m・南北5m(残存長)を測る方形竪穴住居である。住居北辺については、河川の浸食により、流失しているのが、検出できなかつたが、周壁溝と、北西隅に位置する特殊ピットの存在から、やや南北に長い平面形が復原推定できる。土器の出土状況は、次の2か所に集中して分布する。すなわち、1：北西隅に取り付く特殊ピット埋土中、2：南辺に取り付く特殊ピット検出面上面及び埋土中。1からは、完形の小型丸底壺・甕が出土した。また埋土中及び床面付近から滑石製白玉が出土した。



第9図 竪穴住居 3 実測図

竪穴住居 5 東西4.95m、南北6.15mを測る長方形竪穴住居である。支柱穴は、基本的に4本柱で、柱間距離は平均1.6mである。中央に炉跡、東辺を除き、断続的に周壁溝が巡る。検出面から床面までの深さは、最大80cmを測り、この遺跡の他の竪穴よりも、とびぬけて深い。遺物の出土状況は、埋土中、床面、特殊ピット中に分けられる。特殊ピット出土のものは、完形及び、完形に近いものが多い。ここでも、埋土中及び床面から、滑石



第10図 堅穴住居 5 実測図

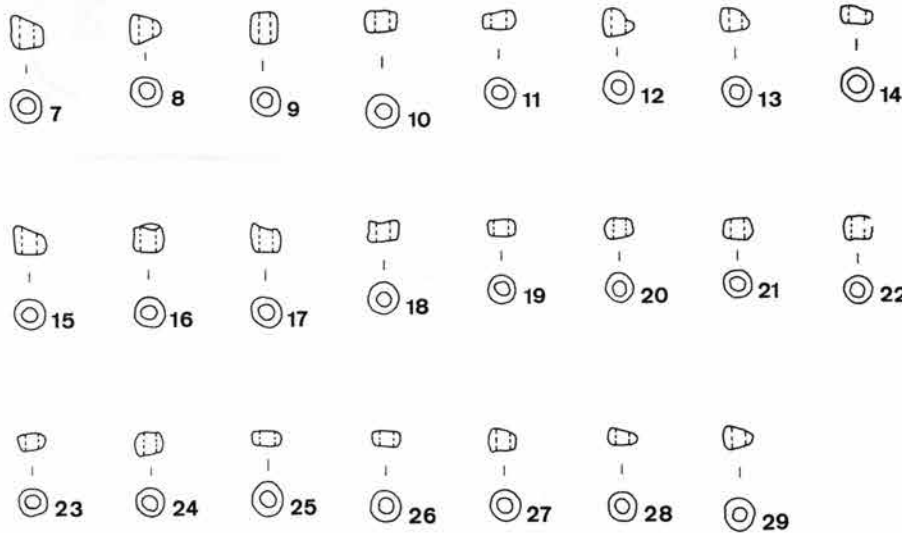
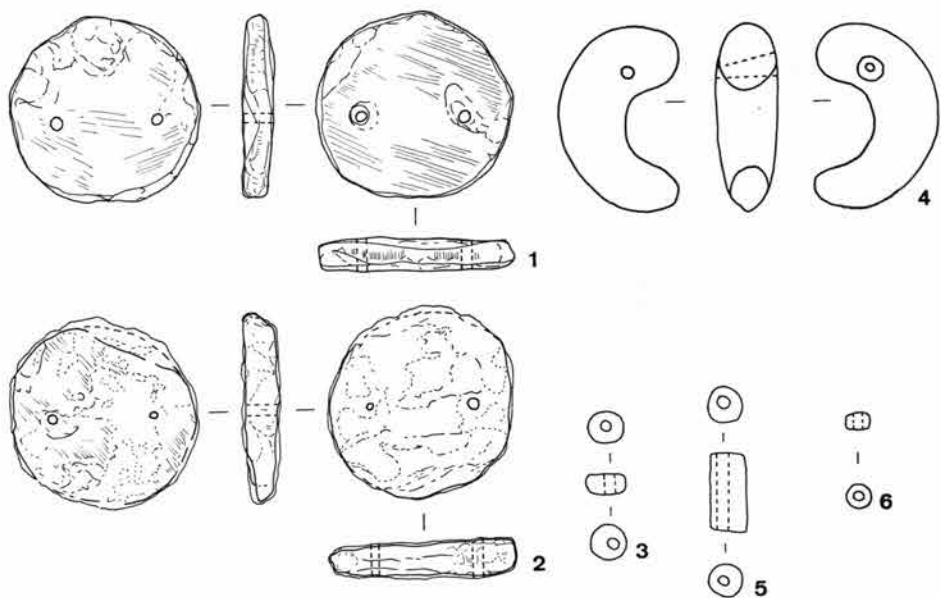
製白玉・勾玉，碧玉製勾玉などが出土したが，規則的に埋納されたものとはみなし難い。

(2) 遺物

下層遺構では，堅穴住居から，石製品，ガラス製品，土師器，須恵器などが出土した。とりわけ大半の住居から出土した白玉の存在は，注目に値する。

石製品・玉類(第11図) 堅穴住居4からは，他の住居では出土を見ない有孔円板2点(1・2)，ガラス小玉(3)が出土した。有孔円板は，2点ともほぼ同形同大で，直径2.5cm，厚さ5mmを測る。片面穿孔である。表面には粗い磨き痕が残る。

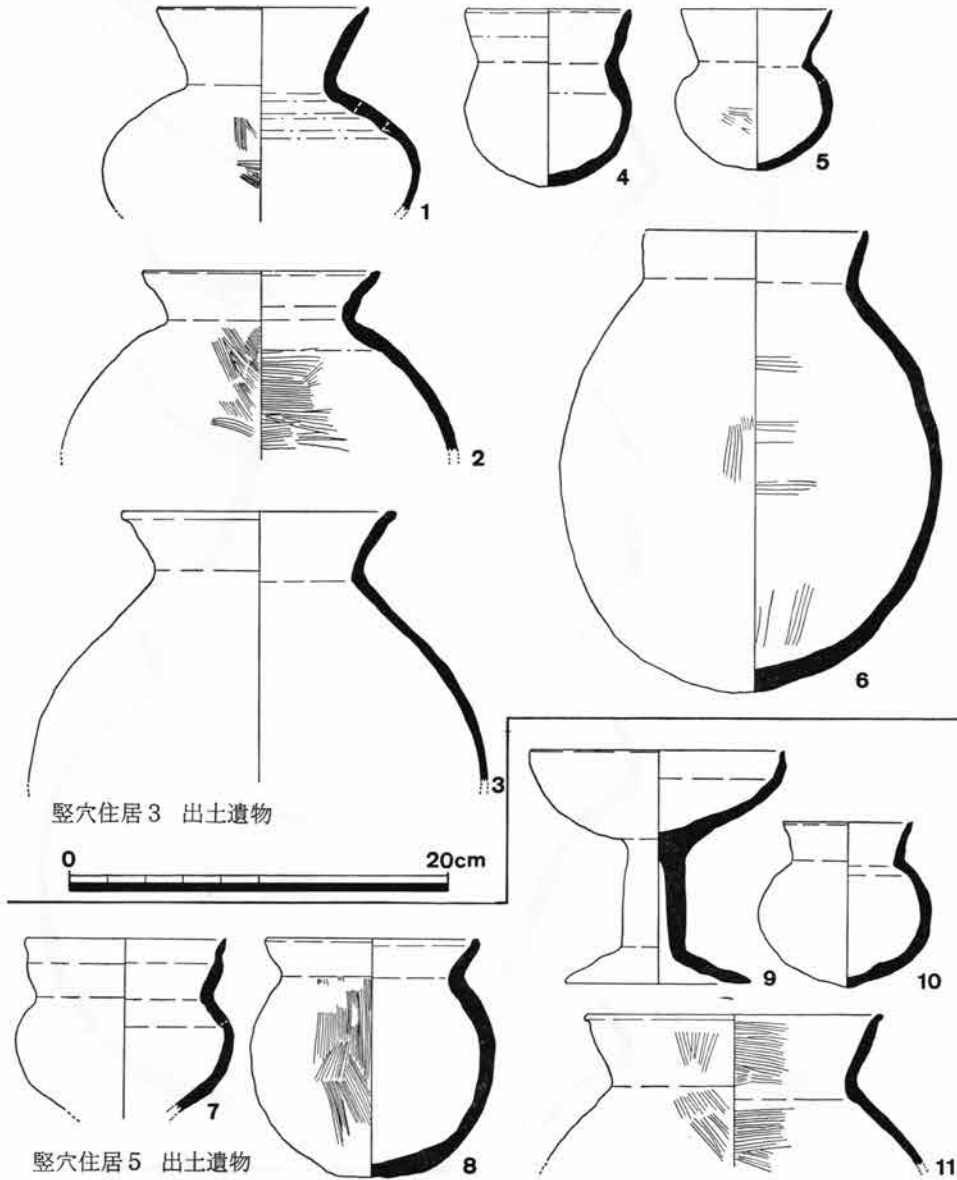
堅穴5の床面付近から勾玉が出土した。長さ2.45cm・厚さ0.8cmを測る。濃緑色を呈し，ややコの字形に近い。他に，管玉の出土した堅穴住居もある。図示したものは，堅穴住居2の特殊ピットから出土したもので，長さ1cm・径4.5mmを測る。片面穿孔である。白玉は，各住居の床面及び埋土中から出土した。図示したものは，堅穴1のもので，床面より，



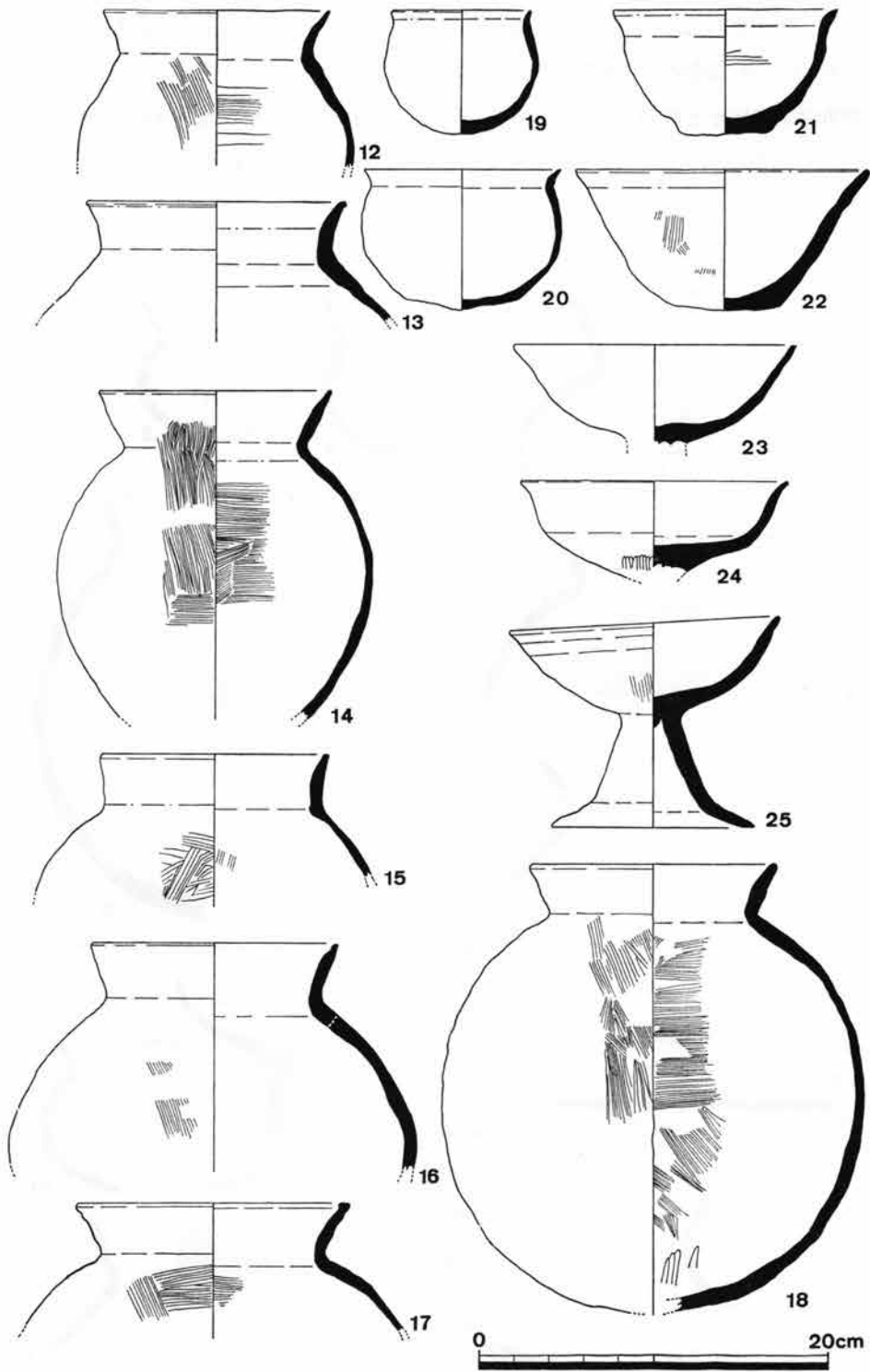
第11図 有孔円板・玉類実測図

23個が一連のものとなって出土したものである。他の堅穴では、散発的に出土した。他に、掘立柱建物の柱掘形内から赤褐色を呈する小玉(6)が出土した。

堅穴住居3出土土器(第12図) 堅穴3からは、床面、土坑中から約14個体の土師器が出土した。土坑からの出土は、5・6で、いずれも完形である。他の土器は、大なり小なり破損している。図示した器種は直口壺(1)、小型丸底壺(4・5)、甕(2・3・6)である。他に高杯の脚部も出土している。壺(1)は、肩部の張った器形が特徴的である。小型



第12図 堅穴住居3・5出土土器実測図



第13図 堅穴住居5床面出土土器実測図

丸底壺も、2つのタイプがあり、4は複合口縁状を呈する。

堅穴住居5出土土器(第12・13図) 堅穴5では、床面・埋土中、土坑中を合わせて約77個体以上の土器が出土した。第13図に図示したものは、全て床面ないし、土坑埋土中からの出土である。器種構成は、甕・高杯・鉢などがある。甕は、口縁部の形態に様々なバリエーションがある。17は、口縁端部が肥厚するもので、布留式の甕である。18も全体のプローションとしては、球形の体部であり、外見上は、17と異なるところがあまりないが、口縁端部は肥厚しない。ほかに、口縁部が短く外反するもの(12・13)、ほぼ直立するもの(15)などがある。最も特徴的なことは、多様化された鉢の存在である。丸底のもの(A)と平底のもの(B)に大別できる。鉢Aは、球形な体部に短く外反する口縁を持つ。法量に大・小がある(19・20)。鉢Bは、口縁形態によりさらに二分できる。すなわち、B-1；口縁端部が短く外反するもの(21)、B-2；体部と口縁部の境界がなく、直線的に伸びるもの(22)である。高杯は、口縁部と杯底部の境界があいまいなもの(24)、ほとんどないもの(23・25)がある。

5. ま と め

以上、昭和63年度の桑飼上遺跡の調査成果について、その一部の概要を報告した。整理作業は、現在も継続中であり、問題点も多い。以下に、今後の課題と展望を示し、まとめに代えたい。

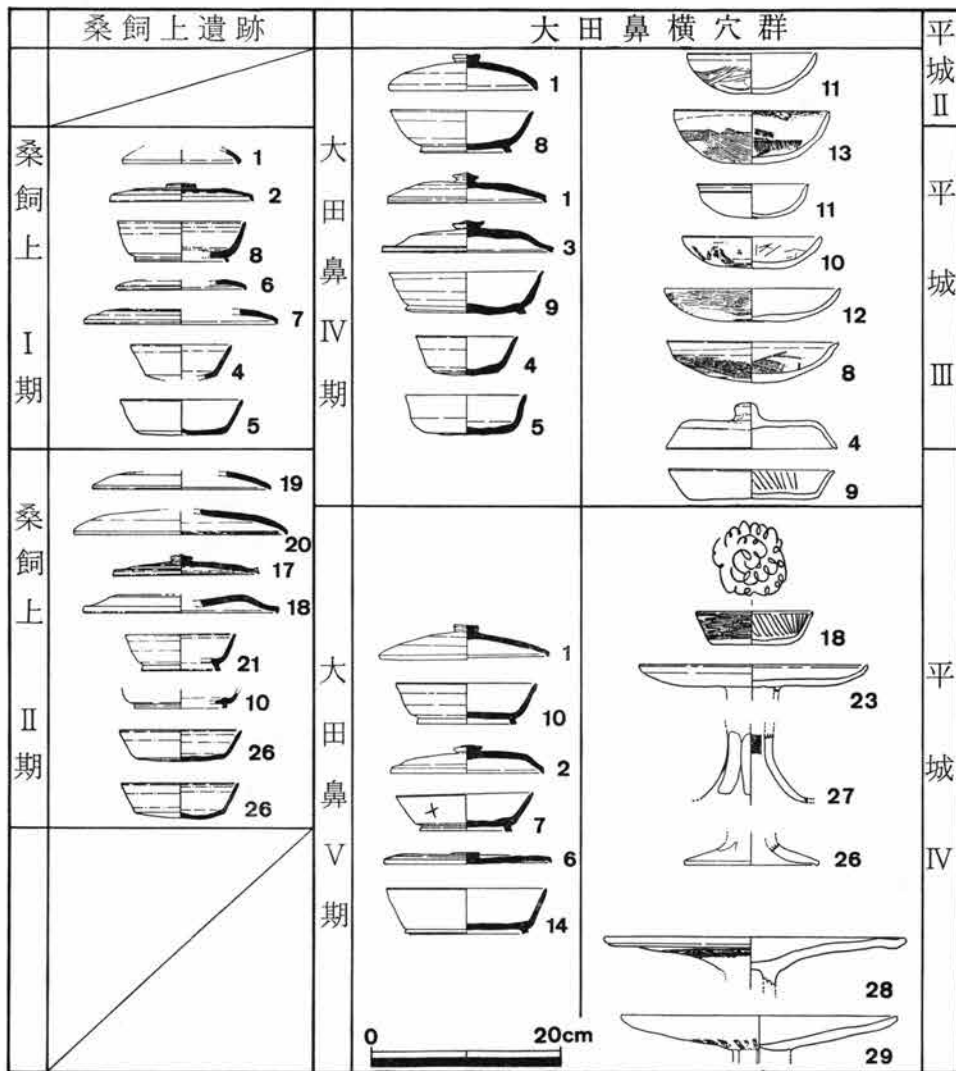
発掘調査成果の概要 今年度試掘調査は、遺跡推定範囲のうち、上流側3分の1について行った。この結果、15・16トレンチで上・下2層にわたり遺構面を確認した。基本的に、上層では、方形柱掘形を持つ掘立柱建物群の広がりか推定でき、下層は、堅穴住居群・土坑・溝群などが主体である。上・下の層厚は最大35cmである。

上層遺構では、方形柱掘形を持つ掘立柱建物群を検出した。これらの建物群は、整然とした規格配置を持つことを最大の特徴とし、柱掘形、柱痕跡の規模も大きい。

下層遺構では、方形堅穴住居群を検出した。大半の堅穴から、石製模造品である白玉が出土したことが特徴である。

奈良時代の土器 上層遺構の掘立柱建物の柱掘形埋土中や、周辺の遺物包含層から、当該期に比定できる土器群が出土している。須恵器と土師器の割合は、90%以上が須恵器であり、土師器で図化できるものは、ほとんどない。そこで、須恵器について、掘形埋土出土のものを中心にB・C期建物群出土のものを桑飼上I期、D・E期建物群に伴うものを同II期とした(第14図)。まだ個体数が少ないため、法量による器種分化が行われているか否か不明である。比較検討のために、中郡大宮町大田鼻横穴群出土の土器を提示した。大

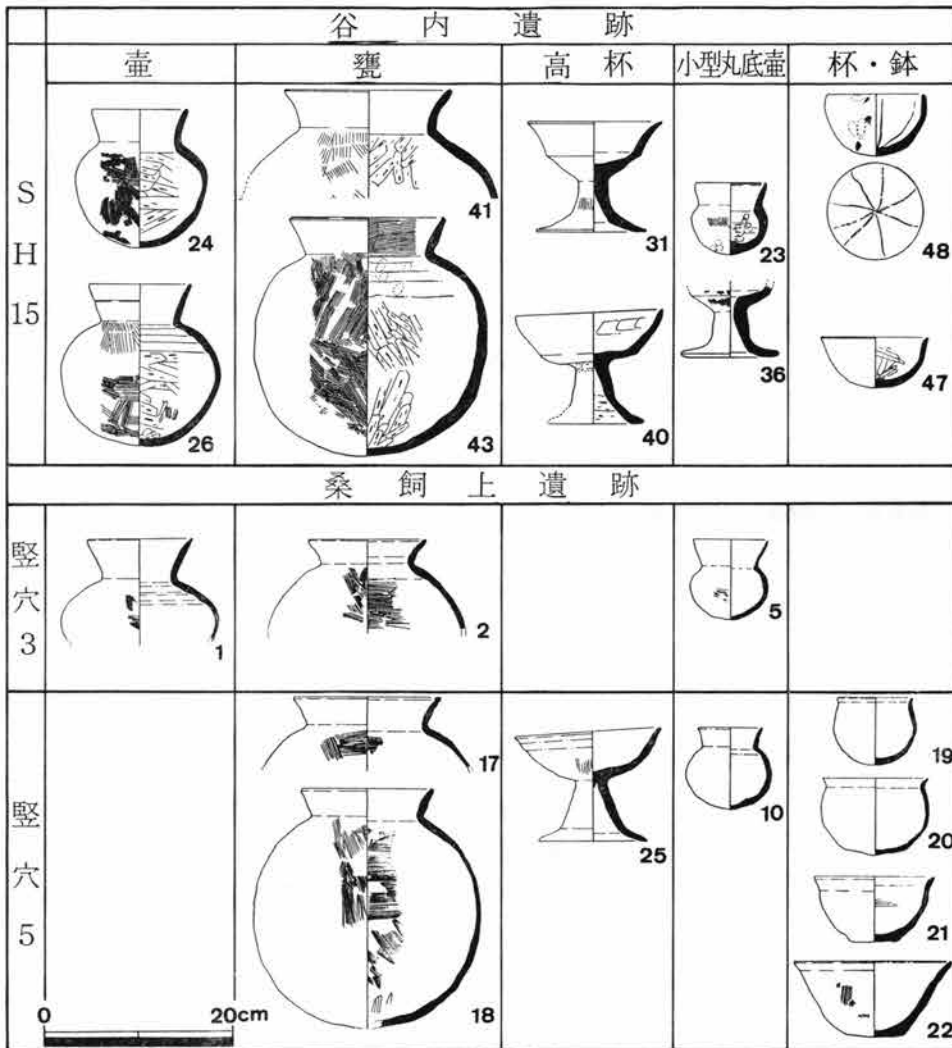
田鼻横穴群では、30基の横穴から、古墳時代後期～奈良時代に至る、多数の土器群が出土した。8世紀段階にまでも新たに開掘された例もあることから、被葬者1人あたりの供献土器の個体数や組み合わせを知ることのできる例もある良好な一括資料である。^(注4) 桑飼上遺跡出土遺物と比較してみると、桑飼上Ⅰ期には、大田鼻Ⅳ期が、桑飼上Ⅱ期には、大田鼻Ⅴ期がほぼ対応するようである。すなわち、型式変化の流れとして、桑飼上Ⅰ期からⅡ期にかけて、蓋の端部は矮小化し、杯は、口縁部と底部の境界がより明瞭となり、口縁部は直線的となる。蓋に関して見れば、桑飼上でも、大田鼻でも、同じように2つの形態(A・B形態)が存在するようである。



第14図 奈良時代土器の併行関係

大田鼻横穴群出土遺物は、墳墓からの出土資料であるため完形品が多い。しかし、法量には、バラツキがあり、また型的には、新・旧の型式のものが、混ざっているものもある。また各期の存続期間も、紀年銘資料を伴わないため、今一つ不明確である。あえて、暦年代を推しはかるために、紀年銘資料が比較的豊富な、平城宮の成果と対応させると、第14図のようになろうか。

古墳時代後半期の土器 古墳時代後半期の土器は、下層遺構である、竪穴住居群から、ややまとまって出土している。これらの土器群は、概ね、京都府北部における須恵器導入前後の資料である。この時期の良好な資料は、由良川中・下流域ではまだ知られていない



第15図 古墳時代後半期の土師器

ので、丹後半島部の中郡大宮町谷内遺跡の資料を提示し、比較検討の資料とした。

谷内遺跡 S H15^(注5)出土資料は、竪穴住居に一括廃棄された土器群と考えている。ここで最も特徴的なことは、直口壺(26)並びに杯(48・47)の出現である。すなわち、壺(26)は、共伴する24に比べ、より直線的な口縁部・球形な体部・口縁部に施された沈線などの要素が目立つ。これらは一連のものであり、とりも直さず、須恵器の同一器形の器形的特徴を模倣した可能性が高い。また、杯(48・47)については、この種器形の初現を考える上で参考となる。以上2点を考慮すると、この段階で、少量ながら既に須恵器が導入されている可能性は極めて高いと言わねばならない。

その他の器形については、甕は、口縁形態などにより二分できる。高杯もまた、杯部の形態において、口縁部と杯底部の境界の有無により二分できるが、口縁端部の形態は、個体差が激しく多様性がある。以上が谷内遺跡 S H15出土土器群の問題点である。

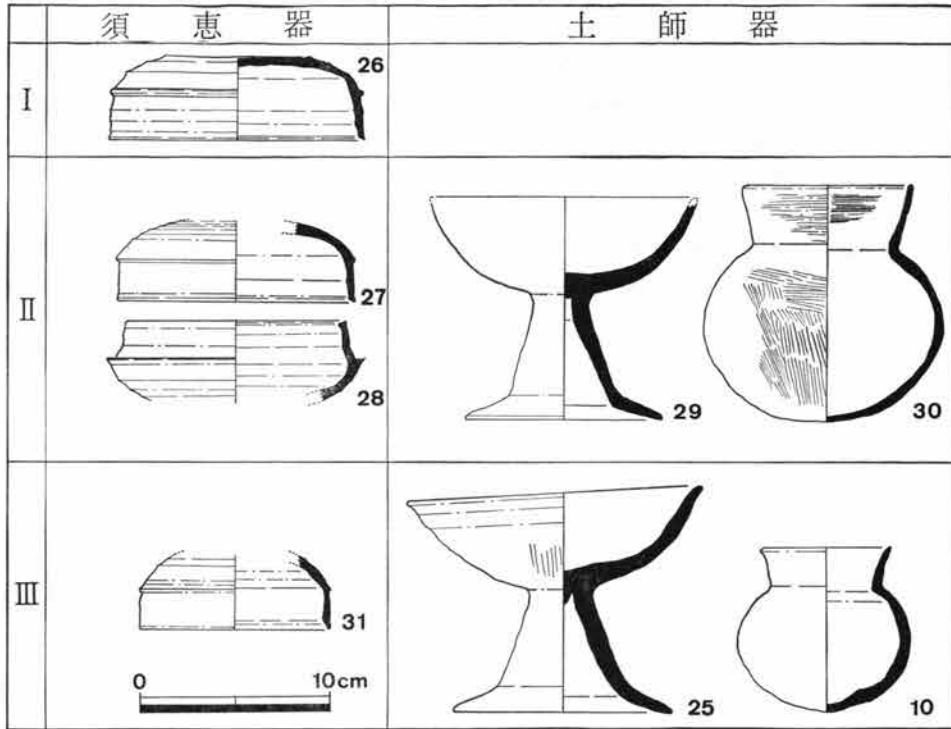
さて桑飼上遺跡では、10基の竪穴住居より、土器群が出土している。ここでは、比較的個体数の多い、竪穴住居3・5について、床面及び付設された土坑埋土中の土器群から抽出して提示した。各自の組成については、共通した器種もあるが、単純には比較できない。

甕について見ると、竪穴5では、布留式甕の存在が目立つが、その個体数は、床面ないし特殊ピットの土器に限れば、7個体中1点のみである。18に見るように全体のプローションは、布留式甕そのものであっても、口縁端部は肥厚しないのである。

また、注目されるのは、多様化した鉢を含んでいることである。

須恵器と土師器の共伴関係 桑飼上遺跡では、古墳時代の竪穴住居埋土中・遺物包含層から、わずかばかりの須恵器が出土している。これらについて、型式分類し、遺構での土師器との共伴関係について検討すべき資料として提示したのが、第16図である。まずそれぞれの出土状況を明らかにしておく。27と29・30は、同一の竪穴住居(竪穴4)の出土である。前者が埋土中、後二者は、付設された土坑の埋土中に投棄されたものである。31と25・10もまた、同一の竪穴住居(竪穴5)の出土である。31は埋土中、25は床面、10は、付設された土坑埋土中からの出土である。なお、26・28は、包含層からの出土である。

土師器は、直接比較できる同一器種が出土しておらず、須恵器の杯を3型式に分類してみた。蓋についてみると、ⅠからⅢへと型式が変化していることが読み取れる。すなわち口縁部と天井部を分ける突帯から稜へ、口縁端部の段から内傾する端面へ、法量の縮小という型式変化である。それぞれの型式の存続期間、重複関係については、今、明らかではない。資料の増加を待って今後の検討課題としたい。須恵器編年の画期の中で捉えれば、ⅢをⅠ型式の最終末型式と捉えることが最も妥当性が高いと考えている。



第16図 須恵器と土師器の関係

以上、桑飼上遺跡の本年度調査から得た課題は大きい。とりわけ、上層遺構で検出した掘立柱建物群については、由良川地域における当該期の拠点建物群の一つであることは疑いない。この由良川に面して整然と建ち並ぶ規格的に配置された建物群については、由良川を航行する船舶からの視覚的効果ということも考慮しなくてはならないのかも知れない。いずれにしろ、調査・整理は、現在も継続中であり、今回提示し得た様々な問題点は、今後の検討の課題としたい。(細川康晴)

注1 調査に参加した方々は以下のとおりである(敬称略)。

池田 力・臼井三郎・臼井信夫・倉橋吉雄・小谷弥太郎・佐藤健一・佐藤 哲・佐藤正作・佐藤 勉・新宮又健・高橋松見・土井康雄・橋垣周郎・山崎源治・山田優紀・吉岡勇治・吉岡 謙・井上久子・臼井あき子・梅原トシ江・瓜生初枝・小田敦子・河合美智子・河合好乃・河崎和子・鯉嶋ひさ江・佐藤弘美・佐藤文子・佐藤増江・佐藤修子・佐藤ミドリ・佐藤ミネ子・佐藤ヤス子・沢藤光子・新宮久野・新宮ヒサノ・新宮久野・新宮 操・新宮美代子・谷口成美・土井淑子・中村ひろみ・真下朝野・真下トメ子・真下幸江・水口和子・野田友子・荒賀俊貴・荒木尚之・飯田 徹・今井欽之・加藤晴彦・金森昭憲・岸岡貴英・佐藤宏典・高田 洋・辻川哲朗・中野智章・宝珍伸一郎・真下定平・松本達也・小沼のり子・末武雅子・高木里佳・苗村明美・服部智佳・堀由香里・山下恵里・轟なをみ・井之本知美・真下春美・山下雅子

- 注2 御指導，御助言をいただいた方は次のとおりである(敬称略)。
安藤信策・飯塚武司・佐原 眞・寒川 旭・高橋美久二・近沢豊明・都出比呂志・中嶋陽太郎
・中村孝行・広瀬和雄・穂積裕昌・宮本長二郎・山中敏史・吉岡博之・和田晴吾
- 注3 肥後弘幸・細川康晴「桑飼上遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第31冊
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1988
- 注4 岡田晃治・細川康晴・森 正「〔2〕大田鼻横穴群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』
京都府教育委員会)1987
- 注5 細川康晴「谷内遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 (財)京都府埋蔵
文化財調査研究センター)1988

2. 国道9号バイパス関係遺跡 昭和63年度発掘調査概要

千代川遺跡 第14次

1. はじめに

国道9号バイパス関係遺跡は、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて、国道9号バイパス(京都縦貫道)建設に伴い事前調査を行う遺跡の総称である。バイパス予定路線は、京都市右京区大枝杏掛町から亀岡市・船井郡八木町・園部町を経て丹波町須知へ至る全長約32kmである。昭和50年より発掘調査を実施しており、その成果については、京都府教育委員会・当調査研究センターが刊行している発掘調査概報に報告済みである。

さて、今年度発掘調査を実施したのは、千代川遺跡である。千代川遺跡は、北半部に丹波国府跡推定地を含み込むことから、昭和59年度に試掘調査が行われ、その成果をもとに次年度から計画的に発掘調査が行われている。今年度は、その4年目である。現地調査は、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所の依頼を受けて、約6,300㎡を対象とし、昭和63年4月19日から、平成元年3月3日まで実施した。調査担当は、調査第2課第2係長水谷寿克、同調査員小池 寛・鶴島三壽である。調査に際しては、亀岡市教育委員会をはじめとして多くの機関から協力を得た。また、地元有志の方々や学生諸氏には、作業員・整理員・調査補助員として参加協力があつた。^(注1)記して謝意を表したい。なお、当発掘調査にかかわる経費は、すべて建設省近畿地方建設局が負担された。

本概要の執筆は、小池・鶴島が行い、分担項目の末に名を記した。

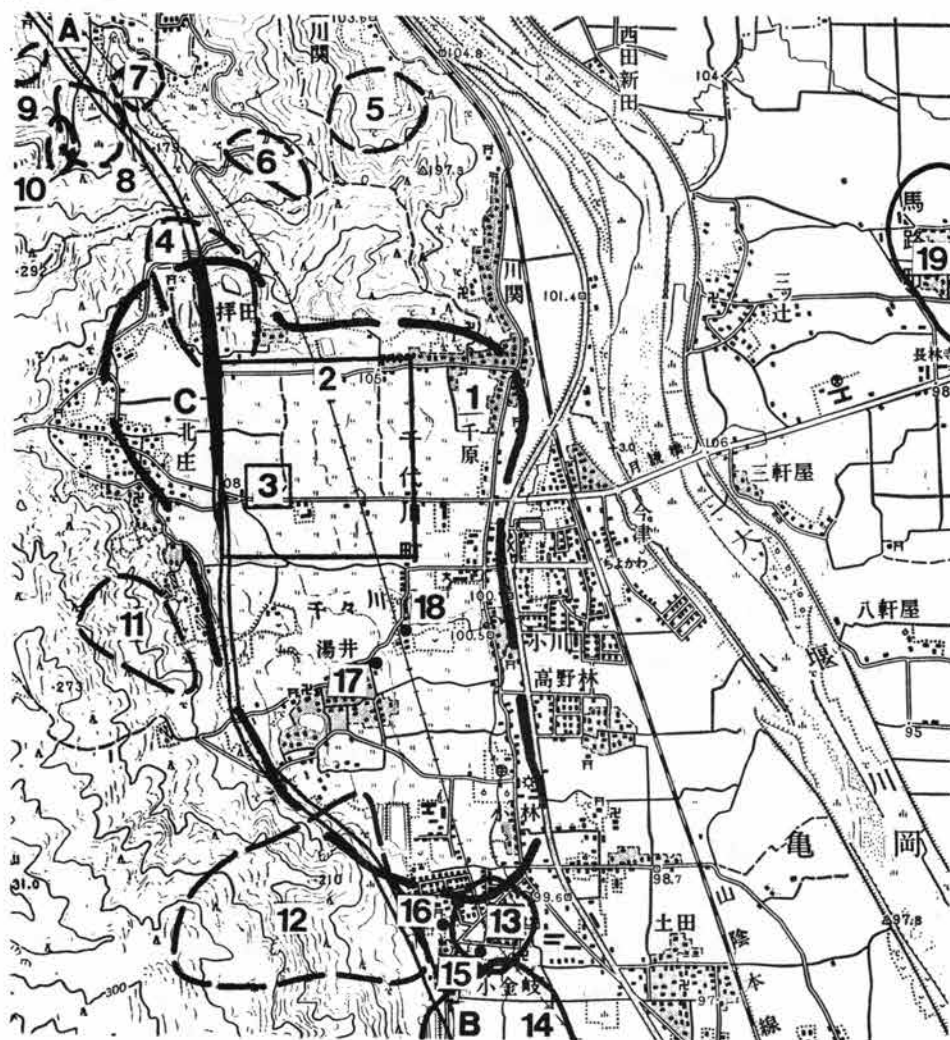
2. これまでの調査(第17図)

千代川遺跡は、亀岡市千代川町に所在し、亀岡盆地の北西部にそびえる行者山(標高471m)の北東麓に位置している。遺跡の範囲は、この行者山からの堆積作用により形成された扇状地上のほぼ全域(東西約1.2km、南北約1.8km)に及んでいる。遺跡の北半部には、丹波国府跡推定地、桑寺廃寺、拝田古墳群などを含み込む、府内でも有数の複合遺跡である。

千代川遺跡は、これまでの発掘調査の成果から、縄文時代後期から鎌倉時代までにわたる長期の集落遺跡であることが判明している。バイパス予定路線のうち、国府推定地以南の部分については、既に調査が終了している。第2・5次調査において、弥生時代終末期～古墳時代・奈良～平安時代という2時期を中心とした集落跡を検出するなど大きな成果

(注2)
 を収めている。国府推定地部分に関しては、59年度の試掘調査以後、奈良～鎌倉時代の遺構・遺物が多数検出されている。多くの墨書土器・緑釉陶器・灰釉陶器をはじめとして、13次調査における「承和七年三月廿五日」の紀年をもつ木簡、井戸枠に転用されていた扉片、後述するが、今年度調査で出土した石帯などは注目すべき資料といえる。

これまでの調査成果をまとめてみると、丹波国府推定地を国府跡と断定し得るにはまだ若干の問題を残していると言える。しかし、これまで提唱されている歴史地理学の方面か



第17図 調査地位置図 (1/25,000)

- 1：千代川遺跡 2：丹波国府跡推定地 3：桑寺庵寺 4：拝田古墳群
 5：上川関古墳群 6：大法寺古墳群 7：内山古墳群 8：小谷古墳群
 9：堂山窯跡群 10：西所古墳群 11：北ノ庄古墳群 12：小金岐古墳群
 13：馬場ヶ崎遺跡 14：北金岐遺跡 15・16：馬場ヶ崎1・2号墳
 17・18：丸塚・丸塚西古墳 19：馬路遺跡 A～B：バイパス予定路線、
 C：今回の調査地

らの考察に加えて、考古学の成果をも含めた、より総合的に検討するための貴重な資料が着実に増加している。

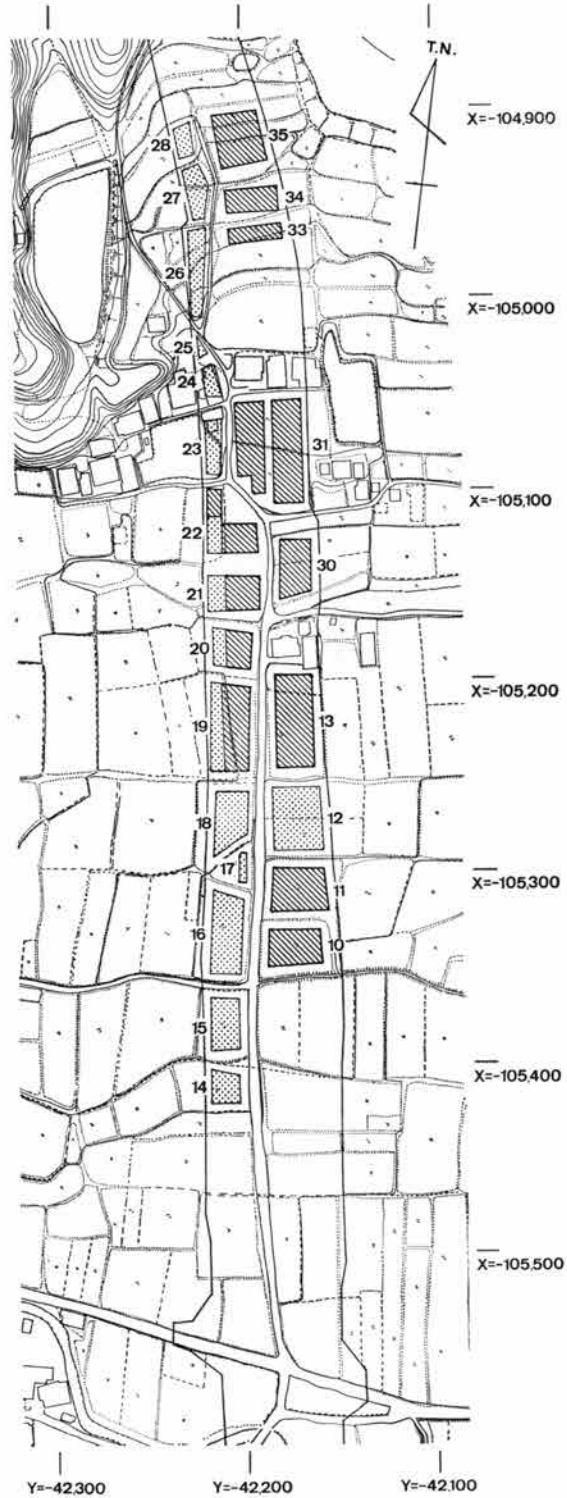
今回の調査地は、13次調査と同様、国府推定地の西辺部から北側へ延びる部分である。南は12次調査地の北側に接し、北は拝田丘陵裾部までの、南北約450mにわたる。

3. 調査の概要(第18図)

昭和59年度に実施した9次調査は、府道(北ノ庄・千代川停車場線)の北側から、拝田丘陵裾部まで試掘調査を行った。面的調査を始めた10次調査から、府道とバイパス予定路線の交点より順次北へ調査を進めている。この時から、基本的に調査実施順に番号が付けられている。しかし、調査区番号はつけたものの、原因者との協議により調査実施順序の変更を行ったところがある。そのため、番号は必ずしも実施順序を正しく表わしておらず、便宜的なものである。

今回発掘調査を行った調査区のうち、昨年度調査した19～22区にわたっては調査区の拡張を行ったため、番号はそのまま踏襲した。31区については、9次調査において試掘した部分を境に、東側を31区の1、西側を31区の2とした。

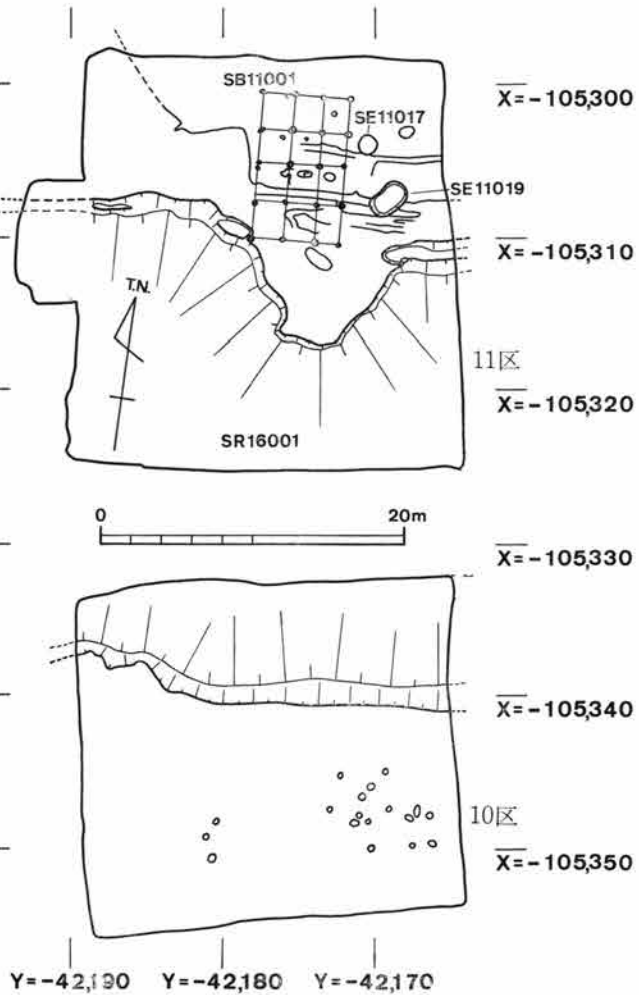
今年度調査を終了して、来年度に29・32区を残すのみとなった。(鶴島三壽)



第18図 調査区配置図(1/4,000)

10区(第19図, 図版第6-2) トレンチの北半では、後述する自然流路 SR16001 の南側肩部を検出した。肩部は、トレンチのほぼ全面において東西方向と平行しているが、西端部分では蛇行しながら北西方向に屈曲している。この肩部とほぼ平行するように内側に傾斜変換線が走っている。流路内は、基本的に黒褐色粘土が堆積しているが、間層として灰褐色砂層が薄く入っている。流路内では、傾斜面下方に人頭大の礫を集積した遺構を検出した。礫を集積するための土坑は、平面形態が方形を呈し、土坑底部は中央が深く掘られている。坑内からは瓦器椀と木製容器が出土しており、中世の墓である可能性がある。流路の南方は、濁黄褐色粘質土を基層とする平坦面が広がっており、直径30cmの円形ピットを検出した。出土遺物はなく時期設定はできない。

11区(第19図, 図版第6-2) トレンチの南半部分は自然流路 SR16001 を、北半では掘立柱建物・井戸・中世素掘り溝・土坑等を検出した。自然流路肩部の形状は、トレンチ中央で南方へ大きく突出している。肩部から底面に至る傾斜は緩やかであり、この傾斜面に土器・木製品・流木が点在している。一方、流路の底部は平坦で、土器・木製品・流木等が出土している。流路内の最下層には、灰褐色細砂利層が堆積しており、それより上層には黒灰褐色粘土層が厚く堆積している。この黒灰褐色粘土層には間層として灰褐色砂層が入っており、この間層以下が奈良時代以前、以上が鎌倉時代に分層できる。最下層である灰褐色細砂利層内からは、弥生土器・古式土師器などの土器とともに、農耕具、鏝などの木製品が多く



第19図 10・11区平面図

出土している。この層からは、流木の出土も見られることから急流による堆積層である可能性が高い。黒灰褐色粘土層の下層には、古墳時代前半期の遺物とともに須恵器・木製品が包含されている。これらの事実から古墳時代前半期には既に流路が形成されており、鎌倉時代に人為的に埋められた可能性が高い。なお、先述した11区の自然流路S R 16001の南側肩部近辺の傾斜面は急傾をなしているが、10区で検出した同流路の北側傾斜面は緩やかであることから、流路の蛇行部分である可能性が高い。

自然流路の北方に広がる平坦面は、北方から南方にかけて緩やかに傾斜している。この平坦面では、桁行4間×梁間3間の総柱の掘立柱建物(S B 11001)を1棟検出した。建物の主軸線は、ほぼ真北と一致している。柱間寸法は桁行・梁間とも1.9mであり、直径40cmの円形の柱穴で構成されている。柱穴内から瓦器碗・瓦質土器等の鎌倉時代の土器が出土している。この掘立柱建物の東2.5m地点では、建物と同時期の井戸S E 11019を1基検出した。井戸掘形の主軸線は、磁北より45°東に振っており、長軸2.5m×短軸1.5mの楕円形を呈している。井戸枠は、一辺1mの板材を組んでおり1.5mの深さがある。井戸内からは、瓦器碗・瓦器皿・土師器皿・中世須恵器摺鉢・呪符木筒等が出土している。

掘立柱建物と井戸を切り込んだ中世素掘り溝は、東西方向に多く掘り込まれている。溝間の距離は不規則であり、重複している部分がある。溝の幅は基本的に25cm前後であり、長さは一定ではない。これらの溝は建物より後出することから、建物が廃絶した後に周辺が耕地化されたことを物語っている。このような遺構の新旧関係は、13・35区でも確認できており、11区以北の広い範囲にかけて耕地化が行われたことを傍証している。なお、溝の性格としては、条里水田遺構の可能性が高い。

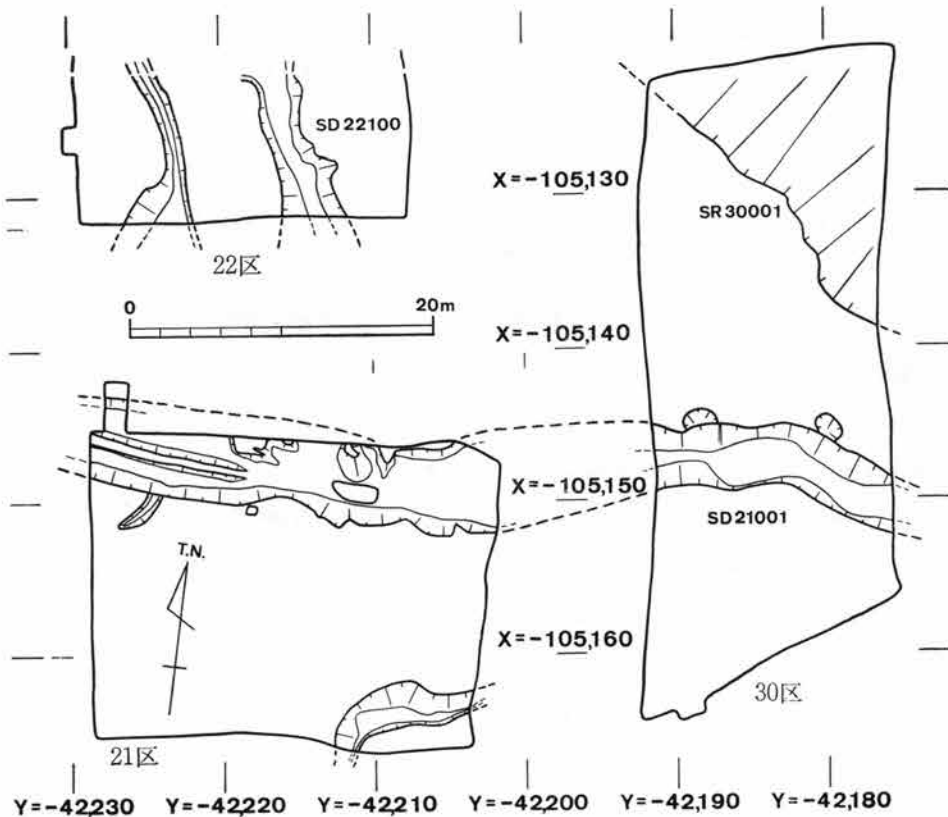
この平坦地では、他に自然流路S R 16001に流れ込む小流路を検出している。

13区(第18図) 中央部において東西方向の自然流路を検出した。流路の幅は15m、深さは2mである。最下層には灰褐色砂利層が堆積しており、層内から布留式併行期の土器や木製品が出土している。その上層には黒褐色粘土層が堆積しており、僅かではあるが中世の土器が出土している。この流路は、先述した自然流路S R 16001と同時期に形成された可能性が高い。流路の北側の平坦地では、南北方向の素掘り溝が重複するように掘られており、10区で検出した溝と同じ性格をもつものと考えられる。

19区(第18図) 13区の西側に設定したトレンチである。13区で検出した自然流路の上流部分とそれに流れ込む2本の流路を検出した。流路の堆積層は、13区と基本的に同じであるが、2本の流路が合流する部分は、砂層と粘土層が複雑堆積しており、断面観察により数回の急流があったものと考えられる。遺物は、上層の黒褐色粘土層に中世の瓦器碗等が多く包含されている以外には出土していない。

21区(第20図, 図版第7-1) トレンチの北端で東西方向に流れる溝 SD21001 を検出した。溝の傾斜面は緩やかで底部の西端部分は中央部が突出し, 他は平坦に掘られている。溝内の堆積は, 最下層が灰褐色砂礫層で上層が暗茶褐色土である。また, 中間に濁黄褐色砂層が確認できた。上層からは僅かに瓦器が出土しているが, 細片である。一方, 最下層には奈良時代から平安時代の須恵器が入っており, 溝の掘り込まれた時期を示すものと考えられる。溝の中央部北側では, 後述する溝 SD22100 の合流部を検出した。溝 SD21001 の南側には黄褐色土を基層とする平坦面が広がっているが, 自然の落ち込み以外は検出できなかった。なお, 溝 SD21001 の下流部を東方に設定した30区で確認している。

22区(第20図) 21区の北側に設定したトレンチである。トレンチ東方では, 南北に流れる溝 SD22100 を検出した。この溝は, 肩部が蛇行しており, 一定の傾斜面を有していない。また, 底部は中央部分が深くなっている。溝内には, 下層に暗灰褐色砂礫層, 上層に黒褐色粘質土が堆積しており, 下層からは須恵器・緑釉陶器が出土している。21区との間は里道のため調査できなかったが, 先述した溝 SD21001 に流れ込むと考えられる。



第20図 21・22・30区平面図

30区(第20図、図版第7-2) トレンチ北方では自然流路 S R30001、中央部では21区で検出した溝 S D21001 の下流部分を検出した。自然流路 S R30001 は、北西から南東に流れ、南西の肩部を検出したに過ぎない。急激に落ち込む傾斜面をもっており、凹凸の激しい底部である。堆積層は非常に複雑であり、黒褐色粘土をベースにして少なくとも数回の蛇行があったと考えられる。この黒褐色粘土層の上層には、灰褐色砂利層が堆積しており、急激な流れを想定できる。最下層の砂利層から縄文時代晩期の土器片が1点出土しているが、流路の形成時期を示す遺物とは考えられず、混入の可能性が高い。この流路は、30区の東方に現存する谷部の成立に深く関わっていると考えられる。溝 S D21001 は、トレンチ西半においてほぼ東西方向に流れているが、以東は南東方向に主軸線を振っている。検出面から溝底部までの深さは、西端部では40cmと浅く、東方に深く掘り込まれている。溝の肩部は、緩やかに傾斜し平らな底面である。溝内より須恵器・土師器・石帯等が出土している。

21・30区において検出した溝 S D21001 は、従来、丹波国府推定地における北限の溝であると考えられており、出土遺物の構成から見る限り背首して良い状況にある。自然流路(S R30001)の主軸線と一致するかのように東半で屈曲することは、流路と溝の同時性を考える必要があり、今なお、検討する課題を残していると言えよう。(小池 寛)

31区(第18図) 30区の北側にあたる調査区である。31区の1に関しては、昨年度調査した23区の溝(S D23010)の延長部、31区の2に関しては、30区で検出した自然流路や、また、東辺に掘立柱建物などの検出が期待されたが、明確な遺構は検出し得なかった。出土遺物の様相は、13次調査における大半の調査区とほぼ同様である。灰褐色土中から、瓦器・土師器、その下層にあたる黒褐色粘質土中からは、奈良～平安時代の須恵器・土師器などが出土した。特に、この包含層中より石帯が2点出土したことは注目に値する資料である。

石帯は、先述した30区の S D21001 内から出土したものと合わせて、計3点すべて国府推定地以北から出土している。後述する34区の掘立柱建物に加えて、バイパス予定路線外にも遺構の広がる可能性が高いことから、拝田地区の谷部に何らかの施設の中心が存在したことを伺わせる。これで、来年度の調査地である32区に対して一段と期待が高まったといえよう。石帯についてみると、京都府内ではこれまでに14遺跡において確認されている。長岡京跡・平安京跡から出土が多く、古墓からの出土も2例ある。国府関連遺跡としては、他に山城国府跡から1点出土している^(注3)。全国の国府関連遺跡の中でも、近接して3点の出土は比較的多い部類に属する。

以上のように包含層中ではあるが、31区の2点の石帯のもつ意味は大きいと言えよう。

33区(第21図, 図版第10-2) 33~35区は丘陵の先端部を占め、バイパス予定路線内でも最も高所に位置する。ここからは、亀岡盆地を北から南へ見渡せるという好位置にある。

調査区の南東隅では、北東から南西へ流れる溝を1条検出した。この溝は、南北に延びる丘陵に、意識的に斜めに掘られた溝である。幅約2.5m、深さ約1mを測る。この溝の北側は、近世の耕作地への転化に伴う著しい削平を受けており、柱穴は確認したもの、建物として検出するまでには至らなかった。溝内出土遺物もほとんどないため、溝の時期・性格なども不明である。

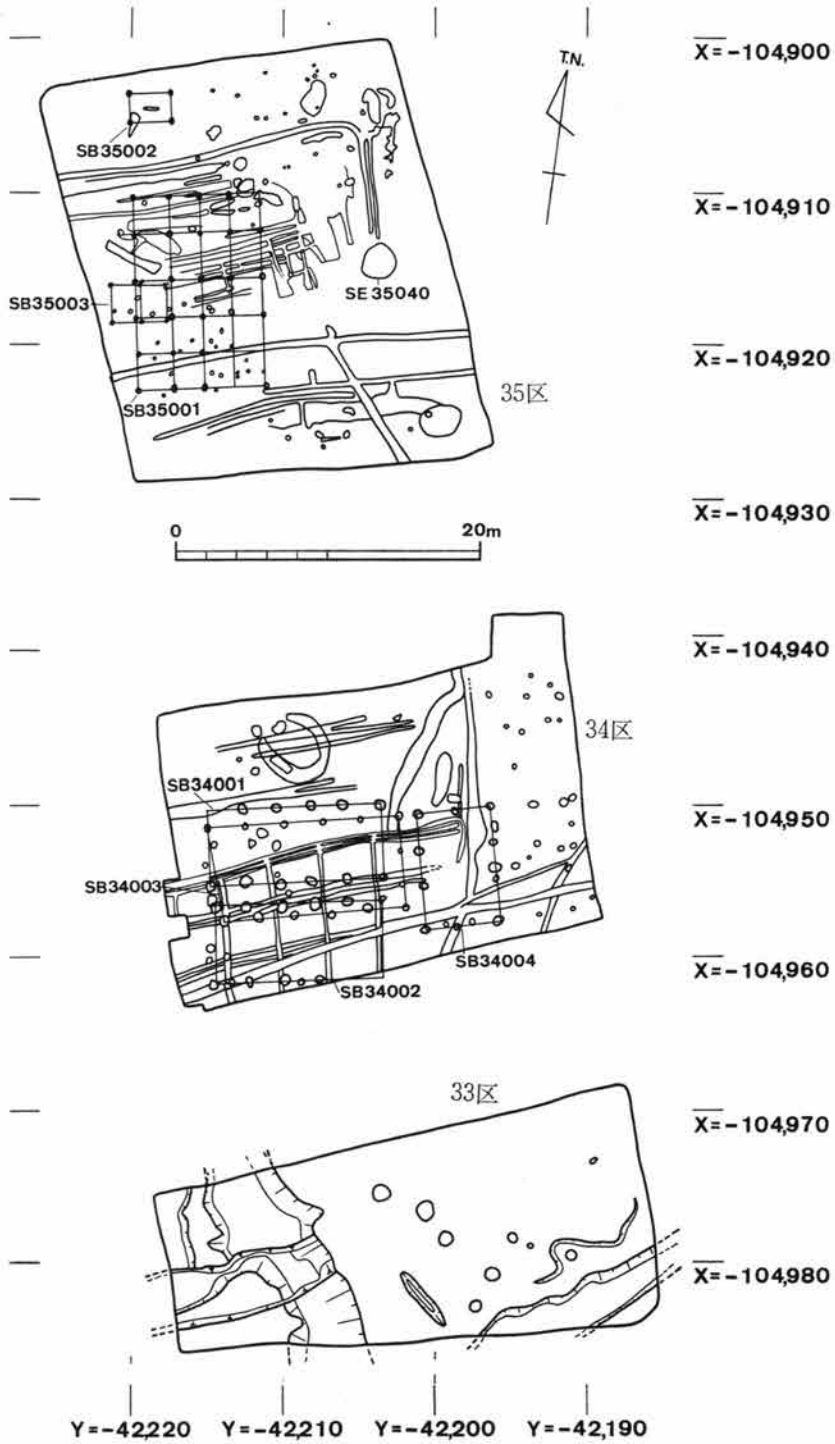
調査区西側では、自然流路を確認した。これは、昨年度の13次調査のおり、26・27区で検出した自然流路の肩部に相当するものと思われる。自然流路内からは、若干の古式土師器とともに、平安時代の須恵器・緑釉陶器、また、瓦器なども出土した。

34区(第21図, 図版第8) 検出した遺構として、掘立柱建物・土坑・中世素掘り溝などがある。掘立柱建物は、全部で四棟検出した。

S B 34001は、東西5間×南北1間の規模をもつ建物である。^(注4) 柱掘形は、一辺約60cmを測る隅丸方形で、約20~40cmを測る。中に直径約20cmの柱根を残すものもある。S B 34002は、S B 34001とほぼ並列する建物である。S B 34001と同様、東西4間×南北1間である。柱穴の大きさ、形状、深さ、残存していた柱根の大きさもS B 34001とほぼ同じである。2つの建物とも、柱穴の中から、須恵器・土師器・緑釉陶器などが出土している。これらの遺物の観察から、平安時代の建物である。S B 34001とS B 34002は、ほぼ並列し、出土遺物も明確な時期差を示すものではなく、ほとんど同時期に近いと考えられる。しかし、S B 34001の南側とS B 34002の北側は、80cmほどしか距離がないため、同時期に存在していた可能性は低いと言えよう。S B 34003は、東西5間×南北3間の規模をもつ建物である。柱掘形は、不整形な円形で直径約40cmを測る。S B 34004は、東西2間×南北3間の建物である。柱掘形は、S B 34003と同様に、不整形な円形で直径約40cmを測る。

検出した掘立柱建物四棟は、切り合い関係を有さない。そのため、切り合いによる建物の前後関係は不明である。また、建物の柱穴内出土遺物もほぼ同様であるため、遺物の面からも前後関係を確認するのは困難である。

調査区東半部で検出した、S B 34004は地山である灰褐色砂質土に建てられている。調査区西半部は、西へ向かって緩やかに傾斜し西辺部において急激に落ち込む谷地形を呈する。そのため、黒褐色粘質土を10~70cm程度搬入し、平坦な地形に整地されている。前述したS B 34001~34003の柱穴のほとんどは、この整地層上面で検出した。整地層である黒褐色粘質土中から、須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土した。これらの遺物は、建物の柱穴内より出土した遺物と比較して、ほとんど時期差は認められない。従って、



第21図 33・34・35区平面図

整地された後、時を移さず建物が構築されたと考えられる。

掘立柱建物を切り込む中世素掘り溝は、調査区西半部で良好な状態で検出されている。東西2条、南北1条を1単位として掘られている。溝の幅は、基本的に25cm、深さ約10cmを測る。溝間の距離は、概ね規則的である。東西間で約3.3m、南北間で約3.2mを測る。溝内からは、小片となった瓦器・土師器および土錘などが出土した。

35区(第21図、図版第9・10-1) この調査区は、千代川遺跡の中でも最も高所に位置している。調査区内の地形は北から南へ緩やかに傾斜しており、南北間の高低差は約2mある。検出した遺構として、掘立柱建物、井戸、土坑、中世素掘り溝などがある。

S B35001は、これまで検出した建物の中でも、最も規模の大きなものである。東西4間×南北5間の総柱による建物である。柱穴は円形で直径約30cm、深さは中世素掘り溝によって上部削平されているところもあるが、20cm前後を測る。柱穴の中には、瓦器碗・土師器皿が埋納されているものもある。S B35002は、東西1間×南北1間の小規模な建物である。調査区北辺で確認したため、さらに北へのびる可能性もある。柱穴は円形で直径約30cm、深さ約20~30cmを測り、S B35001とほぼ同様である。S B35003は、東西2間×南北1間の建物である。調査区西辺で確認したため、この建物もさらに西へ向かってのびる可能性がある。柱穴の形・大きさ・深さは、前記の2つの建物と同様である。S B35003は、S B35001と切り合い関係を有さない。また、柱穴内からの出土遺物もないため、前後関係は不明である。

井戸(S E35040)は、S B35001の東約8mの地点に確認した。当初、拳大から人頭大までの石が集石した状況で検出された。井戸の掘形は、直径約2mを測る不整形な円形である。井戸枠は、長さ1.8m以上、幅約20~30cm、厚さ約2cmほどの板材を縦組みして構築されている。横方向に3か所棧を設けている。深さは、検出面から約1.8mを測る。井戸内から、瓦器碗・土師器皿・木製の杓などが出土した。これらの出土遺物は、S B35001の柱穴内から出土した遺物と同時期のものである。また、井戸の主軸線とS B35001の主軸線は平行する。従って、S B35001と井戸は同時期に存在していた可能性が高い。

中世素掘り溝は、35区においても多数検出された。主に東西方向に多く掘り込まれている。溝間の距離は不規則であり、遺存状態もあまりよくない。溝の幅は概ね25cm前後である。中世素掘り溝の中でも、東西方向から南北方向へつながる溝を検出し得たことは貴重である。北東の屈曲部を確認し、西は調査区外へ向かってのびる。南は後世の削平を受け不明である。そのため、当時の水田の規模を考察するにおいて重要な資料ではあるが、北東隅しか検出できなかったため、水田一枚を復原し得るものではないのが残念である。

(鶴島三壽)

4. 出土遺物(第22～25図, 図版第11)

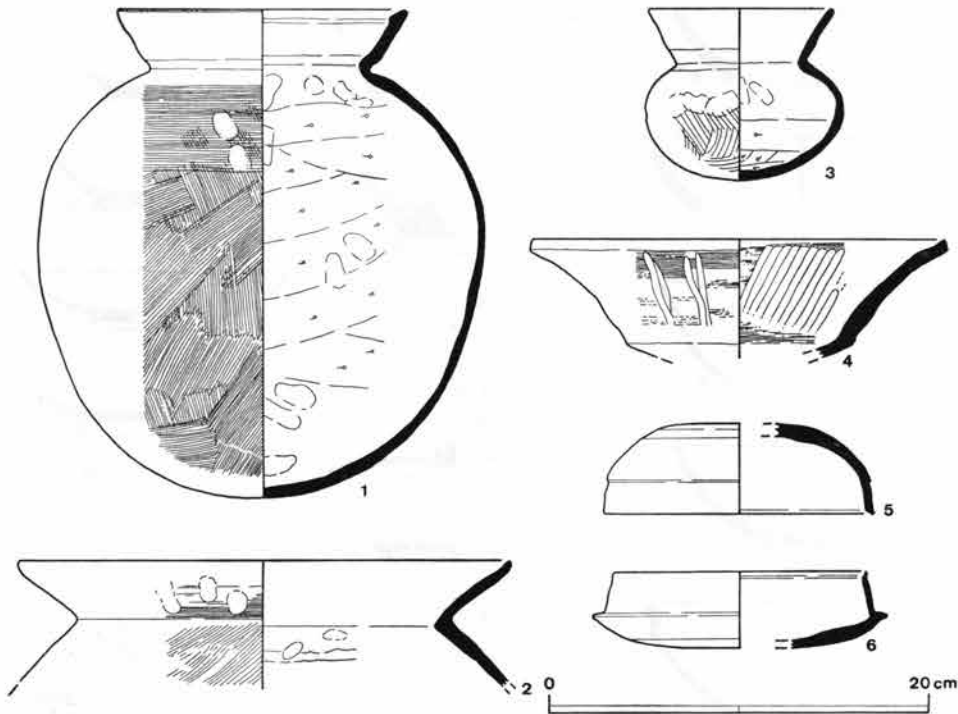
今回の調査で出土した遺物の内、遺構に伴うものの大半は、古墳時代から鎌倉時代に所屬している。一方、包含層からの出土遺物には、それらに加え縄文時代後期・晩期(図版第11-7)の土器が僅かにある。ここでは、遺構から出土した遺物を時代順に概観する。

古墳時代の遺物(第22図, 図版第11-1)

土師器 甕1は口縁端部内面が肥厚し、体部はほぼ球形を呈している。外面は、一部に指頭圧痕が残るものの丁寧にハケメ調整を施している。一方、内面は横方向のヘラケズリで器面調整をしている。甕2は、頸部が鋭く屈曲し、肩の張る体部である。体部には細かいハケメが入る。小型丸底壺3は、扁平な体部をもちハケメが観察できる。高杯4は、緩やかに外反する杯部をもち粗いヘラミガキで器面調整を行っている。

これらの遺物は、11区の自然流路から出土したもので、大半が1・3・4のように布留式併行期であるが、2のようにそれ以前に比定できる資料も僅かながら出土している。なお、甕2は、胎土・色調から生駒西麓産の土師器であり、交易を考える上で重要な遺物であると言えよう。

須恵器 杯蓋5は、内傾する口縁部をもち、肩部は僅かに突出している。天井部は丸く、ヘラケズリの占有率は30%である。杯身6は、内傾する口縁部をもち水平な受部である。



第22図 土器実測図(古墳時代)

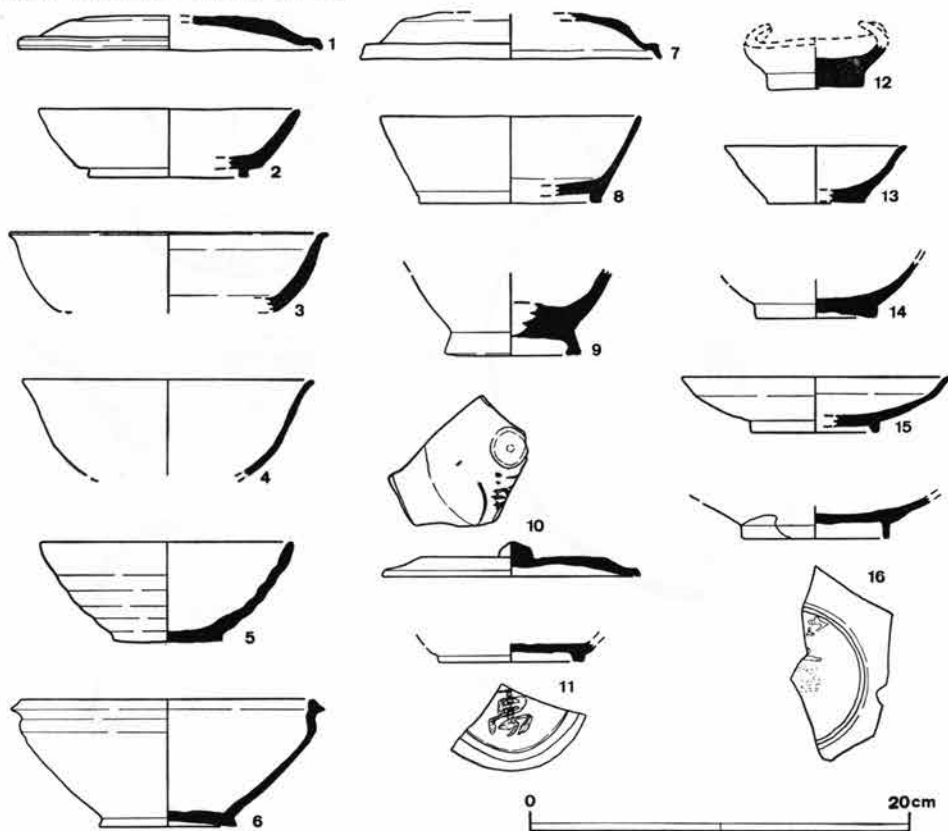
S R16001下層

奈良・平安時代の遺物(第23図)

図示した土器は全体のごく一部であるが、一般的に平安時代の遺物が比較的多い。また、須恵器に比べ土師器の出土点数が少ないことも指摘できる。一方、出土した篠窯産の須恵器・緑釉陶器は、量的にはあまり多いとは言えず、供給された時期は、一時期に集中する可能性がある。

須恵器 杯蓋(図版第11-2)は、つまみ部分が欠損しているが、口縁部に面をもつものが多い。杯身は、底部と杯部の屈曲部に高台が付くものと屈曲部内方に付くものに分類できる。なお、底部に「萬」と書かれた墨書土器11等が出土している。碗5は、ロクロナデが顕著に残存する資料で、同類の土器の出土は比較的少ない。鉢6(図版第11-4)は、平らな底部で口縁部が肥厚している。胎土・焼成とも良好である。この須恵器は、亀岡市篠町に所在する篠窯跡群で焼成されたもので、篠窯で言う第1画期に所属する資料である。

緑釉陶器(図版第11-3) 耳杯12は、口縁部を欠いているが、釉の残存は良好である。皿13は、平らな底部をもち、僅かに外反する口縁部である。淡緑色の釉色を観察できる。碗14は、底部は蛇ノ目高台である。



第23図 土器実測図(奈良・平安時代)

1・7~11: SD21001 2・4・12~16: 34区 3: 31-1区 5: 22区 6: 11区

灰釉陶器 碗16は、平らな底部をもち、底部と体部の屈曲部に下垂する高台が付く。底部外面には、判読できないが墨書がある(図版第11-8・9)。篠窯産の須恵器・緑釉陶器は、量的にあまり多いとは言えず、須恵器・緑釉陶器と同じく供給された時期は、一時期に集中する可能性がある。(小池 寛)

石帯(第24図) 1・2は丸靱, 3は巡方である。1は縦2.8cm, 横3.3cmを測る。裏面の潜穴は、直径2mm程度の楕円形で、やや斜め方向に穿たれている。石材は蛇紋岩である。2は縦3.0cm, 横3.4cmを測る。裏面の潜穴は直径1mmの円形で、斜め方向に穿たれている。石材は大理石である。3は縦3.0cm, 横3.0cm以上を測る。これは巡方の中でも透し穴をもつタイプのものである。表面はきわめて丁寧にみがかれている。裏面の穴は直径2mm程度の楕円形で、やや斜め方向に穿たれている。

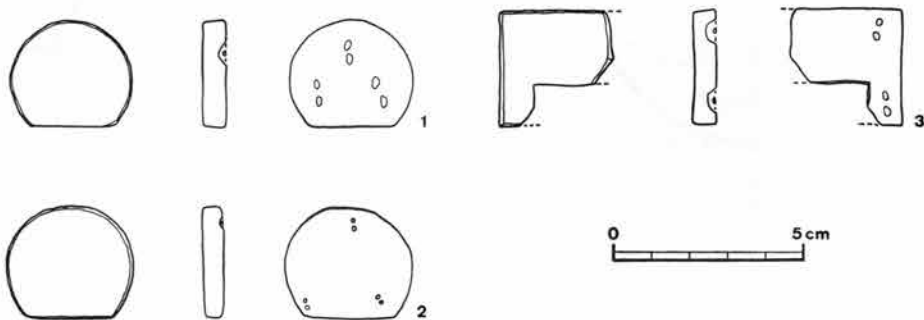
鎌倉時代の遺物(第25図, 図版第11-5・6)

この時期の遺物は、全調査区にわたってまんべんなく出土した。整理箱にして約20箱分にも及ぶ。特に瓦器は10箱分にも及び、出土遺物の約5%に相当する。今回はその中でも、主に遺構に伴ったものを図示した。

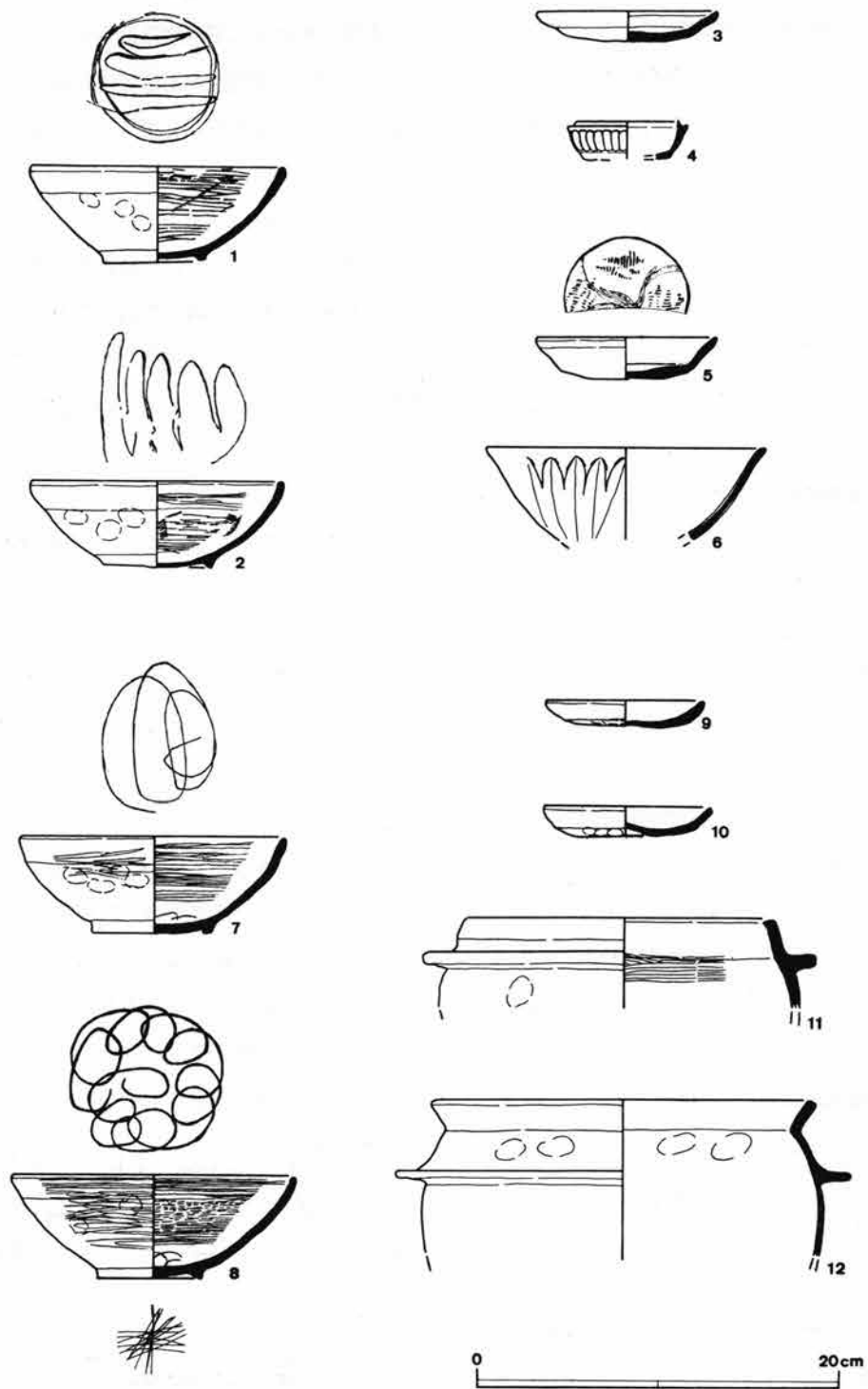
瓦器 1・2・7・8すべて碗である。1・2は口縁部がやや肥厚し、見込みに鋸歯状の暗紋を施す。内面の暗文は平行でやや疎、外面には指頭圧痕が残る。8は口縁端部に沈線をもち、断面三角形の高台がつく。暗文は内外面も密に施される。見込みの暗紋は螺旋形を描く。また、底部外面にはへら記号が認められる。

土師器 3・9・10は皿, 11・12は羽釜である。3はいわゆる「て」の字状口縁を呈するものである。口縁端部を上方につまみあげる。全体の形から、「て」の字状口縁の中でも最終段階のものである。11はいわゆる撰津型の羽釜である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、水平に頸をはりつける。内面には横ハケが施される。12はいわゆる大和型の羽釜である。口縁部はくの字に外反し、口縁部から少し離れた肩部に頸をはりつける。

輸入陶磁器 4は白磁の合子である。合子は一般的な集落跡では出土例が少なく、千代



第24図 石帯実測図
1: S D21001 2・3: 31-1区



第25図 土器実測図(鎌倉時代)

1・2 : S E 35040 3 : 35区 4~6 : 包含層 7~12 : S E 11019

川遺跡の性格を考える上で重要な資料といえる。5は青磁の皿である。見込みには、櫛描紋が描かれている。同安窯系の製品である。6は青磁の椀である。外面に蓮弁を描く。龍泉窯系の製品である。

(鶴島三壽)

5. 小 結

千代川遺跡は、今までに13回の調査が行われており、古墳時代から鎌倉時代の遺構・遺物が多く確認されている。その中であって今回の調査成果は、従来の考古学的分析に加え、自然地形の復原においても多くの情報を得たと言える。10・11区において検出した自然流路 S R 16001 は、少なくとも古墳時代前半期には形成され、鎌倉時代には人為的に埋められたことが判明している。この流路が流れて行くと考えられる調査区以東の水田の配置状況を見れば、他は整然と南北方向に並んでいるのに対して、この部分は規則性を失っている。これは最終期の流路の形状を表現していると考えられ、国府域内に幅20mの自然流路が流れていたことになる。国府造営時において環境整備がなされたとしても、流路の改良事業は行われなかったと解釈でき、完全に国府内の整備が行われなかったと考えることもできる。

30区で検出した自然流路 S R 30001 は、北西方向から南東方向に流れ込んでおり、拝田地区の谷に源を想定できる。この流路からは縄文時代晩期の土器片が出土しているが、流路の形成時期とは考えられず、おそらく、古墳時代前半期を前後する時期の形成と考えてよい。30区では、国府推定地北限の溝 S D 21001 を検出しているが、東半部においては、流路と軸を一致させるかのように屈曲させている。従来の指摘のように推定国府北限溝 S D 21001 が国府域北端に形成された谷地形の祖形であると言う推測は、検出した溝の深さから考えると肯首できず、むしろ、この谷地形の祖形を自然流路 S R 30001 に求める方が妥当である。とすれば国府推定の北限溝は、少なくとも S R 30001 との合流部以西についてのみ掘削されたと考えられよう。

34区で検出した掘立柱建物2棟は、平安時代に造営されたことが出土遺物から明らかになった。建物自体の規模と2棟が整然と並列している点、そして柱穴および周辺から墨書土器等が出土することから考えて一般的な集落に属する建物とは考え難く、国府域外ではあるが国府と大きく関係した建物である可能性は極めて高いと言えよう。国府域の推定は、歴史地理学からの指摘と考古学的発掘調査によってある程度ではあるが、一定の根拠をもって考えられてきた。しかし、今回の調査で検出した掘立柱建物の存在は、その見解に対して新たな問題点を提示することができると思われる。

鎌倉時代の掘立柱建物は、11・35区で確認している。総柱の建物である点から倉庫等の

性格であるとも考えられるが、35区で検出した掘立柱建物 S B35001 の東方では同時期の井戸 S E35040 を1基確認しており、また、瓦器・土師器等が多く出土していることから居住を目的にした建物であると考えておきたい。今回の調査では、2棟の建物跡の検出であったが、周辺に同時期の建物が存在することは十分考えられ、今後の検出に期待される。建物が廃絶した段階でいわゆる中世素掘り溝が穿たれる。11・13・34・35区で検出しているが、中でも34区の溝は、南北が1条、東西が2条を一単位として掘られている。地形は北から南にかけて傾斜しており、東西方向は、溜水を目的にしたと考えられ、南北は、ある程度の流水を目的としていたと考えられる。一方、35区の溝は、東西方向から南北方向に屈曲する部分を検出している。また、屈曲部の外方には、大きく掘り込まれた部分があり、水口の可能性がある。当時の水田の広さは不明な点が多いが、屈曲部分の検出から広さを推定する上で有力な根拠になり得ると考えられる。

6. おわりに

今回の調査では、古墳時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物を検出したが、各遺構・遺物のもつ意味は、従来の見解に対して再検討を必要とする調査成果も含まれる。特に、国府北限の溝とされてきた溝 S D21001 が、自然流路に大きく制約を受け掘り込まれた事実は、国府域の推定について少なからず影響を及ぼすものと考えられる。

国府の存在については、出土遺物等から肯首してよい状況にあるが、その範囲については歴史地理学と過去の調査事例から詳細に検討する段階に至ったと言える。その段階において今回の調査成果は、種々の問題提起が可能であり、多方面からの検証の必要性を指摘できるものと考えている。

(小池 寛)

注1 岩津博文・入船弘幸・石川 令・宇野淳央・牛尾充宏・大西智也・大西秀和・河田正明・郡司佳代子・佐藤寛己・白井真澄・武田和哉・瀧川ひとみ・谷向英人・内藤淳二・西村健司・西村欣也・田村 悟・苗田正裕・広瀬由美子・平野淑子・藤本城次・松田晴史・三谷浩司・山田和美・湯浅研史・吉田茂男・鷲田哲秀・田中智子・小林洋子・村上典子・松下道子・牧野當子・中西 宏・田代美穂子・庄林真弓・岡本美和子・荻野富紗子・石原俊子・石野正雄・宇野三雄・木村 峻・高橋一義・田中寛治・並河義次・野々村修・松浦寛一・渡辺春三・黒田美代子・黒田茂子・小槻小福・谷口明子・中西ふみ子・中垣民子・野々村礼子・原田敦子・俣野ふじえ・松山晃子・松本はつる・松本菊栄・松本末野・俣野よ志江・俣野静子・山内きくの・山内タカ子・山本美代子・八木淑子・八木きみ・八木すて(敬称略)

注2 ①水谷寿克ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1982

②水谷寿克ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第11冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1984

注3 大山崎町教育委員会の林 亨氏の御教示による。

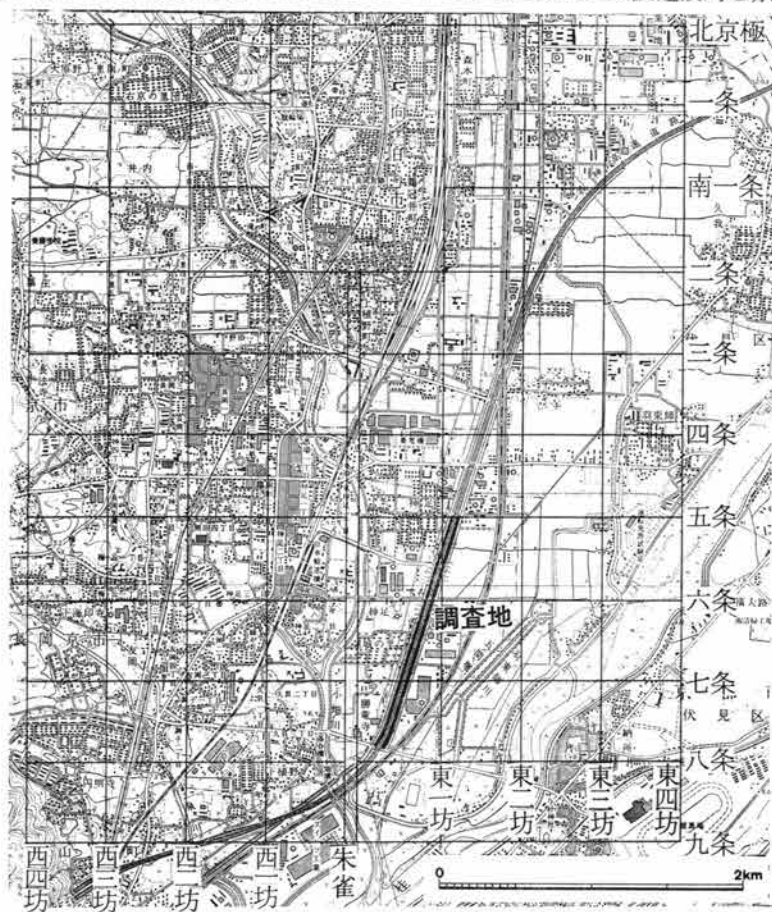
注4 南北1間で検出したが、柱間が約5mを測ることから、南北2間である可能性が高い。

3. 長岡京跡左京第200次発掘調査概要

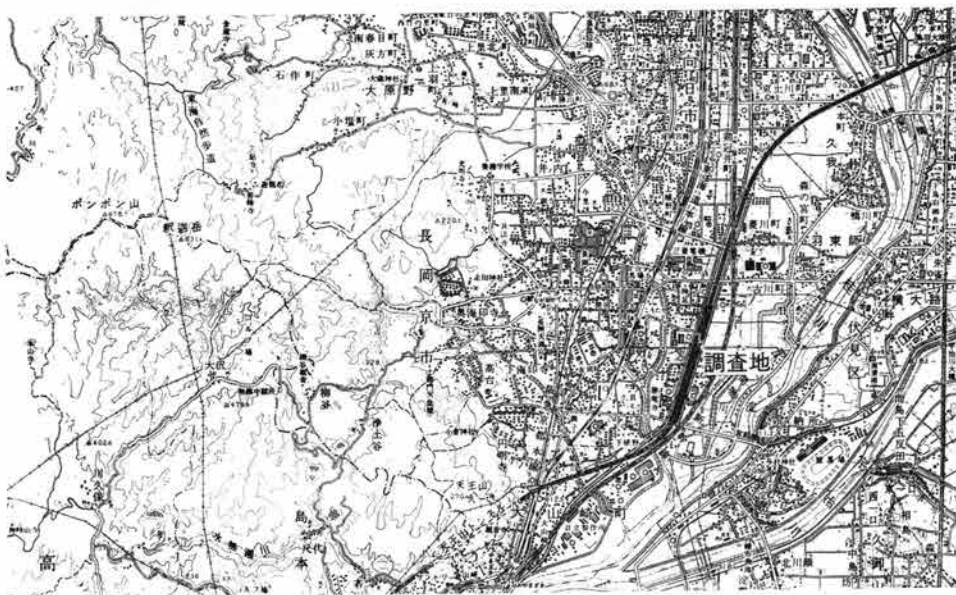
1. はじめに

日本道路公団では、京阪神地区の大動脈である中央自動車道西宮線(名神高速道路)の慢性的な停滞と、天王山トンネル付近での事故の多発を改善するため、大阪茨木インター・京都南インター間の車線の拡幅工事を計画された。名神高速道路の走る京都市西南部及び旧乙訓2市1町(向日市・長岡京市・乙訓郡大山崎町)の地は、桂川、宇治川、木津川の3川が淀川となって大阪湾に注ぐ合流点の北側に位置し、歴史に名高い天王山を南限とする西山の山並が連なり京都盆地の西を画している。平野部は低位段丘から沖積層であり、東南に向かって下がる地形を持つ(第27図)。当地では、ほぼ全域に長岡京を始めとする周知の遺跡が分布している。これら関係遺跡の取り扱いについて日本道路公団大阪建設局と京

都府教育委員会が協議した結果、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査を行うこととなった。今年度の調査地は、長岡京の条坊復原(第26図)によると、条では五～七条大路、坊では東一坊第二小路～東二坊坊間小路及び、弥生時代の集落跡で



第26図 長岡京条坊図



第27図 調査地位置図

ある雲宮遺跡にも一部が含まれている。路線としては、長岡京市馬場～同市勝龍寺までの約1.5kmにわたり(第27図)、合計、6ブロック・22トレンチ(第28図)を設け、長岡京跡左京第200次調査として行った^(注1)。現地の発掘調査は昭和63年7月18日～平成元年3月15日を要した。調査面積は、延べ約4,200 m^2 となった。本調査にかかわる経費は、日本道路公団大阪建設局が負担された。

調査には、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人、同主任調査員戸原和人、同調査員三好博喜があたった。調査を行うにあたっては、日本道路公団、長岡京市教育委員会、向日市教育委員会、神足地区の方々など関係各機関をはじめ、立命館大学・龍谷大学・近畿大学・大谷大学の学生諸氏のご協力^(注2)を得た。紙面をかり、謝辞を述べたい。概要の執筆は、1～3・5を戸原が、4を三好が行った。

2. 調査の方法

調査地は、名神高速道路と、国道171号線に挟まれた幅約8mの斜面地であり、安全対策上、開発対象地の全面で発掘を行うことが困難であったため、長岡京の条坊に係わる遺構の調査に限定して調査することとし、条坊の復原計画線の座標周辺にトレンチを設け、条坊遺構の検出に努めた。

調査に用いた地区割りは、京都府遺跡調査概報昭和52年度長岡京条坊復原に従い、トレンチが地区をまたがる場合は、面積の多くを占める地区名とした(第28図)。また、調査地内の地区割りは、調査区がN16°30'E程度傾くため、設定したトレンチの主軸に平行する



第28図 調査地字切図(地区名)

割り付けにした。

調査トレンチに対する安全対策としては、名神高速道路側でH鋼と矢板を用い、国道171号線側ではシートパイルによる土留め支保工を行った。当初計画した現地地表下3.0mを越える深さについては、トレンチ中央部で断ち割り(幅1.0m、深さ0.5m)を行い、下層の確認を行った。

3. 調査の概要

今年度の調査の結果、長岡京の条坊に関する遺構や、久我畷に関する遺構など、いくつかの新しい成果を得た。

1ブロック(7ANQNR・QNB地区)

勝龍寺の西川原と西落辺で3か所のトレンチを設定した(第29図)。

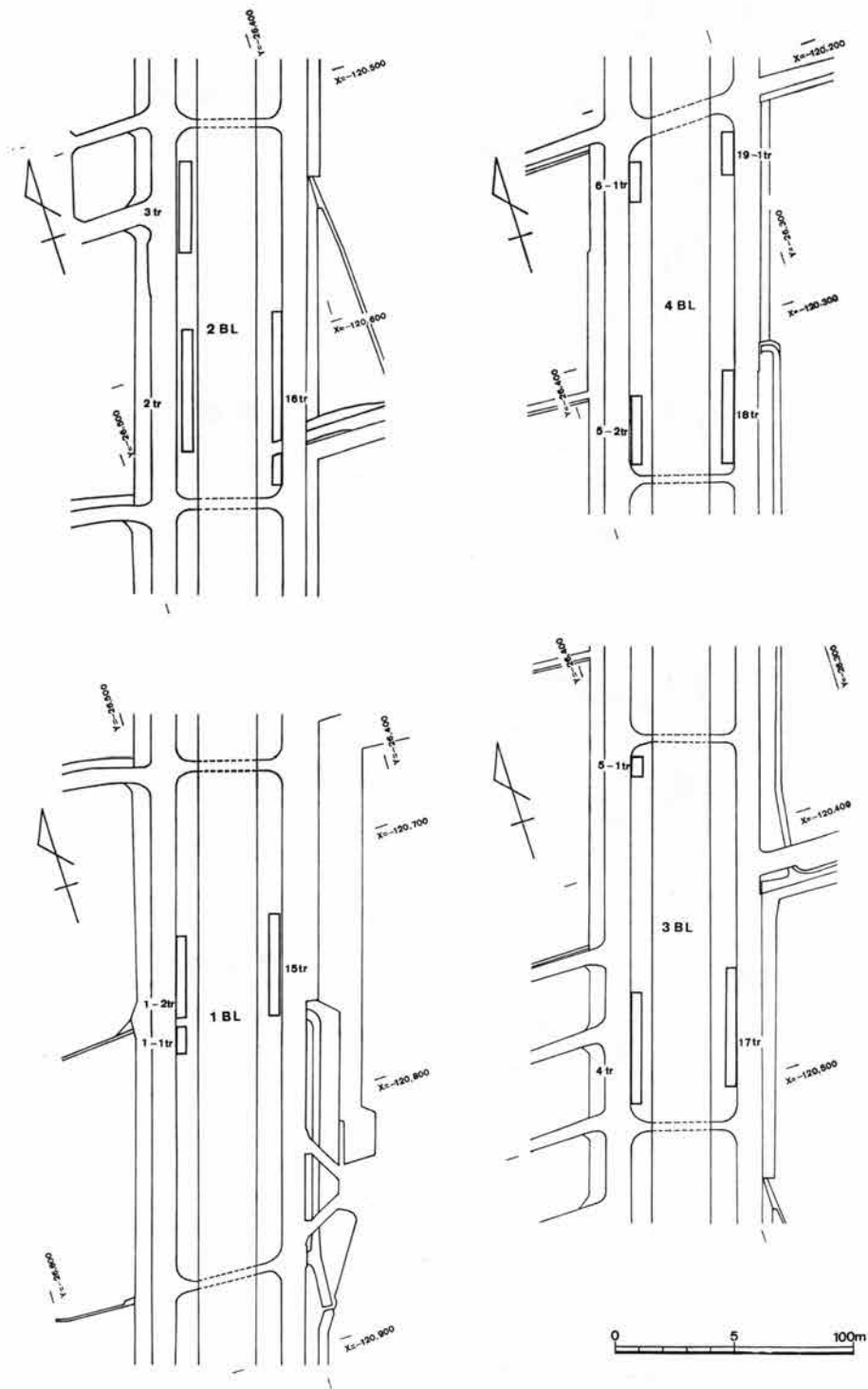
第1-1・1-2・15トレンチ(図版第12-1)

七条大路の検出を目的に設定したトレンチである。第15トレンチでは、地表面の標高が約12.6mで、地表下約2.6mまでが第1層盛り土、標高9.7mまでが第2層青灰色砂、標高9.6mまでが第3層暗褐色粘質土、標高9.3mまでが第4層青灰色細砂シルト、以下青灰色シルト層までを確認した(第35図)。各地層からの出土遺物はほとんどなく、遺構を確認するには至らなかった。

2ブロック(7ANQTR地区)

勝龍寺の塔ノ森で3か所のトレンチを設定した(第29図)。

第2・16-1・16-2トレンチ 第2トレンチは七条第二小路、第16-1・16-2トレンチは七条第二小路と東一坊第二小路の検出を



第29図 1～4ブロックトレンチ配置図

目的に設定したトレンチである。第16-2トレンチでは、地表面の標高が約12.6~12.9mで、地表下約2.9mまでが第1・2層盛り土(サンドマット層を含む)、3.1mまでが第3層暗褐色粘質土(旧耕作土層)、標高9.2mまでが第4層青灰色細砂シルト、約5cmの黄褐色細砂層、以下が概ね青灰色シルト層となっている。青灰色シルト層上面には上層の黄褐色細砂で埋まった牛や人の足跡が検出されており、水田面と考えられる(第35図)。黄褐色細砂層より瓦器碗が出土している。

第3トレンチ(第30図、図版第12-2) 東一坊第二小路と久我畷(山崎津~鳥羽作り道にかけての古道)にかかる調査区である。トレンチの全面に直径3~5cmの礫層が広がっていたが、道路面としての範囲を確定するには至らなかった。この礫層を取り除いた下層から「伊勢」の刻印の押された杓子出土している。礫の下層からは、東西に流れる溝を4条検出している。それぞれの溝は、北よりSD200003が幅0.66m、深さ0.47m、座標位置はX=-120,525.22を測る。SD200004が幅0.76m、深さ0.31m、座標位置はX=-120,529.50を測る。SD200005が幅0.63m、深さ0.4m、座標位置はX=-120,533.35を測る。SD200006は南の肩が攪乱されており明らかでないが、幅0.78m以上、深さ0.33mを測る。座標位置はX=-120,538.48を測る。これらの溝の埋土は、第5層青灰色砂質粘土、第6層青灰色粘性砂質土、第7層暗青灰色粘質土からなる(第35図)。それぞれの溝は、SD200003とSD200004間が4.28m、SD200004とSD200005間が3.85m、SD200005とSD200006間が5.13mを測る。溝内からの出土遺物はなく、時期は確定できない。

3ブロック(7ANQKT・MAR・MOT地区)

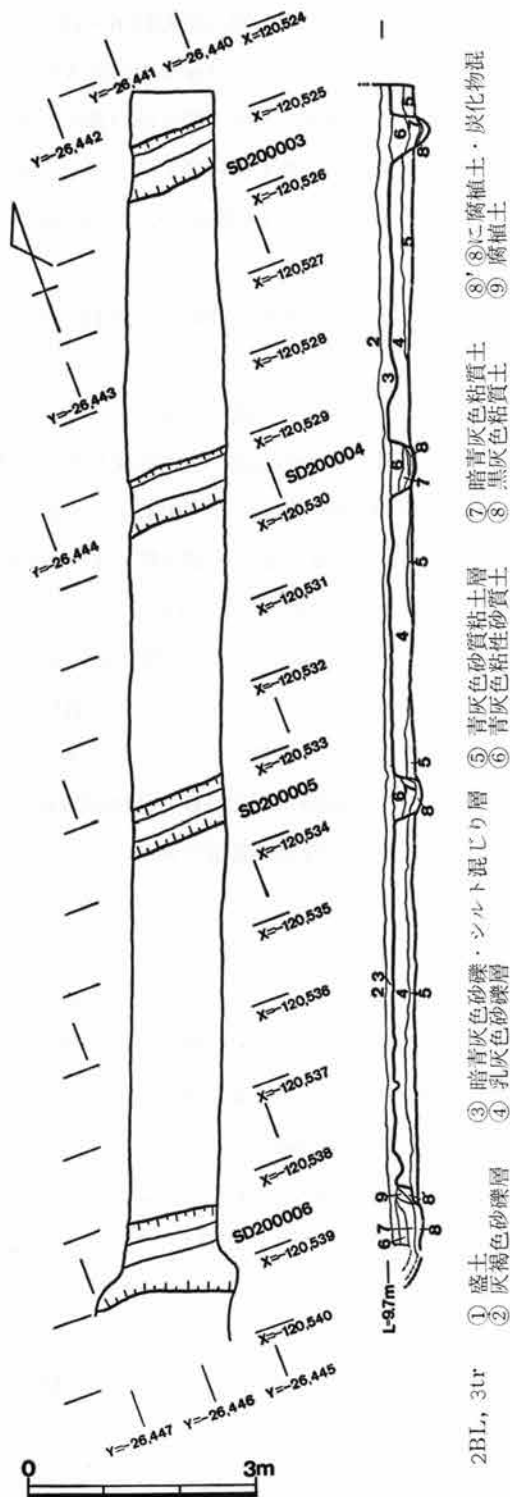
勝龍寺の蔵本・芦原、神足の太田で3か所のトレンチを設定した(第29図)。

第4・17トレンチ 七条条間小路の検出を目的に設定したトレンチである。地表面の標高が約12.4~12.7mで、地表下約2.5~2.9mまでが第1層盛り土・旧耕作土層、標高9.5m前後までが第2層灰褐色粘質土層、標高9.3~9.7m前後までが第3層暗褐色粘性砂質土、標高9.3~8.9m前後までが第4層黒灰色粘質土層と続く(第35図)。

第5-1トレンチ(図版第13-1) 七条第一小路の検出を目的に設定したトレンチである。地表面の標高が約12.4mで、地表下約2.5mまでが第1層盛り土・旧耕作土層(標高9.9m)、標高9.8m前後までが第2層暗茶褐色砂層、標高9.7m前後までが第3層褐色礫層、標高9.6m前後までが第4層灰色粘性砂質土茶褐色有機物混じり層、標高9.2m前後までが第5層灰色粘性砂質土層、標高9.1m前後までが第6層灰色砂層、標高9.1m以下が第7層黒灰色粘質土層と続く(第35図)。

4ブロック(7ANMOT・MKM地区)

神足の太田・暮隅で4か所のトレンチを設けた(第29図)。



第30図 2ブロック第3トレンチ断ち割り部実測図

第5-2・18トレンチ 七条第一小路の検出を目的に設定したトレンチである。地表面の標高が約12.6mで、地表下約3.0mまでが第1・2層盛り土・旧耕作土、標高9.3m前後までが第3層灰褐色砂質粘土、標高9.2m前後までが第4層灰褐色砂質粘土礫混じり、標高9.1m前後までが第5層褐色細砂、標高9.1m以下が第6層暗灰色粘質土となる(第35図)。

第18トレンチでは、地表面の標高が約12.2mで、地表下約2.6mまでが第1・2層盛り土・旧耕作土、標高9.6~9.4m前後までが第3層灰褐色粘質土、標高9.3~9.1m前後までが第4層暗褐色粘性砂質土、標高9.0m以下が第5層暗灰色粘質土となっている。

灰褐色砂質粘土層礫混じり層より長岡京期の須恵器・杯蓋・杯身等が、礫の上面で「聖宋元寶」(1101年初鑄)が、暗褐色粘性砂質土層からは、丸瓦・鉄釘が出土している。

第6-1・19-1トレンチ 六条大路の検出を目的に設定したトレンチである。

第6-1トレンチ(第31図、図版第14-1・2)は、地表面の標高が約12.6mで、地表下約2.7mまでが盛り土・旧耕作土、標高9.9~9.8m前後までが第1層灰色砂、標高9.8~9.7m前後までが第2層灰色砂質土、標高9.7~9.5m前後までが第3層灰色粘性砂質土、標高9.5~9.3m前後までが第4層黒褐色粘

- ① 盛り土
- ② 灰褐色砂礫層
- ③ 暗褐色粘性砂質土層
- ④ 乳灰色砂礫層
- ⑤ 青灰色砂質粘質土層
- ⑥ 青灰色粘性砂質土層
- ⑦ 暗青灰色粘質土層
- ⑧ 黒灰色粘質土層
- ⑨ 腐植土
- ⑩ 腐植土・炭化物混

2BL, 3Ur

性砂質土、標高9.3m以下が第5層暗黒灰色粘土層及び淡黒灰色粘土の融合状態となっている。また、溝SD200001は、淡暗茶褐色土によって埋まっていた(第32図)。

溝SD200001は、幅約1.0m・深さ約30cmを測り、調査地内で3.5mにわたって検出した。溝の中心座標値は、X=-120,232.43を測る。上層灰色砂層より瓦器碗・瓦質羽釜、溝内より須恵器杯蓋・杯身、土師器皿・高杯などが出土している。

第19-1トレンチ(図版第13-2)は、地表面の標高が約12.5mで、地表下約2.8mまでが第1層盛り土・旧耕作土、標高9.8~9.5m前後までが第2層褐色粘性砂質土(径2~10mmの礫混じり)、標高9.45~9.4m前後までが第3層暗褐色粘性砂質土(径2~5mmの礫混じり)、暗褐色粘性砂質土層の下面に部分的に厚さ5cm程度の第4層乳灰色粘質シルト層を挟む。

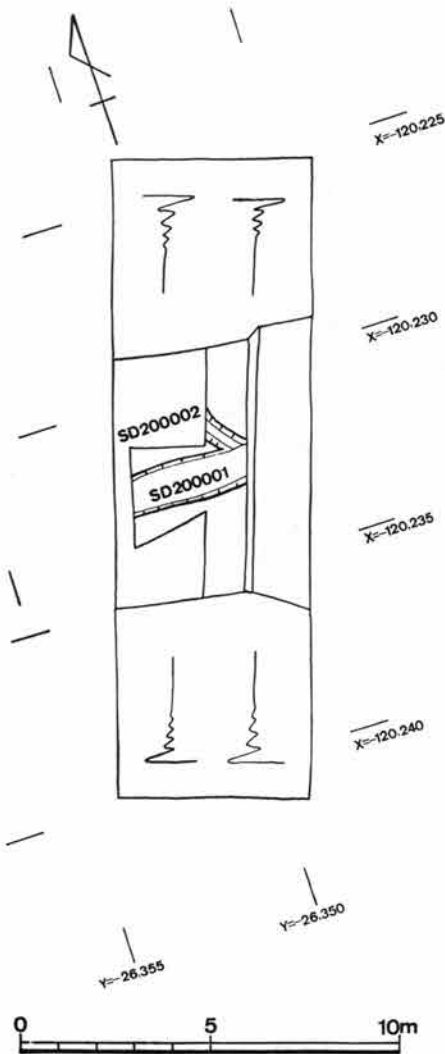
この層には黒色粘質土が混じり、液状化した噴砂の可能性が考えられる。標高9.4~9.1m前後までが第5層黒灰色粘質シルト、標高9.1m以下が第6層暗灰色細砂層となっている(第35図)。

5ブロック(7ANMSB・MYD地区)

神足の下八ノ坪・柳田で6か所のトレンチを設定した。

第6-2・19-2・20-1・20-2トレンチ(第33図)

第6-2・19-2トレンチは、六条大路の検出を目的に設定したトレンチである。19-2トレンチでは、地表面の標高が約12.6mで、地表下約2.0mまでが第1層盛り土・旧耕作土、標高10.5~10.1m前後で、北寄りには暗黒灰色砂、南寄りでは第2層茶灰褐色砂質土が堆積する。南端では、標高10.3m前後までで第3層茶褐色砂質土、標高10.2m前後までで第4層灰色砂質土、標高10.0m前後までで第5層灰色粘性砂質土、標高9.9m前後までで第6層黒灰色砂礫土、標高9.8mまでで第7層赤褐色砂礫土、標高9.6m前後までで第8層黒灰色砂、標高9.5m前後までで第9層黒灰色粘質土(第35図)がベースとなり北に向かって下がる谷部の様相を呈している。谷

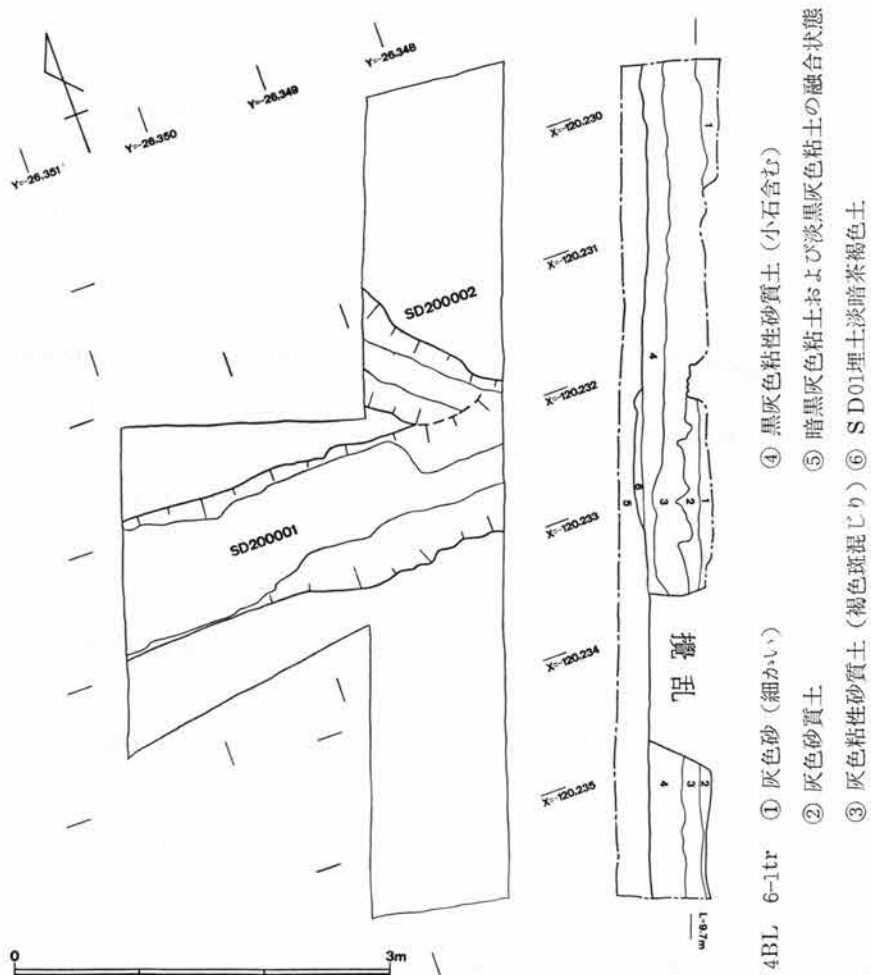


第31図 4ブロック第6-1トレンチ平面図

部の堆積は、上層で灰色粘性砂質土、下層で青白灰色粘性砂質土が確認されている。堆積層の中からは布留式土器が出土している。

第7-1 トレンチ 六条第二小路及び東一坊大路の検出を目的に設定したトレンチである。地表から約2.0mで長岡京期の包含層を検出している。南北の溝・ピット等を検出している。

第7-2 トレンチ(第34図, 図版第15-1・2) 第7-1トレンチ同様六条第二小路及び東一坊大路の検出を目的に設定したトレンチである。当初, 第7-1トレンチとは一つのトレンチとして設定したが, カルバート(暗渠)のため, 二つのトレンチとなった。六条第二小路の条坊復原計画心から約1m南で, 幅約40cmの東西溝を検出した。さらに南と北とに6m離れた位置で同規模の溝を2条検出した。東西に流れる溝を4条検出している。それぞれの



第32図 溝SD200001・200002実測図

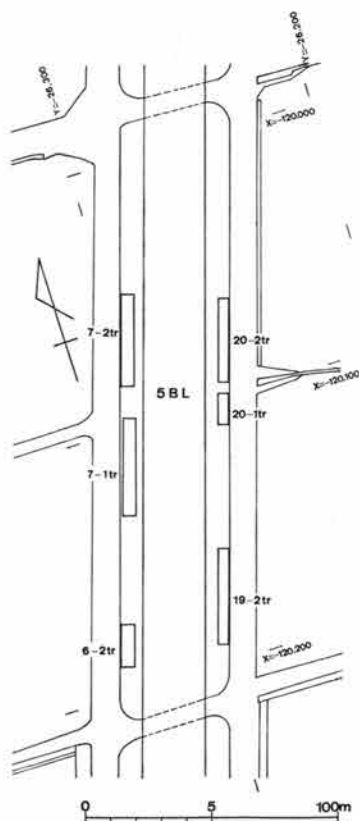
溝は、北よりSD200007が幅0.4m、深さ0.2m、座標位置はX=-120,059.650を測る。SD200008が幅0.4m、深さ0.15m、座標位置はX=-120,065.600を測る。SD200009が幅0.6m、深さ0.2m、座標位置はX=-120,072.670を測る。これらの溝の埋土は、黒灰色粘質土からなる。それぞれの溝は、SD200007とSD200008間が4.28m、SD200008とSD200009間が3.85m、溝SD200009からは長岡京期の遺物を出土しており、他の溝も同一時期と考えられるため、条坊との関係を考える上で今後の検討を要する遺構と考えられる。

7ブロック(7ANMKY・MMO・MTD地区)

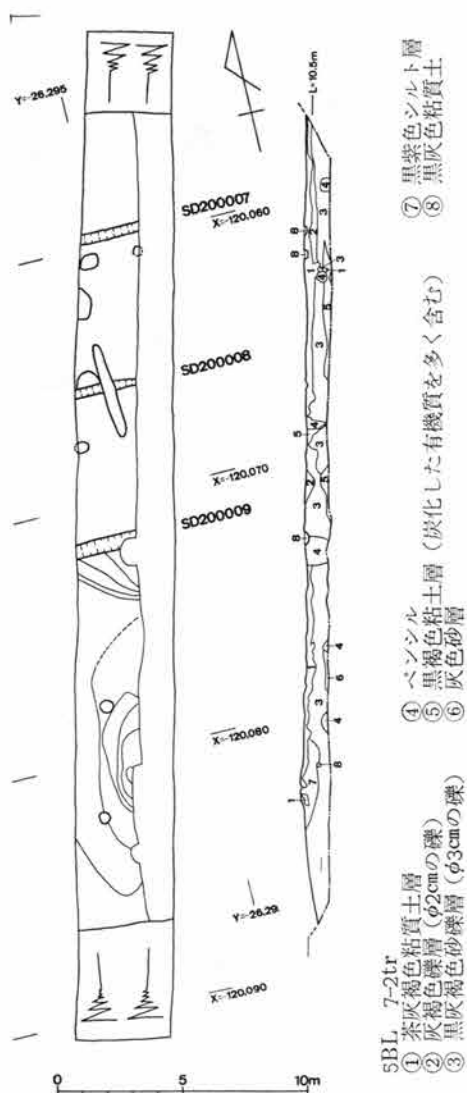
神足の雲宮・寺田・麦生で2か所について今年度の調査を行った(第28図)。

五条大路・六条第一小路及び東二坊第一小路の検出を目的に設定したトレンチである。長岡京期の遺物包含層、弥生時代・古墳時代前期の遺物包含層を確認している。

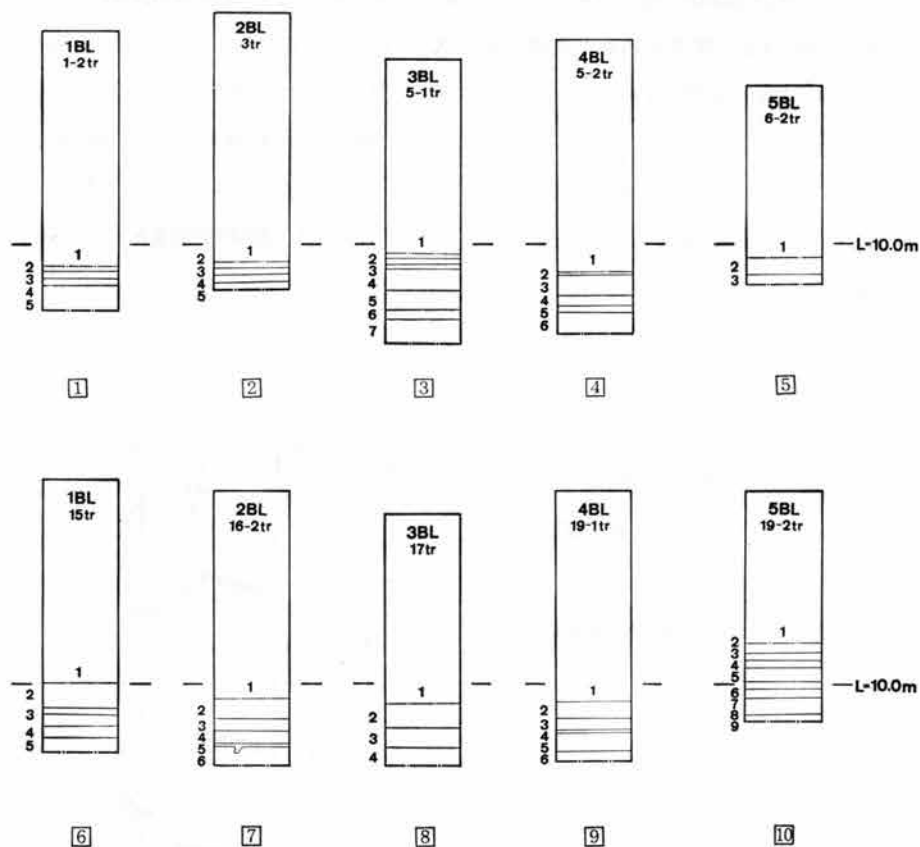
この地区の調査は、次年度に継続する



第33図 5ブロックトレンチ配置図



第34図 5ブロック第7-2トレンチ実測図



第35図 トレンチ土層柱状図

- | | | | | |
|-----------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1BL 1-2tr-①</p> <p>①盛土
②③に明茶褐色斑多く混じる
③明茶褐色斑少し混じる
④明灰色砂質土
⑤黒灰色粘質土</p> | <p>2BL 3tr-②</p> <p>①盛土・旧耕作土
②灰褐色砂礫
③暗青灰色砂礫
④乳灰色砂礫(φ7cmの礫を含む)
⑤青灰色砂質粘土</p> | <p>3BL 5-1tr-③</p> <p>①盛土・旧耕作土
②暗茶褐色砂
③褐色礫
④灰色粘性砂質土(有機物の茶褐色斑混じる)
⑤灰色粘性砂質土
⑥灰色砂
⑦黒灰色粘質土</p> | <p>4BL 5-2tr-④</p> <p>①盛土・旧耕作土
②灰褐色粘質土礫混じり(φ10~5cm)
③灰褐色砂質粘土
④礫混じり(φ5~1cm)
⑤褐色細砂
⑥暗灰色粘質土</p> | <p>5BL 6-2tr-⑤</p> <p>①盛土・旧耕作土
②茶灰褐色砂質土(下位でシルト化が進んでいる)
③黒灰色粘質土(炭化した有機質を多く含む)</p> |
| <p>1BL 15tr-⑥</p> <p>①盛土
②青灰色砂
③暗褐色粘質土
④青灰色細砂シルト
⑤青灰色シルト</p> | <p>2BL 16-2tr-⑦</p> <p>①盛土
②サンドマット(盛土青灰色砂)
③旧耕土層暗褐色粘質土
④青灰色細砂シルト
⑤黄褐色細砂
⑥青灰色シルト</p> | <p>3BL 17tr-⑧</p> <p>①盛土・旧耕作土
②灰褐色粘質土
③暗褐色粘性砂質土
④暗灰色粘質土</p> | <p>4BL 19-1tr-⑨</p> <p>①盛土・旧耕作土
②褐色粘性砂質土(φ2~10cm小礫混じり)
③暗褐色粘性砂質土(φ2~5cm小礫混じり)
④乳灰色粘質シルト
⑤黒灰色粘質シルト(上部と下部はそれぞれ接する層の影響をうけ変色している)
⑥暗灰色細砂(長岡京期のベースから)</p> | <p>5BL 19-2tr-⑩</p> <p>①盛土・旧耕作土
②茶灰褐色砂質土
③茶褐色砂質土(茶褐色斑混じる)
④灰色砂質土(多少)
⑤灰色粘性砂質土
⑥黒灰色砂礫土
⑦赤褐色砂礫
⑧黒灰色砂(細かい)
⑨黒灰色粘質土</p> |

ため、検出遺構等の詳細については来年度の報告に譲りたい。

(戸原和人)

4. 出土遺物

1・2・3ブロックでは遺物の出土量はごく僅かで、瓦器の細片が主体となっている。4・5ブロックでは長岡京期の遺構が検出され、同時期の土師器・須恵器を主体とする遺物が出土した。今回の遺物の出土量は、整理箱10箱程度である。

溝 SD 200001出土遺物(第36図1～12)

須恵器(1～8)は細片が多く、器種・器形を判断し得る資料は少ない。杯C(3)は、へら起こした底部から開きながら立ち上がり、端部を丸く収めている。

杯B(4～6)は、底部付近の破片が多く、全体を推定しうる資料は少ない。蓋A(1・2)は、縁辺部の破片で、宝珠つまみの形態は不明である。壺L(7・8)は口縁部を欠く。卵形の体部で、糸切痕を残す底部には高台が付く。

土師器(9～12)は磨滅した細片が多く、器種・器形・調整などを判断しうる資料は少ない。碗A(9)は細片で、詳細は不明である。皿A(11)は外面はへラケズリが施されており、C手法に当たる。皿C(10)は口縁端部がナデ調整で、あとは未調整である。高杯A(12)は脚部以下を欠く杯部の破片である。復原口径13.5cmを測る。脚は六角程度の面取りが行われている。

溝 SD 200003出土遺物(第36図13)

須恵質の甕もしくは鉢の底部破片が出土している。底部は平底で、外傾しながら胴部下半が立ち上がっていく。外面には平行タタキメを残し、内面はタタキのあとスリケンを行っている。

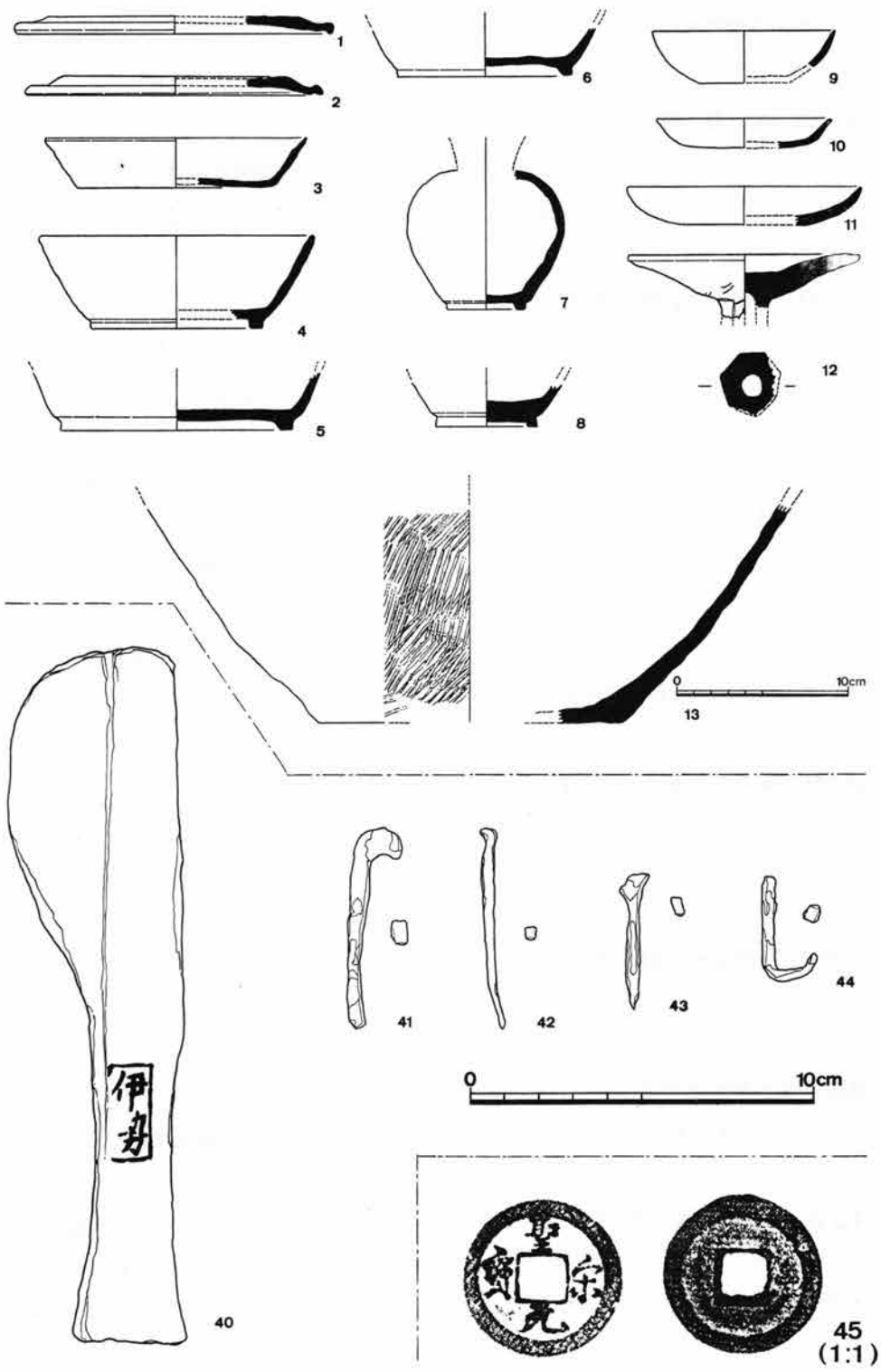
久我畷古道関連出土遺物(第36図40)

第3トレンチで調査した久我畷の古道に関連すると考えられる礫層の下から木製の杓子が出土した。柄の部分に「伊勢」の刻印が認められる。

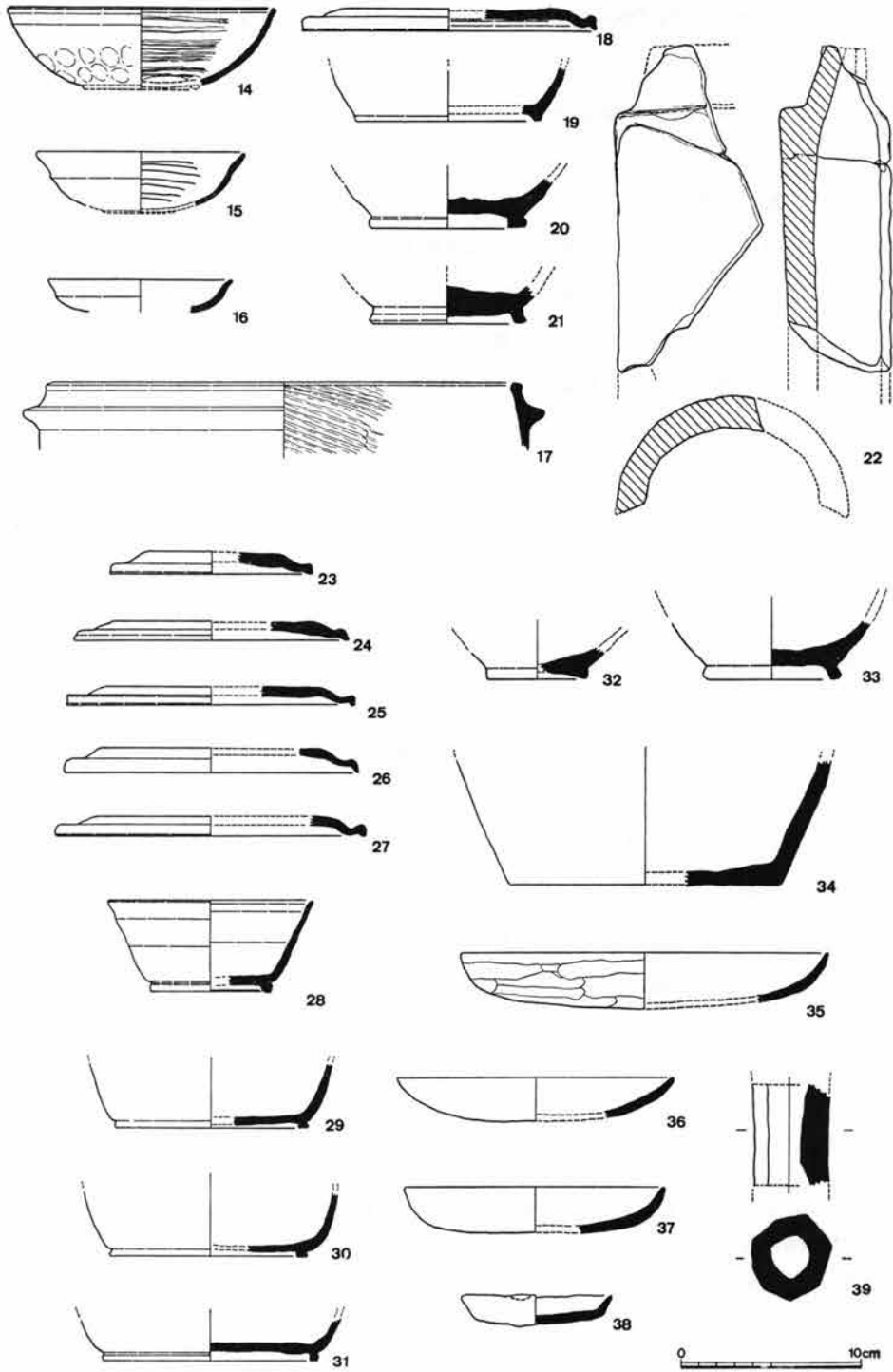
包含層出土遺物(第37図)

1・2・3ブロック 瓦器を主体とする細片が若干出土している。14は図上復原のできた碗である。口縁端部内側に凹線が巡り、内面には細かい暗文が施されている。

4ブロック 北西側で推定長岡京六条大路の側溝が検出され、包含層からも同時期の遺物が出土している。土師器では皿C(16)や羽釜(17)、須恵器では蓋A(18)や杯B(19)・壺の底部(20・21)などがみられる。22は玉縁付の丸瓦で、内面には布目痕や絞り痕が認められる。15は瓦器の碗で、口縁部を強くなでて屈曲させている。金属製品では、釘(41～44)が出土した。また、第4トレンチ礫層内から、聖宋元寶(45、1101年初鑄)が出土している。



第36図 出土遺物実測図・拓影



第37图 包含層出土遺物実測図

5ブロック 今年度の調査ブロックのなかでは、比較的多くの遺物を出土した。須恵器には、蓋A(23~27)や杯B(28~31)・壺の底部(33・34)などがある。32は削り出し高台をもつもので、椀もしくは壺と考えられるが、磨滅のため不明である。土師器では、皿A(35~37)や皿C(38)・高杯の脚部(39)などがみられる。(三好博喜)

5. ま と め

調査は、長岡京の条坊と雲宮遺跡に関する遺構・遺物の検出を目的とし行った。確認した地層は、地点により様々で、連続して捉えることが困難であった。概ね2~4ブロックでは洪水による砂礫の堆積が顕著で、時期も中世の頃と考えられる。また、5ブロック第19-2トレンチの地層は、周辺に普遍的なものではなく、河道の堆積と考えられる。

確認された成果の内、主なものとしては、4ブロック(第6-1トレンチ)で検出した溝SD200001があげられる。

溝SD200001は、長岡京の条坊計画線では推定六条大路に近い位置にある。今回検出した遺構を検討する上で関連する遺構としては、五条大路の南北両側溝が検出されている。検出された五条大路は、溝の心々で15mを測り、この中心軸は $X = -119,690.5$ となっている。この結果から、発掘された五条大路の条坊中心軸線と復原計画心の座標値($X = -119,667.7$)では、発掘結果の中心が22.8m南にくることになる。これを六条に應用すると、六条大路の条坊復原計画心の座標値($X = -120,200.50$) + (-22.8) = $-120,223.3$ となる。以上のことから、今回検出した溝は、六条大路の条坊復原計画心から9.13m南に位置していることになる。また、五条大路の南側溝から、今回検出した推定六条大路の南側溝までの距離は534.43mを測り、長岡京の条坊計画に用いられた尺が29.6cmで、一条・一坊は、1,800尺(532.8m)になることを考えれば、五条大路の南側溝から一条で1.63m南に下がっていることになり、前記の距離に非常に近い値を得ることになる。

以上のことを考えて、今回検出した溝SD200001は、長岡京六条大路の南側溝の可能性を指摘しておきたい。(戸原和人)

注1 調査地区名は、以下のとおりである。

7ANQNR西河原田・QNB西落辺・QTR塔ノ森・QKT蔵本・MAR芦原・MOT太田・MKM暮隅・MSB下八ノ坪・MYD柳田・MMO麦生・MKY雲宮・MTD寺田

注2 現地調査に参加していただいた方々は以下のとおりである(敬称略)。

油谷雅司・石津敦子・入船弘幸・大西秀和・片山和子・北村 清・島田滋子・末松英治・滝脇喜充・武村英治・只野 昭・田中 牧・谷脇伸一・塚本映子・津村知子・徳田尚美・十時奈津子・中崎憲和・中原昌弘・野田典枝・早川文乃・原田光明・平田晴彦・船越裕介・古澤妥史・別所寛康・松尾均子・宮本純二・山田晶代・山根嘉久男・若松幹郎・小田栄子・駒井靖子・福田万智子

4. 木津地区所在遺跡

昭和63年度発掘調査概要

はじめに

この調査は、住宅・都市整備公団の依頼を受け、関西文化学術研究都市の開発区域内に所在する遺跡の調査で、通称、木津東部丘陵地(木津町鹿背山・木津・市坂・梅谷地区)で実施した発掘調査である。

昭和63年度は、大字市坂地区で4遺跡の試掘および発掘調査を行った。

上人ヶ平遺跡は、昭和63年度までの試掘調査で遺跡の範囲が明らかとなったため、本年度は遺跡地の東半分(4,800㎡)を対象に発掘調査を行った。^(注1)

発掘調査の結果、古墳時代中期(上人ヶ平遺跡のⅣ期)^(注2)に属する小形方形墳を4基(14号墳・15号墳・16号墳・17号墳)新たに検出したほか、試掘調査で確認していた古墳(7号墳・8号墳)の規模が明らかとなった。また奈良時代(上人ヶ平遺跡のⅥ期)の遺構では、掘立柱建物・井戸のほか土坑なども新たに確認した。

瓦谷遺跡は、昨年度^(注3)の調査に引き続き、今年度も試掘調査を行った。今年度の調査では、古墳時代前期(上人ヶ平遺跡のⅢ期)の旧流路のほか、瓦谷58 b t では後述するように埴輪窯に関連した灰原も確認した。

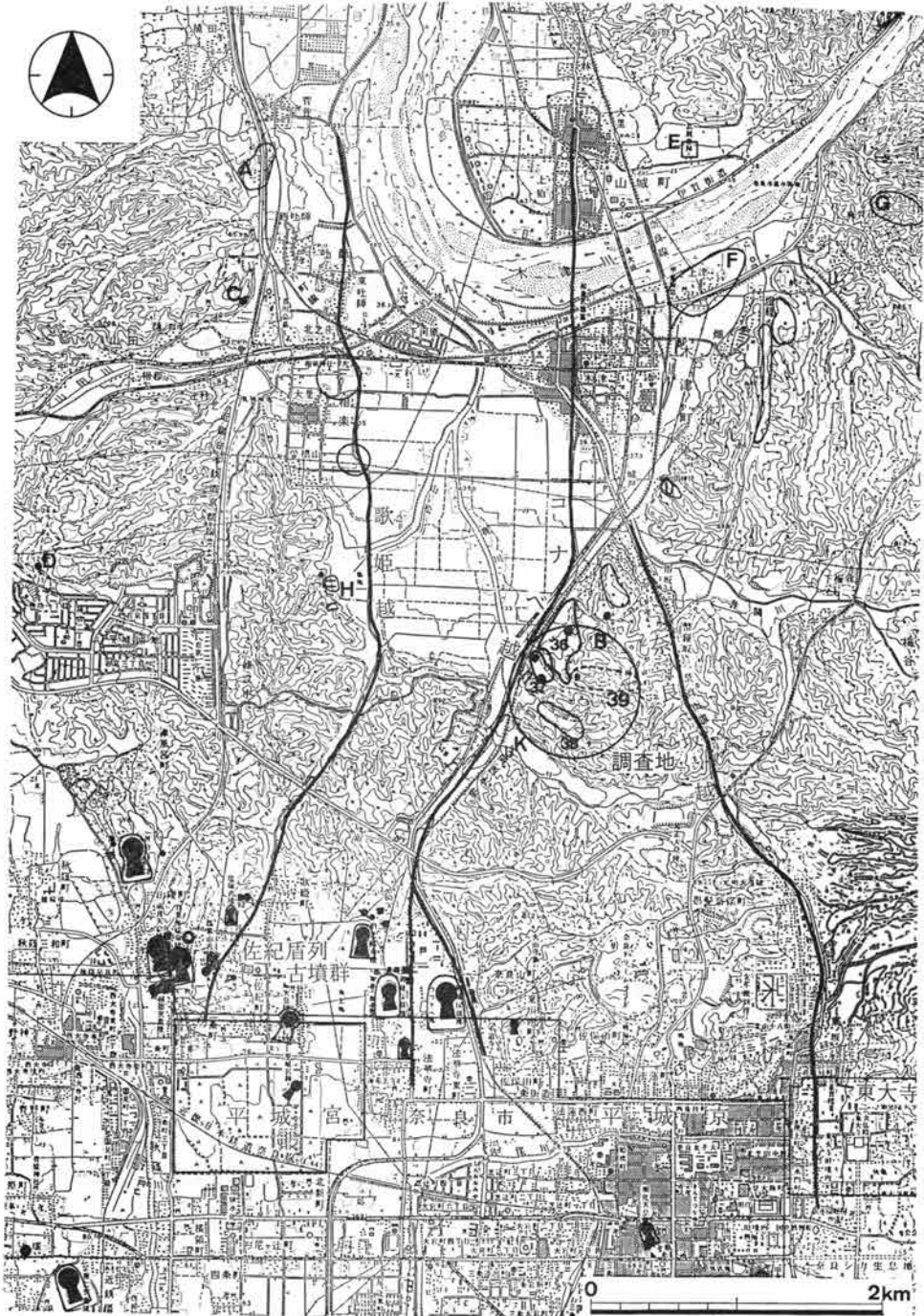
上人ヶ平埴輪窯は、瓦谷58 b t の試掘調査で灰原を確認したため、新たに丘陵斜面にトレンチを設定し、窯体の確認につとめた。その結果、3基の窯体および灰原を確認し、そのうちの1基(上人ヶ平1号埴輪窯)のみ発掘調査を行った。

幣羅坂古墳は、上人ヶ平遺跡とは瓦谷遺跡を挟んだ対岸の丘陵上にある遺跡である。この調査では、丘陵上に古墳状隆起が13地点あり、各地点に試掘トレンチを設定し、調査をした結果、1基のみ古墳であることが明らかとなった。

瀬後谷遺跡は、昭和62年度の試掘調査で興福寺系の軒平瓦などが出土しており、周辺の丘陵斜面に瓦窯が予想される遺跡である。今年度は、奈良国立文化財研究所西村 康氏のご協力^(注4)で磁気探査を実施し、遺跡の範囲の確認につとめた。

調査は、当調査研究センター調査第2課第3係長小山雅人、同主任調査員石井清司、同調査員伊賀高弘が担当し、多くの補助員・整理員がそれを補助した。^(注4)

なお、本調査にかかわる経費は、住宅・都市整備公団が負担された。(石井清司)

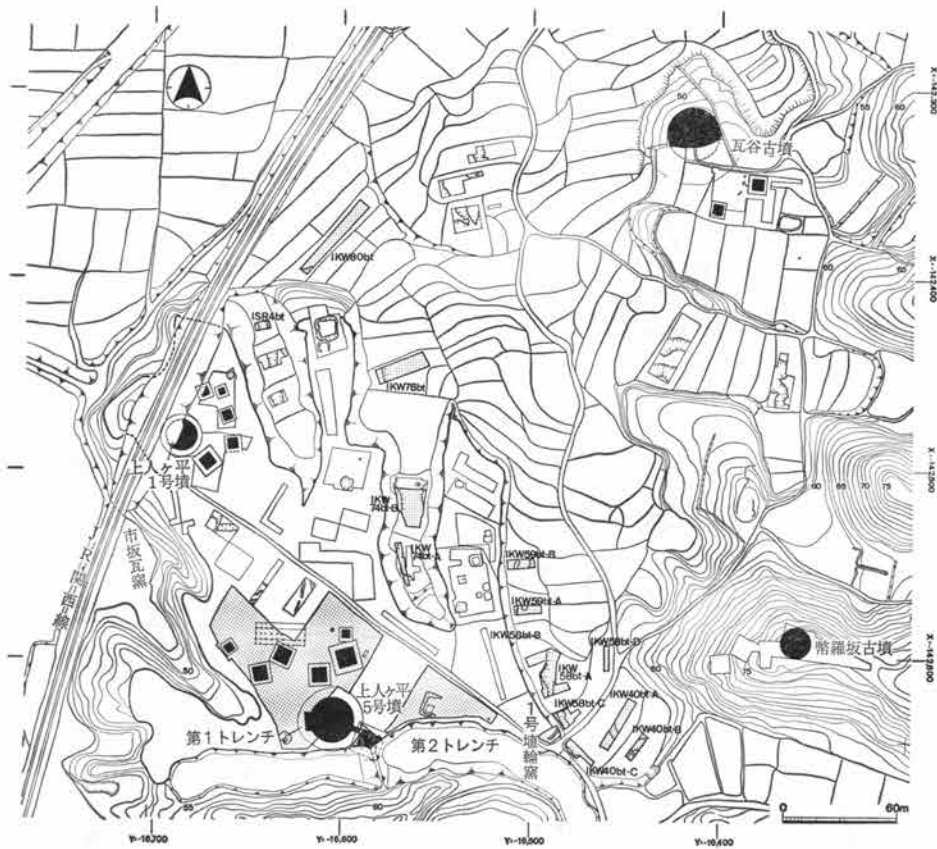


第38図 調査地位置図

36: 瓦谷遺跡 37: 上人ヶ平遺跡 38: 瀬後谷遺跡 39: 幣羅坂古墳

A: 吐師七ツ塚古墳群 B: 西山古墳 C: 白山古墳 D: カザハヒ(石のカタド)古墳

E: 高麗寺跡 F: 上津遺跡 G: 鹿背山城 H: 音如ヶ谷・歌姫西瓦窯 K: 歌姫瓦窯



第39図 上人ヶ平・瓦谷遺跡調査区配置図

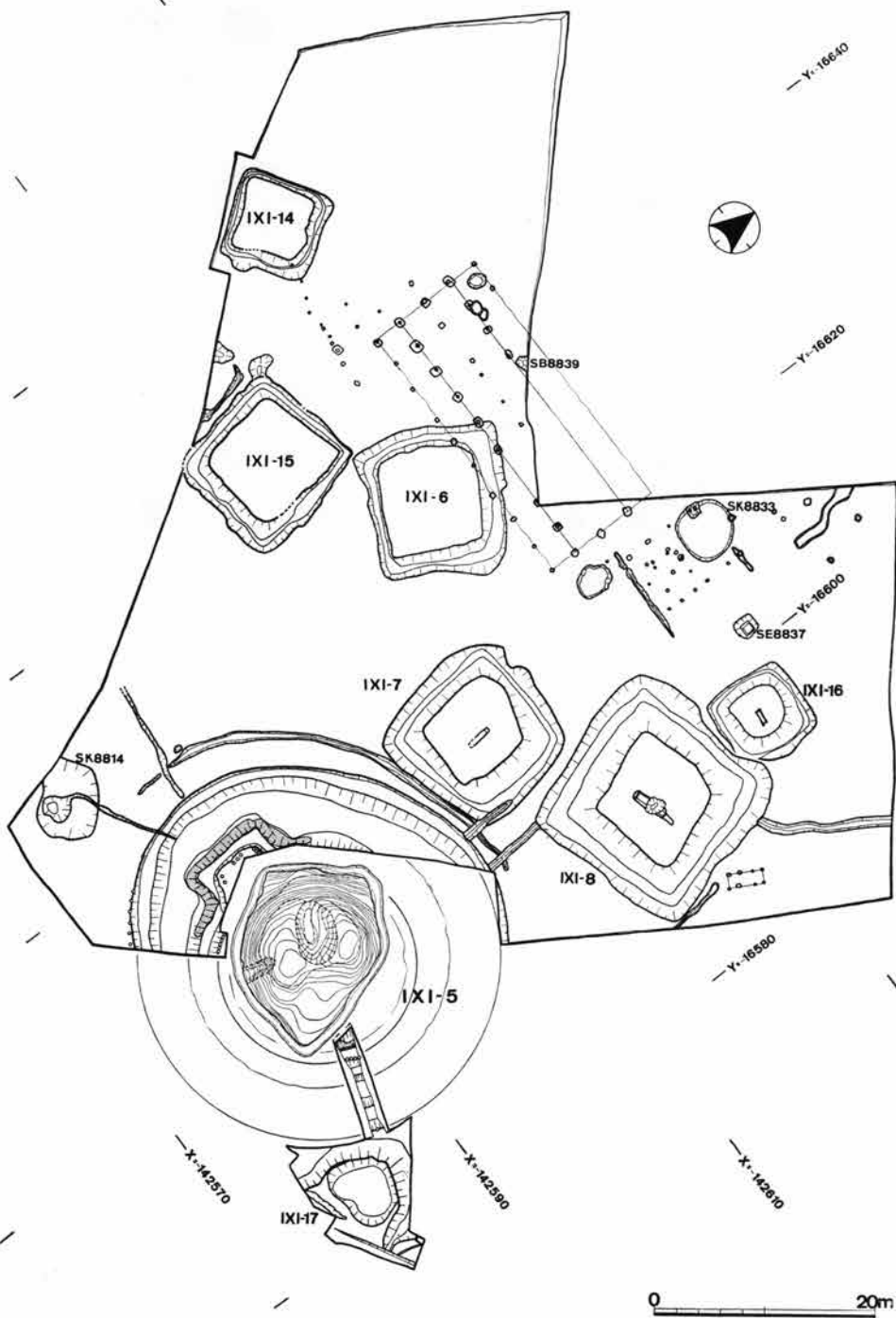
(1) 上人ヶ平遺跡

1. 調査の経過

上人ヶ平遺跡の本年度調査は、昨年来の試掘調査の成果をうけて、台地の南半部を対象に調査を実施した。

今回の調査区は、州見山を主峰とする丘陵の末端に形成された幅の広い台地の基部寄りに位置する。ただ、台地の基部といっても、調査区のすぐ南側は、東西方向の人工的な谷地形(池)により南東方向に延伸する丘陵と分断された不自然な地形を示している。

対象地の中央には、埴輪を巡らした造り出し付き円墳として古くから周知された上人ヶ平5号墳が今でもマウンドを地表に残しており、その後、断片的なトレンチ調査で、この周囲に小形の方墳や奈良時代の遺構・遺物が濃密に分布することが判明している^(注1)。今年度は、こうした過去の成果をもとに5号墳周辺を中心として発掘調査を実施した。調査面積は4,800 m^2 である。



第40図 第1トレンチ遺構平面図

2. 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構としては、マウンドをもった墓(広義の古墳)8基と土坑(SK8814)1基の調査を行った。

古墳は、その形態・規模・構造等から、造り出し付きの中規模な円墳(5号墳)と、一辺10m前後の小規模な方形墳(6・7・8・14・15・16・17号墳)に明確に区別できる。そして5号墳を中心に、主としてその北西側の外周に小形方墳が複数群在することに示されるように、両者は一体となって上人ヶ平古墳群全体の中の小単位を構成している。そこで以下、この古墳単位を構成する二つの墳墓体系について、それぞれ今次調査で判明した事実を概説する(各古墳の規模は第2表を参照)。

なお、試掘部分の拡張という調査の性格から、6号墳の全容および5・7・8号墳の一部が既に調査報告されている^(注1)ので、これに重複する部分は説明を省略する。

第2表 古墳概要表

古墳名	墳形	墳丘規模	埋葬施設	外部施設	出土遺物	備考
5号墳	造り出し付き円墳	主丘部基底径25m, 周濠幅約7m	不明 墳頂部に盗掘痕	埴輪列石葺	埴輪類(A類)・土器類・瓦磚類	昭和61・62年度調査で一部確認
6号墳	方墳	10.5(東西)×11.5m	奈良時代以降の削平により欠失	埴輪列(墳頂部?)	埴輪類(C類)・土器類・瓦磚類	昭和61・62年度調査で確認済み
7号墳	方墳	10.0(東西)×10.0m	木棺直葬, 北側に副室付設(木製櫃か)	埴輪列(墳頂部?)	埴輪類(A類)・土器類・瓦磚類・鉄器・ガラス小玉	昭和61・62年度調査で一部確認 墓塚の存在不明
8号墳	方墳	13.5(東西)×13.0m	木棺直葬, 2段墓壇, 被盜掘	埴輪列(墳頂部?)	埴輪類(A類)・土器類・瓦磚類・鉄器・豎箆	昭和61・62年度調査で一部確認
14号墳	方墳	7.5(南西～北東)×7.0m	奈良時代以降の削平により欠失	埴輪列(墳頂部?)	埴輪類(B類)・土器類・瓦磚類	周溝内より赤色顔料の充満した土師器甕出土
15号墳	方墳	10.5(東西)×11.5m	奈良時代以降の削平により欠失	埴輪列(墳頂部?)	埴輪類(C類)・土器類・瓦磚類	
16号墳	方墳	6.5(東西)×6.5m	木棺直葬(棺底に竊敷)	埴輪列(墳頂部?)	埴輪類(A類)・瓦磚類(鬼瓦含)	蓋形埴輪3個体出土
17号墳	方墳?	南東側が大きく削平	墳丘部の近世以降の攪乱で不明	埴輪列?	埴輪類少量 土器類	完形復原可能な馬形埴輪出土

方墳の墳丘規模は、墳丘基底が明確でないので対向する周溝の中軸線間の長さを記す。
 (出土遺物の項目の「土器類」とは、古墳に直接関連する土器(須恵器・土師器)を示す。また、同じく「瓦磚類」とは、奈良時代の遺物を総称したもので、多量の瓦に混じり若干の土器が含まれる。)

(1) 上人ヶ平5号墳(IXI-5)

これまでの調査で、周濠の存在や造り出し部の構造等が明らかとなっていた5号墳では、今回、地表に残るマウンド部を除いた古墳の西側一帯(第1トレンチ)、および東側の一部にトレンチを設定して調査を行った。

その結果、既知の成果を補足する以外に、造り出し部の全容や古墳の外部施設等が判明するなど新たな知見も得た。以下、個別の遺構について概述する。

周濠 東西両トレンチで確認した。いずれも、古墳築造直前の表土(腐植土)上面をベースに基本的にはこれを逆台形状に浅く掘り込んで構築し、平坦な濠底は、比較的堅固な粘質土の地山に達する。ただ、その断面形を詳細に観ると、築造当初のプランであったかどうかはさらに検討を要するが、内外両傾斜面の中位に幅の狭いテラスを設けて小規模な段築状に造りだしている。こうした形態は、造り出し部も含め既掘部分の全てにおいて確認できることから局所的な変形でないことが判る。

周濠の外縁線に示される平面形は真円にならず、造り出し部の付設される西側がこれに規制されてやや突出し(真円ラインから約2.1m突出)、全体として卵形を呈する。

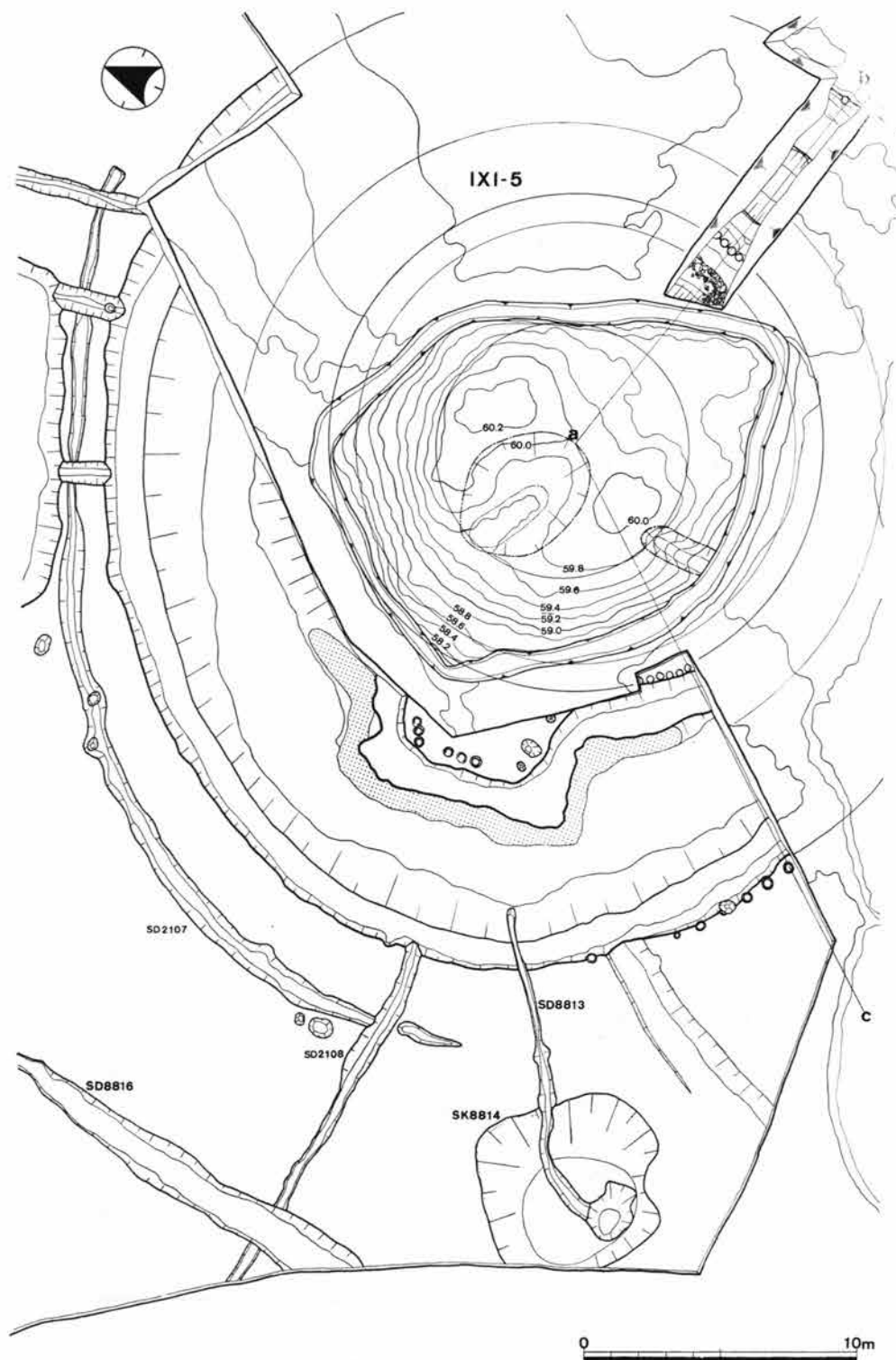
濠内埋土は、大きく3層に分けられる。すなわち、上位より濠内の大半を占める黄色系の砂ないしは細砂質粘土による互層(I層)、暗灰色系の粗砂混じりの還元層(II層)、埴輪や葺石の転落石を多く包含する茶褐色系土層(III層)である。I層は、出土遺物が少なく薄稿状堆積を示すことから、緩やかな流れを伴う自然堆積と考えられる。II層は、濠底付近に約10cmの厚さで堆積し、埴輪類に混じって瓦類等の遺物が少なからず混入する。これは、少なくとも奈良時代において本来の周濠の形態をとどめ、かつ滞水していたことを示す証左となる。III層は、層厚に差はあるが例外なく外傾斜面側の下層に堆積し、埴丘流土と考えられる。ただ、埴丘崩落は、長期に亘りかつ複次にまたがる様子が窺われる。斜面の葺石は、造り出し部を除き用いられない。

造り出し部 先年の調査でその北半部を確認していたが、今回は、その全容を検出した。その構築は、周濠掘開の段階で既に計画されていたもので、地形を掘り残すことで周濠内に造り出している。基底部での前端部幅9.5m、主丘部からの突出2.8m、主丘部との接合部(くびれ部)幅9.5mを測り、相対的に幅が広く前端部のあまり広がらない平面形を呈する。各部の断面形は、周濠のそれと同じく2段傾斜を示す。

外部施設として埴輪列と葺石がある。

埴輪は、造り出し上部平坦面にその上縁線に沿って圍繞するが、今回は、その痕跡を再確認したにとどまる。

葺石は、下段斜面にのみ敷設され、その両端は、くびれ部から主丘部側にも約3.5mに



第41图 5号墳周辺遺構平面図

わたって延伸する。構造的には、拳大の自然石を重ねることなく斜面に貼り付けただけの簡易なもので、明確な基底石や作業基準となる仕切り石列の使い分けはみられない。

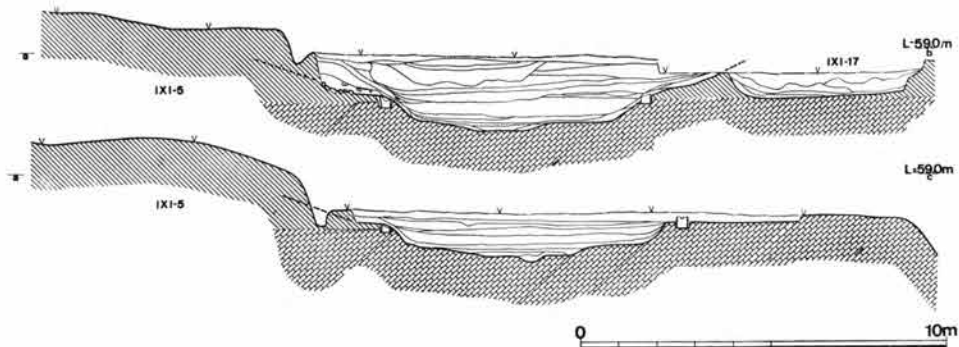
墳丘 1段目墳丘の上面テラス(幅1.0m)には一重の埴輪列が圍繞する。極めて周濠側に偏在しており、その軸線は周濠上縁とほぼ一致する。樹立間隔は、心々で約35cmを測り、隣接する埴輪との間隙はほとんどない。樹立方法に関しては、少なくとも平面観察による限り溝も含め明確な掘形は認められない。仮に掘形を伴っていたとしてもテラスの最終整形で覆われて検出できなかったものと思われる。埴輪そのものの遺存度も良好で、2段目タガ位相当以下がテラス面下に埋没していた。

古墳東側トレンチでは、小範囲ながら2段目墳丘斜面を検出した。テラス埴輪列中軸より内方0.9mに下縁がめぐる。この斜面上には、本格的な葺石が敷設される。葺石の施行方式の詳細は未確認だが、基底石(径30cm前後のやや縦長の垂円礫で基底ラインにその長軸をそろえるものが多い)と一般石(拳大程度の自然石)を明確に使い分ける。また、縦方向の仕切り石(区画石列)が認められる。

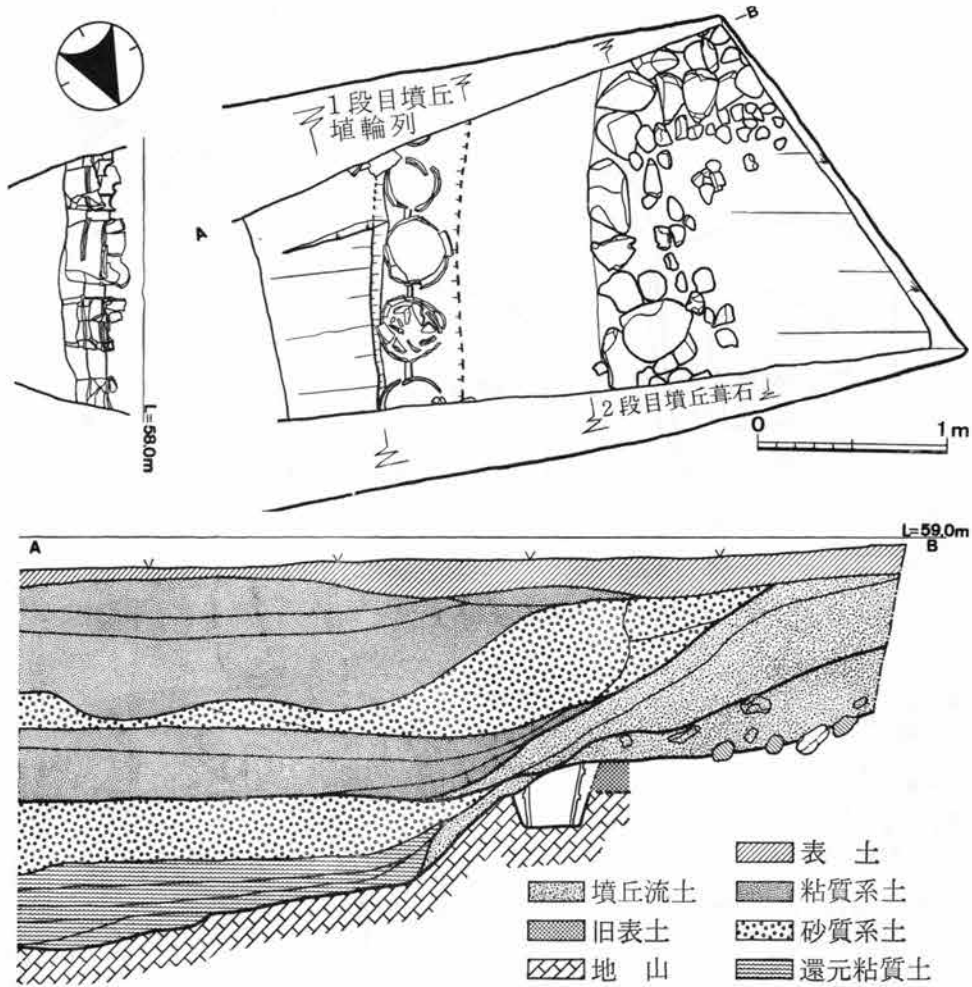
外堤 周濠とその外周を平行して巡る小規模な溝S D2107に挟まれた帯状の平坦部を前回までに外堤と認識していたが、今回、その延長部と古墳の東側トレンチの2か所においてこの外堤を巡る埴輪列を確認した。

外堤埴輪列は、墳丘側のそれと同様、周濠上縁線にその圍繞ラインがほぼ一致するほど周濠側に近接している。埴輪の樹立間隔は、平均90cmと墳丘側に比して大きく、このため樹立方法も個別の掘形を穿って据え付けている。

2段目タガ付近まで遺存する埴輪付近の土層観察によると、外堤上には当初より盛土は施されず、その上面は旧表面の整形程度にとどまる。



第42図 5号墳断面図



第43図 5号墳墳輪列・葺石実測図

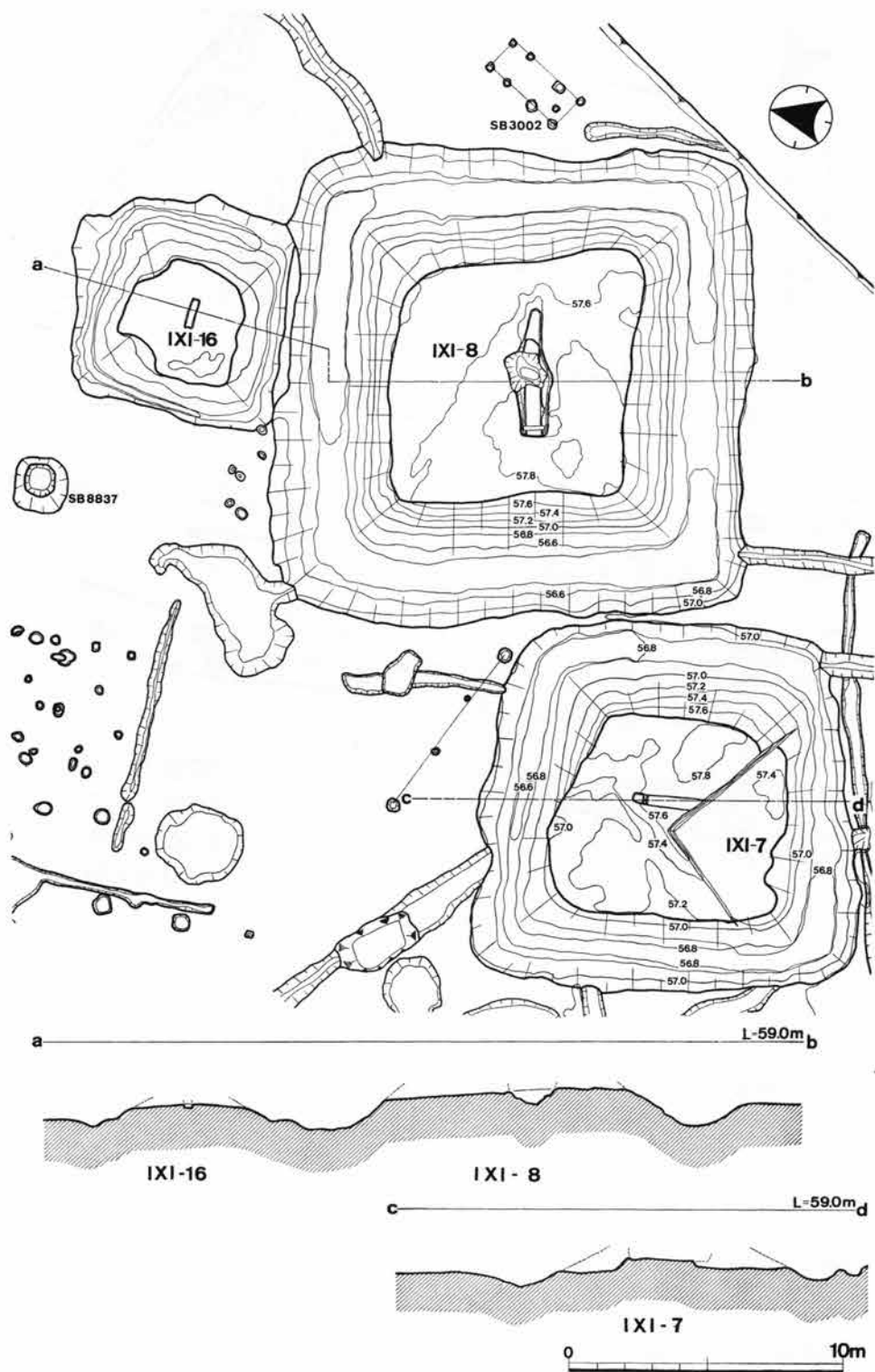
なお、今回の調査区内において、外堤を外域から画す溝は途切れて存在しないことが明らかとなった。

(2) 小形の方形墳(6・7・8・14・15・16・17号墳、図中にはI X Iを冠する)

上人ヶ平5号墳を中心にその周囲に7基の小規模な方墳を群在するかたちで検出した。このうち、3基(6・7・8号墳)は、昨年度来の試掘で部分的に確認していたが、今回は面的調査によりその全貌を明らかにするとともに新たな4基の方墳を検出した。

墳形は、墳丘の流失あるいは後世の削平・整地等によって部分的に変形しているものもあるが、例外なく正方形プランを基本とする。

墳丘規模は、墳丘下縁が明確でないので、周溝幅の心々ライン間で計測すると、最小の16号墳で6.5m、最大の8号墳で13.5mを測る(個々の古墳の規模は第2表参照)。



第44図 7・8・16号墳実測図

周溝は、築造時の旧表ラインをベースにこれを下底面を設けないU字形断面に開掘し、排土を墳丘盛土に利用する。周溝の規模は、墳丘斜面側に残る旧表土のレベルで仮想すると幅1.5～3.0m前後、深さ0.5～1.0mに復原できる。ただし、6・14・15号墳などは、古墳内外の削平が大きく、周溝の本来の形状を著しく失っている（検出面での上縁幅0.6～3.0m）。対して、7・8・16号墳は、丘陵部に位置するこの種の古墳としては異例に良く墳丘部が保存されている（8号墳で墳丘盛土厚0.5mを測る）。おそらく、これらは、墳頂に残された埋葬施設の残存状況等から、築造当初から僅かメートル単位以下の削平しか受けていないものと考えられる。

墳丘は、先述したように、下半を、周溝によりその内方に削り出された旧表以下地山部分（方形基台）、上半を盛土によりそれぞれ構築している。ただ、段築工法は採らず、墳丘斜面の勾配を一律になるよう努めている。ただし、現状では、堅固な下段に比べ、盛土部分は崩れ易く、結果として盛土部分の傾斜が緩くなっている（周濠外傾斜面下底に堆積する墳丘流土から想定）。

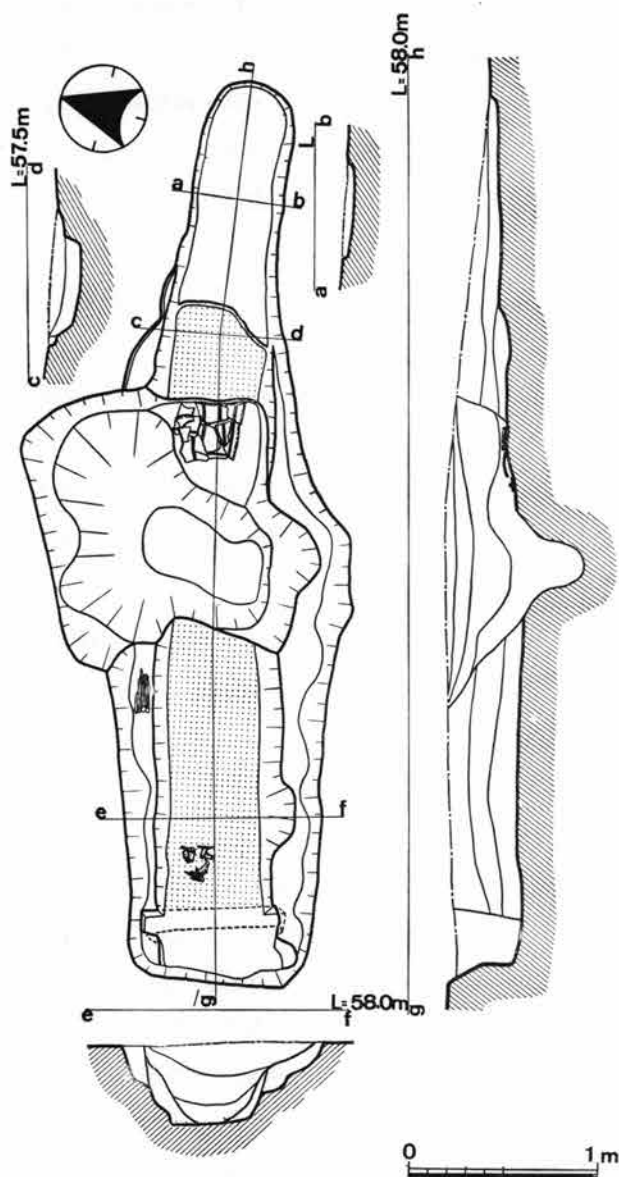
周溝内堆積状況には、明らかに2通りのパターンが看取できる。1つは、一定程度自然埋没した後、その上半に多量の瓦が混入するもの。他の1つは、長期に亘り自然埋没したものである。前者は、瓦類の出土状態に人為的な作業を窺わせるもので、奈良時代に軟弱な窪地に瓦を投入して整地したものと考えられる。一方、後者は、埋土のかなり深い層にまで多量の埴輪に混じり奈良時代の瓦片が若干出土しており、奈良時代において、なお周溝が機能していたことを示している。概して、後者の古墳の墳丘はよく残されている。

墳丘の外部施設に関しては、確認した全ての古墳において埴輪列の囲繞が想定できる。ただ、本来の墳頂面が失われている現状では、具体的な樹立方式・囲繞位置を知ることができない。唯一、周溝内から多量の埴輪片が出土することをその根拠とする。おそらく、埴輪片が周溝四辺からほぼ均一に出土することから墳頂部の埋葬施設を方形に取り囲むように配されたものと推察する。

出土埴輪は、その大半が普通円筒埴輪だが、朝顔形埴輪や多様な形象埴輪も少なからず含まれる。とりわけ形象埴輪は、古墳の規模に関係なく、優品が多々みられる。

例えば、14号墳の北東辺溝の中央において蓋形埴輪が、本体と立ち飾りが装着されたままの状態、横位に転倒して出土しているし、16号墳では、周溝各辺に複数の蓋形埴輪や家形埴輪が個体単位にまとまりをもって転落していた。さらに、17号墳の北溝の溝底付近では、脚部を欠失する以外は完形に復原できる程度の遺存率を持った馬形埴輪が古墳の軸線に対して平行するように倒れていた。

これらの諸例は、比較的規模の小さな古墳に多く見出されるが、その出土状況は、本



第45図 8号墳主体部実測図

来の樹立位置を大きく動いていないことを意味し、周溝内に転倒した後、奈良時代に人為的に埋められた結果、良好に遺存したものと推量される。

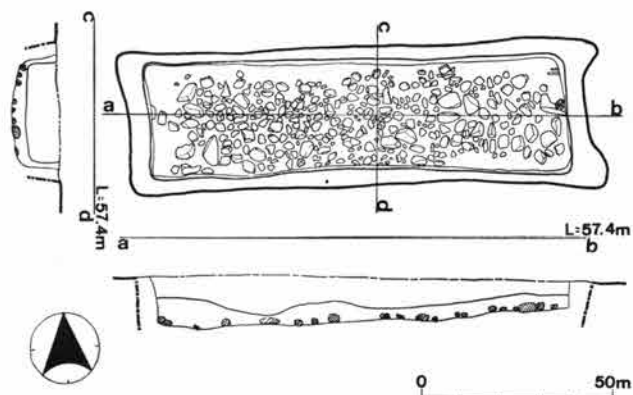
埋葬施設については、7・8・16号墳でその中心主体部を確認した。他の古墳では後世の削平が大きく、全くその痕跡を残さない。なお、溝中埋葬等の副次的施設は認められない。このうち、7号墳に関しては、昨年度調査分として既に報告されているので省略する。

8号墳の場合、墳丘の中心のやや南寄りに、主軸を墳丘ラインと平行するように東西にもつ木棺直葬形式の埋葬施設を確認した。調査時の状況は、墳頂検出面が東側ほど低く、また、墓壇の中心付近に径2m前後・深さ最大75cmの摺鉢形盗掘坑が存在する。墓壇は、墳頂部を2段に掘り込んで構築している。上段部分は、隅丸長方形プラン(長辺3.6m、最大幅1.2m)を呈し、断面形は縦・横断面とも比較的緩い勾配をもって掘り込んでいる(残存する深さは検出面が最も高い西端で約25cm)。ただ、その東側に幅と深さを一段縮小した浅い掘形が、主軸をやや違えて接続している。一方、下段部分は、上段墓壇の底面の側縁部に、それぞれ幅10cm程度のテラスを残し、その内方をさらに15cm掘り込んでいる(上縁幅60cm、下縁幅50cm、上縁長360cm、下縁長355

来の樹立位置を大きく動いていないことを意味し、周溝内に転倒した後、奈良時代に人為的に埋められた結果、良好に遺存したものと推量される。

埋葬施設については、7・8・16号墳でその中心主体部を確認した。他の古墳では後世の削平が大きく、全くその痕跡を残さない。なお、溝中埋葬等の副次的施設は認められない。このうち、7号墳に関しては、昨年度調査分として既に報告されているので省略する。

8号墳の場合、墳丘の中心のやや南寄りに、主軸を墳丘ラインと平行するように東西にもつ木棺直葬形式の埋葬施設を確認した。調査時の状況は、墳頂検出面が東側ほど低く、また、墓壇の中心付近に径2m前後・深さ最大



第46図 16号墳主体部実測図

残るが、これらから、内法長さ315cm、幅50cmの組み合わせ式木棺が、墓壇壁に密着させるように設置されていたことが判明する。伴出遺物は、棺内・棺外(墓壇内)・盗掘坑より若干出土している。うち、前二者は副葬品である。棺内からは、西木口板の約25cm東方で、鉄製農耕具(刀子・鑿・斧・鎌・鍬先)・堅櫛が、一か所に集中して出土した。棺外では、墓壇下底のテラス上(いわゆる遺物床)に、鉄鍬が15本束になって一括埋納されている。いずれも刃先を西方に向けており、有機質の容器に収納して供献したものと考えられる。盗掘坑からは、埴輪・須恵器(甕・杯蓋・壺)の小片が少量出土している。このうち、第45図に図示した埴輪については、盗掘坑の範囲に入るものの、円筒埴輪の比較的大きな破片を、棺底ライン直上にふせるように置いたもので、あるいは築造当初の施設(例えば枕)の可能性が残る。墓壇の東方張り出し部、および西木口と墓壇西端との間に位置する副室的な空間からの出土遺物はない。

この8号墳の北に接する16号墳でも中心主体が確認された。墳丘部の中心に位置し、主軸を墳丘ラインに合わせて東西にとる棺の痕跡を確認した。その構造は、組み合わせ式木棺で、その側板・木口板の板の厚みに相当する範囲が、わずかに変色していた(長1.25m、幅0.38m)。棺内方(正確には側板・木口板の内側)には、小石が一重に敷設され、これを棺床としている(検出面から礫敷上面までの最大深さ12cmを測る)。この礫敷直上には赤色顔料のしみこんだ薄い土層が入り、底板に赤色塗彩が施されていたことが窺われる。出土遺物は、棺東端で針状鉄器が2点出土したのみである。礫敷のレベルより東側に埋葬頭位を想定できる。

(3) その他の遺構

S K 8814は、第1トレンチの南端で検出された不整形(長径7.5m・短径6.5m)の土坑である。断面形は、2段構造となり(検出面からの深さ約1.2m)、内部より埴輪片と6世

cm)。下段墓壇の底面は平坦で、側壁部も上段に比べ直立している。また、墓壇西端より30cm東方で、棺木口板を固定する側方への掘り込みがあり(東木口部分にはない)、さらに、この西木口の痕跡より東方の下段墓壇下底全面に赤色顔料が認められる。なお東木口の閉塞方法が不明として

紀代の須恵器杯蓋が出土した(第51図3)。

S D8813は、5号墳の周濠下底より始まり、S K8814の下段部分にいたる素掘りの溝である。上縁幅(30cm)に対して側壁が垂直近くに掘られ(検出面からの平均深さ40cm)、その溝底は、周濠部で濠底レベルとほぼ一致する。埋土下層に砂の堆積がみられるが、遺物をほとんど伴わない。

この他、古墳の周濠から派生する溝を各所で確認した。いずれも、断面U字形の素掘り構造(上縁幅約70cm)で、あるものは古墳の周溝間を連絡している(5号墳と7・8号墳)。これらは、先に奈良時代に周溝が機能していたとする古墳にのみ付随し、埋土内に奈良時代の遺物(瓦)が混入すること、さらに5号墳の外堤外周を画す溝(5号墳の構築物)と重複してより新しいことから、奈良時代に開かれ周溝内の水量調節を目的とした可能性がある。

3. 古墳時代の遺物

(1) 埴輪類

A. 円筒埴輪(第47図, 図版第24)

大半が普通円筒埴輪であり、これに少量の朝顔形円筒埴輪が加わる。およそ、全ての古墳から出土しているが、原位置を保つものは前記のように5号墳に限られる。このため5号墳の円筒埴輪の遺存度は高く、完形に復原できた個体も少なくない。これに対し、他の古墳の場合、原位置を失って周溝内に転落した資料ということもあり、小片化したものが多く、前者に比べ全体形を窺い知るものは少ない。ここでは普通円筒埴輪に関して、個体ごとの記述は避け、現時点でおおよそ抽出し得る大雑把な類型を設定し、その内容を簡単に紹介することとする。まず、その類型設定の分類基準となる要素(属性)を明示する。

A類：器高70cm・底径28cm前後の中型の規模を有し、外面にタガ状突帯(以下、タガと記す)を6条巡らせることを分類の指標とする一群。

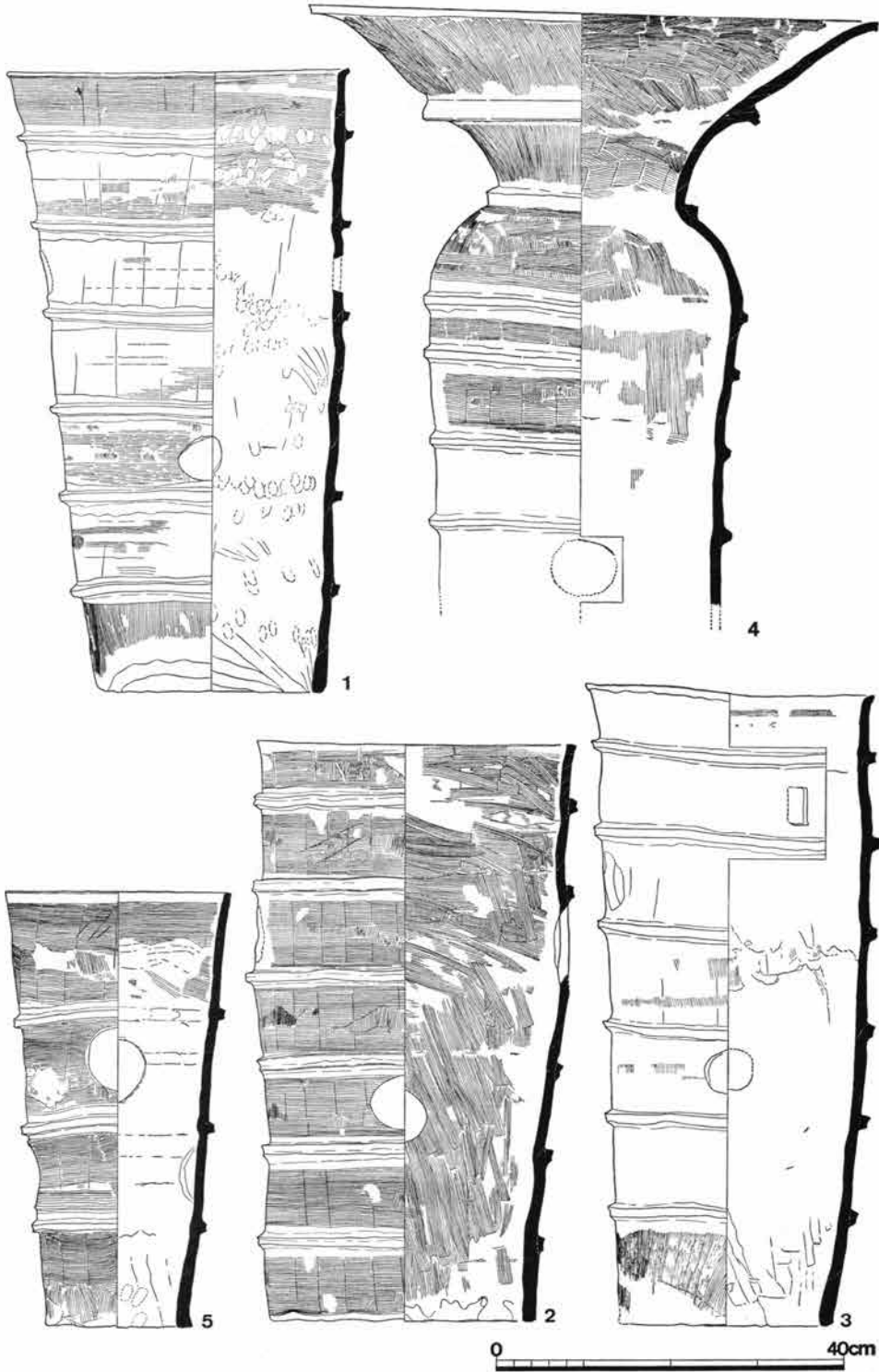
B類：全体形を知ることができる個体は少ないが、概ね器高50cm・底径17cm前後の小型品で、タガを3条配するもの。そして、製作技法にA類と共通する内容を見い出せる一群。

C類：規模・タガの条数はB類と変わらないが、その製作方式に、前二者と比してより簡略・粗雑さが認められる一群。

これらの類型と出土遺構(古墳)との関係は大略、A類が5・7・8・16号墳、B類が14号墳、C類が15号墳にそれぞれ対応する。

次に、各類型ごとに、その内容を触れてみたい。

A類 全体形状は、底径に比し口径がやや広がり、逆円錐台形を呈し、横断面形は正円



第47図 円筒植輪実測図

に近いが、わずかに楕円を呈するもの(意図したものではない)もある。タガは、ほぼ等間隔に配すが、それに画された各段の幅は全体に狭い。また、最上段は他段に比べ特に狭く造形している。最上段(口縁部)は、底部から屈曲することなく直線状にのびるが、口唇部は外方に屈折して側方に面をもたせるもの(擬タガ状)と、屈折することなく直口して、端部が水平面をなすものがある。前者は、見かけ上7段のタガを巡らせたように見える。タガは、側面が指頭撫でで内方にくぼむ台形断面を呈し、やや下方に傾くのを一般とする。その整形・本体への接合はヨコナデで行うが、その撫で付けが不十分で、タガ下縁に剝離痕が多く見られる。透孔の形状は、円形に統一されている。ただ段幅が狭いため、小規模(直径約6cm)である。穿孔方式は、3段と5段に段を違えて面違いに段間2個あて対称方向に配する。穿孔は、器表の最終調整後に行う。なお3では、6段目に方形の副次的穿孔^(注5)を有す。円筒部の成形・調整は、複数の小工程(乾燥単位)によって、分割的に行われる。それは、特に内面に残る成形・調整手法の差(施行方向など)により、区別できる。粘土帯間を接合し、器体の形を整える成形手法としては、ナデ・ハケメが用いられる(ただし、それは、調整が簡略化された内面においてのみ観察できる)。なお、両者を併用するものは少なく、また、ハケメを用いるものも少ない(2)。いずれも、基本的には、下から向かって左上がりに重複するように丁寧に施すもので、上位ほどその傾度を強める。器面を平滑にする調整には、ハケメが多用される。まず、外面の調整には、タガ貼付前の調整(1次調整)としてタテハケが用いられる。その後、ヨコハケの2次調整を加える。2次調整はタガ間に等しい幅の工具原体を用い、段間で重複することなく、1周の施行でもれなく調整する。その施行方式は、静止痕をとどめた継続的なハケ(川西氏のいうB種ヨコハケ)^(注6)を用いる。ただこの2次調整は、器表全面に施されるもの(2)と、基底段を省略するもの(1・3)がある。内面調整は、器高の上半部、特に口縁部周辺に限定され、ヨコハケが施される。ただ、それは、多回起的なもの(2)と1次調整のみ(1・3)に類別できる。焼成は、須恵質の範疇に入る。全体に硬質なものが多く、器面は淡黄色～橙色を呈する。黒斑はない。ただ1・3などは、基底段の一側面下縁が、周囲に比べて半月状に変色・欠落している。これは、焼成における火廻りの差を示しており、窯で焼かれた1つの徴証^(注7)となる。器表面を赤色塗彩する個体はない。ただ3は、化粧土(塗土)を内外面に施している(このため調整痕が残らない)。

B類 全体形は、口径と底径の差がより大きく、全高の低さも手伝って、口広がり之感を与える。3条のタガは間隔が広く、結果的に各段の幅が広くなる。タガの形状や接合方法はA類と変わるところがない。透孔は、円形で、2段と3段に面違いに段間2個あて穿孔する。ただ、段間が広いこともあって規模が大き(直径7cm)、また、段数の減少にと

もなって隣接する段に穿孔される。成形・調整技法は基本的にはA類と共通し、複数の小工程により分割的に行う(器体を倒立させて底部を調整することはない)。ただ、器面調整は、その施行にやや粗雑化が認められる。広義の須恵質に焼成されるが、器面は黄灰色を呈し、A類に比べ低温度での焼成を窺わせる。黒斑はない。

C類 細片化したものが多く、図示していないが、全体としてB類と同様のプロポーションをもつ。ただし、タガは、その基部の幅こそ変わらないが、突出度の著しい扁平な断面形を呈するものがある。この類型を特徴づける要素として、器面調整の簡略化が挙げられる。すなわち、ほとんどの個体で2次調整が省略され、器表には1次調整が残るにすぎない。1次調整には、外面にタテハケ、内面にナナメハケ(口縁部に限る)がそれぞれ用いられる。また、内面には成形段階の左傾ナデが顕著に残る。ハケメに使用される工具原体は概して条線密度が高い。焼成は土師質で黄灰色を呈す。黒斑はない。

朝顔形埴輪 第47図4は、8号墳から出土したもので、いわゆるA類の普通円筒埴輪に、朝顔形口縁部がとりつくものである。肩部が円筒部(胴部)から張り出すことなく内湾し、頸部から大きく外反する。口縁部は、カーブを呈して大きく外反する1次口縁(頸部)の端部内面に、直線的に延びる2次口縁(口縁部)を付加するように接合し(分割成形)、下方に張り出す1次口縁の口唇部を、口縁中位の突帯として成形している。器体の成形・調整の手法は、A類の普通円筒埴輪のそれに準ずる。なお、胴部の上位2番目のタガは、最終調整後に追補されたようで、剝離面に2次調整のヨコハケが残る。

第49図8は、14号墳から出土したもので、口縁部の形状は、中位突帯を境にカーブを反転させるように「く」字形に屈曲する。両者の接合は分割成形による。器表は内外とも丁寧なヨコハケによって最終調整している。焼成は土師質で、黒斑はない。

B. 形象埴輪(第48～50図, 図版第24)

古墳出土の形象埴輪としては、家形埴輪、蓋・靱・甲冑などの器財形埴輪、馬形埴輪、鶏形埴輪などを確認した(各古墳から出土した形象埴輪の種類については、第3表を参照)。これらは、主として周溝内に破碎転落した状態で出土しており、細片化したものが多いが、馬や蓋など復原可能な個体も含まれる。

靱形埴輪(第48図1・2) 1は、8号墳周溝内より出土した。矢筒部の上縁を飾る背板部分にあたる。実際は、その上縁背板の左右に展開する鱗状部が直接接合しないので、掲載した復原図の横幅は推定の域を出ない。全体として、1枚の平板な板状部の周縁を切り出すことによって大小の鱗部を造形し、その内部は、ヘラ描き沈線によって各部の表現および文様帯を構成する。矢筒上部を囲む部位(上面に裁面をもつ半円形区画)は、その周縁を二重の沈線で縁取り、より古相の靱形埴輪に通例の段状緒帯表現(低平突帯貼付によ

第3表 形象埴輪 一覧表

古墳名	形象埴輪の種類								時期	実測図掲載箇所
	家	盾	蓋	靴	甲冑	鶏	馬	その他		
1号墳								○	V	「59年度報告書」
5号墳	○	○	○	○	△	○	○		IV前	第50図1～4
6号墳							○		IV後	「63年度報告書」
7号墳			○						IV前	「63年度報告書」
8号墳			○	○	△	○			IV前	第48図1 第50図6・7
9号墳	○		○	○		○			V	「61年度報告書」
14号墳			◎						IV後	第49図7
15号墳	△		○						IV・V	第49図6
16号墳	◎		◎						IV前	第48図3 第49図1～5
17号墳							◎		IV	第48図4
(埴輪窯)	◎	○	○		○	○	○	○	IV～V	第61図6 第62図1～9

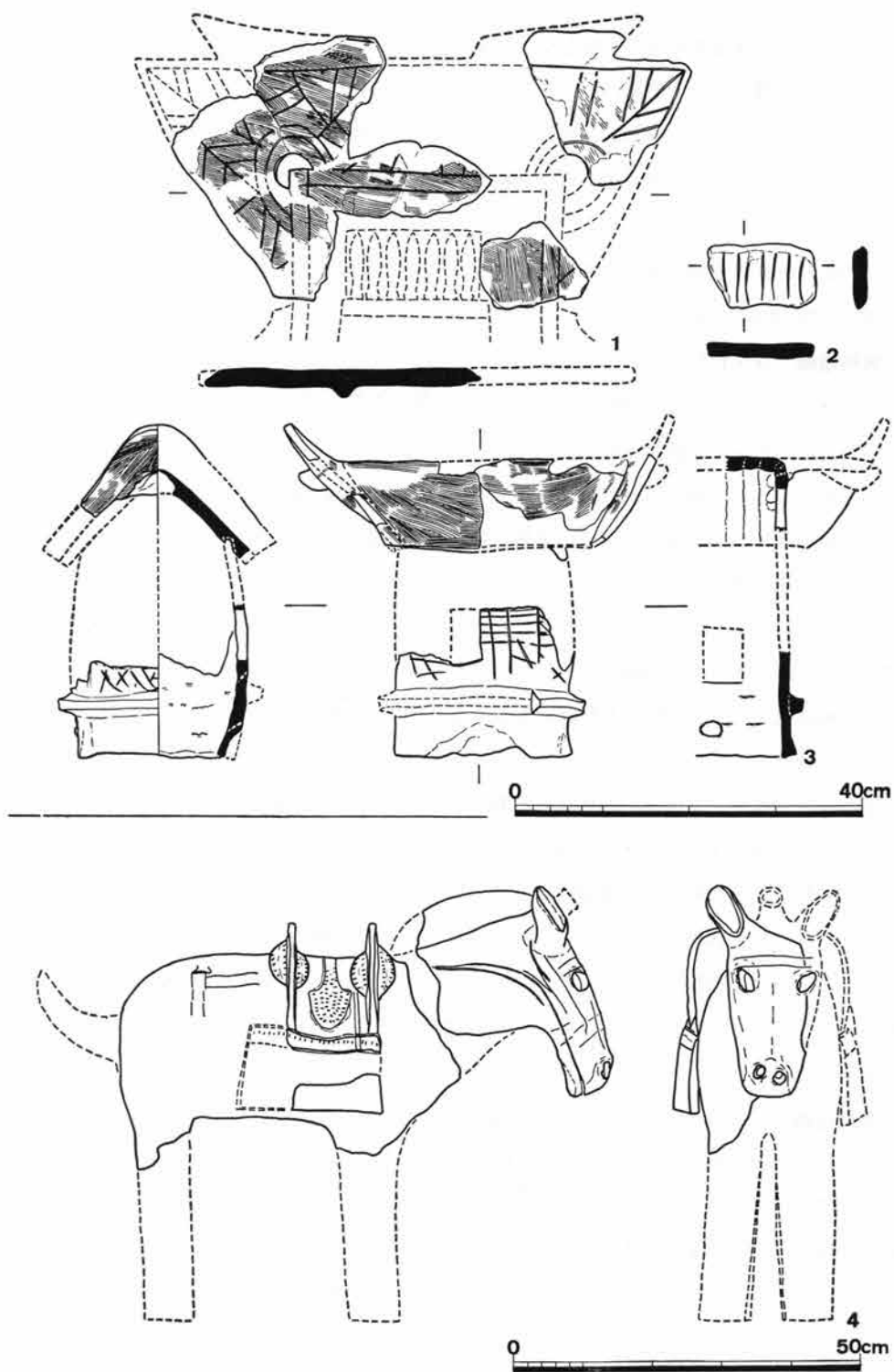
◎は、完全復原可能なもの。△は、小片のため可能性があるもの。
 時期は、共伴する円筒埴輪から求めたもので、川西編年に準拠する。
 「63年度報告書」とは、『京都府遺跡調査概報』第32冊を指す。

り線を配し、形骸化した直弧文というより、綾杉文に近い構図でその内側を充填する。この綾杉文様の構成は、鱗部の形状に規制されるところが大きく、その中心軸線が複雑に交錯するため、2本1単位の子葉線が無造作に配される繁雑な構図となる。製作にあたっては、幅のある粘土帯を横位に積み重ねた板状部の外縁をへら状工具で整形した後、前面をハケメ、裏面をナデによって最終調整する。文様の施文・穿孔は、調整後に行われる。支持基台となる半円筒部は、裏面に残された補充粘土の痕跡から、半円形区画より内方で本体と接合しており、矢筒部と幅を揃えて一括成形した後、背板を鱗状に付加する製作技法を採ったものと考えられる。^(注8)

2は、矢筒の上部に配された鏃を表現した小破片である。鏃は線刻で平板に表している。

家形埴輪(第48図) 3は、16号墳の周溝内から出土した。現状では壁上半部が大きく欠失しているが、窓の配置状況などから壁高を復原した。切妻形式の屋根を備えたもので、屋根に対して軸部(屋根より下の部分の総称)が高く誇張して表現され、全体に縦長の印象を与える。屋根は棟を丸く造り、妻の転びの著しい破風板を表現する。破風板は素文であり、その頂部内側に棟木を配す。棟木は断面半円形を意図しているが、粗雑な造りで破風板とともに加飾されない。屋根の流れ部分も素文であり、押縁・網代は表現されない。軸

る立体的表現)は採らない。またこの半円形区画の上辺の両端の外縁に、この区画に被覆された小さな円形区画(いわゆる背負ひもの表現)を配している(外周の径約5cm)。この円形区画は、数条(3条)の図線で構成され、この最も内方を穿孔する。へら描きによる装飾文は、鱗状部にのみ施文され、半円形区画内にはおよばない。その意匠は、鱗部の外周に沿って、単線の縁取



第48図 形象埴輪実測図 (1)

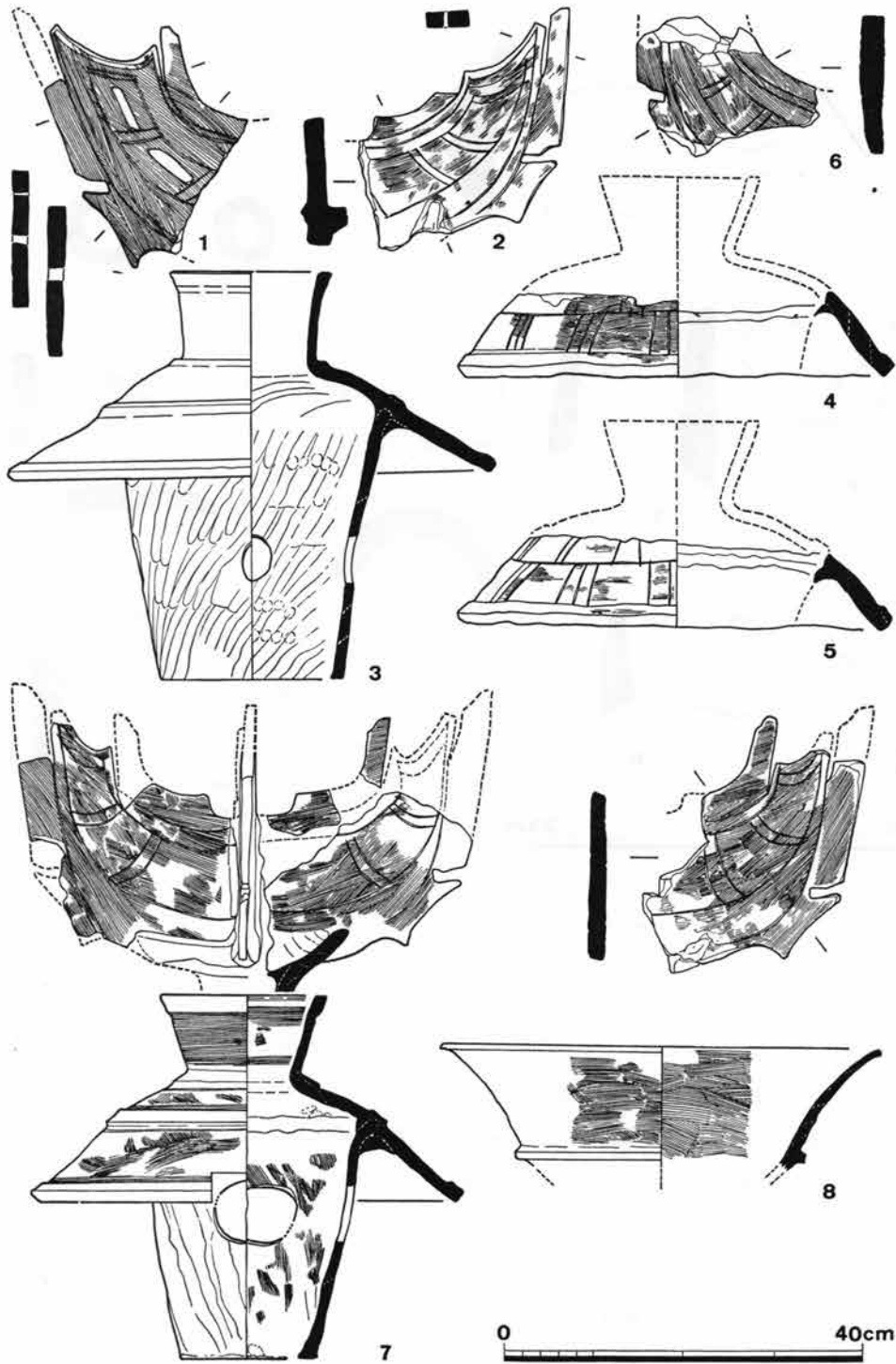
1 : 8号墳 2 : 5号墳 3 : 16号墳 4 : 7号墳

部は横断面が、各辺不等長の矩形を呈し、平と妻の辺長差が小さい。隅部の屈折は丸く緩慢で隅柱の表現を欠く。壁面には、へら描きによる線刻と、窓あるいは入口を表した縦長不整形の透しがある。線刻は、腰板以上に縦横の平行線を重ねて板壁を表すが、裾側では、別に×形の連続文が表現される。裾廻り台は、円筒埴輪の突帯に近似した台形断面のものをめぐらせている。

この他、軒先に線刻を施した擬似入母屋、あるいは寄棟形式の屋根の部材(第50図1)、外面に装飾的図様を線刻した壁部(同3)などの小片がある。

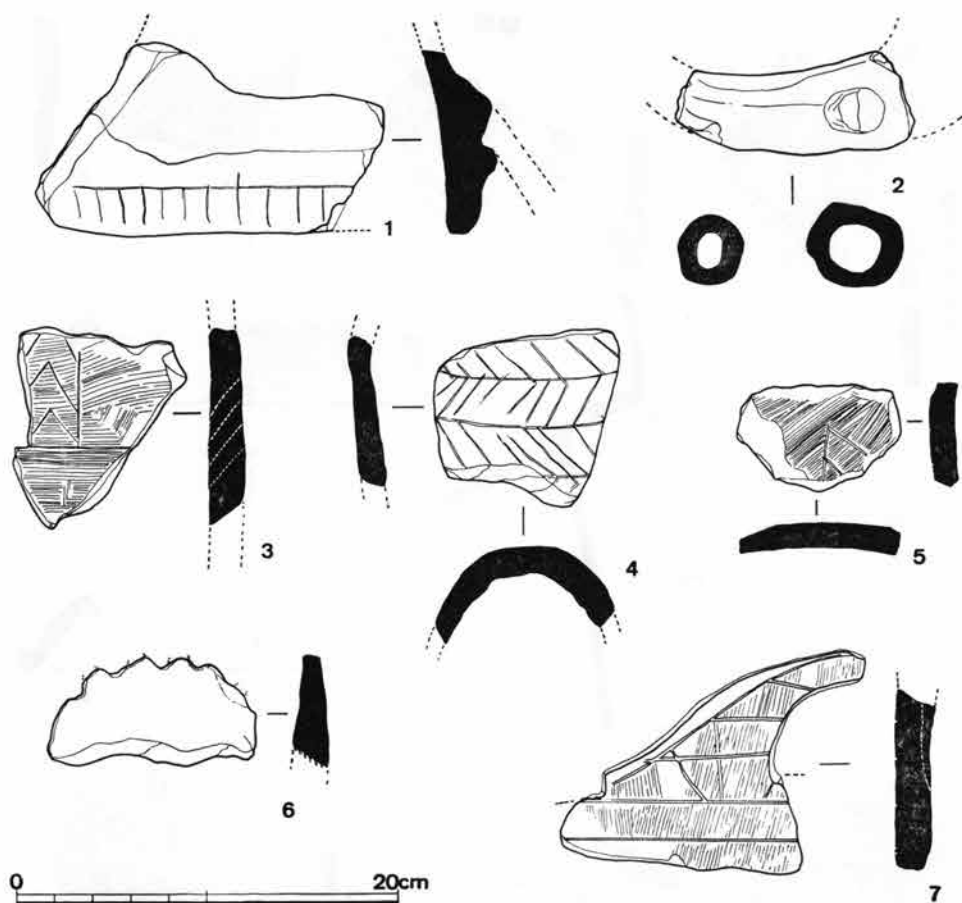
馬形埴輪 5・17号墳から出土している。このうち、17号墳出土例(第48図4)は、脚部と尻尾・たてがみに復原の根拠はないものの、概ね全形を窺い知れる程度に残存している。ただ、その保存状態は良好とはいえず、剥落や摩耗によって細部の表現や製作手法の詳細は不明である。復原された規模は、全長83cm、残存高40cm、最大幅28cmで馬形埴輪としては中形に属す。馬体そのものの表現は比較的写実的で、特に頭部の微妙な表現は実物の頭蓋の形態を忠実に模したものである。馬装は、へら描き沈線による帯状および別の粘土による造形を併用して表現する。鞍部は比較的残りが良く、鞍本体以外に鞍敷き、障泥が表現されている。前輪・後輪は素文で、その内外に磯金具が付設する(実際の馬装では内側にはない)。障泥は方形板を本体に貼り付けて造形し、その上辺を一段高くして縁部を表現する。鐙の部分も欠くが、これを懸垂する釣手が、鞍褥から障泥上端にかけて2条の平行沈線として残る。鞍敷きは、粘土の貼付で匙状の形態に造る。全体に装飾性が乏しいが、磯金具・鞍敷き・障泥縁具には、へら状工具先による連続刺突文が施される。三繫は面繫・尻繫が断片的に確認できる。このうち、頭格については、手綱と面繫が表現され、轡などの立体的造形は現存しない。面繫は、左右の頬帯とその前面に額帯・鼻帯がわたされ、喉帯の痕跡もわずかに認められる。杏葉・辻金具・鏡板などの装飾的金具は、剥落したのか全く認められない。表面の最終調整にはナデが主として用いられる。焼成は土師質で黒斑はない。

蓋形埴輪(第49図、図版第24) 蓋形埴輪は最も出土個体が多く、かつ各古墳に普遍的に認められる器財埴輪である。とりわけ14号墳出土例(7)は、図上で完形に復原できる希少な類例であり、既に別稿で紹介している。^(注9)このため、ここでは比較資料として図のみを掲載し、本文では16号墳の蓋形埴輪を中心に紹介する。16号墳からは、3個体の蓋形埴輪が出土している。これらは全体の形状をみると基本的には14号墳例と大きく隔たるものではないが、細部の表現などに若干の差異が認められる。また、16号墳に限っても、笠部外面の表現および立ち飾りの意匠から大きく a・b 2類に細分できる。a類は、笠部中位突帯以下笠縁にかけてへら描き沈線による文様帯を有するもので(4, 5)、羽根部に透孔のな



第49図 形象埴輪実測図(2)

1~5:16号墳 6:15号墳 7・8:14号墳



第50図 形象埴輪実測図 (3)

1～4：5号墳 5：7号墳 6・7：8号墳

い立ち飾り(2)とセットになるもの。b類は、笠部外面と突帯以外の線刻をもたないもので(3)、羽根部の文様帯間に透孔をもつ立ち飾り部(1)と組み合わせるものである。両類型とも、円筒形基台から笠部上半を連続して成形し、これに笠部下半を付加し(笠部分割成形)^(注10)、受け部口縁とその接合部、笠部中位と下縁のそれぞれ外面に低平な突帯を造形する。a類の笠下半の文様構成は、突帯間を1条の沈線で上下2段に分割し、その各段に3本一単位の縦位の帯状表現を交互に配している。立ち飾り部は、U字板の外縁をくり込むことにより、羽根一枚につき、その内側に1、外側に2個あて火炎状の鱗部を造り出している。

内部の文様構図は、ヘラ描き沈線で施文され、U字板本体部分の縁取り線を2～3条めぐらせた内方に2本一組みの円弧状帯を3～4単位わたす。b類では、この円弧帯間の空間に、U字板の軸線に沿う細長い穿孔を設ける。器面調整は、ハケメを最終調整として多用する。線刻・穿孔は調整後に行う。なお、3の円筒形器台は、内外面とも右上がりの丁

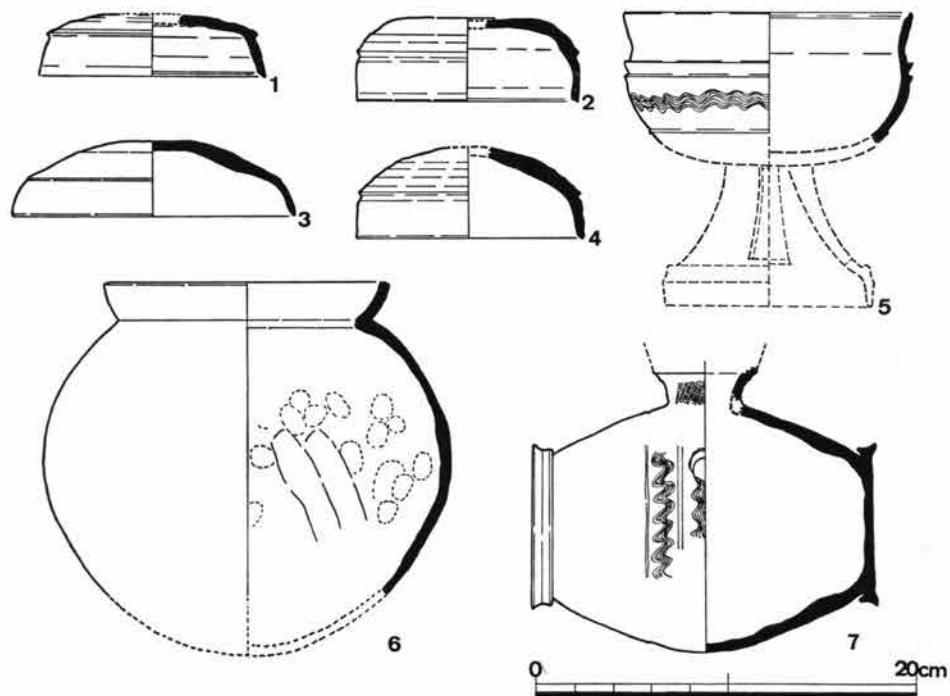
寧なタテナデ調整によって仕上げ(左利きの工人を想定)、その中位に円形透孔が4孔配されている。

その他の形象埴輪(第50図) 4は、半截小円筒部の外面に綾杉文が線刻されるもので、肩甲を表現したものと考えられる。6は、鶏のとさかの部分で、上縁を鋸歯状に切り出している。2は、緩くカーブを描きながら徐々に径を減らしていく中空の小円筒片で、人物の腕の可能性もある。7は、特異な鱗状に造り出した板状埴輪片で、縁取り線と複数の平行線が線刻される。

(2) 土器類(第51図, 図版第25)

各古墳から多量の埴輪類に混じって若干の土器資料が出土している。大半は須恵器であり、主体部の盗掘坑埋土に包含された1を除き、全て周溝内から出土した。これらは、細片化したものが多く(意図的に破砕された可能性もある)、ここでは図示できたものだけに限り説明を加える。

杯 ほとんどが蓋である。1は、天井部が平坦で、口縁部が「ハ」字形に外反する。口唇部はわずかに内傾するが、明瞭な段を有しない。回転ヘラケズリが天井部外面全体に及ぶ。2は、天井部が丸みをもつが、その頂部は平坦面を残す。口縁部は幾分内湾ぎみに垂



第51図 古墳時代土器実測図

1 : 8号墳 2 : 15号墳 3 : SK8814 4~6 : 14号墳 7 : 7号墳

下し、口唇部は内傾する面をもつ。天井部外面の埴程度に回転ケズリが施される。4は、丸い天井部に、中位でやや内方に屈曲する口縁部を具備する。口唇形態は幾分内傾するが丸みを残している。天井部外面を全面にわたり回転ケズリした後、回転カキメ調整を加える。内面に一定方向のナデが認められる。3は、口径に対する器高が小さいため扁平な形態を呈す。肩部に1条の凹線をめぐらせ、低い稜を削り出している。口唇部は丸くおさめる。

無蓋高杯 5は、杯部が深く、口縁部は中位から屈曲して外反する。口唇部は、内傾して段を有する。稜線は鋭く、体部外面には2条の突帯をめぐらせ、この間を波状文で充填する。

樽形壺 7は、体部中央に最大径をもつピア樽形を呈し、その中央に2重口縁の口頸部が接合する。器表の加飾は、体部中央に3条の突帯と波状文、頸部外面に波状文をそれぞれめぐらせる。

土師器甕 6は、やや扁球形の体部に、内湾する短い口縁部がとりつき、その接合部は鋭く屈曲する。口唇部は外傾する面をもつ。器表摩耗のため調整の詳細は知り得ないが、体部内面に顕著なケズリや押捺手法が認められる。(伊賀高弘)

(3) 鉄器類(第52図)

8号墳の主体部より、鉄製農耕具類・鉄鎌・蕨手刀子が出土している。

A. 農耕具

鉄斧 2個体出土している。F37は、全長71mm・刃幅30mm・袋部最大内径14mmの小形品である。外形は、肩部の張り出しがなく、やや刃部の広がる長方形である。

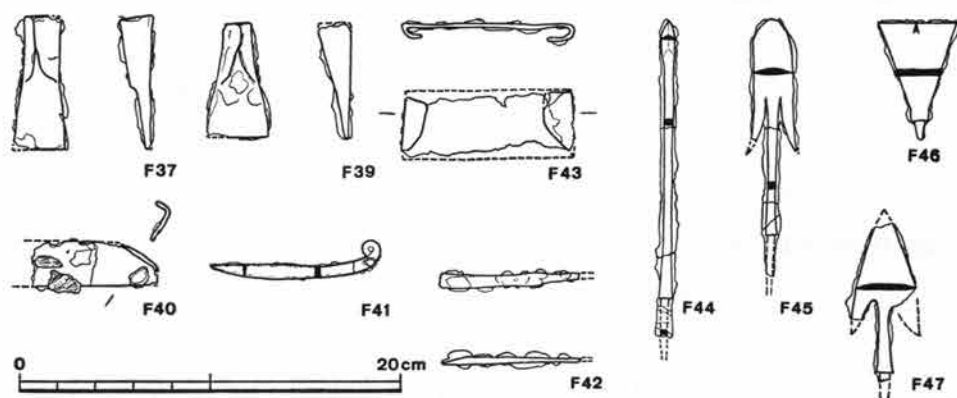
F39は、全長62mm・刃幅34mm・袋部最大内径が14mmである。F37に比べやや刃部が広く、三角に近い外形である。

鉄鎌(F40) 刃先を欠損し、残存長は67mm・幅25mmである。上端部を刃のラインと斜行するように、直角に折り曲げる。柄は表裏から挟み込むように刃に対し135°開いた角度で幅16mmのものが装着されていたことが木質の残存状態から確認できる。また、堅櫛の痕が刃部に残る。

鑿(F42) 残存長74mmで断面が長方形の棒状を呈する。茎部と頸部の境には篋被状の段をつけ、茎部はやや細くなる。刃は片切り刃である。

鉄先(F43) 方形の鉄板の両端を折り曲げて本体に装着する方形板耕具刃先である。縦35mm・横90mmの残存を測り、厚さは1mm程度だったと思われる。

蕨手刀子 5本出土している。5本ともほぼ一致する同形同大で一括生産品と考えられる。F41は全長95mm、刃の長さ約25mm・幅6mm、柄頭の渦状部が直径約9mmを測る。柄部



第52図 古墳時代鉄器実測図

F37・39・40～45：8号墳 F46：7号墳 F47：21b t

に木質等の残存はみられない。

B. 鉄 鎌

8号墳の主体部より16本、7号墳の周溝よりF46、15号墳北方でF47が出土している。

8号墳の鉄鎌 平根式1本・尖根式15本に分けられる。

平根式(F45)は、柳葉式に属する。筥代の先を失っているが、残存長137mm・頸部72mm・鋒部42mm・幅21mm・腸袂の長さ30mmを測る。この鉄鎌は全長の殆どを占める長い頸部、鋭い腸袂を有する。筥袂は関筥袂で、鋒の断面は片丸に近い両丸である。

尖根式は、15本出土しているが、全て同形同大で、鑿箭式である。これらの中で比較的良好な残存状態であるF44は、刃部が長さ20mm・幅8mm・頸部128mm・筥代の残存長が20mmで木質がよく遺存している。筥代については他の製品の同部位から40mmを推定する。この鉄鎌は、片切り刃の小さな刃部に対し、細く長い頸部を有し、鉈によく似ている形態をとる。筥袂は関筥袂である。

7号墳の鉄鎌 F46は斧箭式に属する。残存長は63mmで筥代の先端を失っている。刃部は片切り刃の方頭で刃幅43mm・長さ41mm、頸部の長さ7mm・幅9mmの逆三角形を呈する。筥袂は関筥袂である。

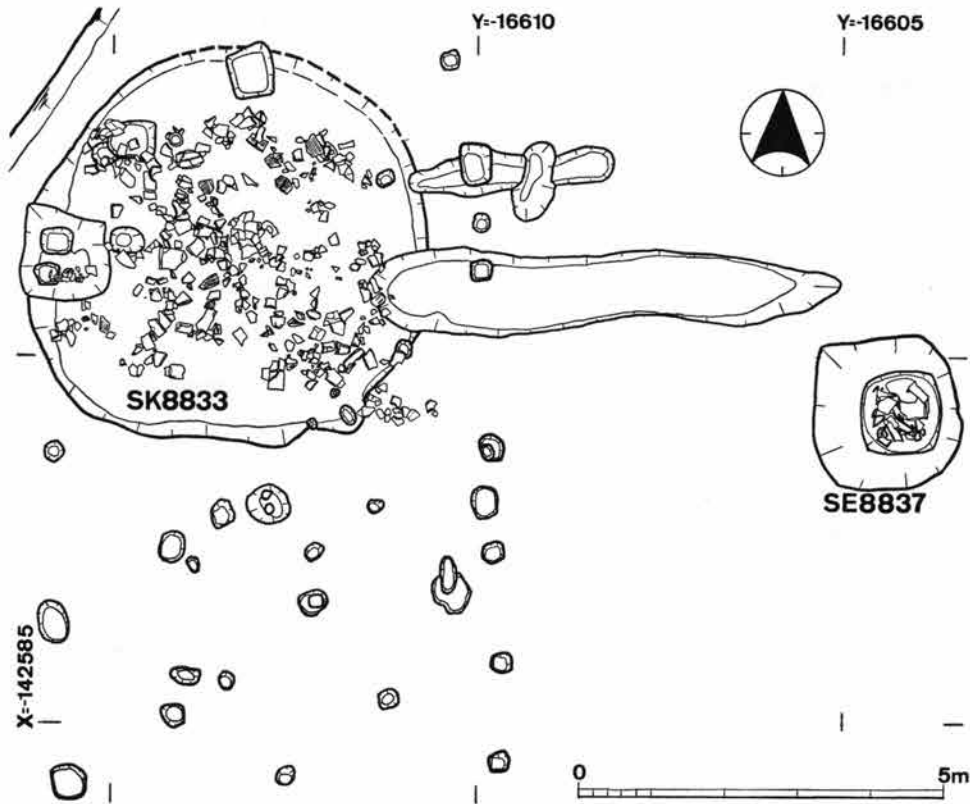
F47は大きな腸袂を有する三角形式である。刃部先端・腸袂の一部・筥代を欠損している。残存長は85mm・幅34mmである。腸袂の形状が左右対称にならない。また8号墳出土の平根式に比べ頸部が短い。

(中井英策)

4. 奈良時代の遺構

奈良時代の遺構には、掘立柱建物・井戸・土坑がある。また古墳時代の遺構でも記したように、奈良時代に古墳を削平し、整地したもの(14号墳など)と古墳を削平せず、周溝をそのまま残すものがある。この周溝を残す意図は、瓦生産に関連して何らかのかたちで周溝を利用したものと思われる。

掘立柱建物 S B8839 建物の一部がトレンチ外となるため明らかではないが、身舎は梁間2間×桁行9間の東西棟の建物で、南・北に一間の庇をもつ両面庇の建物である。各柱間は、約2.9mのほぼ10尺等間で、身舎の掘形の規模は、一辺約0.6~0.8m、深さ約0.7mである。底部分の掘形は、身舎部分の掘形に比べて規模が小さく、掘形の直径約0.5mを測る。身舎部分には、束柱あるいは間仕切りの柱と思われる径0.3mの柱穴が、約2.9mの等間隔で並ぶ。このS B8839は、次年度以降調査地を拡張する予定であるため、詳細についてはその調査の結果を待って報告したい。



第53図 SK8833・SE8837実測図

柱穴群 S B 8839の東側で、S K 8833を囲むように柱穴群がある。これらの柱穴群は、S B 8839に関連した雑舎的な建物、あるいはS B 8839を囲む柵列の可能性がある。これらの柱穴群もトレンチの北側に広がる可能性があるため、次年度以降の調査の結果を待って検討していきたい。

井戸 SE 8837 柱穴群の東側で、柱穴群と16号墳の間で検出した方形プランの井戸である。掘形は、上面では方形で底部近くでは円形に近くなる。上面での規模は、一辺約2 m・深さ約1.5 mを測る。掘形内からは、井戸枠は出土しなかったが、掘形の最下層から木片が出土しており、木枠の可能性もある。井戸内では上層からコンテナにして20箱を数える多量の瓦が出土しており、その下層からは土器が出土した。瓦には丸瓦・平瓦のほか、軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・磚などがある。土器は須恵器杯・皿・盤、土師器甕などがある。なお土器のうち須恵器杯Aの外底面に「司」と墨書されたものが1出土した。

土坑 SK 8833 柱穴群の中央にある直径5.5 m・深さ0.3 mの円形の土坑である。この土坑からは、丸瓦・平瓦のほか軒丸瓦・軒平瓦がまとまって出土した。

5. 奈良時代の遺物

奈良時代の遺物は、前述の井戸 S E 8837・土坑 S K 8833のほか、各古墳の周溝内からも多量の遺物、特に瓦が出土した。ただ、整理作業が進んでいないため、ここでは井戸 S E 8837から出土した遺物を中心にその概要を説明する。

(1) 土 器(第54図)

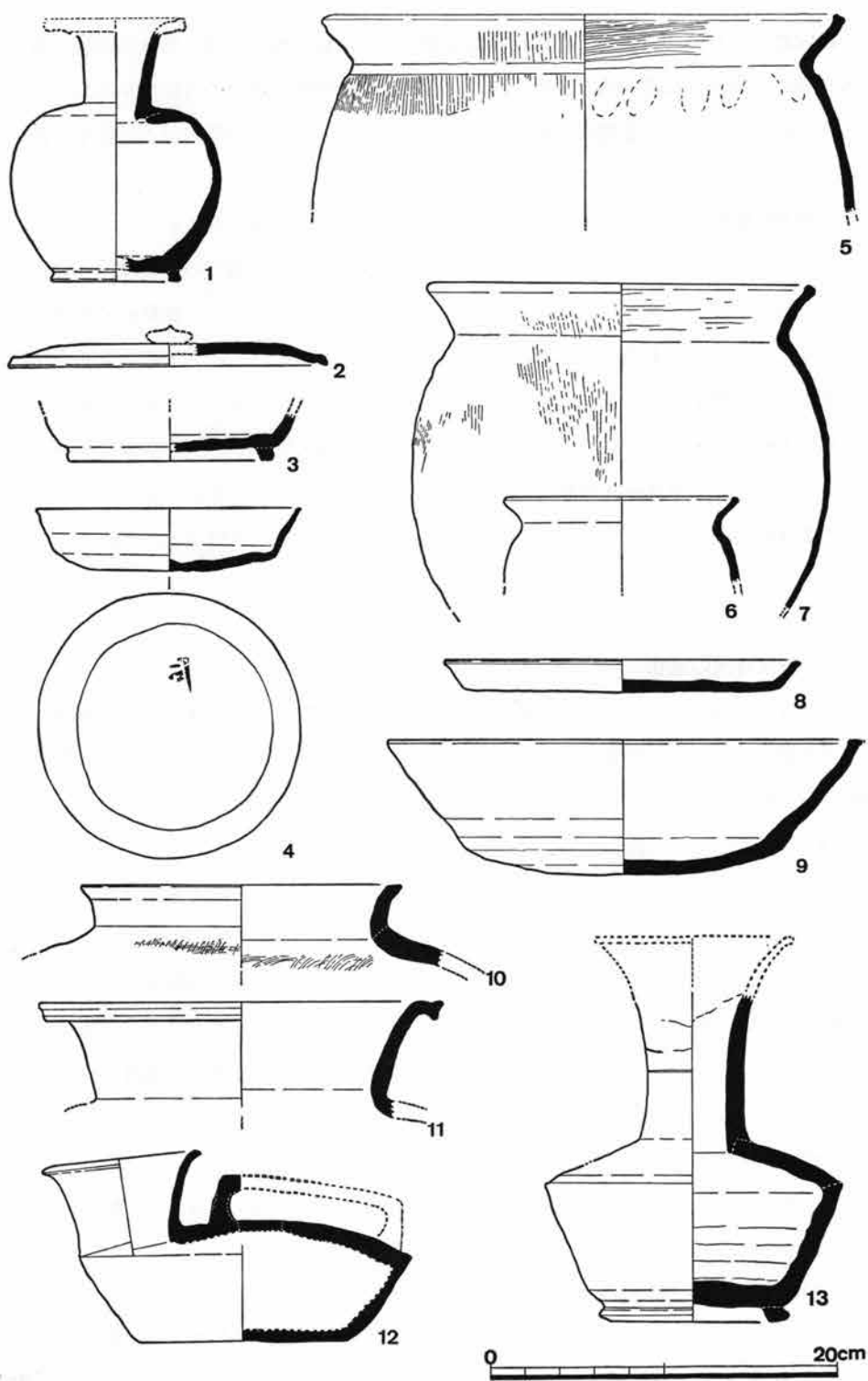
S E 8837出土の土器(1～9)には、須恵器壺 L・杯 A・杯 B・皿 A・杯 B 蓋・盤、土師器甕などがある。壺 L(1)は、口縁端部を欠く。体部は肩部の張った球形を呈する。盤(9)は、丸底ぎみの底部で、口縁部は斜め上方に長く立ち上がる。口縁端部は、内・外方に肥厚し、丸くおさめる。甕(5～7)は、口縁部が外湾ぎみに立ち上がり、口縁端部が内側にわずかに肥厚し、丸くおさめる。杯 A(4)の外底面には、「司」と墨書されている。

S K 8833からは、須恵器平瓶(12)が出土した。12は、口縁部の一部と把手を欠くが、ほぼ完形に近い土器である。

7号墳の周濠からは、須恵器壺(13)・甕(10)が出土した。13は、肩部に明瞭な稜線が入り、頸部は長く立ち上がる。10は、口縁端部が平坦となる。体部外面はタタキののちカキメを加える。体部内面は、同心円文のタタキを施す。

須恵器甕(11)は、口縁部片で、口縁端部は強く外反したのち、上・下方に肥厚する。S B 8839の柱穴掘形より出土した。

(石井清司)



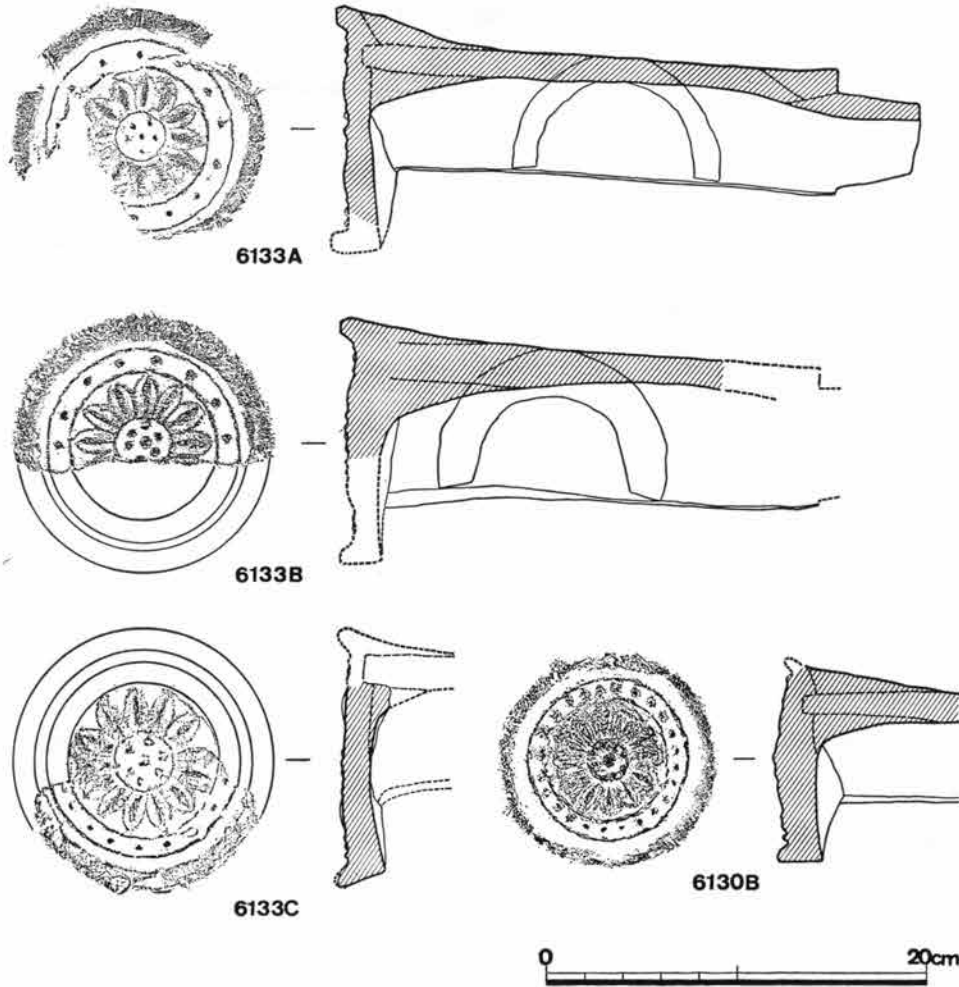
第54図 奈良時代土器実測図

(2) 瓦 磚 類(第55~57図, 図版第26)

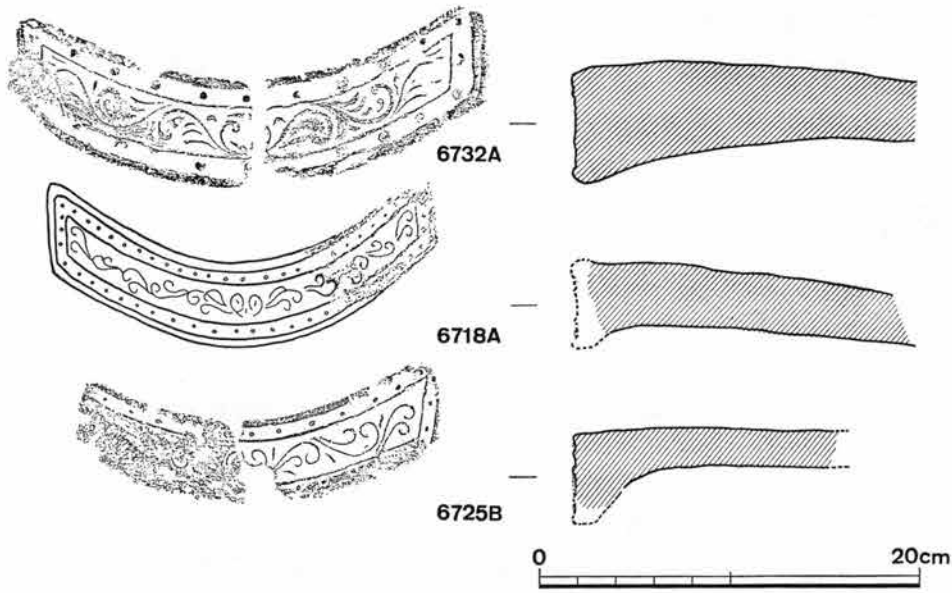
今回の調査では, 調査区内すべてのトレンチより瓦が出土している。総数は多くコンテナバットで150箱ほどである。これらは多くが丸・平瓦であるが, 今回は軒瓦についてのみ概述する。

軒丸瓦 軒丸瓦は文様構成の判別できる破片を含めて4型式46個体出土した。

6133Aは, 直径16.5~16.8cm, 中房径3.4cmを測り, 中房には1+5の蓮子, 内区には先尖りの単弁12葉を配し, 外区には13の珠文を置く。11個体出土した。なお, この内の6個体は全体の文様構成等は上述のとおりであるが, 中房がやや楕円を呈し, 全体的に文様がにぶいものがある。これを単なる焼き歪みとみるか, あるいは範ずれ・異範と考えるべ



第55図 軒丸瓦実測図



第56図 軒平瓦実側図

きか、今後の資料増加をまって検討したい。

6133Bは直径がおよそ16cm、中房径は3.6cmを測る。中房蓮子は1+6。内区には単弁12枚、外区に15の珠文を置く。7個体出土した。

6133Cは直径約16cm、中房径約4cmを測り、中房には1+6の蓮子を配し、内区には単弁13枚、外区に18の珠文を持つものである。3個体出土した。

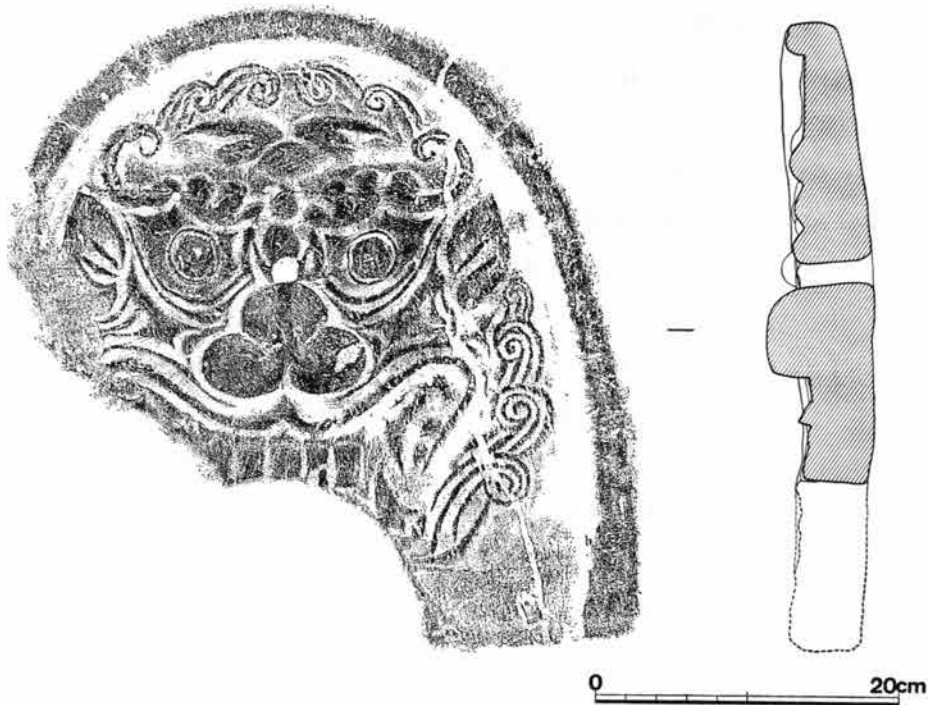
以上の6133A～Cは、前回までの調査でも出土しており、市坂瓦窯出土の型式とも一致している。

これに今回新たに6130Bを2個体確認した。直径13.5～13.7cm、中房径3.0cmを測り、上述の3型式に比して小形である。内区は子葉を持つ16枚の単弁文を持ち、中房には1+8の蓮子を配す。また外区には突線鋸歯文を巡らす。この6130Bは市坂瓦窯で出土しており、今回確認されたことにより、当遺跡が市坂瓦窯と一連のものであることを一層明確にしたといえる。

軒平瓦 軒平瓦は3型式17個体出土した。

6732Aはほぼ完形の優品である。瓦当面には優美な均整唐草文を主体に配し、上下各外区に9の珠文、左右各脇区に3の珠文を配す。中心飾部分での厚さは約6.0cmを測る。10個体出土した。

6718Aは遺存状態が悪く判然としないが、均整唐草文を主体としたものである。欠落部



第57図 鬼面文鬼瓦実測図

分を拓影で接合し補うと上下各外区，左右各脇区に珠文をもつものであることがわかる。厚さ・幅ともに小ぶりの瓦である。2個体出土した。

6725Bはやはり均整唐草文を主体としたもので，中心部分での厚さは5.8cm程である。6個体出土した。

なお，前回までに確認されていた6732A型式は，今回は確認されていない。

鬼瓦 I X I—16周溝上層・SE8837掘形埋土内・SB8839に重複する土坑・I X I—16とSE8837に挟まれた地区の包含層中・SB8839の南側に位置する小ピット掘形内より各1点，計5個体出土した。いずれも破片化しているが，全て同型式の平城宮式鬼面文鬼瓦（毛利光敏彦氏の分類による平城宮Ⅳ式-Bに相当する）である。ここでは，SE8837例を図示し若干の説明を加える（第57図参照）。左下部を欠失するものの文様構成の全体を知りうる程度残存しており，全高（復原高）41.5cm，幅44.0cm，厚5cmの規模を測る。いわゆる文様面は下顎部を省略して顔面上半のみを表現したもので，三葉形の鼻，木葉形の耳を付す。額と頬の周囲に複線で構成された蕨手状の卷毛をめぐらす。（八瀬正雄）

6. 中世の遺構

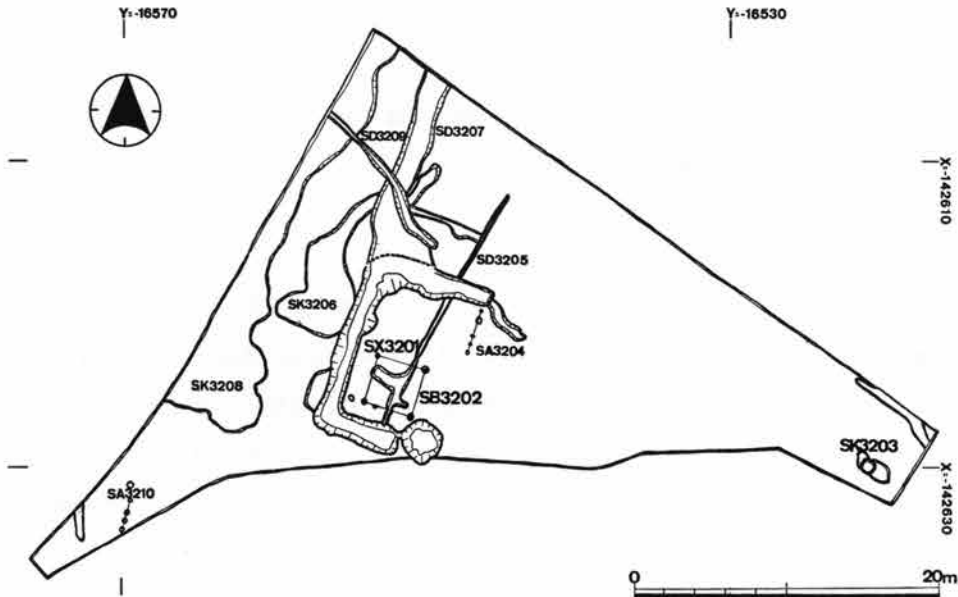
第2トレンチでは、溝を付随する建物遺構を検出した(第58図)。

溝SX3201は、下底部に若干の平坦面をもたせて地山を逆台形状に掘り込むもので(上縁幅約1.5m・深さ0.4m)、平面的には、東側を開放して「コ」字状に巡る(溝の中軸で西辺長10.8m・北辺長7.5m・南辺長5.0m)。ただ、南辺溝は短く、その延長部に円形プラン(径2.5m)の土坑が位置する。各溝(土坑も含めて)とも、粘土系の土で埋没していたが、各辺の溝底より高い位置で人頭大の石材(自然石)が転落した状態で出土している。

この溝によって基壇状に掘り残された内部の空間に掘立柱構造の小規模な建物と柵が配置する。いずれも柱筋を溝の主軸に揃えている。SB3202は、南溝に偏在する1間四方(東西3.3m×南北3.1m)のほぼ正方形建物である。掘形は、隅丸方形プラン(一辺30cm前後)で、内部に柱痕跡(径15cm前後)を残す。SA3204は、北溝の東境から南に延びるもので、東辺を画す施設と考えられるが、建物前面にまで続かない。

これら一連の遺構の時期に関しては、建物周辺の基壇面および溝底付近より土師器皿・鍋・瓦器碗が出土しており、おおよそ12～13世紀に機能していたものと考えられる。

SK3203は、側壁のみ硬く焼き締まった焼土壇である。帰属時期は不明である。



第58図 第2トレンチ遺構平面図

7. 小 結

(1) 上人ヶ平古墳群は、これまでの調査で14基の古墳が確認されているが、それらは台

地上に一様に分布するのではなく、大きく2つの領域(支群)に集中して築造される。それぞれの支群は、中規模の円墳1基を中心に、複数の小規模な方形墳(以下、記述の便宜上これを小形方墳と記す)が、これを取りまくように群在するという共通した内容をもっている。今回は、このうち5号墳を中心とした南支群の実態が概ね明らかになった。つまり、南支群は、中規模円墳である5号墳を中心に、7基の小規模な方墳が、その周囲に群在するという形態を採っている。ただ、ここでの方墳の分布形態は、(北支群のそれに見られるような)主墳(1号墳や5号墳などの円墳)の周囲に円弧を描くように圍繞するものではなく、少なくとも5号墳の北側の6基は、東西に主軸方位をもって帯状に配された観がある。この点に関しては、より広範な調査を待って再度検討したい。

(2) 各支群を構成する個々の古墳の実態については本文でふれているが、ここでは円墳と小形方墳の相違点を中心に整理してみる。両者は、単に形態・規模が異なるだけでなく、以下の諸点において顕著な相違点が抽出できる。すなわち、各支群の中心となる円墳(特に5号墳)は、墳丘が段築をもって構築され、斜面に葺石、各テラスに埴輪列といった外部施設を備える。これに対し、小形方墳は、段築工法を採らず、斜面に葺石は敷設されない。また、埴輪列の存在は想定されるが、それは墳頂部に限られる。5号墳は、典型的な古墳の属性を備えたもので、いわゆる王権の身分標式を媒介とする前方後円墳を頂点とする墳墓体系に帰属するものと理解できる。一方、小形方墳は、形態上弥生時代の方形周溝墓の系譜を引きつつ、古墳時代の全期間を通じて汎日本的広がりをもつ墓制で、前方後円墳体系から隔絶された墳墓体系と考えられる。つまり、小形方墳の被葬者は、王権に直接支配隷属関係を持たない、換言すれば、王権との支配関係を保障された5号墳の被葬者に隷属することで、間接的に王権に支配体制に組み込まれた階層の人々の墓制ということができる。ここに墓制における王権の二重支配構造を見出すことができる。

(3) 古墳の築造時期に関しては、各種の伴出遺物から概ね推定できる。とりわけ埴輪類(特に円筒埴輪)は、各古墳から普遍的に出土しており、比較検討していく上で好資料となり得る。すなわち、本文で抽出した円筒埴輪の諸類型は、そのまま、時期差を示しているものと考えられる。ただ、ここでいう時期差は、共伴する土器資料(須恵器)の型式差から判断すると、比較的短期間(須恵器の3~4型式の中に納まる程度)であると推定される。これを敢えて既存の編年観に照合させれば、円筒埴輪A類は、川西編年のⅣ期の典型、B類は同じくⅣ期の範疇内、C類は、同氏のⅤ期にそれぞれ比定できる。^(注6)この内、同じⅣ期に入るA・B両類の新旧関係については、A類の形態や規模に、より古相の要素が残ることから、A類がB類に先行するものと理解する。このように、円筒埴輪の編年を基軸として古墳の相対的な先後関係を提示すると、5号墳→7・8・16号墳→14号墳→6・15号墳

の築造順が想定できる。

(4) 上記の円筒埴輪の編年観を、他の遺物から検証する。

まず、須恵器資料については、その出土状況が様々で厳密な対比はできないが、8号墳の盗掘坑より、TK 216 前後の杯蓋・壺、7号墳の主体部よりTK 208 前後の把手付碗・同周溝内より同期の樽形甕、14号墳の周溝内よりTK 208 前後の杯蓋・無蓋高杯、6・15号墳周溝内よりTK 47前後の杯がそれぞれ出土している^(注11)。

次に、7号墳と8号墳から主体部の副葬品として鉄器が出土している。いずれの場合も、ミニチュア化した農耕具(斧・刀子・鎌・鍬先)と武器(鎌)という組成は変わらない(7号墳はこれに剣が加わる)が、その細部を検討すると、例えば鎌が7号墳の場合曲刃形式をとるのに対し、8号墳では直刃鎌である点をはじめ、長頸鎌・刀子・鍬先の形態等のわずかな型式差が認められる。すなわち、須恵器と鉄器の型式差から、8号墳は7号墳にわずかに先行することが確認できる。

一方、形象埴輪に関してみると、比較資料のある14号墳と16号墳の蓋形埴輪の対比が可能である。例えば、笠部の装飾をみると、14号墳例は突帯以外は素文であるのに対し、16号墳では、線刻による笠骨が表現されたものが存在する。また、立ち飾りの線刻を比較しても、14号墳例に簡略化が認められる。16号墳例がより大形である点も加味すれば、14号墳例がより後出することは明白である。その他の形象埴輪については、単独出土で比較検討できない。ただ、馬形埴輪は、その最も古い段階に位置付けられるし、家・鶏・靱など形象埴輪として古くから存在するものも、その一般的な編年観から大きく逸脱するものではない。

(5) 後述する埴輪窯との関連を、若干付言する。すなわち、5号墳から直線距離にして120m東方に位置する3基の埴輪窯の資料を、古墳群のそれと比較する。

窯体内(1号窯に限定)および、灰原(2・3号窯資料の混在する可能性がある)から出土した円筒埴輪は、古墳群で抽出したB・C類に近似する。中でも1号窯の最終操業に係る資料は、C類と全く同じ内容をもっている。これに対してA類は、今のところ確認されていない。

一方、形象埴輪は、いずれも灰原の資料になるが、例えば17号墳例と同じ意匠の馬形埴輪が出土しているし、16号墳で見られたものと同様、笠部に線刻表現をもつ蓋形埴輪片が認められる。すなわち、灰原まで含めると円筒埴輪A類と共伴する形象埴輪は、この地区で生産されていた可能性が高いことになる。(伊賀高弘)

(2) 上人ヶ平1号埴輪窯

1. 調査の経過

上人ヶ平1号埴輪窯の調査は、田畑部にある瓦谷遺跡の試掘調査から始まる。

これは、瓦谷21btの試掘調査によって地表下60cmで、炭を含んだ黒褐色土層が厚さ5～35cmにわたって堆積する層を確認し、同層から多くの埴輪が出土した。この黒褐色土層が窯に関連した灰原である可能性が考えられたため、急遽調査地を丘陵部へ向かう斜面へ拡張し、窯の確認につとめた。その結果、窯体の一部を確認した。この試掘調査では、これまでの埴輪窯の調査例からみて、埴輪窯が数基連続する可能性が考えられたため、谷部(瓦谷遺跡)に調査地を拡張したところ、新たに2地点にわたって窯体の一部と灰原を確認した。

以上の試掘調査により、3基以上の埴輪窯がこの斜面に存在することが明らかとなった。

2. 調査の概要

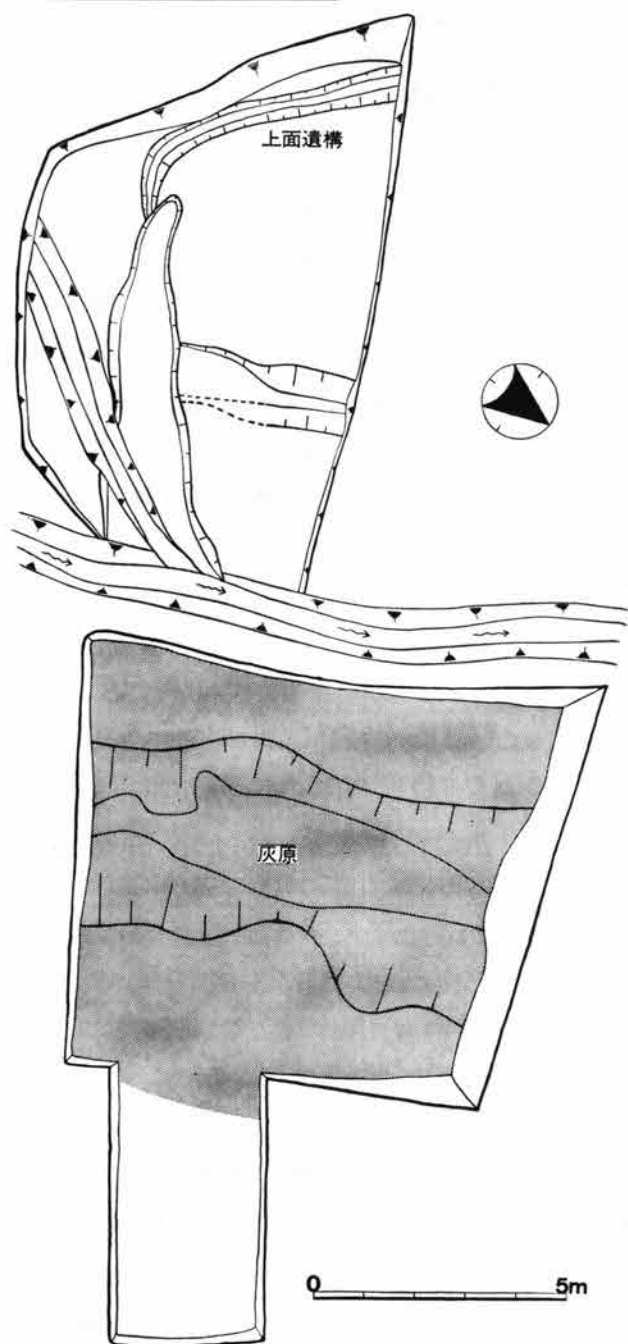
試掘調査の結果、3基の埴輪窯を確認したが、東側で確認した2基の窯(2・3号窯)については、農道が現在も機能しているため調査を行わず、北側の1基(1号窯)のみ、その性格を明らかにするため発掘調査を行った。

1号窯の発掘調査は、試掘調査の結果、明らかとなった灰原の範囲、丘陵斜面で検出した窯体の一部から、窯本体の範囲がある程度予想できたため、窯本体を確認するためのトレンチを約10m×7mの小規模な範囲で設定し、調査を進めた。調査が進むにつれ、窯体の一部(燃焼部)が後世の給水管の埋設工事で、削平を受けていたが、全体に遺存状態が良好な窯であることが明らかになった。

(1) 1号窯の窯体構造

1号埴輪窯は、丘陵斜面をトレンチ式にくり抜いた地下式の無段・無階の窖窯で、窯体の検出全長約8.0m(斜距離)、幅約1.45mを測る。窯体内は煙道部・焼成部・燃焼部からなる。煙道部は焼成部端から幅が狭くなり、焼成部と煙道部の境には比高差約20cmの段を設け、火柄の役割りを果している。焼成部と燃焼部には床面の断ち割りの結果、3面の床面を検出しており、燃焼部、焼成部の床上げが認められる。

築窯当初の床面(第1次床面)は、床面傾斜角約20°を測り、燃焼部最大幅1.45m、焼成部最大幅1.45mを測る。床面に認められる燃焼部と焼成部の境の段は、この第1次床面では認められず、床面に堆積した厚い灰原から推定すると、焼成部の長さは約4mを測る。第1次床面の煙道部は、第3次床面の煙道部に重複するものか、あるいは第2次床面、



第59図 遺構平面図

床面(あるいは第2次床面)の煙道部をこわして、新たに煙道部を南西方向に拡張したものの可能性がある。この第3次床面は、第1次床面、第2次床面と重複してあり、全長約8.0m(斜距離)、焼成部幅1.45m、焼成部床面の傾斜角約 15° を測る。

第3次床面は、前述のように、焼成部と燃焼部の境には灰層が堆積しており、この灰層

第3次床面の修復に際して削平されたものかどうかは明らかでない。第2次床面あるいは第3次床面の修復にさいして削平されたものであれば、後述する第3次床面の円筒埴輪が転倒した付近にあった可能性がある。

第2次床面は、第1次床面の焼成部下半部から燃焼部にかけて、床面の床上げを行ったもので、第1次床面の焼成部から燃焼部にかけて順次厚さを増して堆積している。第2次床面の燃焼部の傾斜角は、第1次床面の燃焼部の傾斜角よりもゆるくなり、燃焼部床面の傾斜角は約 10° を測る。第2次床面の煙道部と燃焼部の境については不明瞭である。

最終床面(第3次床面)は、第2次床面にさらに床上げを行ったもので、この床面の床上げに使用された埋積土内からは、窯壁あるいは焼台と思われる粘土塊の焼き上がったものが多く出土した。第3次床面は、前述のように第1次

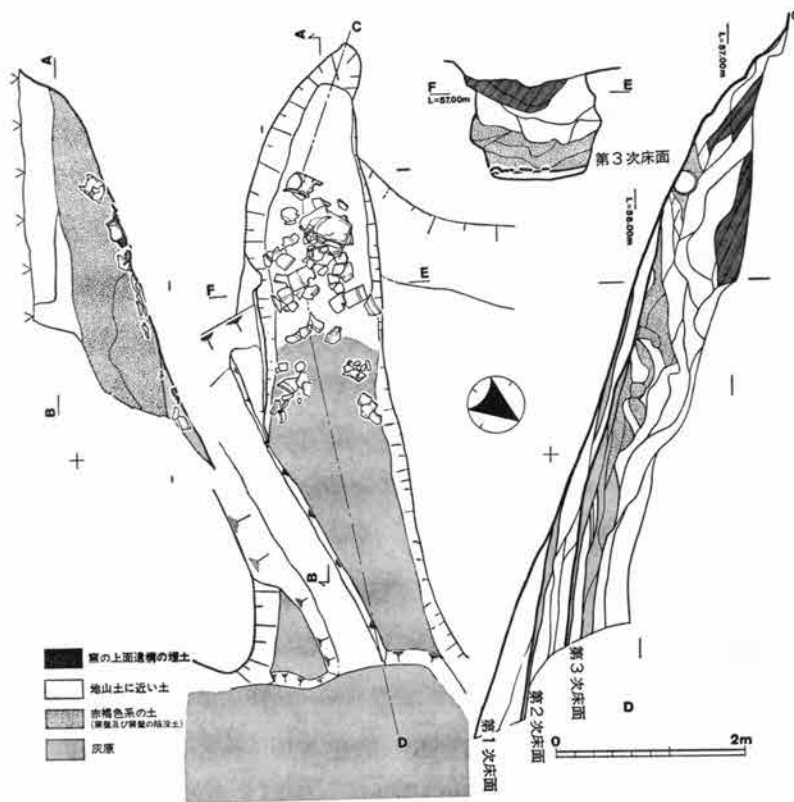
の堆積した範囲をもって焼成部と燃焼部の境とした。この灰層の堆積した燃焼部の範囲は、長さ約3.0mにおよぶ広い範囲である。この第3次床面の焼成部の範囲を第1次床面からみると、第1次床面の燃焼部および焼成部の半分までが、第3次床面では燃焼部として利用したことになる。この第3次床面の燃焼部と焼成部付近の側壁をみると、他の側壁にくらべて、高温の火を受けているためか、還元炎に近いかのような状態で、灰褐色土で堅緻に焼けている。また第2次床面に廃棄された埴輪が、この第3次床面の焼成部と燃焼部の境付近では、第3次焼成時の影響を受け、須恵質状に堅く焼かれている埴輪が多い。

第1～第3次床面の成形時には、窯壁の残滓・黄褐色粘質土によるかさ上げとともに、淡赤褐色砂質土の土を薄く敷いて床面としている。

窯体内に落ち込んだ埋積土内には、半地下式窖窯の埋積土にみられるような窯壁の落ち込みは顕著でなく、また、比較的小さな窯壁を観察してもスサ入り粘土はなかった。

窯体の側壁は、断ち割り作業を行っていないため明らかでないが、粘土の貼り付けは認めがたい。

各床面からは、形象埴輪を含む埴輪が出土しており、特に最終床面である第3次床面で



第60図 窯体実測図

は、ある程度まとまった状態で出土した。

(2) 灰 原

1号窯の灰原は、焚口部から直径10m以上の範囲にわたって広がっており、特に布留式土器を含む旧流路の窪地に間層を挟んで3層の灰原が堆積している。ただこの灰原の調査は、調査範囲が狭いため1号窯に帰属するものか、あるいは2・3号窯からの灰原が重なって堆積しているものかどうか明らかではない。灰原から円筒埴輪のほか蓋・盾・馬・鶏などの形象埴輪も多く出土した。

(石井清司)

3. 出 土 遺 物

(1) 円 筒 埴 輪(第61図)

普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪がある。

普通円筒埴輪 埴輪の全体形は、底部(径17cm前後)から口縁に向かって、徐々に広がる形状を基本とするが、口縁段は、緩やかに外反するもの(1)と、直口状を呈するもの(2・3)がある。タガは、個体あたり3条等間隔に巡るものと思われ、それに画された段幅は広い。タガの断面は、全て台形状を呈するが、その中で最終床面の資料は、1次床面のそれ(6)に比べ異常に突出度が低く、あたかも周囲のナデ整形により削り出した観を呈する。透孔は円形で、2・3段に面違いになるように段間に2孔配する。その規模は、最終床面の個体ほど大きく(径8cm)、段幅全体を占める。粘土帯の接合部の凹凸をならし、器体を円筒形に仕上げる成形には、例外なくナメ方向のナデが用いられる。それは、底端部の粘土の重さによる肥厚を強く押さえ、それを起点として丁寧にナデ上げるもので、上位ほど傾度を強める(左傾するものは右利き工人を想定できる)。器壁をより平滑に仕上げる調整には、ハケメが多用される。ただ、内面の調整は省略される。外面調整の施行方式には、最終床面の個体と、第1次床面のそれとの間に、明らかな相違が見い出せる。すなわち、前者の場合外面に施される調整は、基本的には1次調整のタテハケのみであり、2次調整は省略される(2は口縁段に限り2次調整のヨコハケが見られる)。これに対し6は、基底段の2次調整は省略されるものの、一般にヨコハケの2次調整を加える。

焼成は、土師質で、淡黄灰色～灰色を呈する。黒斑はない。

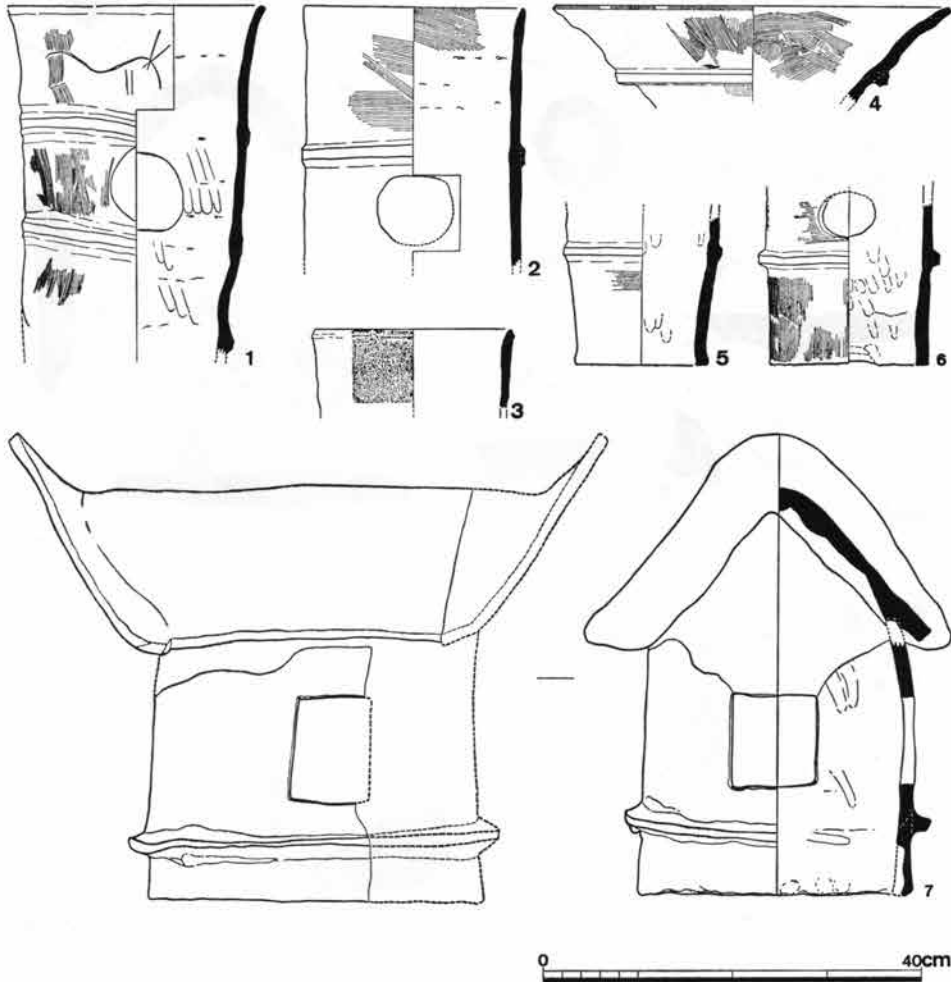
朝顔形円筒埴輪 最終床面の資料である。中位の突帯は、1次口縁の端部が擬口縁状を呈しているのではなく、全て粘土帯を貼り付けて整形している。突帯の断面は多角形状を呈する。内外の調整は、縦横方向のハケメを用いるが、外面は、突帯貼付前のタテハケのみで2次調整を省く。外形は、口縁部が途中で屈曲することなく頸部から端部に至るまで、直線状に延びる。つまり、口頸部を単一工程で一気に作り上げる(一括成形)。

(2) 形象埴輪(第61・62図)

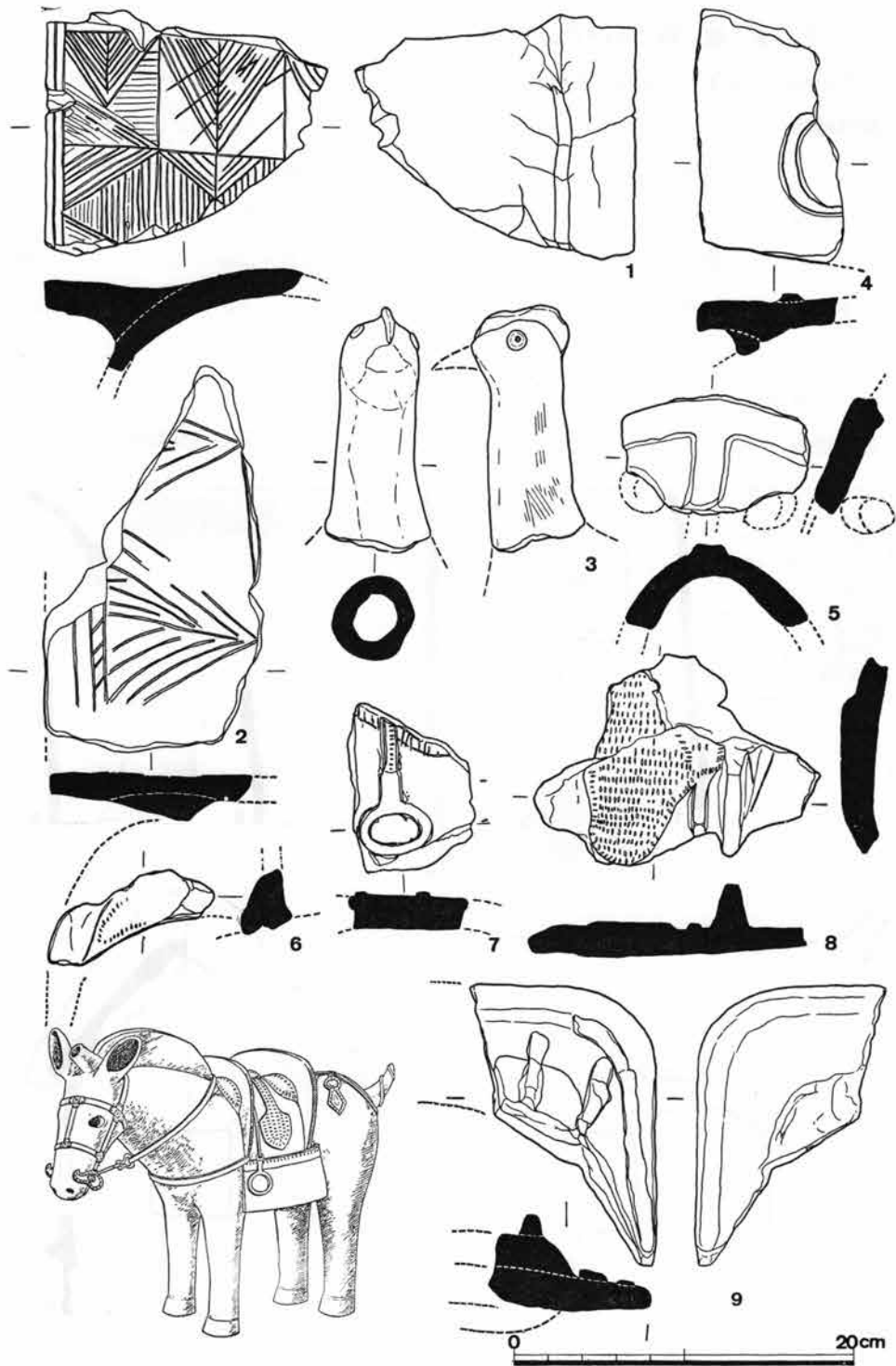
形象埴輪は、全体に土師質に焼成されており、黒斑を有するものは認められない。

家形埴輪 第61図7は、切妻屋根構造の家形埴輪である。一方の妻側と軸部の上半を大きく欠失するが、全体形を復原できる程度に遺存している。屋根部は、妻の転びがやや大きな破風板をもつが、屋根の流れ部分も含め一切の装飾的表現を欠く。軸部は隅を丸く造り、その横断面は隅丸長方形を呈する。壁面には、妻・平側各々に縦長長方形の窓を1個穿孔する。しかし、それ以外の造形は見られない。裾廻り台は、突出長の短い台形断面を呈し、壁面に粗雑に貼り付けている。伝統的な形態(全体のプロポーション)を残しながらも、その細部の表現を極力省略した家形埴輪といえる。

盾形埴輪 第62図1は、いわゆる鋸歯文系の盾形埴輪である。その左側縁部の上端付近



第61図 埴輪 実側図 (1)



第62図 埴輪実測図(2)

1・3・5～9：1号窯灰原 2：窯体内埋土 4：第1次床面

に相当する。盾本体は、円筒支持部の前面をも利用し、その両側に側縁部を鱗状に付加して造形するもので、盾面の中央部の横断面が緩い円弧を呈する。盾面の表面には、外区に底辺を外側に向ける鋸歯文、内区に蓋形文を、各々連続的に加飾する。また、その外周を2本の平行沈線で縁どる。内区と外区の界線は1本沈線で表し、各々の文様区の単位図様の区画線と区別されない。また、上辺の鋸歯文帯が、側辺のそれを覆い隠す構図(いわゆる^(注8)Ⅱ字形)を採らない。ただ、側辺の鋸歯文が優先され、上辺のそれと重なる部分で、上辺の鋸歯文を矮小化させている。鋸歯文・菱形文内は、垂直二等分線または対角線を設け、これにとりつく綾杉文調の平行線をわたす。また、これら単位図様間の空間を細かい平行線で充填する。同2は、文様単位がひとまわり大きいのが、線刻に精緻さが無い。外周の縁取線は3本で、内側2本間を斜線でうめる。鋸歯文内の充填原理は1と変わらない。

馬形埴輪 同4～9は、馬形埴輪の断片である。4は、障泥の下底部で、輪鏝が輪状粘土の貼付で表される。5は、頭部の頭格を示す破片で、带状粘土を貼り付けて額帯・鼻梁帯とする。6～9は、鞍部の破片である。各々、磯金具・輪鏝・鞍敷・後輪を表している。いずれも、各部の表現を粘土貼付により立体的に造形している。

鶏形埴輪 同3は、鶏形埴輪の頭部である。嘴ととさかの先端を欠くが、写實的に表現されている。
(伊賀高弘)

4. 小 結

上人ヶ平埴輪窯は、上人ヶ平遺跡が立地する台地上の東側斜面に築かれており、上人ヶ平古墳群と連結した遺構である。

上人ヶ平埴輪窯は、3基の窯からなり、そのうちの1基のみ発掘調査を行った。

1号埴輪窯は、地下式の窯で、3回の床上げが確認できる。1号埴輪窯では、窯体および灰原内から埴輪のみが出土しており、埴輪専業窯と思われる。

窯体および灰原から出土した埴輪は、円筒埴輪のほか、朝顔形埴輪・形象埴輪(家・盾・蓋・鶏)などがあり、円筒埴輪は上人ヶ平遺跡で出土したB類・C類に属し、川西編年のⅣ期のものとⅤ期のものが存在する。窯出土の埴輪は、上人ヶ平遺跡で記したように上人ヶ平14・15号墳から出土した円筒埴輪が窯体内出土円筒埴輪に近似し、窯体および灰原出土の形象埴輪に近似したものが上人ヶ平16・17号墳がある。このように窯で生産された埴輪が直線距離にして100～150mに位置する上人ヶ平古墳群の一部に供給されたことが明らかになり、埴輪の生産地と供給先が同一丘陵上にあるという良好な遺跡である。

(石井清司)

(3) 瓦 谷 遺 跡

1. は じ め に

瓦谷遺跡は、上人ヶ平遺跡の北側に隣接するが、その南半が現在の行政区割(小字名)を遺跡境界とするため、その南界が上人ヶ平の台地の北半を幾筋も開析する谷部に大きく貫入している。

ここ数年来、各所で試掘調査を実施した際、数条の河谷(旧谷地形)を確認しており、その埋積土中より保存状態の良い遺物が多量に出土している。その内容が台地上の上人ヶ平遺跡と共通する点から、両遺跡のとりわけ重複し合う部分は一体のものとして評価すべきものであろう。

今年度の調査は、上記の上人ヶ平遺跡に隣接する地点を対象とし、大きく3か所に調査区を設けて調査にあたった。結果、古墳時代および奈良時代の遺物を多量に包含する河道等を確認した。

以下、各地点ごとにその概要を略述する。なお、台地の東端に東接する一連の調査区において埴輪を焼成した窯跡を複数検出したが、これに関しては先述したため、埴輪窯を除いた地点についてのみ紹介する。

2. 調 査 の 概 要

名地区ごとに概要を記す。

(1) 40・58・59 b t (第39図)

上人ヶ平の台地の東縁に位置、下流に広がる扇状地形にとりつく最も長い谷の開口部に相当する。

調査は、水田の各筆単位に調査区を設定し、遺構の検出状況に応じ適宜拡張した。その結果、小規模な河道ともいべき自然流路と土坑を検出した。基本層序は、上層より耕作土・造成土・灰色粘土・青灰色粘質土の地山となる。

自然流土は、40 b t—Bトレンチより58 b t—Aトレンチに至る連繋が想定できる主流と、これに注ぎ込むと思われる支流(59 b t—Aトレンチ)がある。いずれも、堆積と再開析を繰り返すことによって複雑な断面形状および堆積状況を示している。流路内埋土は、腐植土と地山の崩落土と考えられる青灰色シルトの互層を基本とし、部分的に激しい流れを示す砂礫層がこれに貫入する。

主として腐植土層から、布留式併行期の遺物がまとまって出土した。ただし、40 b t 地

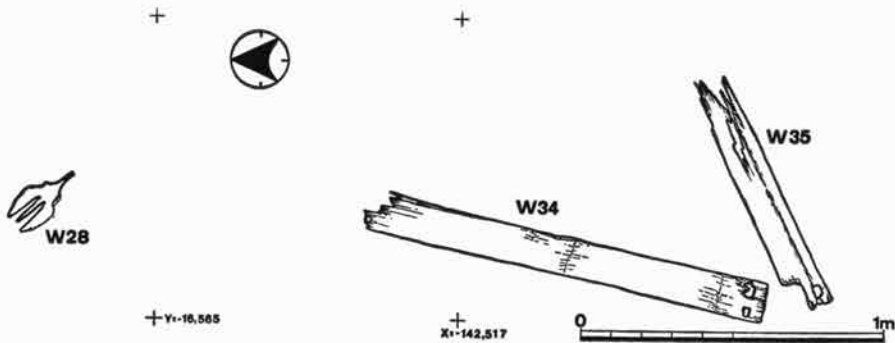
区に至ると出土量は激減する。おそらくこれは、隣接する台地上の集落遺構の分布の粗密を反映しているものと思われる。なお、58b t-Cトレンチにおいて、流路上層に多量の炭層の堆積が見られ、埴輪片の混入が見られた。そこで、これをもとに丘陵部斜面を調査したところ埴輪片を検出するに至った。この窯については「上人ヶ平1号窯」の項をたてて説明したので、ここでは省略する。土坑は、59b t-Aトレンチで1基検出した。直径3.5m前後のほぼ円形プランを呈し、皿状に浅く掘られている。内部より、流路内と同期の土師器がややまとまって出土したが、いずれも細片で、据え置かれた状態を示すものはない。この他、40b t-B地区で、須恵質の焼きひずんだ埴輪片が出土している。これは、より上流側に窯が展開することを示唆し注意を要する。

(2) 74・78・80 b t (第39図)

上人ヶ平の東尾根と中尾根の間を開析する小規模な谷部(74・76b t)と、その延長部(80b t)に各々トレンチを設定した。この内74b t地区については、昨年度の調査の際、古墳～奈良時代の遺物を多量に包含する埋積谷を確認しており、その追認調査として未掘部分を拡張したものである。その結果、74・76b t地区で旧谷地形の落ち込みを検出した。この地区の基本層序・谷内堆積の状況は、昨年度と変わらないので省略する。ただ、特記すべきこととして、74b t-B地区の谷内埋土中位において、布留式併行期の木製品(建築部材?・ナスビ形農具先・柄状木器)がほぼ同一層準で一括出土している(第63図)。一方、JR線路近くの80b t地区では、トレンチ南端部で丘陵裾を掠める小規模な自然流路1条を検出したのみで、この他の顕著な遺構・遺物は検出されなかった。

(3) ISR 4 b t-B (第39図)

74b tの位置する谷の1筋西側に平行する南北谷の谷口部分にあたる。この谷部も昨年度調査しており、これに続く最下位段状耕地にトレンチを設定した。その結果、前年度調査の自然流路の延長部を確認したが、遺物は出土しなかった。



第63図 74b t B地区木製品出土状況図

3. 出土遺物

今回の調査によって出土した遺物の大半は、布留式併行段階の土師器であり、同期の木製品および奈良時代の土器・瓦・木製品がこれに若干含まれる。

いずれも、低湿地遺構内に包含されていることもあって遺存状態は概ね良好である。

出土遺物の中心を占める古墳時代の土師器(古式土師器)については、昨年多量の遺物が出土した74b t トレンチの拡張区とそれに隣接する76b t 地区に加え、今回、新たに調査した台地の東縁に相当する58・59b t 地区に集中している。これら両地区の遺物の内容は、後者に奈良時代の遺物が含まれない点を除くと、ほとんどその様相に差異が認められないことから、説明の便宜上、両者を一括して扱うこととする。

(1) 土 師 器(第64・65図、図版第33)

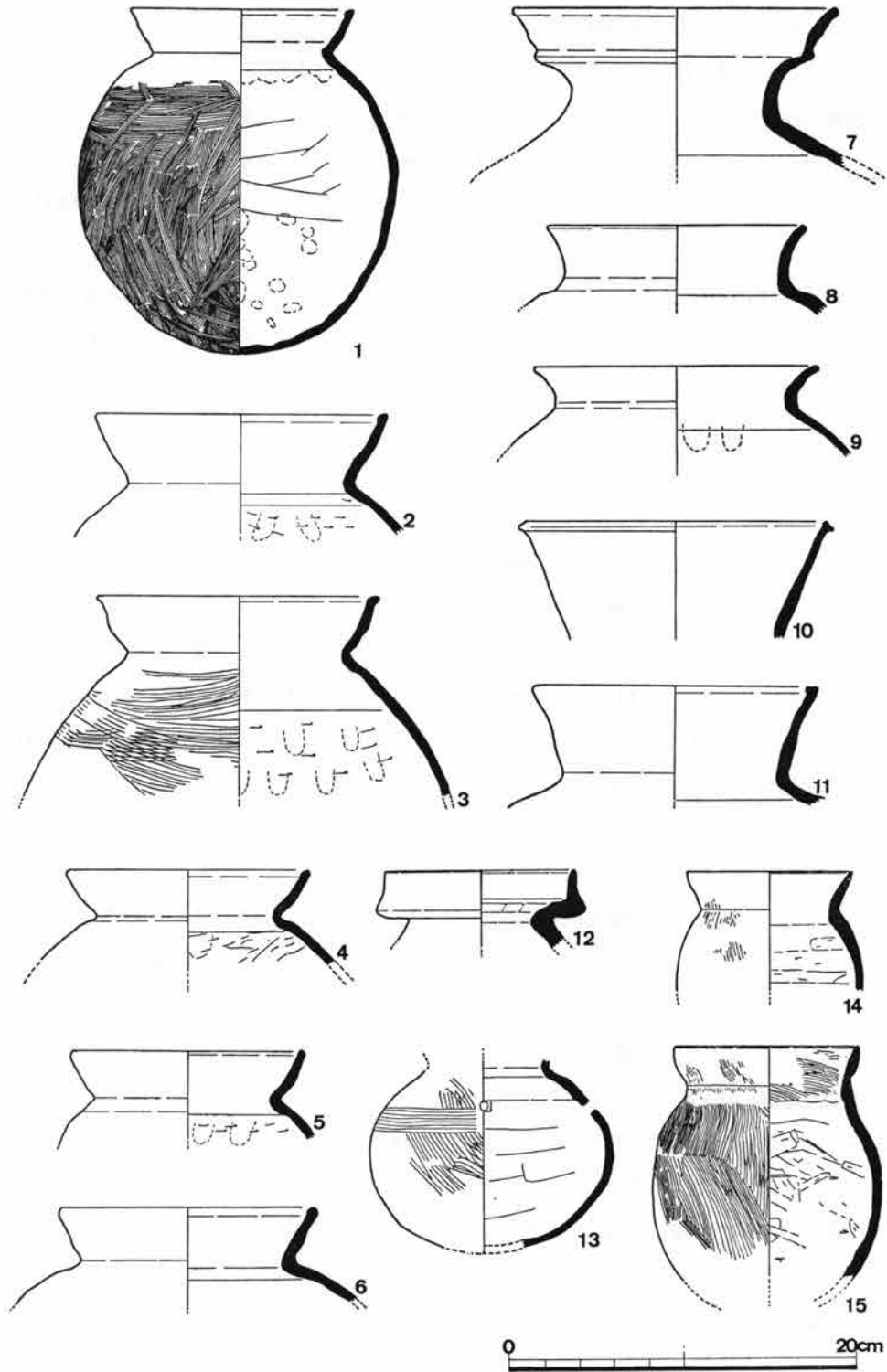
甕・高杯・小型丸底壺・器台・壺・鉢などの器種が確認できる。

甕(第64図) 典型的な布留形甕(1～6)に混じって、S字状口縁・外反口縁などの特殊な形態の個体(8・9・12・14・15)が少量含まれる。

このうち布留形甕は、遺存率の高い口縁の規模より、口径13cm前後と16cm程度のものに類別できる。形態は、体部が正円に近い球形で(1より)、口縁は中位に最大厚をもって緩く内湾する。頸部と体部の境界部は、横位のナデにより緩やかなカーブを呈するが、4のように比較的鋭く屈曲するものもある。口縁端部の形態は、例外なく口唇部が肥厚し、短く内傾する面をもつものが多い。ただ、内外に肥厚させ、水平の端面をもつもの(3)や、面をもたず内方に丸く折り返すもの(5)も少量存在する。器面調整は、体部外面に全面にわたる縦基調のハケメを施した後、肩部外面に横位のハケメを加えるのを基本とする(1)。さらに、口縁部の最終調整であるヨコナデが体部の上位数cmの範囲におよび、この部分の先行するハケメが消されるものが多い。内面は、体部下半に指頭圧痕が顕著に残り、最大腹径前後から頸部屈曲部の下位数cmまでの範囲に横位のケズリ手法を用い器壁を3mm前後と薄く仕上げる。

一方、典型的な布留形甕ではない甕形土器をみると、8・9などは、口縁がカーブを描くように外反し、端部は丸く単純に終わる。頸部と体部の接合部外面に明瞭な稜線はもたない。体部外面には、頸部くびれ部付近までタテハケを残すものがあり(9)、内面は、横位のケズリ手法が認められる。2個体ともに径1～3mm程度の長石粒を多く含み、他の個体と胎土が著しく異なる。地域外からの搬入品と考えられる。

また、14・15は、体部が長胴球形を呈し、直口ぎみに小さく外反する口縁を具備する粗製の小形甕である。体部外面に縦位、口縁部内外面に横位のハケメを施し、体部内面にはケズリ手法が用いられる。



第64図 古式土師器実測図 (1)

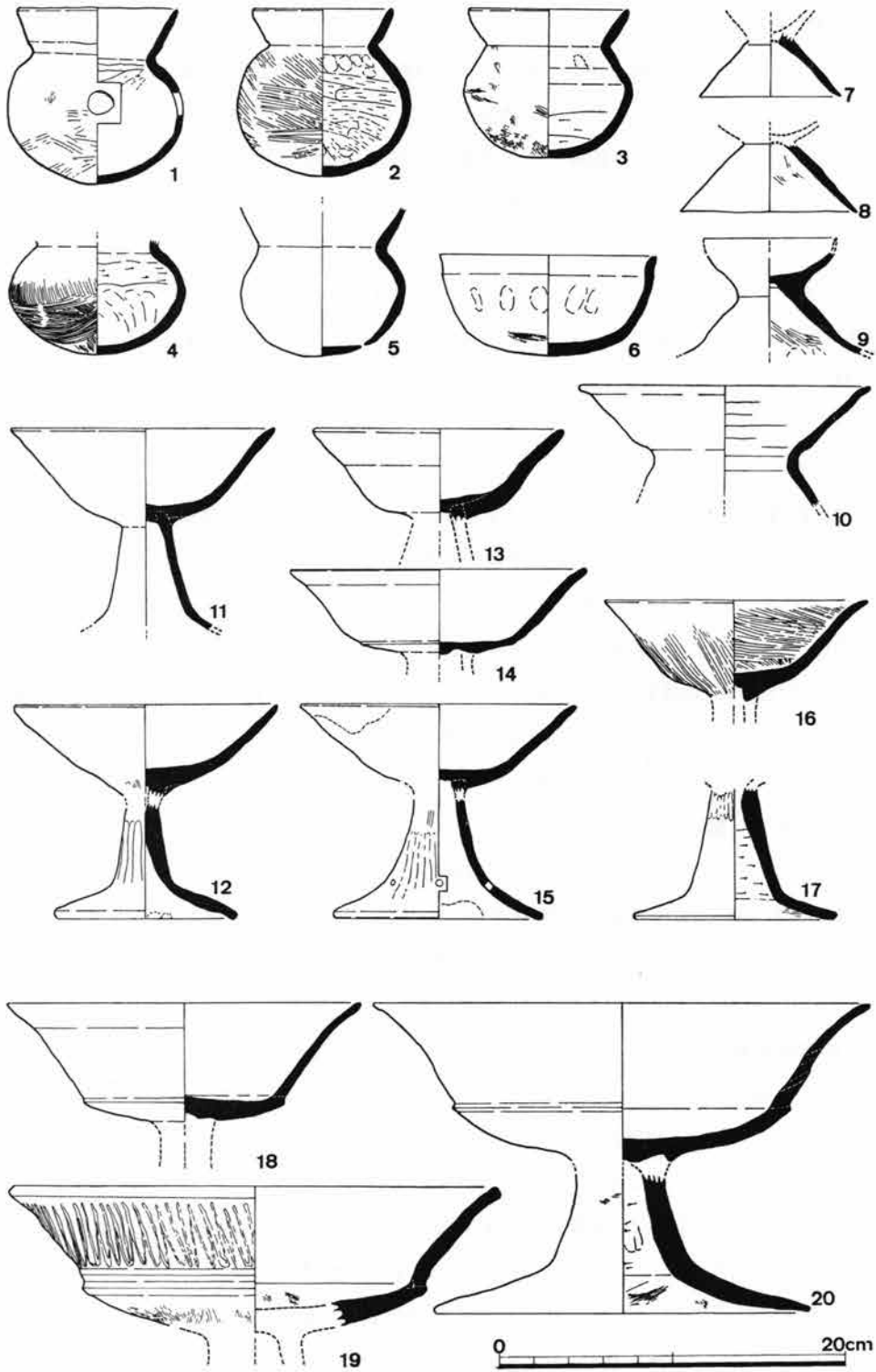
12は、S字状に屈曲する口縁部をもつ土器である。口縁は、内傾ぎみに短く直立し端部は丸く終わる。遺存部分は内外面ともヨコナデにより最終調整している。

高杯(第65図) 甕に次ぎ出土数が多い。大半が杯部と脚柱部が分離している。法量の違いから大形品(口径28cm前後)と小形品(同15cm前後)に分けられるが、後者が圧倒的に多い。いずれも杯部が屈曲して底部と口縁部に明確に区分できるタイプに属し、いわゆる碗形を呈するものはない。

大形高杯(19・20)は、皿状の底部に外反する口縁部を付加するかたちで杯部全体を整形するため、その境界が鋭く屈曲し、接合部外面に擬口縁状の低い突帯が巡る。脚柱部は、柱状部が短く、下端が大きく屈曲して裾部につながる。調整は、多回起的に丁寧な調整を施している。例えば、19は、杯部の底部外面に放射状ハケを施した後ヨコハケ調整、底部内面には放射状ハケの後ナデ・放射状ミガキがみられる。口縁部は、内外面ともヨコハケの後波状の丁寧なミガキを暗文風に施す。20は、杯部外面全体に斜放射状ハケを施した後底部との接合部を含めた口縁部にヨコナデ調整。内面は、底部に「クモの巣状」ハケを施した後放射状のミガキを加え、口縁部はヨコナデの後粗い横位のミガキを施している。

小形高杯は、杯部の形態より2種に細分できる。1つは、底部と口縁部の屈曲が緩慢で明瞭な稜をもたないもの(11~13・15・16)。他の1つは、大形高杯と同じく接合部で鋭く屈曲し、1条の突帯が巡るもの(14・18)である。数量的には前者が後者を凌駕する。脚柱部は、柱状部と裾部との屈曲が鋭いものと、なだらかに移行するものとが混在する。器面調整は、大形高杯に比べ粗略化したもので、杯部の場合、その内外面に放射状のハケを施し、口縁部を中心にこれにヨコナデを加えるものが多い。一方、脚柱部は、外面にタテハケ→タテナデ→面取り様の縦方向のミガキ(柱状部のみ)の順で調整するのを基本とする。内面は、柱状部ではしぼり目を回転ケズリで平滑にし、さらにヨコナデを加えるものもある。裾部は、ハケを「クモの巣状」(円弧に沿ってハケメを静止させながら継続的に施すもの)あるいは斜放射状に施し、さらにこれにナデを加えるものもある。

小型丸底壺(第65図) いずれも最大径をやや上位にもつ扁球形の体部に、器高の $\frac{1}{2}$ 程度の高さの口縁部を具備する形態を示す。調整は、体部調整の後口縁内外をヨコナデして仕上げる。体部の調整は、外面にハケメ、内面にケズリを多用する。外面のハケ調整は、全体に縦または斜位に施した後、最大腹径以下底部にかけて不整方向の丁寧なハケメを用いる(2・4)。さらに、体部中位に幅の狭い横位のハケを加えるものもある。内面のケズリは、口縁接合部のいくらか下位より横位に施すが、底部付近は不整方向に変わるものが多い。さらにナデを加える個体があるが(3・5)、上半部に限られ、全面におよぶものはない。1は、体部の最大径付近に整形段階において整美な円孔を1個穿っている。



第65図 古式土師器実測図 (2)

器台(第65図) いずれも部分的に欠損しており全体形を知り得る個体はないが、少なくとも形態から2種に分類できる。1つは、小皿状の受け部に円錐形の脚部がとりつくもので、小形丸底壺とセットになる小形精製土器(7~9)である。他の1つは、受け部が大きく直線状に外傾し、ほぼ対称形となる円錐状の脚部との接合部が大きく開口するいわゆる「鼓形」器台である(10)。器面調整は、両者ともに脚部内面に横位のケズリが認められ(先行するしぼり目を残すものもある)、さらに、その下半に放射状のハケを加えるものがある(8・9)。外面は、ナデにより仕上げるが、9はこれに横位のミガキを加える。また、10の受け部内面には横位ケズリ→ナデ→放射状ミガキと多回起的な調整がみられる。

鉢(第65図6) 丸底の浅鉢状を呈し、短い口縁が僅かに外反し端部は丸くおさめる。内外面ともハケメ調整を施したのち、体部中位に指オサエ、口縁部にヨコナデを加える。胎土は粗質である。

二重口縁壺(第64図7) 大きく外反する頸部に、短く外反する口縁部が付加されるもので、その接合部外面に形骸化した低平な突帯状隆起が残る。

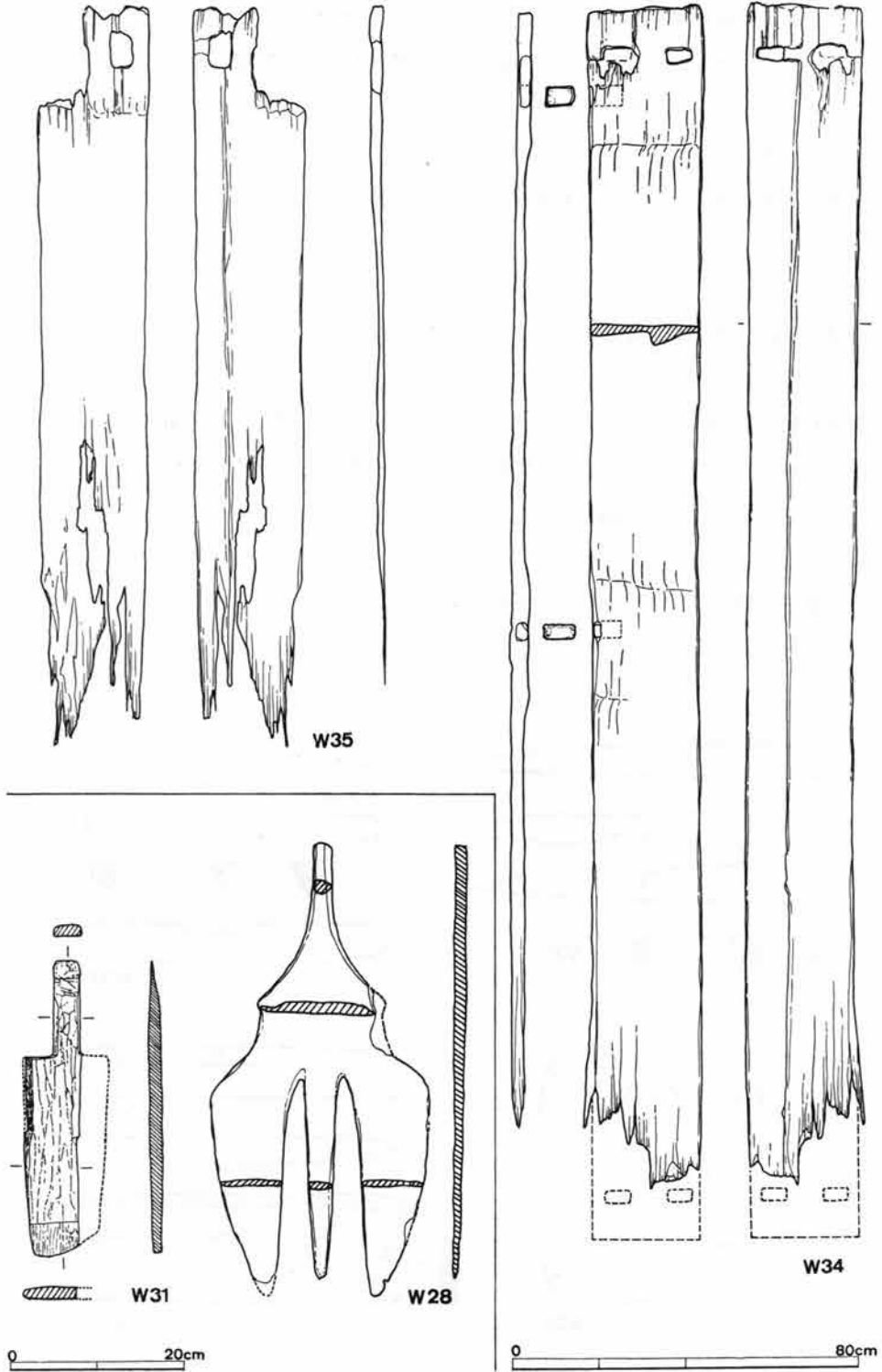
直口壺(第64図10・11) 口縁部の破片のみだが、直線的に長く伸びた口縁端部が内外に肥厚し、その端面を外傾(10)または水平(11)に造形している。

第64図の13は、扁球形の体部を有し、その上半の一方に小円孔が穿孔されている。口縁を欠失し器種を特定できないが、内外の調整手法は、布留形甕のそれに共通する。また、外面に2次的な煤の付着がみられる。

(2) 木製品(第66・67図)

木製品は、昨年度に引き続き、74bt調査区において良好な保存状態で出土した。これらは、(層位的には判断し難いが)個体そのものの形式および共伴資料等からみて、布留式併行期(建築部材W34・35、ナスビ形農具先W28、有頭棒状木製品W27・32)と奈良時代(容器形木製品の部材W29・35)に峻別できる。

大形板状木製品 W34・W35とも平の一端に柄穴を2孔穿孔した板状木製品である。両者とも、一端を欠損しているため長さは特定できないが(W34の復原長282cm)、幅(26cm)が一致しており、同一規格のもとに製作されたことが窺える。遺存度の高いW34で細部を見ると、平の一面に長軸に対して両端と中央部を約34cmほど残して、この間を内刮りしている(この部分の板厚は約1cm減じて3cmを測る)。この刮り残された部分の一側面に、各1孔柄孔が穿孔される。一方、反対側の面には、板の長軸方向に板厚の約 $\frac{1}{2}$ の範囲を大きく刮り残して「かえり」状に造形している。この段状部の横断面は、板の中軸に向かって徐々に厚みを増し、最後に垂直に切り込んで終わる。この切り込み面には、小角材の圧痕が数か所に認められる。類例がなく用途を特定し難いが、側面の太柄^{たば}は、板材を同一方向



第66図 木製品実測図(1)

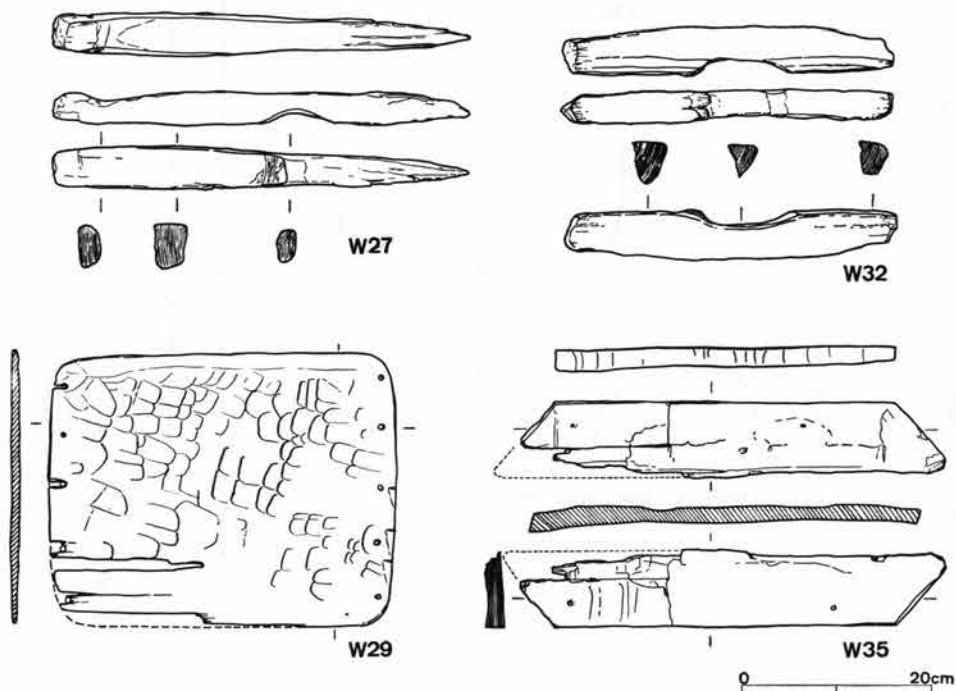
に接続する際の板材同士のたわみ防止を意図したもの(雇太柄)であり、また、内削りを施した面の風蝕が激しいことなどから判断して、床張り構造の小家屋の最下段の壁材の可能性はある。この場合、一面に削り出された「かえり」状部分は根太を介して床板を支える用途として機能する^(注12)。

ナスビ形農具先 W28は、三本歯の着柄形式の耕起具の先である。先端に向かって幅を減じる刃部の中寄りに2本の抉り込みを入れ、刃先を三叉に分割している。全長51.5cm、刃部最大幅25.3cm、肩部幅15.0cm、着柄部の先端幅2.0cmを測る。

棒状木製品 W27は一端に有頭部を、W32は中央部に抉り仕口をそれぞれ設ける。用途は不明である。

容器部材 W29は、各隅部を丸く整形した長方形を呈する板材(長辺36.4cm・短辺28.6cm・最大厚さ1.0cm)。形態は、長方形曲物(折敷)の底板に近似する。側板との結合孔は、短辺側に5孔等間隔(約5.0cm)で穿孔されているが、それぞれは単孔である。板面は平坦で、側板を受ける仕口はない。

台座状木製品 W35は、両側端を斜めに切り込んで台座状とした厚板材(厚さ2.0cm)。両端に偏在して各1孔の釘穴が残り、ここに別材の木口による圧痕が認められる。他の部材と組み合わせる台座の部材と考えられる。



第67図 木製品実測図(2)

杓子形木器 W31は、身の $\frac{1}{2}$ を欠損するが、全長34.0cmを測る。身は先縁を斜めに造り、先端から4.0cmの位置に刃先の装着痕が認められる。関部は垂直にカットされ、柄部は先端に向かって徐々に厚さを減じ、へら状に終わる。

4. 小 結

瓦谷遺跡では今回を含めて3年目の調査となり過去の成果も含めて遺跡の実態・内容がおおよそ明確となってきた。

すなわち、瓦谷遺跡は、その遺構・遺物の示す性格から、瓦谷古墳の立地する主として扇状地の北縁に接する地区と、上人ヶ平遺跡の広がる南側の台地に隣接あるいは貫入する地区、そしてそれらの中間に位置する扇状地の中央部に区分することができる。そして、それぞれの地区の遺跡の内容は、それに隣接する台地上のそれを反映するという共通点をみいだすことができる。

今回の調査は、遺跡の南西部を占める上人ヶ平の台地に隣接する地区に重点を置いてその実態究明にあたった。このうち、74b tは、昨年特に遺物の出土が顕著であった地点の未掘部分の調査であり、既知の成果を補うことができた。すなわち、今次調査でも多量の遺物が谷地形内の埋積土中に良好な保存状態で包含されている状況が追認できた。出土遺物の大半は、古墳時代前期(布留式併行期)に帰属するもので、中でも完形のナスビ形農具先や建築部材の可能性の高い大形板状木製品などは、府内では類例が乏しく、古墳時代の木製品を研究する上で、貴重な資料となる。

一方、40・58・59 b tの所在する台地の東縁地区は、これが初めての調査であり、その結果、古墳時代の遺物を多量に包含する自然河道を検出したほか、3基の埴輪窯を確認するなどの予想以上の成果を得ることができた。河道出土の遺物は、布留式併行期の土器類を主体としており、窯に隣接する調査区(58 b t—C・40 b t—C)では上位に多量の埴輪類が混入する。土師器資料は、概ね布留式期の中～新段階に属するもので、体部に円孔を穿つ小形丸底壺の存在などは、須恵器出現後(甕の影響のもとに製作されたものか)の様相を示す資料といえる。

(伊賀高弘)

(4) 幣羅坂古墳

1. 調査の経過

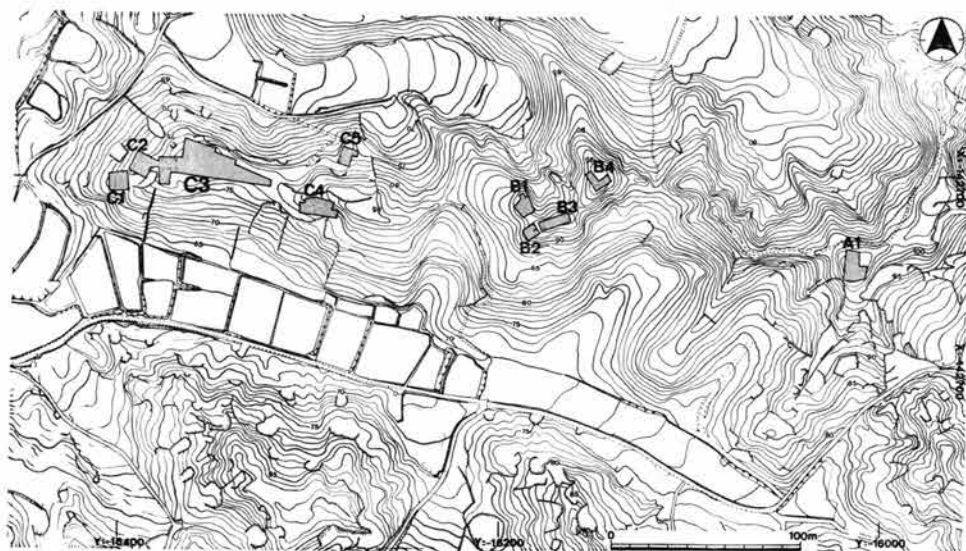
幣羅坂古墳は、上人ヶ平遺跡とは瓦谷遺跡の谷を挟んだ東西にのびる丘陵の頂部にある古墳である。

幣羅坂古墳については、従来、2基の古墳として遺跡地図に記載されていたが、調査着手前の樹木の伐採・分布調査により、尾根筋にそって古墳状の隆起を11地点にわたって確認した。そのため各古墳状隆起地点に3m×2mの試掘坑を設定し、試掘調査を行った。

試掘調査の結果、各古墳状隆起の大半は自然地形であったが、幣羅坂2号墳と記載されている丘陵の最先端で埴輪片および埋葬施設と思われる土質の変化を確認した。

この試掘調査により、幣羅坂2号墳(C₃地点)のみが古墳であることが明らかとなったため、この地点を中心に調査地を東西約60m、南北20mに拡張し、古墳の規模およびその性格の追求につとめた。その結果、幣羅坂古墳は木棺直葬を埋葬施設とし、墳形は円あるいは楕円形の古墳であることが明らかとなった。

なお、この地点は従来幣羅坂2号墳として記載されていたが、幣羅坂1号墳が古墳とは認めがたいため、本書では幣羅坂2号墳を幣羅坂古墳に改め、その記述を行う。



第68図 調査区配置図

2. 墳 形

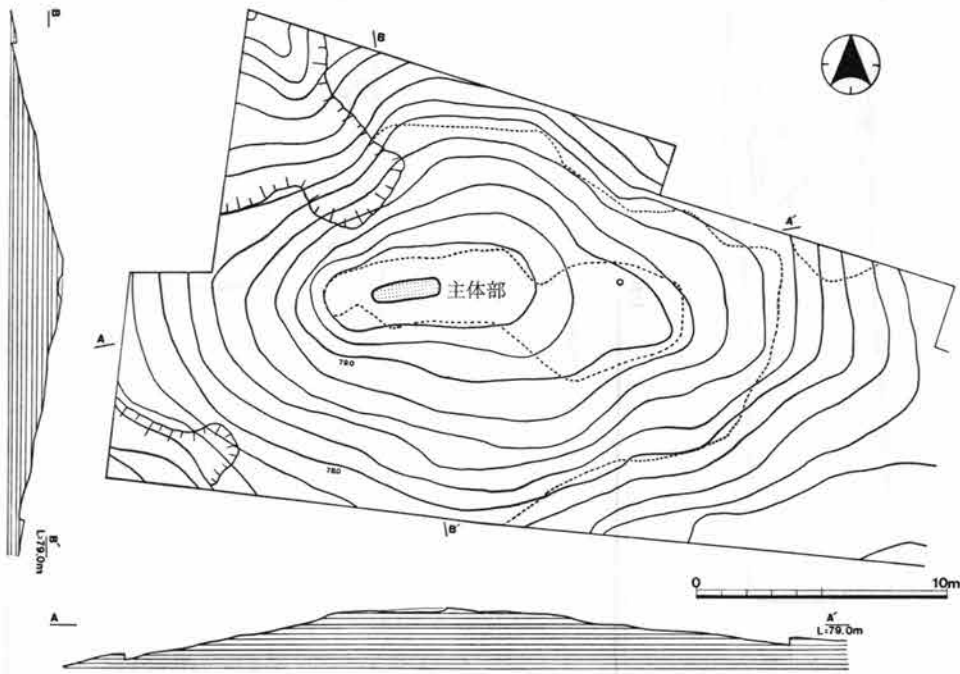
幣羅坂古墳は、細尾根に立地し、また調査前は竹林におおわれていた。調査は地形測量ののち、表土の除去を行ったところ、表土下約10～30cmで地山土となり、墳丘の大半は竹林の土取りにより削平されていることが明らかとなった。

丘陵斜面では表土直下の腐植土中から埴輪の細片が含まれていたため、埴輪列あるいは埴輪列の抜き取り痕を期待したが、埴輪は埋葬施設から東に約7m地点で一か所円筒埴輪が据えられた状態で検出されたほかは認められず、埴輪列の大半は後世の土取りなどにより削り取られていることが明らかとなった。このため幣羅坂古墳の墳丘の大半は削り取られ、埴輪列も一地点のみ確認しただけであり、明らかとはいえないが、地山の地形図をみるかぎり、円形あるいは楕円形と思われる。墳丘規模は、埋葬施設から据えられた埴輪を半径とすると径約18mとなる。

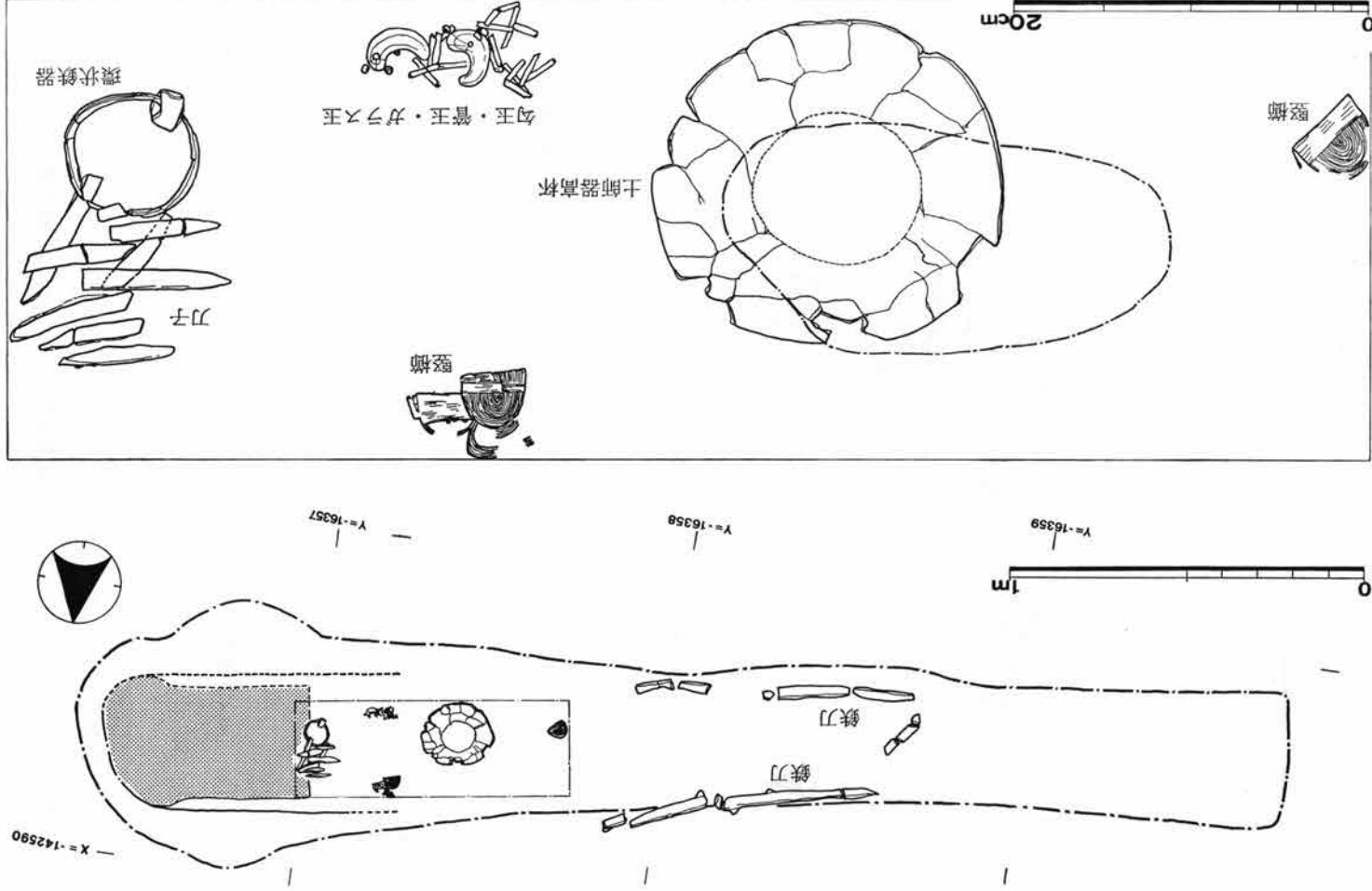
3. 埋葬施設

幣羅坂古墳では、最高所の表土および腐植土を除去したところ、鉄剣が出土した。このため鉄剣の周辺を精査したところ、埋葬施設と思われる土質の変化を確認した。

幣羅坂古墳の埋葬施設は、木棺直葬であり、墓壙の長さ約3.5m、幅約0.5mを測るが、



第69図 墳丘実測図

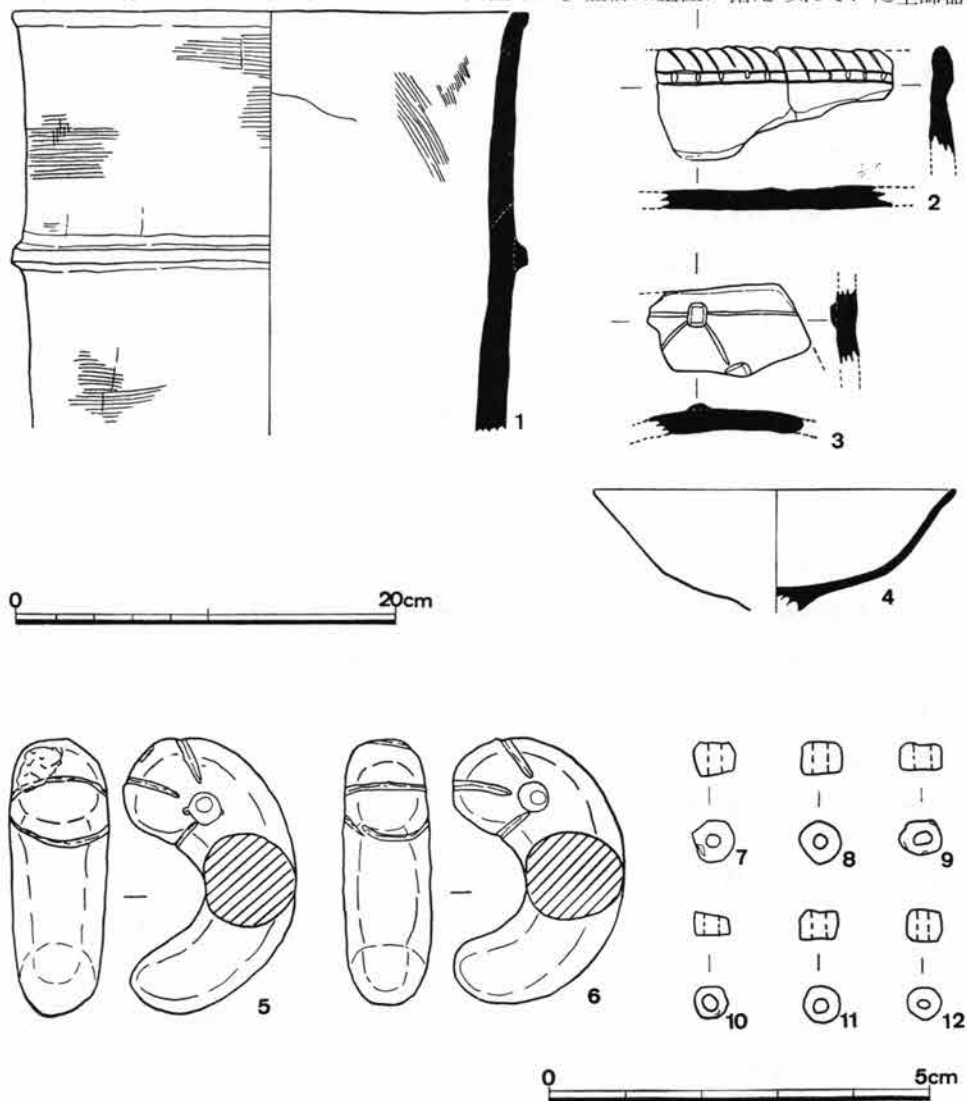


第70図 主体部実測図

墓壇検出面から墓壇底まで10cmと浅く、墓壇の大半は後世の開削によって削平されていることが明らかとなった。

4. 遺物の出土状態

埋葬施設周辺の腐植土を約10cm除去したところ、鉄剣2振が出土した。当初鉄剣は遊離した状態で出土したと考えたが、周辺の精査を進めるにつれ鉄剣は埋葬時の状態をとどめていることが明らかとなった。鉄剣は棺の中央長軸に平行する形で墓壇(あるいは棺)に接して納められていた。この鉄剣の東約1mには刀子・環状鉄器が、鉄器の西約10cmには玉類(勾玉、管玉、ガラス小玉)がまとまって出土した。竖櫛は正位に据えられていた土師器



第71図 出土遺物実測図

高杯を中心に東・西に分かれて出土している。

5. 出土遺物

幣羅坂古墳からは鉄剣2、鉄刀子6、環状鉄器1、堅櫛4、勾玉2、管玉16個以上、ガラス小玉6個以上、土師器高杯などが棺内から出土した。また墳丘からは埴輪が出土した。

鉄剣は2振とも墓墳底から遊離した状態でバラバラに出土しており、復原することはできないが全長80cm前後と思われる。

鉄刀子は長さ5.5～8.3cmと、やや大小のバラツキがある。刃部は、関に近づくほど幅が広くなり、関の部分で幅約0.9～1.2cmとなる。厚さは背で約0.2cmとなる。把は遺存していないが、鉄に付着している部分から木質ではなく骨角(鹿角か)と思われる。

環状鉄器は長方形の鉄板を直径7cmの環状に鍛造したもので、環状部には幅1cmの鉄板をまきつけている。この鉄製品の用途は不明。

玉類は勾玉・管玉・ガラス小玉がある。このうち、管玉の大半は、碧玉製で風化が著しく、現地から取り上げることは困難であった。

勾玉(5・6)は「C」字形で頭部に丁字頭が作られている。穿孔法は片面穿孔である。ガラス小玉(7～12)は、径0.43～0.59cm、長さ0.31～0.59cmである。色調は、コバルトブルーである。

堅櫛は、いずれも頭部のみが遺存している。頭部には黒漆が塗られている。頭部幅3.9cmを測る。

土師器高杯(4)は杯部のみが遺存していた。椀状の杯部で口径19cmを測る。なお、杯部上面には朱の痕跡があった。

埴輪は円筒埴輪のほか、甲冑を模した形象埴輪がある。円筒埴輪は完形に復原しうるものがないが外面の調整をみると、2次調整のヨコハケを施し黒斑があることから川西編年のⅢ期に相当する。

甲冑形埴輪(2)は、ひたたれあるいは背面の先端で皮を表現したものである。3は三角板革綴短甲を模した形象埴輪である。

6. 小 結

幣羅坂古墳は15地点にわたり、試掘調査をおこなった結果、尾根先端に位置する一基のみが古墳となり、他は自然地形であることが明らかとなった。幣羅坂古墳は、組み合わせ式木棺を埋葬施設とする円あるいは楕円形墳であり、埴輪および埋葬施設内の出土遺物から、川西編年のⅢ期の時期に相当し、台地上に広がる上人ヶ平古墳群に先行する古墳と考えられる。

(石井清司)

(5) 瀬後谷遺跡

1. 調査の経過

瀬後谷遺跡は、上人ヶ平遺跡とは尾根ひとつ南側にある遺跡である。瀬後谷遺跡については、昭和62年度の試掘調査で現水田面に11か所の試掘坑を設定し、遺跡の確認調査を行った。この試掘調査の結果、22b tのトレンチで灰原と思われる包含層を確認し、同層からは、奈良時代の土師器・須恵器・瓦などが多量に出土し、特に瓦類では興福寺系の軒平瓦(平城宮6671 i 型式)・面戸瓦なども出土している。

昭和63年度は、昭和62年度の試掘調査の結果を踏まえ、丘陵部に窯跡などの遺構が予想されるため、丘陵部の試掘調査を予定した。

丘陵部における瀬後谷遺跡の試掘対象面積は、 $8,800\text{m}^2$ を測る広い範囲である。

2. 調査方法

今年度の試掘対象面積が $8,800\text{m}^2$ と広範囲にわたり、また昭和62年度の試掘結果により窯跡等が予想されるため、まず対象地全体に対し、奈良国立文化財研究所西村康氏の御厚意により磁気探査を行った。



第72図 磁気探査地区割り図

磁気探査はまず、丘陵部に30m区画を基準にして7ブロックごとに反応を調べた。その結果丘陵頂部付近では顕著な反応は認められなかったが、22b t トレンチの付近の6・7区ではわずかに反応があった。ただ窯跡にみられるような顕著な反応はでなかった。

3. 小 結

瀬後谷遺跡は、昭和62年度の水田部の試掘調査によって、丘陵部に窯跡などの存在が予想される遺跡であり、昭和63年度の磁気探査結果により、6・7区でわずかに反応がみられ、遺跡の範囲がある程度しぼりこめることが明らかになった。このため、次年度以降は、ある程度遺跡地の範囲を限定し、掘削作業を行う予定である。(石井清司)

ま と め

昭和63年度における木津地区所在遺跡の調査は、1遺跡の試掘調査、2遺跡の発掘調査と1遺跡の磁気探査を行った。

瓦谷遺跡の試掘調査は、昭和61年度から開始し、本年度で3年目をむかえた。本年度は昨年の唐櫃を転用した井戸を検出したトレンチ(74b t)の拡張、上人ヶ平遺跡と幣羅坂古墳の間の谷部(40・58・59b t)の試掘調査を行った。この試掘調査では古墳時代前期と奈良時代の土器・木器が旧流路内から出土しており、台地上にある上人ヶ平遺跡との関連が指摘できる。なおこの試掘調査では59b tで埴輪窯の灰原を確認したことは、上人ヶ平遺跡を考える上でも重要な成果であると考えられる。

幣羅坂地区の試掘調査では、11地点の試掘調査の結果、上人ヶ平遺跡を見下ろす丘陵縁辺部で1基の古墳を検出した。この幣羅坂古墳は発掘調査の結果、円あるいは楕円形古墳であり、墳丘の大半は後世削平されていたが、わずかに埋葬施設が残り、鉄製品(鉄剣・刀子)・玉類・堅櫛などが出土した。また墳丘の流れ落ちた埋土から黒斑をもち、2次調整(ヨコハケ)を施した川西編年のⅢ期に相当する円筒埴輪、三角板革綴短甲を模した形象埴輪片が出土しており、5世紀前半の古墳と考えられる。この幣羅坂古墳の確認により、市坂地区では瓦谷古墳→幣羅坂古墳→上人ヶ平古墳へと古墳の築造が連綿と続くことが明らかになった。

上人ヶ平遺跡の調査は、昭和59年度から試掘調査が続けられてきたが、本年度は3つに派生する尾根の基部を中心に、対象面積4,800㎡に対して発掘調査を行った。

上人ヶ平5号墳を中心とした古墳群では、新たに4基の低墳丘墓(方形墳)を確認した。

各古墳の周溝からは多くの埴輪が出土しており、特に14号墳の蓋形埴輪、16号墳の蓋・家形埴輪など、古墳の規模に対して優品の形象埴輪が立て並べられていたことは注目され

る。

奈良時代には、調査地の北西部で掘立柱建物（S B8839、2間×9間の身舎、南北両面庇）とその建物の東側で方形の井戸を検出した。この掘立柱建物は、次年度以降も調査を予定しているため、規模およびその性格などについてはその調査結果を待ちたい。SE 8837は、多量の瓦とともに、瓦の堆積土の下から土師器甕、須恵器杯・皿・盤などがまわって出土しており、奈良時代の良好な一括資料である。

上人ヶ平埴輪窯は、前述のように瓦谷遺跡の試掘調査においてその灰原を確認し、丘陵斜面に窯を構築したことが発掘調査によって明らかになった。

埴輪窯は3基を現在までに確認し、次年度以降も丘陵斜面にトレンチを設定する予定であるため、次年度の調査成果をまわって、その窯の基数等は明らかにしたい。

発掘調査した1号埴輪窯は、地下式無段無階の竈窯で、3面の床面を確認し、各床面からは、円筒埴輪のほか家・盾等の形象埴輪が出土した。各床面の円筒埴輪は、外面調整が1次調整(タテハケ)のみのもものと、2次調整(ヨコハケ)を加えるものがあり、川西編年というⅣ期とⅤ期の過渡的な埴輪窯である。そしてこの埴輪の供給先として上人ヶ平14・15号埴などがあり、「埴輪の生産地と供給先」が近接してある遺跡として注目される。今後埴輪の供給先が、上人ヶ平古埴に限定して供給されたものか、あるいは南山城・北大和の広範囲にわたって供給されたものかどうかは検討課題である。

瀬後谷遺跡は、磁気探査のみをおこない、掘削作業は行わなかった。木津地区所在遺跡では、市坂瓦窯・梅谷瓦窯等が近接してあり、今後とも磁気探査を活用する遺跡が数多くあり、その第一回目の試みとし、瀬後谷遺跡でおこなった。

瀬後谷遺跡では、窯を想定できるような顕著な反応はみられなかったが、わずかながらも反応をしめす地点があり、その地点を中心に次年度以降、掘削作業を行う予定である。

木津地区所在遺跡の調査も、本年度で5年目を終え、市坂地区を中心に本格的に調査が進められてきた。本年度の調査では、上人ヶ平遺跡での新たな発見である埴輪窯の検出など多大な成果をおさめた。今後も上人ヶ平遺跡については面的な調査を予定しており、その調査結果をまわって、その詳細は検討していきたい。

(石井清司)

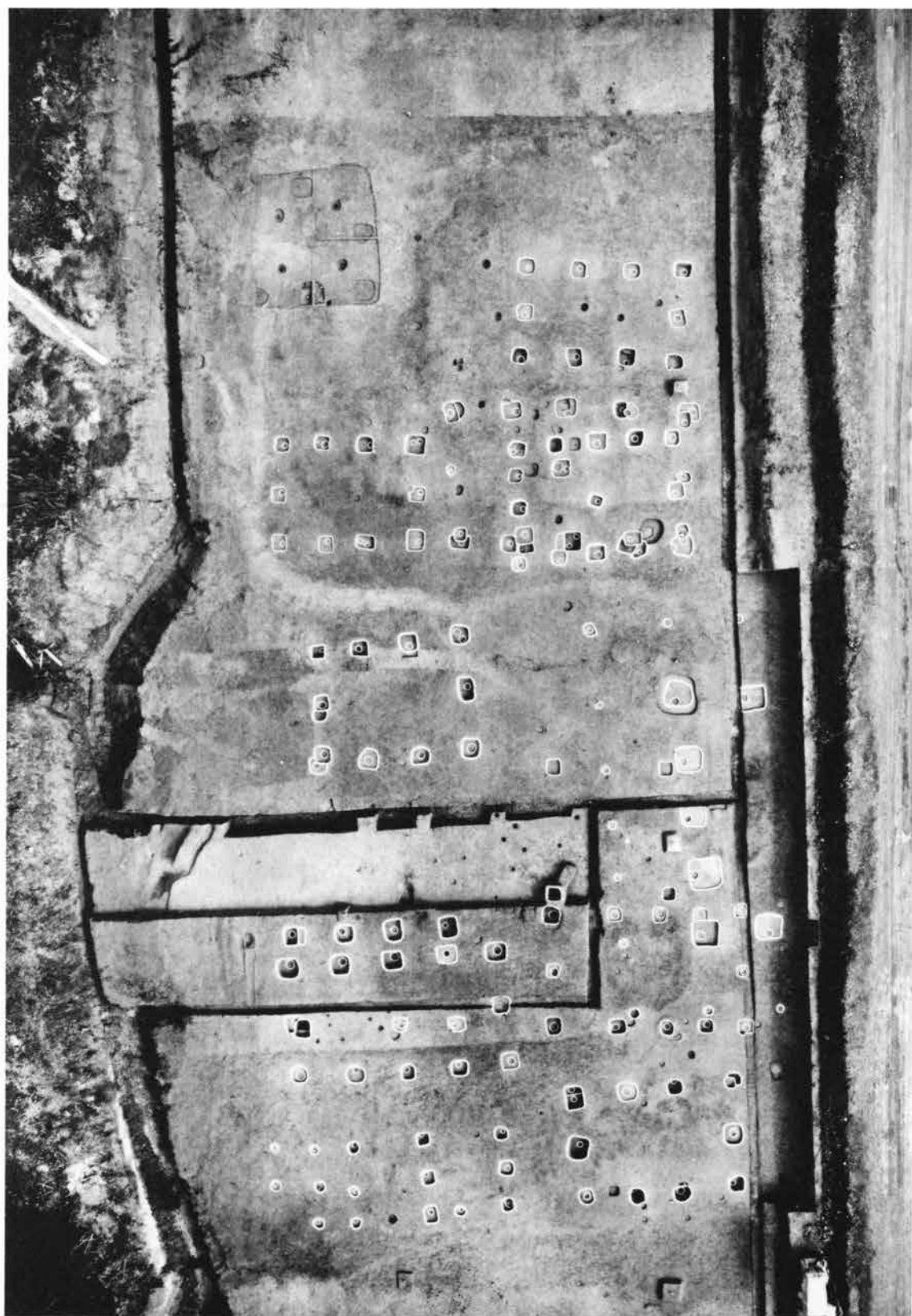
注1 「木津地区所在遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

「木津地区所在遺跡昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第26冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第32冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

- 注2 前掲62年度概報にて、上人ヶ平遺跡検出の遺構を次のように時代区分している。
Ⅰ期=弥生時代後半、Ⅱ期=古墳時代・庄内式併行、Ⅲ期=古墳時代・布留式併行、Ⅳ期=古墳時代・5世紀代、Ⅴ期=古墳時代・6世紀代、Ⅵ期=奈良時代。
- 注3 「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第32冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注4 調査に参加していただいた方々は以下の通りである(敬称略)。
補助員 泉 晶子・板野 史・井上直樹・井上陽子・大高小百合・大谷健二・奥田維子・鎌田敏史・川本由香・木村晶子・小嶋 亮・斎藤和久・正寿 敦・杉原美智久・高田優子・高橋和湖・筒井崇史・峠 美穂・豊福 孝・中井栄策・藤木忠嗣・古木寿子・宮本純二・森本元子・八瀬正雄・吉田悦子・米田佳代・米田希代・若松美智子・渡辺康子
整理員 木下町子・木村絹子・坂田千晶・篠原恵子・島原みどり・庄司優理・新谷二三代・谷口ゆかり・玉置真弓・辻 道子・中嶋昌代・中西 修・早川和子・林 恵子・平岡佳代子・三谷育代・宮本久美子・吉永清美
- 注5 赤塚次郎氏は器壁の一部に施すごく小さな透孔について「副次的穿孔」の語句を用いられる。
赤塚次郎「円筒埴輪製作覚書」(『古代学研究』90) 1979
- 注6 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号) 1976
- 注7 この点に関しては、例えば青山学院大学森台遺跡発掘調査団『千葉県山武町森台古墳群の調査』(1981)において指摘している。
- 注8 高橋克壽「器財埴輪の編年と古墳祭祀」(『史林』第71巻第2号) 1988
- 注9 伊賀高弘「上人ヶ平古墳群の蓋形埴輪—14号墳出土の蓋形埴輪を中心に—」(『京都府埋蔵文化財情報』第32号) 1989
- 注10 田中秀和「畿内における蓋形埴輪の検討」(『ヒストリア』第118号) 1988
- 注11 田辺昭三「初期須恵器について」(『考古学論考』) 1980
- 注12 宮本長二郎氏の御教示を賜った。

圖 版



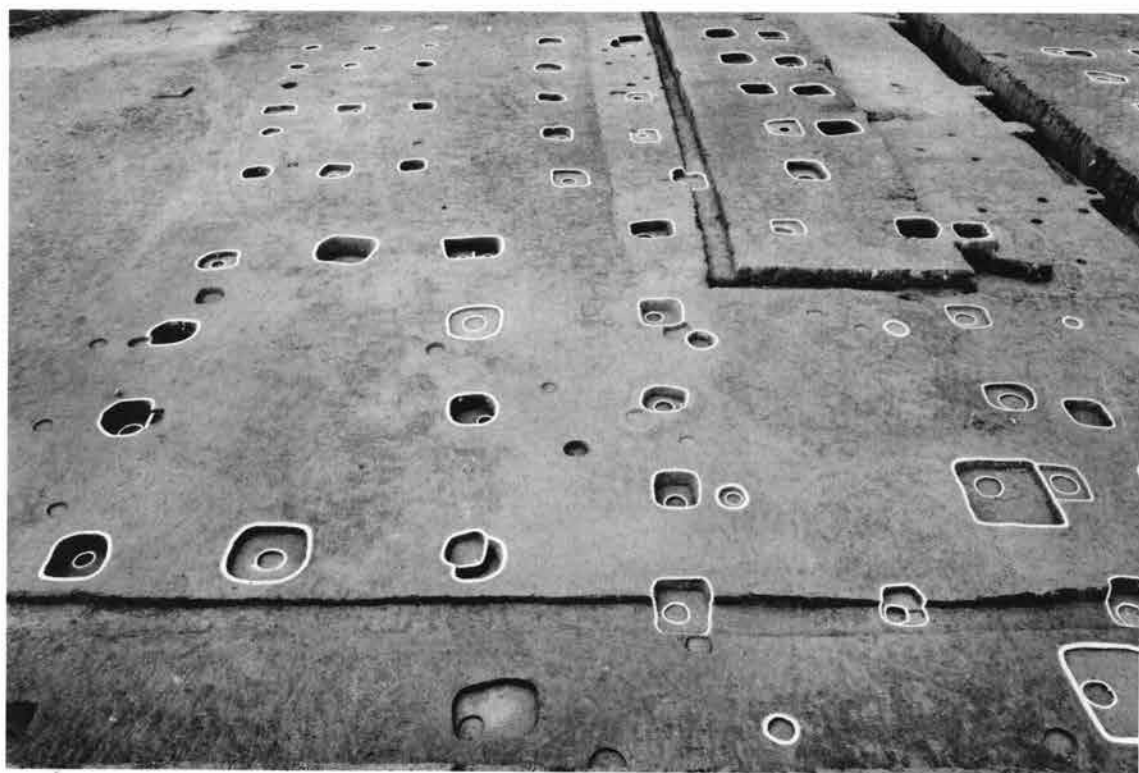
掘立柱建物群（上層遺構，左が北）



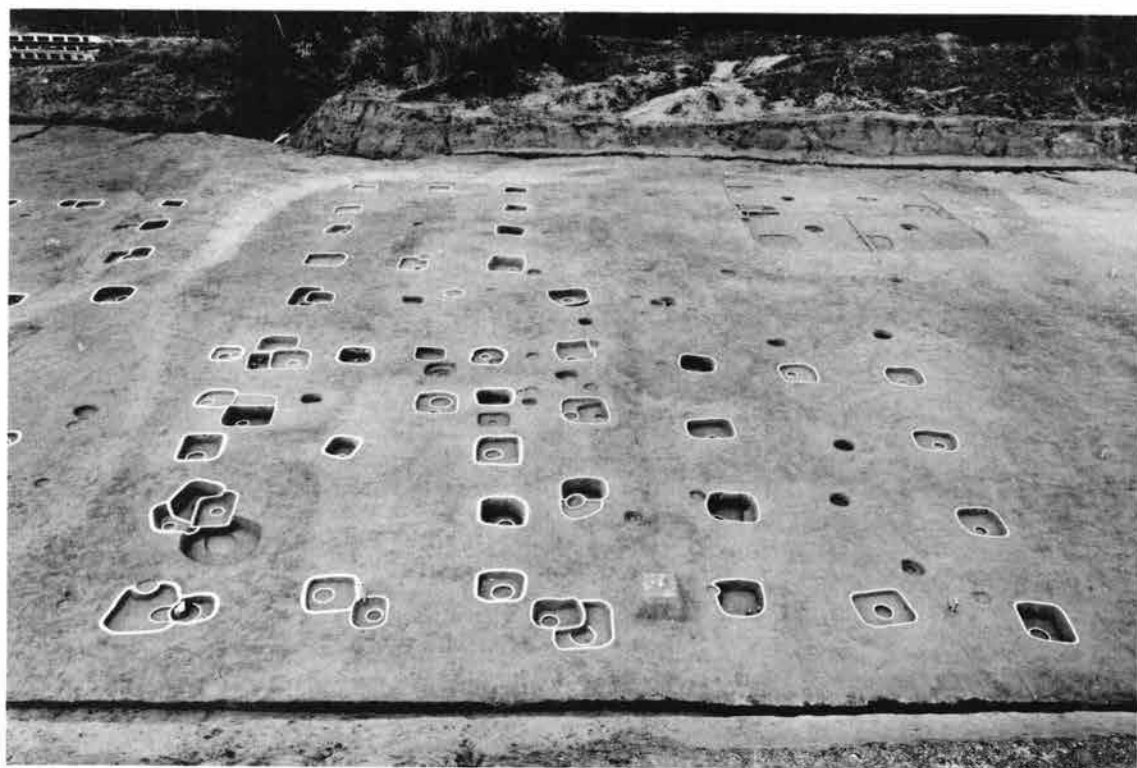
(1)掘立柱建物群 (東から)



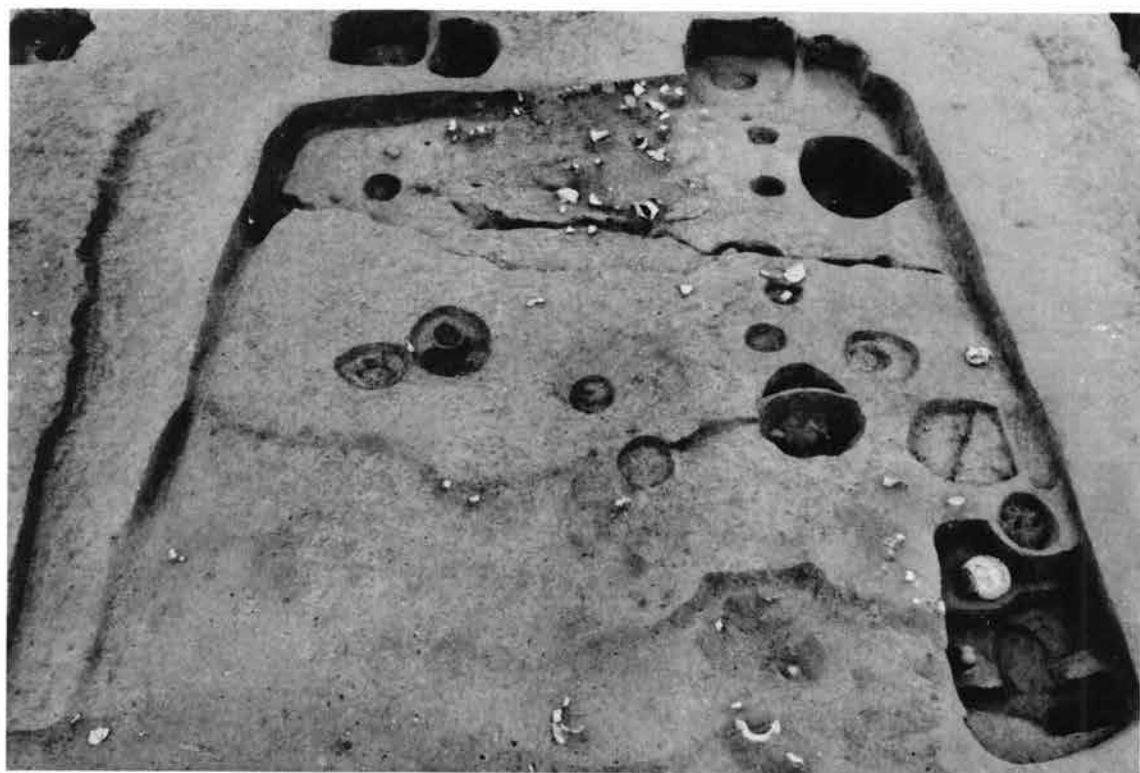
(2)建物13 (北から)



(1)A・B・C期建物群 (南から)



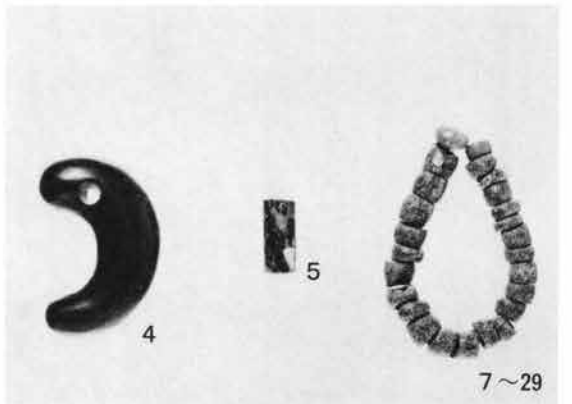
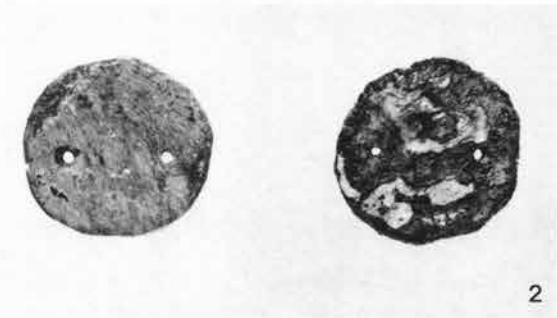
(2)D・E期建物群 (南から)



(1) 竪穴住居3 (北から)



(2) 竪穴住居5 (東から)





(1)調査地遠景（北から）



(2)10・11区全景（上方が西：空中写真）



(1)21区 S D21001完掘状況（西から）



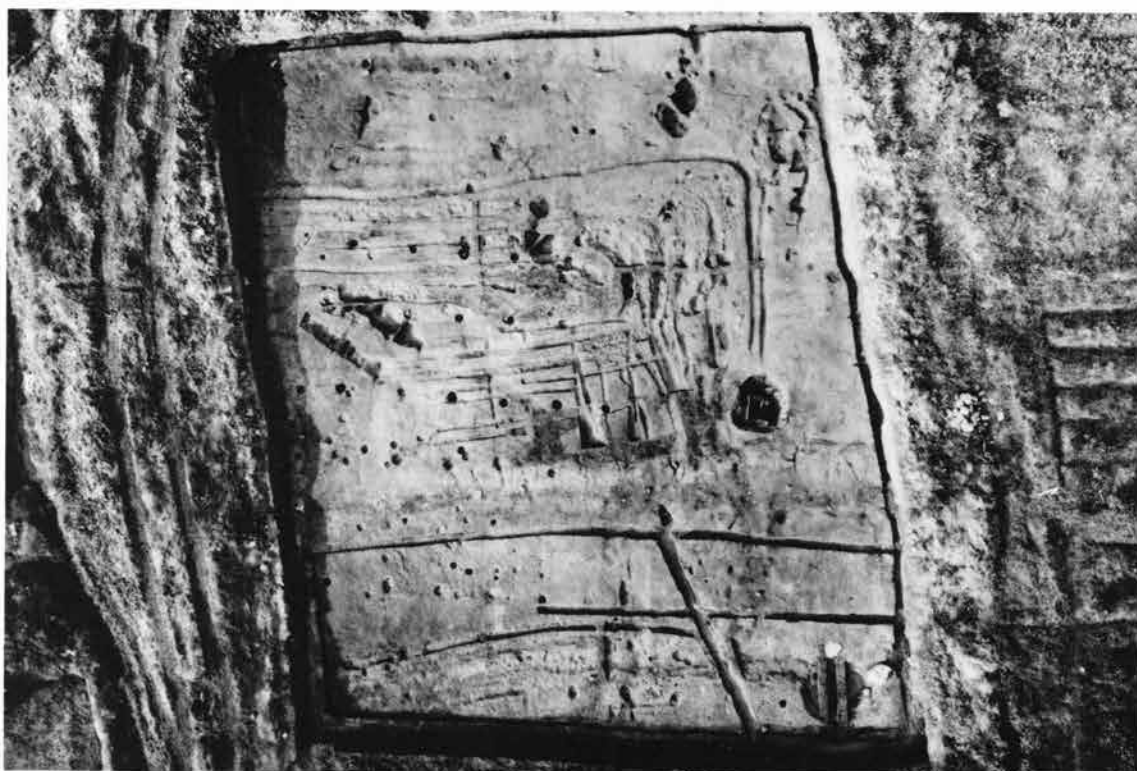
(2)30区 全景（上方が西：空中写真）



(1)34区 全景（上方が南：空中写真）



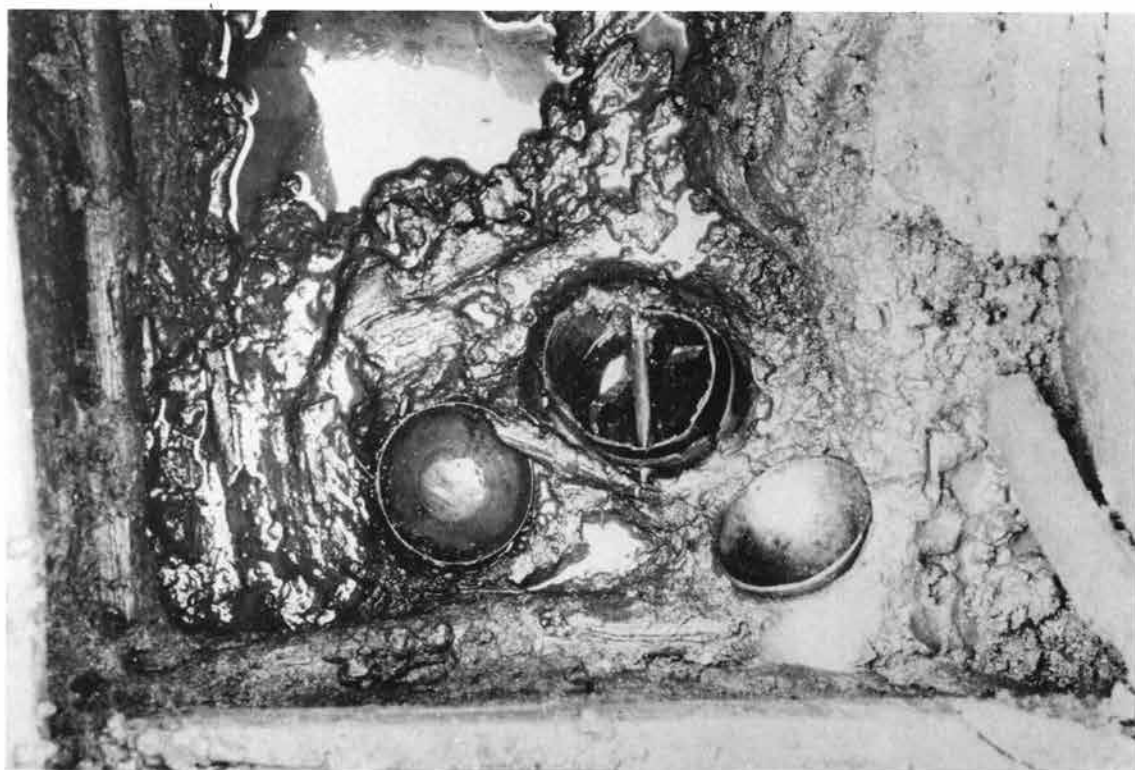
(2)34区 柱穴（柱根・礎板石）



(1)35区 全景（上方が北：空中写真）



(2)35区 S B 35003検出状況（北から）



(1)35区 S E 35040遺物出土状況



(2)33区 流路完掘状況（西から）



1



2



3



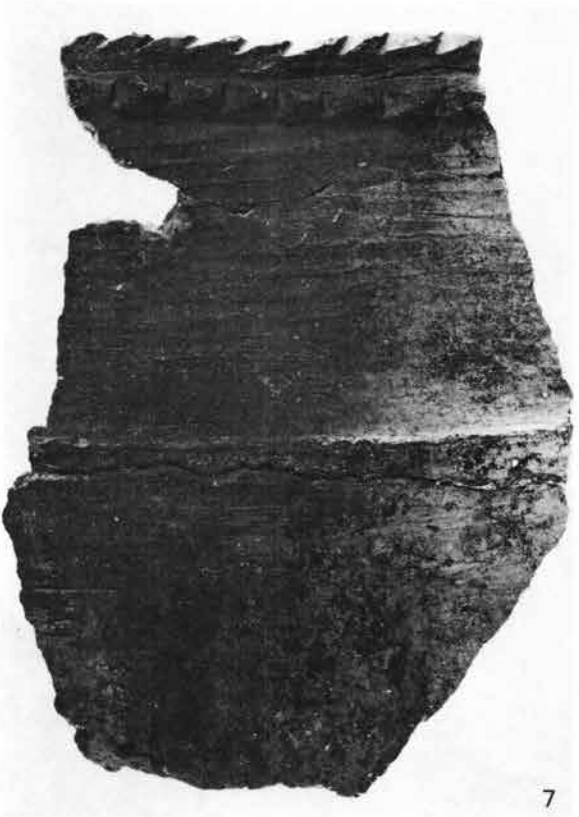
4



5



6



7



8



9



(1) 1ブロック第15トレンチ全景（北から）



(2) 2ブロック第3トレンチ全景（北から）



(1) 3ブロック第4トレンチ全景（北から）



(2) 4ブロック第19-1トレンチ土層液状化断面（東から）



(1)4ブロック第6-1 トレンチ溝S D200001 (西から)



(2)4ブロック第6-1 トレンチ溝S D200001断面 (東から)



(1)5ブロック第7-1・2トレンチ全景(北から)



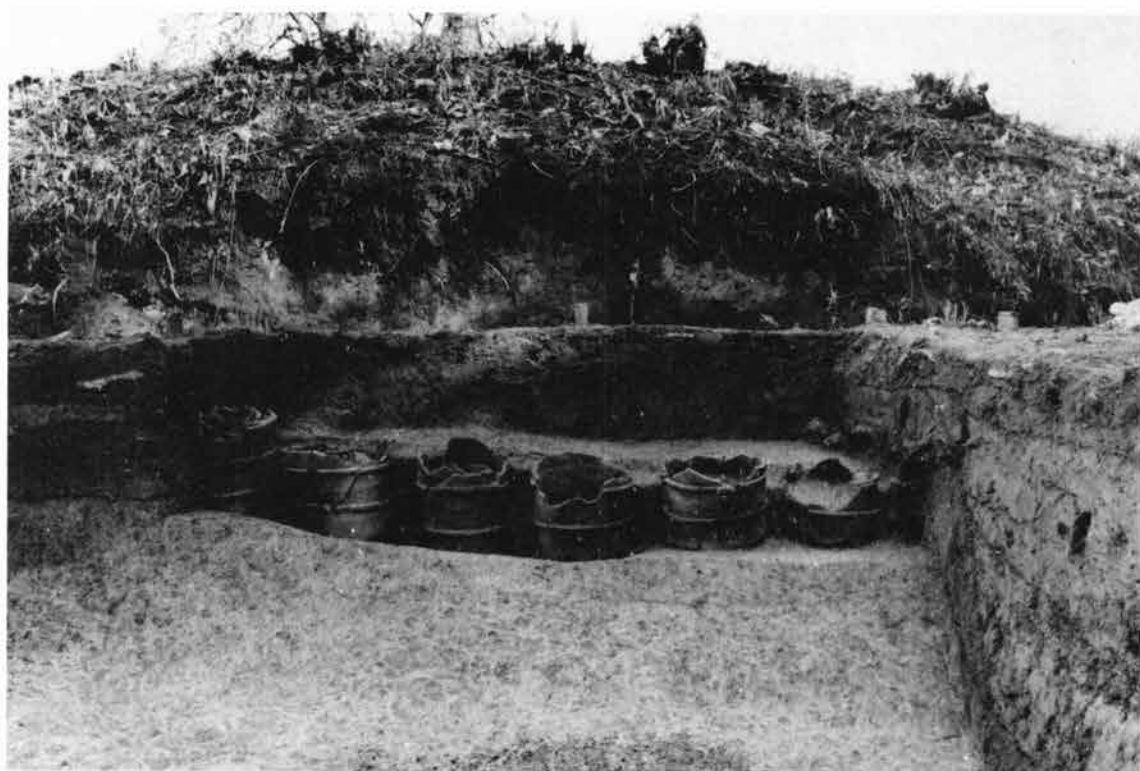
(2)5ブロック第7-2トレンチ全景(北から)



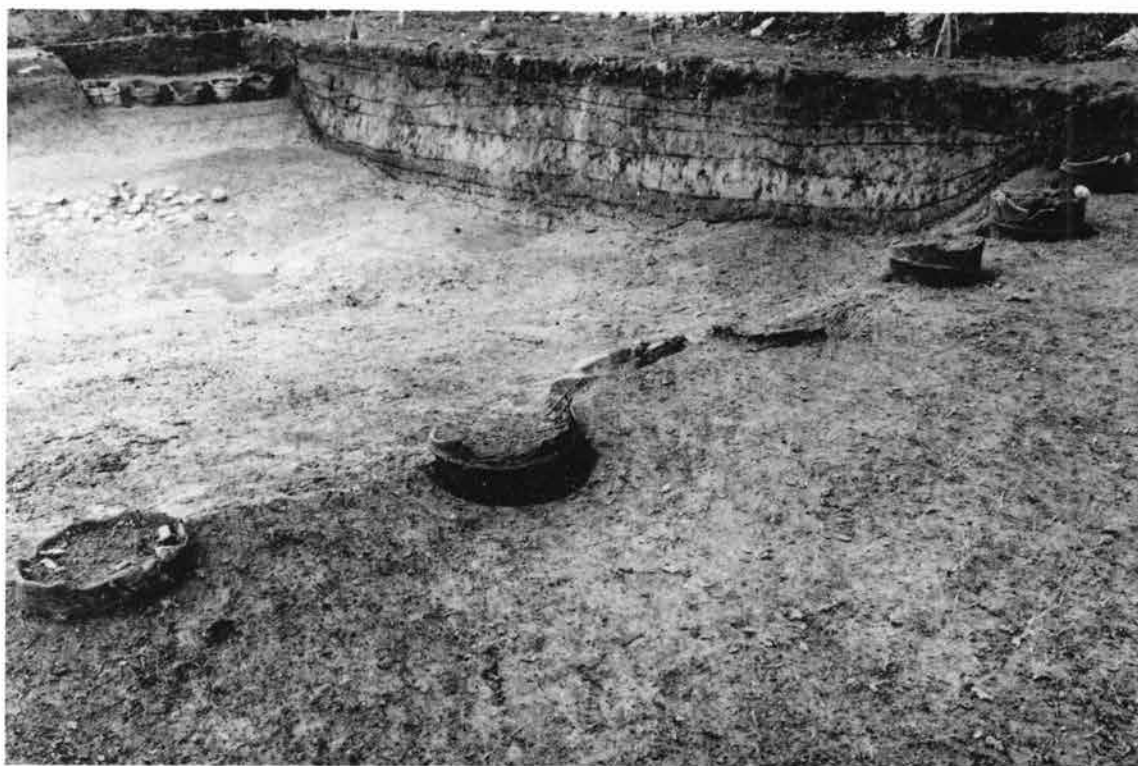
(1)調査地全景 (北西から)



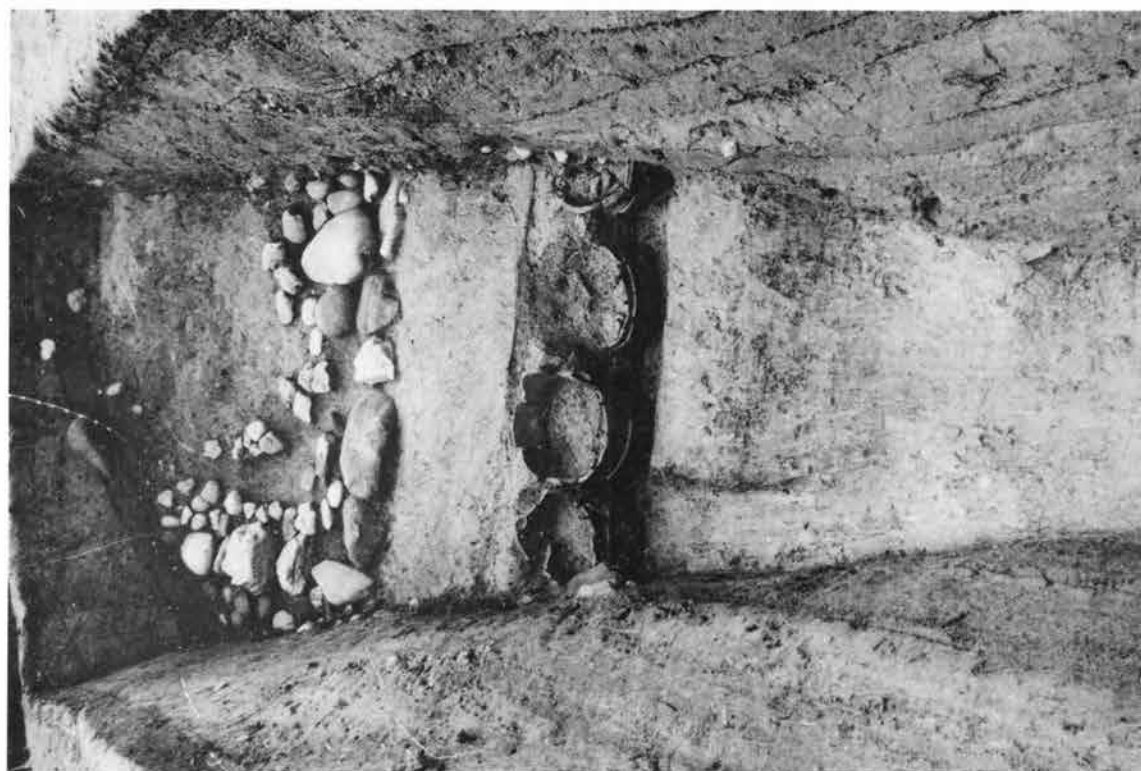
(2)5号墳造り出し全景 (西から)



(1) 5号墳墳丘埴輪列検出状況（南西から）



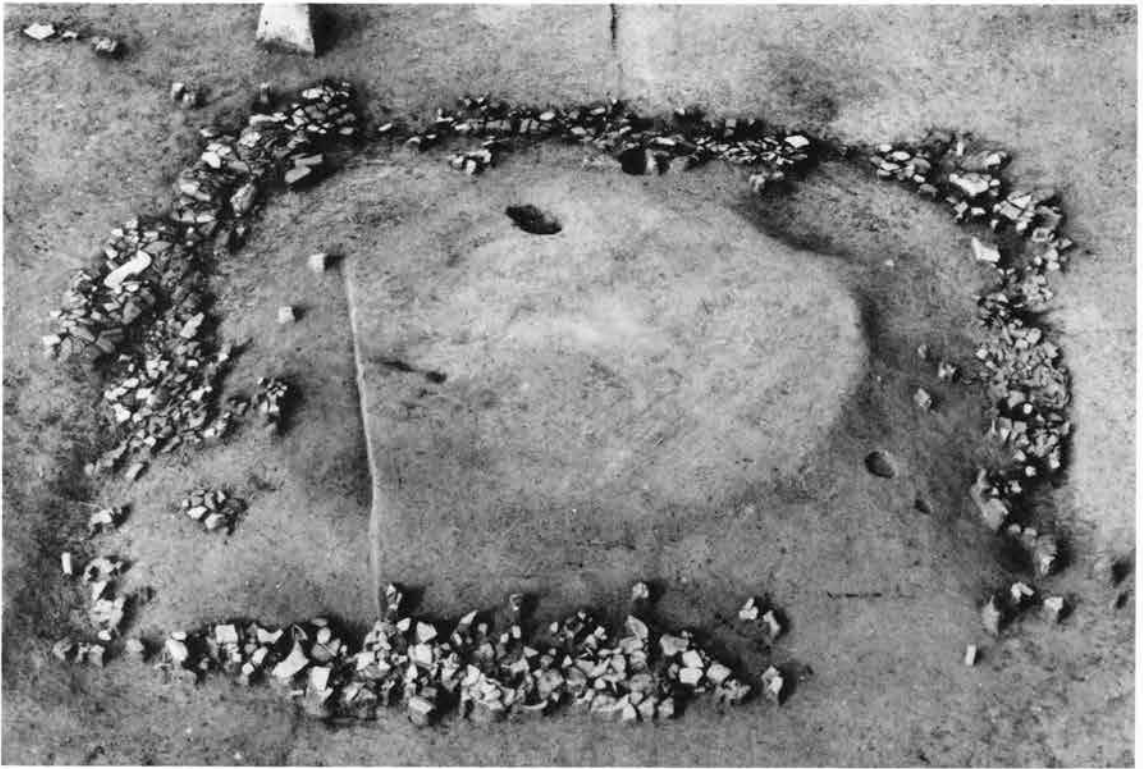
(2) 5号墳外堤埴輪列検出状況（西から）



(2) 5号墳墳丘壇輪列・葺石検出状況 (東から)



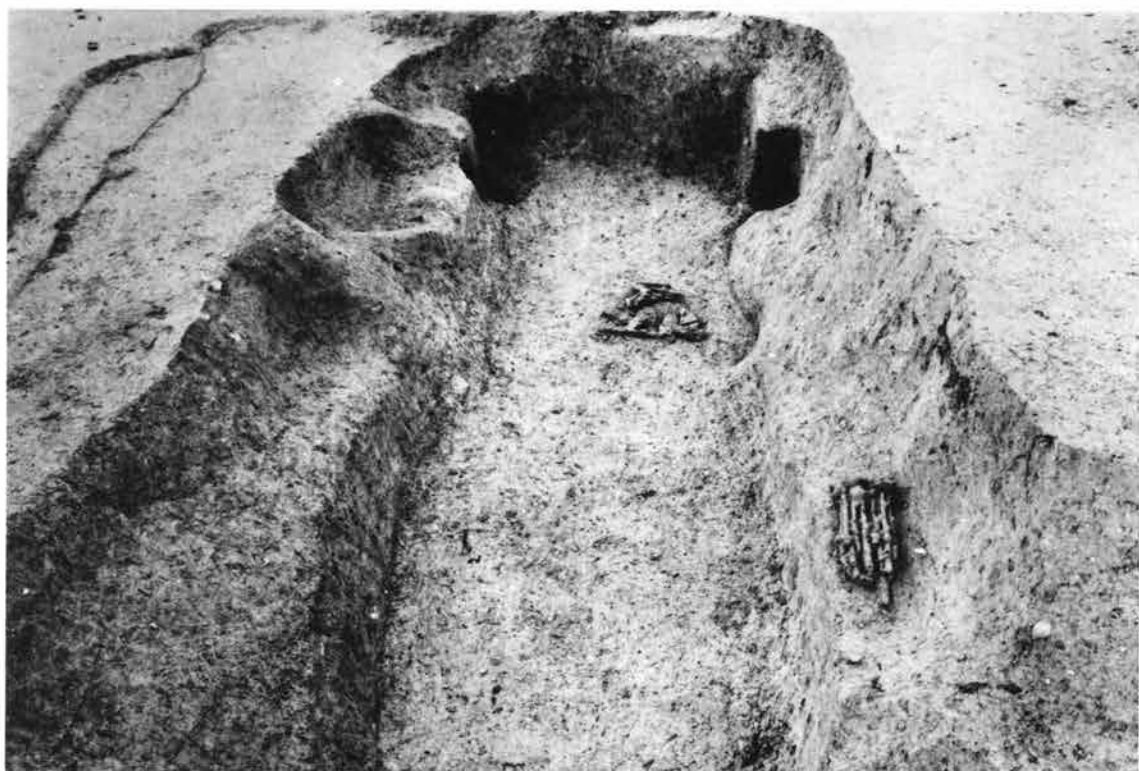
(1) 5号墳東調査区全景 (東から)



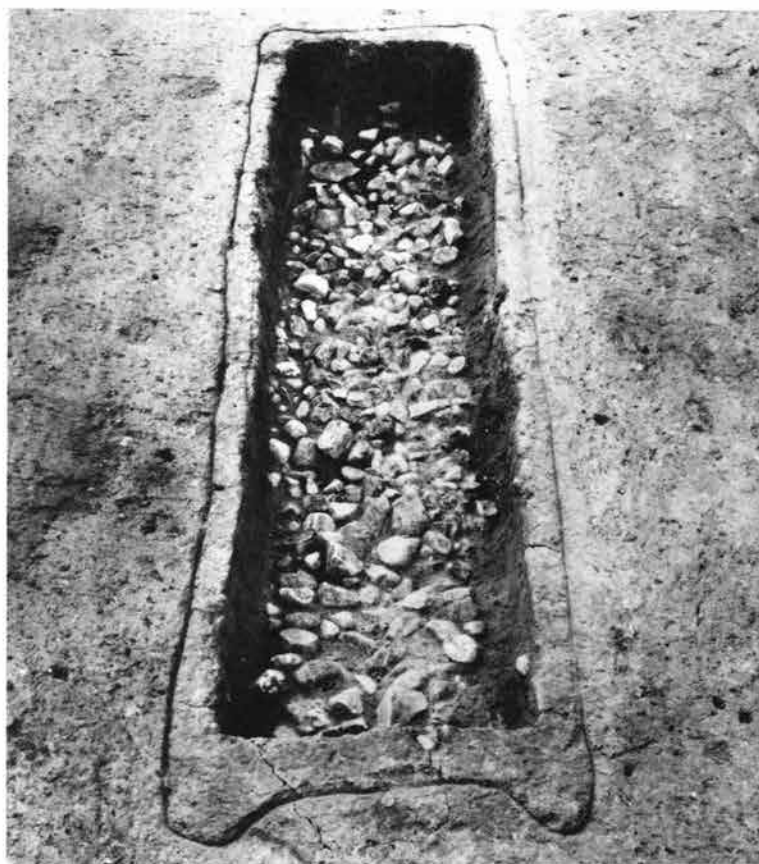
(1)16号墳周溝内遺物堆積状況（南から）



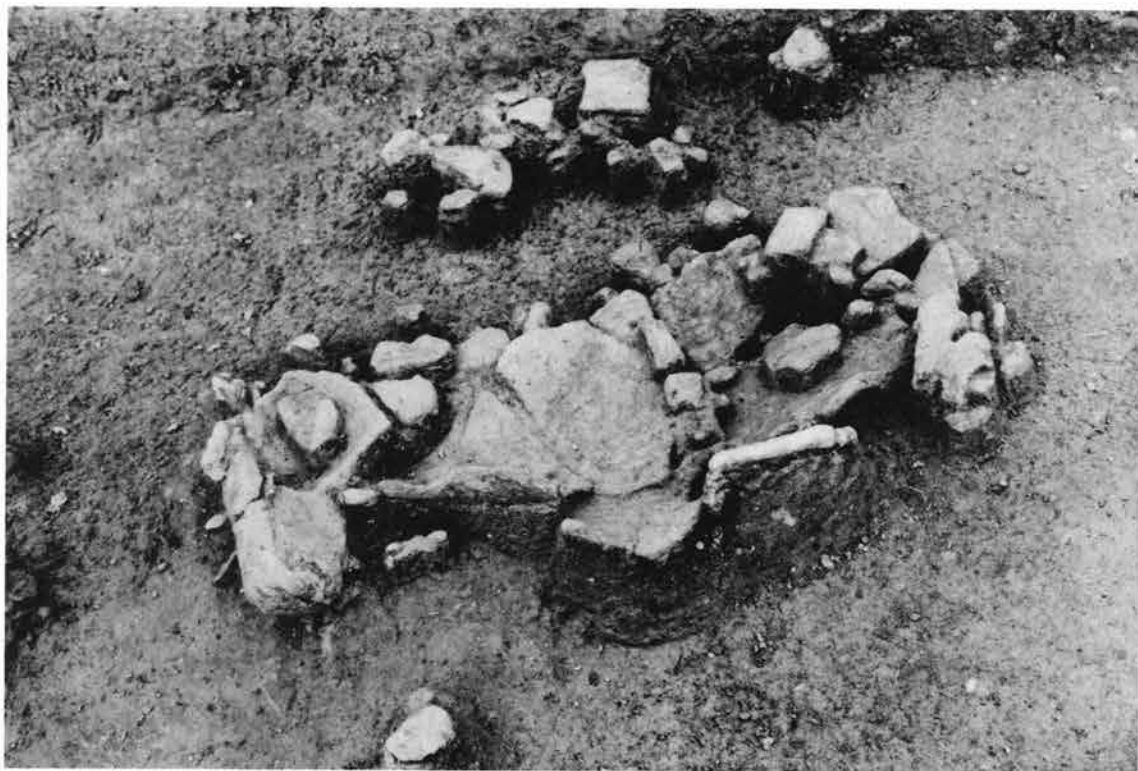
(2)16号墳全景（東から）



(1) 8号墳主体部遺物出土状況 (東から)



(2) 16号墳主体部全景 (東から)



(1)17号墳馬形埴輪出土状況（南から）



(2)14号墳蓋形埴輪出土状況（西から）



(1) S E 8837遺物出土状況（西から）



(2) 鬼瓦出土状況（北から）



(1)第2トレンチ全景 (東から)



(2)S X 3201全景 (東から)





14-5



14-1



14-4



14-2



14-3



14-6



14-7



|



17-4



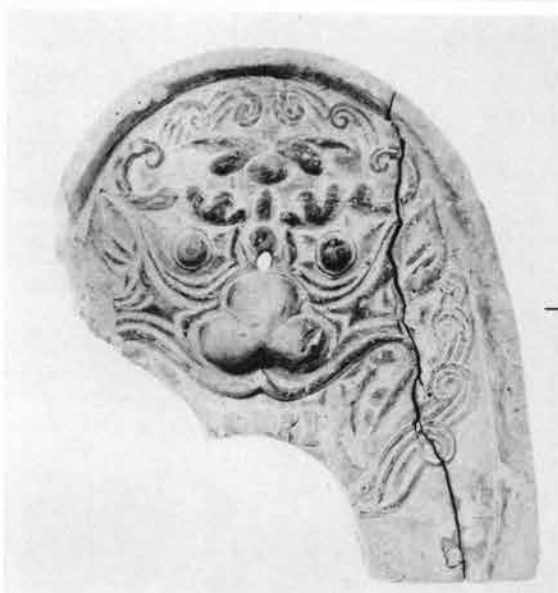
17-8



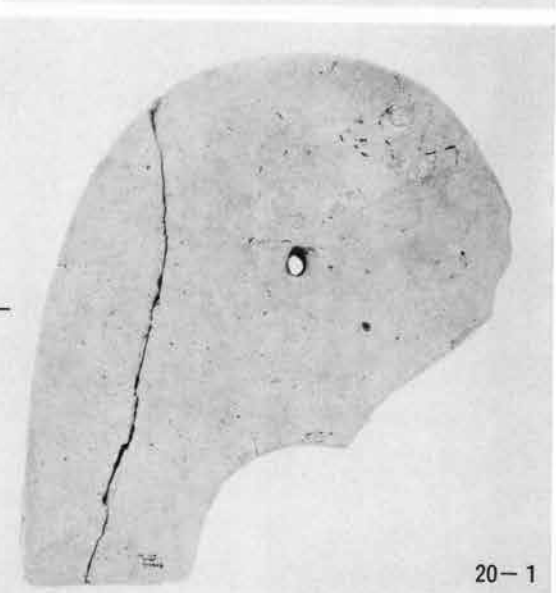
17-9



17-12



—



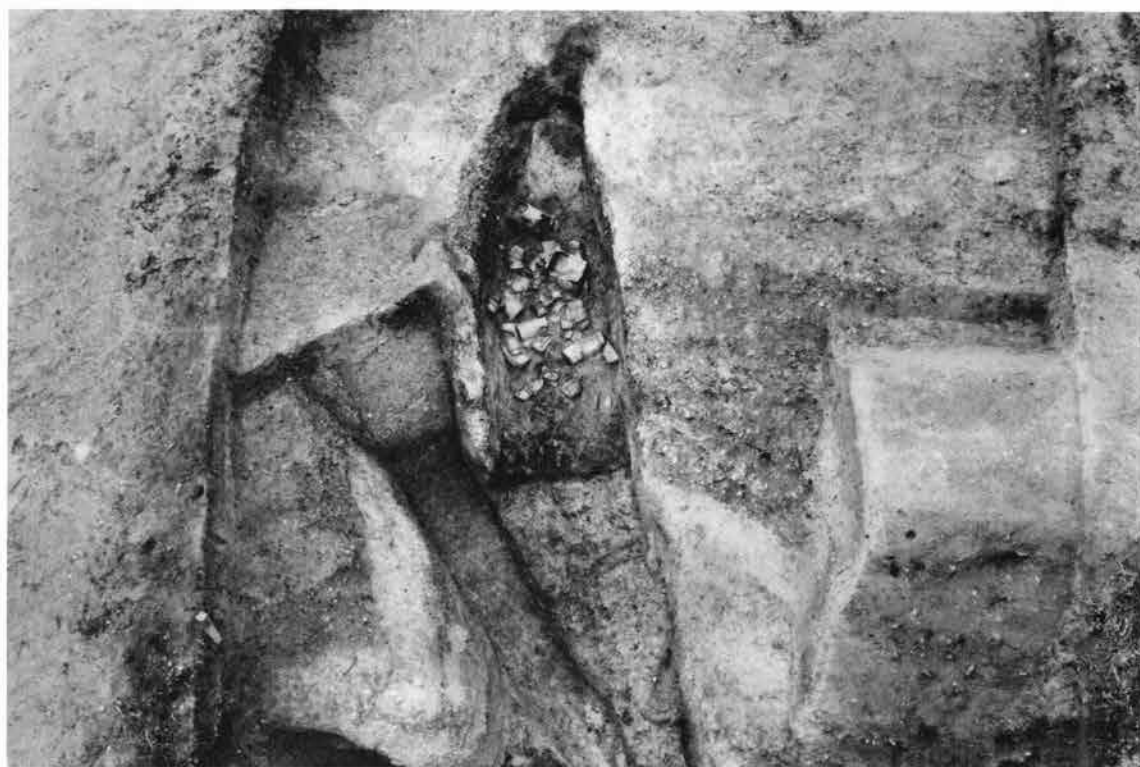
20-1



19-1



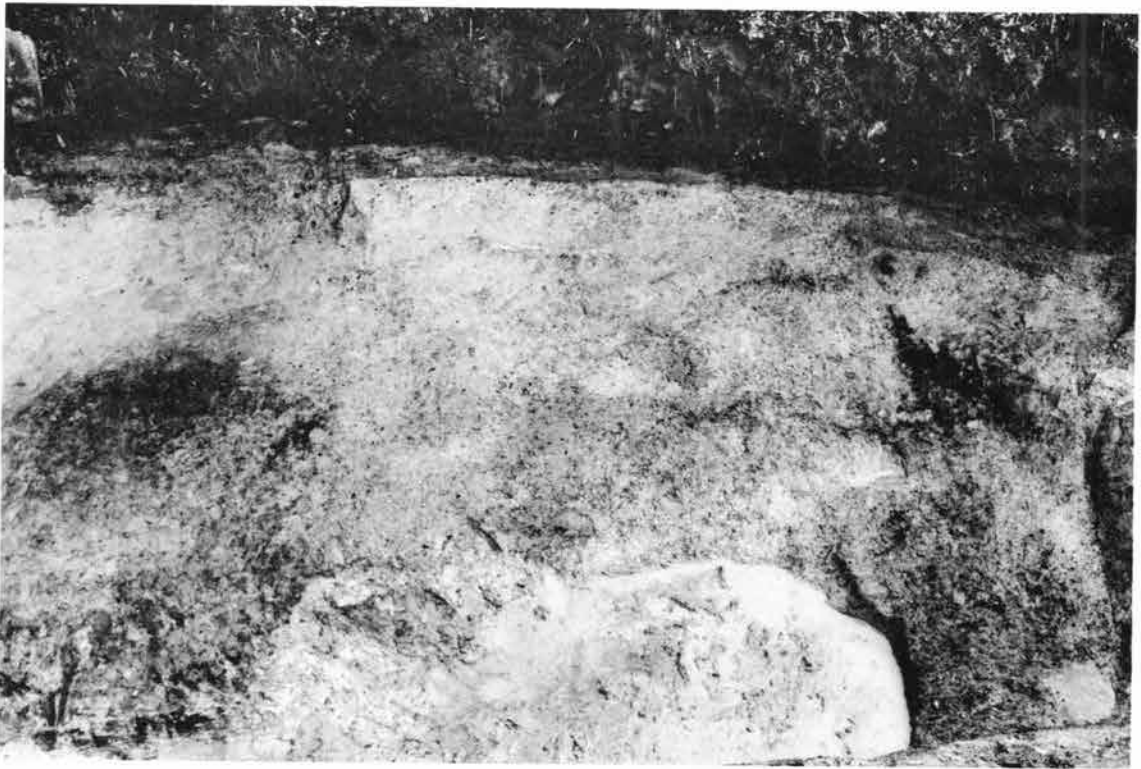
(1)調査区全景（北東から）



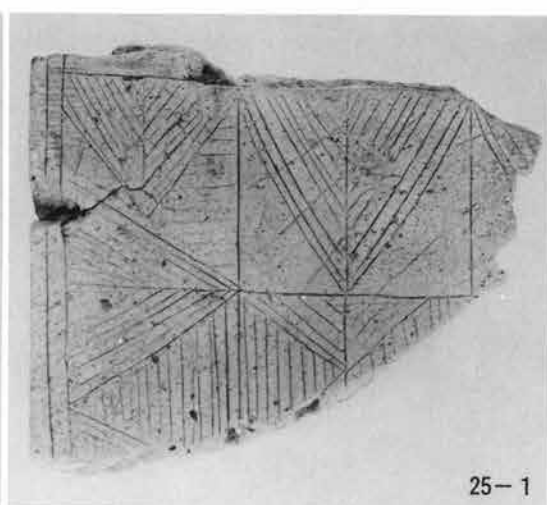
(2)窯体検出状況（3次床面，北東から）



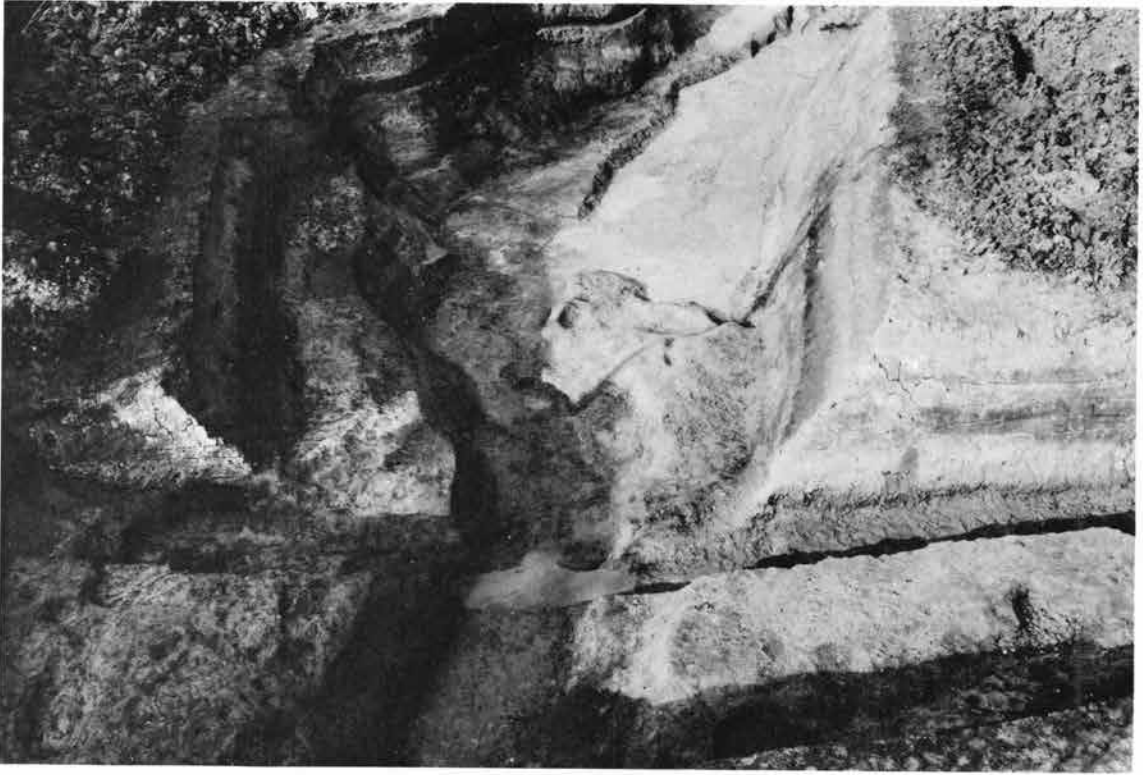
(1) 3次床面遺物出土状況 (北東から)



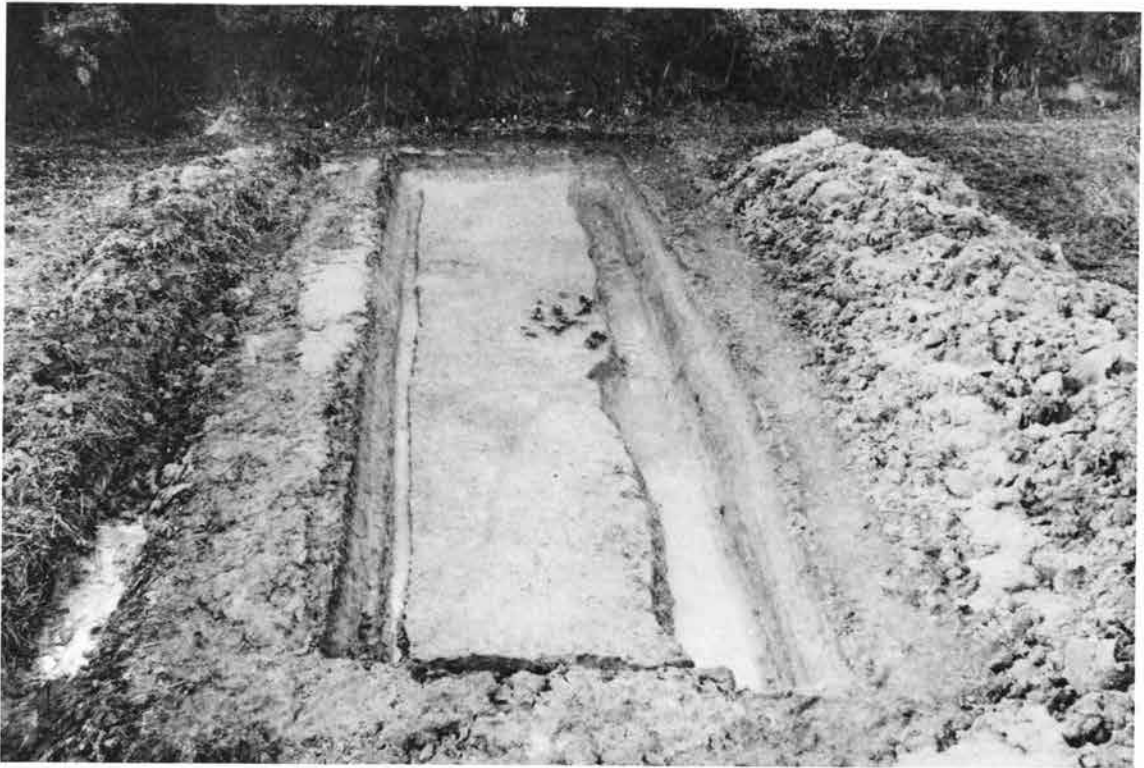
(2) 2・3号窯灰原検出状況 (北東から)



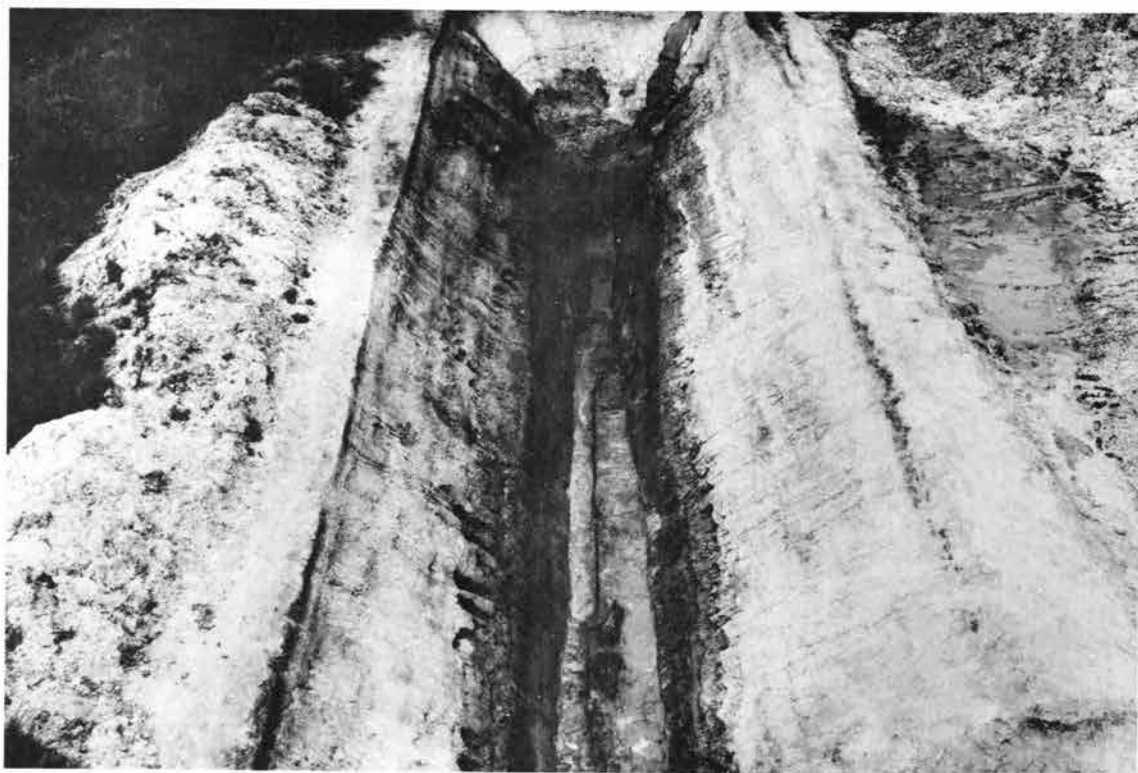
埴輪



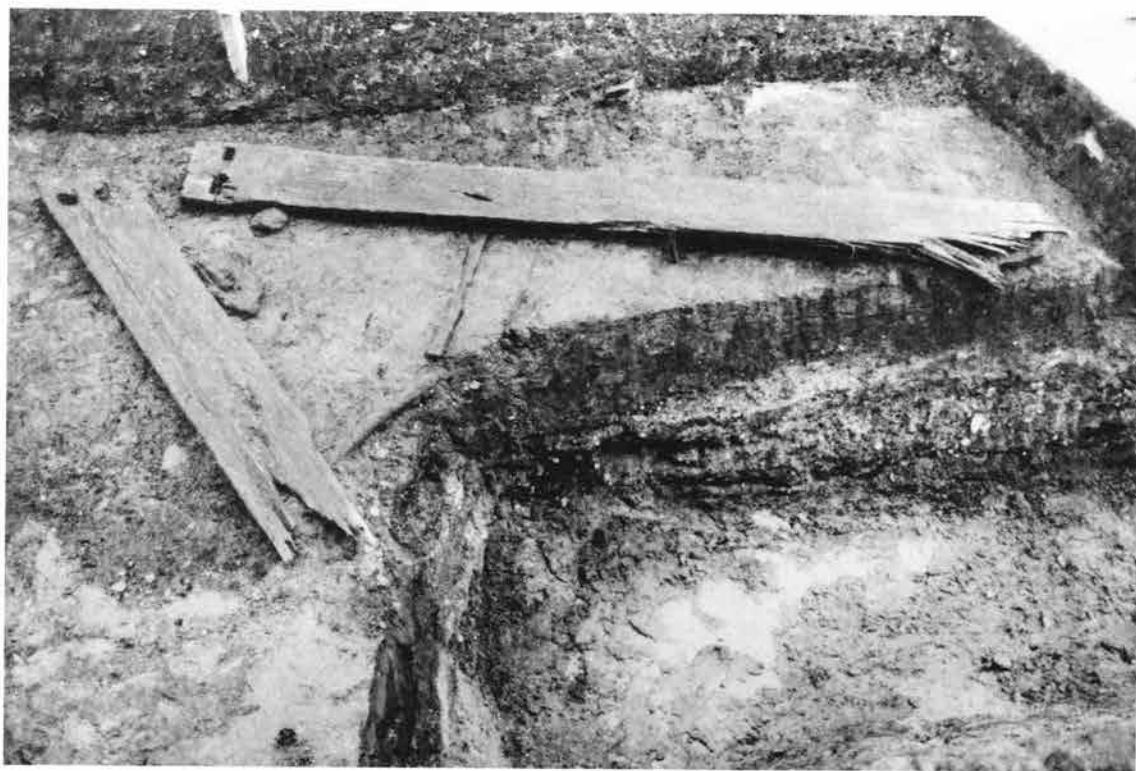
(1) 1 KW58 b t 全景 (南から)



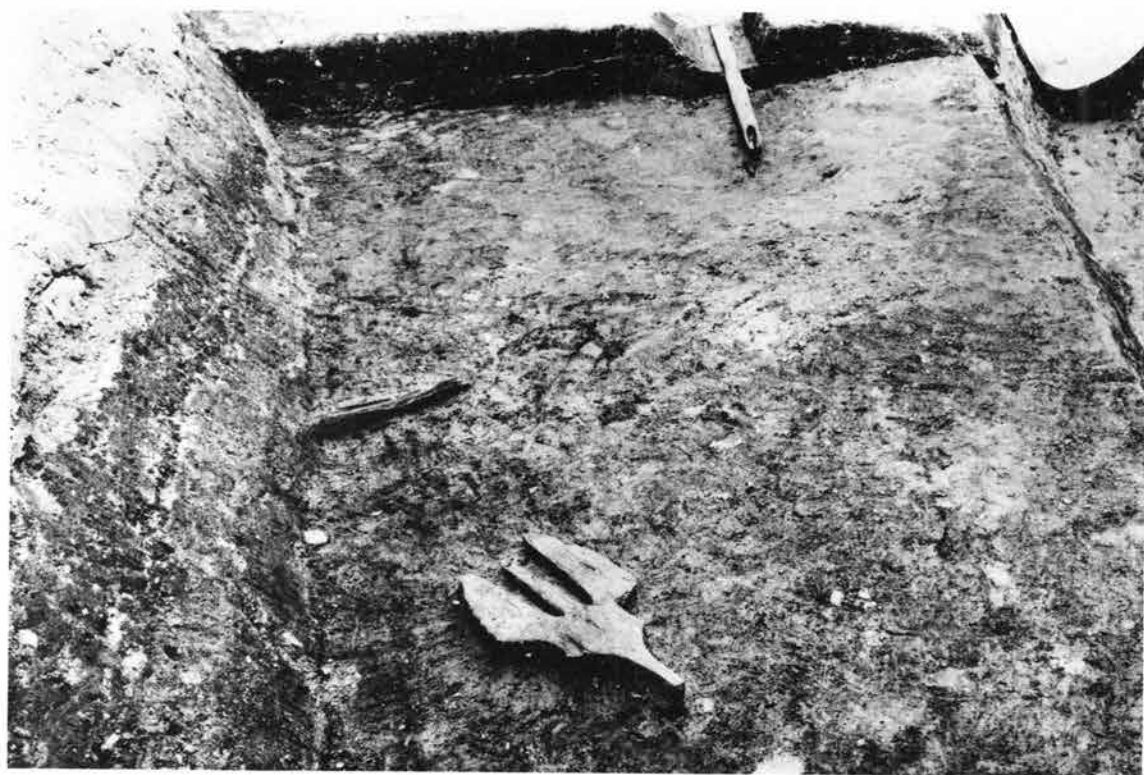
(2) 1 KW59 b t - A 全景 (東から)



(1) 1 KW76 b t 全景 (東から)



(2) 1 KW74 b t 木器出土状況 1 (東から)

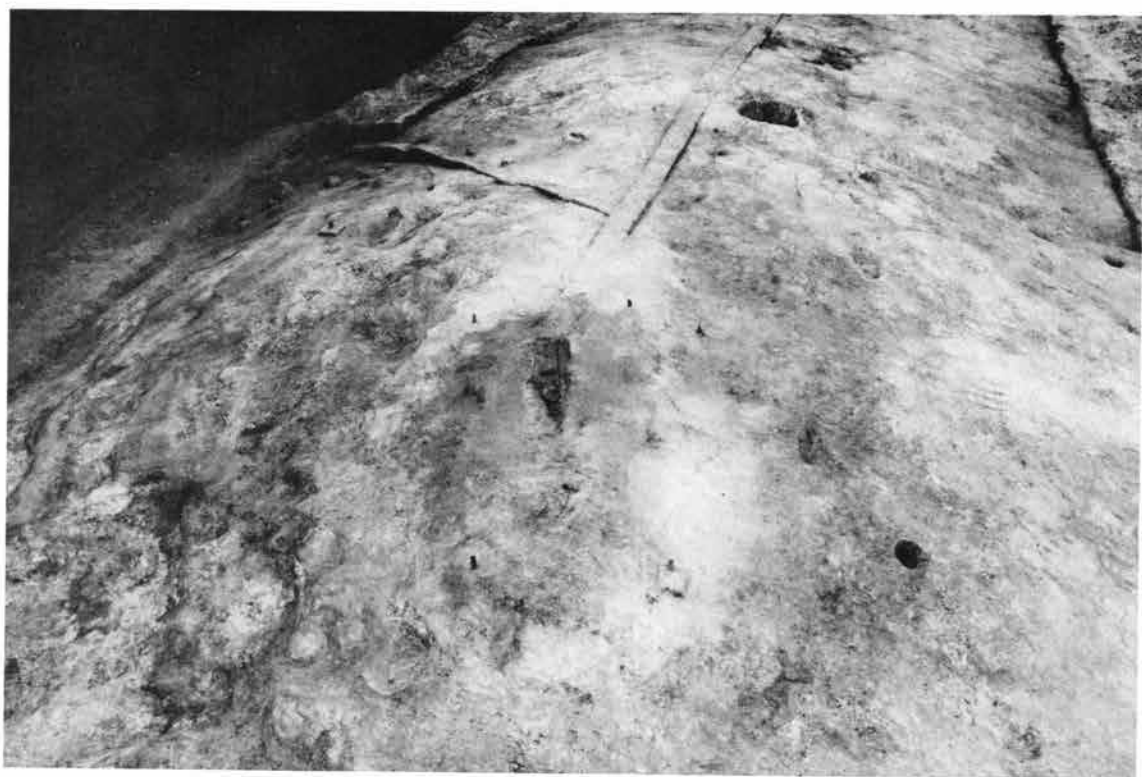


(1) 1 KW74b t 木器出土状況 2 (南から)



(2) 1 KW74b t 木器出土状況 3 (西から)





(1)墳丘全景 (西から)



(2)主体部全景 (西から)



(1)調査区全景 (北から)



(2)磁気探査風景 (北東から)

京都府遺跡調査概報 第35冊

平成元年11月30日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3

TEL (075) 933-3877 (代)

印刷 株式会社 中村太古舎

〒520 大津市京町三丁目4-32

TEL (0775) 24-4370 (代)